新潟県埋蔵文化財調査報告書　第162集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XV

道　端　遺　跡　V

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XV

道端（みちばた）遺跡 V

2006

新潟県教育委員会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海東北自動車道は、新潟市の新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、山形県を経て、秋田自動車道と接続する秋田県河辺ジャンクションに至る高速自動車道です。新潟県内では胎内市の中条インターチェンジまでが平成14年度に完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議（以下国幹会議）において、日本海東北自動車道の中条－朝日間は、旧日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。その後、公団の分割民営化により、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国幹会議において、荒川－朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。日本海東北自動車道はこの地域内外の経済的な交通・流通を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送などの「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この日本海東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「道端遺跡」の報告書です。調査の結果、当遺跡は弥生時代中期と古墳時代中期～後期を主体とすることが判明しました。弥生時代中期は竪穴建物、平地式建物、墓の可能性のある周溝遺構、土坑等で構成され、北陸系を中心とする弥生土器や石製農具などの遺物が注目されます。古墳時代は竪穴建物、掘立柱建物、土坑等で構成され、土師器・須恵器を中心に多量の遺物が出土しました。中でも、十数個体にのぼる須恵器は県内でも有数の資料です。いずれの時期も阿賀野川以北における中心的な遺跡と考えられ、稲作農耕の定着、大和政権の進出など地域の歴史を語る上で欠くことのできない貴重な成果が得られました。

今回の発掘調査結果が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々や地元区長並びに荒川町教育委員会には多大なる御協力と御援助をいただきました。また、東日本高速道路株式会社及び村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本報告書は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端 97 番地ほかに所在する道端遺跡の発掘調査の記録である。

2　発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委）が東日本高速道路株式会社から受託して実施した。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。埋文事業団は発掘調査および関連諸工事を国際航業株式会社（以下、国際航業）に委託し、平成 17 年 4 ～ 12 月にかけて実施した。発掘調査面積は、延べ 12,400 ㎡（上層 9,600 ㎡、下層 2,800 ㎡）である。

4　整理及び報告に関わる作業は、平成 17 年 6 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日の間に現地及び国際航業整理棟で国際航業文化事業部作業員が行った。

5　出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・整理している。遺物の注記・記号は「05 ミチ」とした。また、出土地点及び層位を併記した。

6　引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に掲載した。

7　本書に掲載した遺物番号は、すべて通し番号とし、本文・図面図版・写真図版の番号は、すべて一致している。

8　本書の方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は、日本平面国家座標のＸ軸方向を指す。

9　第Ⅵ章の自然科学分析は、分析・原稿をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

10　本書の執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章１節、第Ⅶ章２節Ｂ２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 沢田　敦（埋文事業団日東道担当班長）

第Ⅰ章２節、第Ⅲ章２節、第Ⅳ章１節Ｂ１）６）、第Ⅳ章２節Ａ・Ｂ１）２）第Ⅴ章２節Ａ、
第Ⅶ章２節Ａ・Ｂ１）、３節 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 前川雅夫（国際航業文化事業部主任研究員）

第Ⅳ章１節Ｂ１）６）、２節Ｂ１）６）、第Ⅴ章１節Ａの土器、第Ⅶ章１節・・・・・・・・・・・片山博道（同　研究員）

第Ⅳ章１節Ａ１）・Ｂ４）、２節Ｂ１）５）、第Ⅴ章３節 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・丹下昌之（同　研究員）

第Ⅱ章、第Ⅲ章１節、第Ⅳ章１節Ａ２）～４）・３節、第Ⅴ章４節の珠洲焼･銭貨・・・・・・辻　弘和（同　研究員）

第Ⅳ章１節Ｂ２）、２節Ｂ６）、第Ⅴ章２節Ｂの石器・４節の縄文土器・・・・・・・・・・・・・・福井流星（同　研究員）

第Ⅵ章・・・・・・・・・・・・ 高橋　敦・斉藤崇人・松元美由紀・斉藤紀行・馬場健司（パリノ・サーヴェイ株式会社）

11　遺構トレースはその一部を辻　弘和、遺物実測は土器の一部を片山博道・福井流星、石器を福井流星、木製品を丹下昌之がこれを行った。また、遺物写真撮影は、一部を丹下昌之が行い、その他はモノクローム新潟に依頼した。

12　本書の編集は、遺構図版を辻　弘和、写真図版を丹下昌之、遺物図版の土器・石製品・土製品を片山博道、石器を福井流星、木製品を丹下昌之が行い、沢田　敦の指導のもと前川雅夫が全体を統括した。

13　本書の発掘・報告書の作成にあたって、弥生時代の土器については明治大学石川日出志教授に、木製品の建築部材については首都大学東京山田昌久助教授にご教授をいただき、また、以下の方々・機関からもご教示とご協力をいただいた。記してここに厚く御礼を申しあげる。（敬称略、五十音別）

及川　良彦　　岡本　郁栄　　金子　拓男　　斎野　裕彦　　関　　雅之　　鈴木　　暁　　高濱　信行
田中　耕作　　田辺　早苗　　福田　健司　　増田　一美　　水澤　幸一　　吉井　雅勇
荒川町教育委員会　　荒川沿岸土地改良区

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理 …… 2

A　調　　査 …… 2

1）　試掘確認調査 …… 2

2）　本調査の経過と概要 …… 2

B　整　　理 …… 5

C　調査・整理体制 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 8

1　地理的・歴史的環境 …… 8

2　阿賀野川以北の古墳時代の遺跡 …… 8

3　阿賀野川以北の弥生時代の遺跡 …… 10

第Ⅲ章　グリッドの設定と層序 …… 11

1　グリッドの設定 …… 11

2　基本層序と包含層 …… 12

第Ⅳ章　遺　　構 …… 14

1　古墳時代の遺構 …… 14

A　遺構の概要 …… 14

1）　概　　要 …… 14

2）　平面・断面形態 …… 14

3）　主 軸 方 位 …… 15

B　遺 構 各 説 …… 15

1）　竪 穴 建 物 …… 15

2）　掘立柱建物 …… 16

3）　土　　坑 …… 16

4）　河　川　跡 …… 17

5）　性格不明遺構 …… 19

2　弥生時代の遺構 …… 20

A　遺構の概要 …… 20

1）　概　　要 …… 20

2）　弥生時代の包含層と遺構群 …… 20

B　遺 構 各 説 …… 21

1）　周溝を有する建物跡 …… 21

2）　周 溝 遺 構 …… 26

3）　土　　坑 …… 27

4）　溝　　跡 …… 28

5) 河　川　跡 …… 29
6) 性格不明遺構 …… 29
3　下層の調査 …… 30
A　調査の概要 …… 30
B　調査の経過 …… 30
第Ⅴ章　遺　　物 …… 32
1　古墳時代の土器・石製品 …… 32
A　概　　要 …… 32
1) 出土遺物の概要 …… 32
2) 器 種 分 類 …… 32
B　各　　説 …… 38
2　弥生時代の遺物 …… 44
A　土器・土製品 …… 44
1) 概　　要 …… 44
2) 器 種 分 類 …… 46
3) 土 器 各 説 …… 47
B　石　　器 …… 51
1) 概　　要 …… 51
2) 各　　説 …… 51
3　木　製　品 …… 54
4　その他の時代の遺物 …… 56
第Ⅵ章　自然科学分析 …… 58
1　は じ め に …… 58
2　試　　料 …… 58
3　分 析 方 法 …… 59
A　放射性炭素年代測定 …… 59
B　樹 種 同 定 …… 59
C　花 粉 分 析 …… 59
D　土壌理化学分析 …… 60
E　種実遺体分析 …… 60
F　植物珪酸体分析 …… 60
4　結　　果 …… 61
A　放射性炭素年代測定 …… 61
B　樹 種 同 定 …… 62
C　花 粉 分 析 …… 63
D　土壌理化学分析 …… 63
E　種実遺体分析 …… 64
F　植物珪酸体分析 …… 69

5　考　　察 …… 69
A　古　植　生 …… 69
B　植物利用状況 …… 70
C　内容物推定 …… 72

第Ⅶ章　ま　と　め …… 75
1　古墳時代の遺物 …… 75
A　器 種 構 成 …… 75
B　時 期 設 定 …… 77
C　遺構の性格 …… 81
D　ヘラ記号「×」のある土器 …… 81
2　弥生時代の遺構と遺物 …… 82
A　低地の発掘調査の問題点と自然化学分析の成果について …… 82
B　遺　　物 …… 85
1) 土　　器 …… 85
2) 石器使用痕分析 …… 92

≪総　　括≫ …… 96
≪要　　約≫ …… 97
≪引 用 文 献≫ …… 98
≪観　察　表≫ …… 104

挿 図 目 次

第 1 図　調査範囲トレンチ位置図 …… 3
第 2 図　調査区位置図 …… 3
第 3 図　弥生・古墳時代の主要な周辺遺跡 …… 9
第 4 図　グリッド設定図 …… 11
第 5 図　基本層序模式図 …… 11
第 6 図　基本層序柱状図 …… 13
第 7 図　遺構の平面形態と断面形態の分類図 …… 15
第 8 図　下層トレンチ位置図 …… 31
第 9 図　古墳時代（土師器）器種分類図 …… 34
第 10 図　古墳時代（須恵器）器種分類図 …… 37
第 11 図　弥生土器器種分類図 …… 45
第 12 図　SR 2a の模式柱状図及び試料採取位置 …… 58
第 13 図　花粉化石群集 …… 63
第 14 図　植物珪酸体含量 …… 69
第 15 図　花粉化石 …… 72
第 16 図　木材・植物珪酸体 …… 73
第 17 図　種実遺体 …… 74
第 18 図　遺物集中地点と重量分布図 …… 76
第 19 図　古墳時代中・後期における
道端遺跡出土土器の変遷 …… 78
第 20 図　新潟県におけるヘラ記号のある土師器 …… 81
第 21 図　包含層別遺構分布図 …… 83
第 22 図　包含層別弥生土器 …… 86
第 23 図　弥生時代中期の仙台平野の甕と
本遺跡出土の甕 …… 90
第 24 図　使用痕光沢面分布図 …… 94
第 25 図　使用痕光沢面写真 …… 95

表　目　次

第 1 表　弥生・古墳時代の主要な周辺遺跡一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第 2 表　分析試料及び分析項目一覧 ・・・・・・・・・・・・・ 58
第 3 表　放射性炭素年代測定結果 ・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第 4 表　暦年較正結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第 5 表　樹種同定結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第 6 表　花粉分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 7 表　土壌理化学分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 8 表　種実遺体分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第 9 表　植物珪酸体含量 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第 10 表　遺物集中地点１重量比率表 ・・・・・・・・・・・・・ 75
第 11 表　古墳時代中・後期における道端遺跡と編年対応表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第 12 表　弥生土器編年対応表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第 13 表　観察された光沢面のタイプと特徴 ・・・・・・・・ 94

図 版 目 次

［図　　面］
図版 1　遺跡の位置と周辺の地形
図版 2　遺構全体図
図版 3　古墳時代全体図
図版 4　弥生時代全体図
図版 5　SI 6
図版 6　SB107
図版 7　SK 1～3
図版 8　SK102・116、SX104・118・119・121
図版 9　SI 1
図版 10　SI 3
図版 11　SI 9
図版 12　SI10
図版 13　SI11・12
図版 14　SI15
図版 15　SI8
図版 16　SI13・14
図版 17　１・２号周溝遺構
図版 18　３・４号周溝遺構
図版 19　２号周溝遺構内１号土坑、３号周溝遺構主体部
図版 20　SK 4～8
図版 21　SK126・132、SX117・123
図版 22　SK120・130・134、SX111
図版 23　SD122・125・127～129
図版 24　SR 1～4
図版 25　SR 2 a
図版 26　古墳時代の遺物（1）
図版 27　古墳時代の遺物（2）
図版 28　古墳時代の遺物（3）
図版 29　古墳時代の遺物（4）
図版 30　古墳時代の遺物（5）
図版 31　古墳時代の遺物（6）
図版 32　古墳時代の遺物（7）
図版 33　弥生時代の遺物（1）
図版 34　弥生時代の遺物（2）
図版 35　弥生時代の遺物（3）
図版 36　弥生時代の遺物（4）
図版 37　弥生時代の遺物（5）
図版 38　弥生時代の遺物（6）
図版 39　石器（1）
図版 40　石器（2）
図版 41　石器（3）
図版 42　石器（4）
図版 43　石器（5）
図版 44　木製品
図版 45　その他の時代の遺物
［写　　真］
図版 46　調査区全景
図版 47　北区弥生面全景
図版 48　１～４号周溝遺構、SI10～12
図版 49　遺物集合写真
図版 50　SI 6（1）
図版 51　SI 6（2）
図版 52　SB107
図版 53　SK 1～3・102

図版 54　SK116、SR １・２ａ
図版 55　SR ２ａ、P109・110
図版 56　SX104・119・121
図版 57　SI １・３（１）
図版 58　SI １
図版 59　SI １・３（２）
図版 60　SI ３、SK ４
図版 61　北区弥生時代遺構群、弥生時代包含層
図版 62　SI ９
図版 63　SI10 ～ 12
図版 64　SI11 ～ 14
図版 65　SI15
図版 66　SI ８
図版 67　１・２号周溝遺構（１）
図版 68　１号周溝遺構
図版 69　１・２号周溝遺構（２）
図版 70　３・４号周溝遺構
図版 71　３号周溝遺構、SK126
図版 72　SK132・134、SD122・125
図版 73　SD125・127 ～ 129
図版 74　SR ２ａ
図版 75　SX117・123、１号周溝遺構下面
図版 76　包含層遺物出土状況･下層トレンチ･現況写真
図版 77　古墳時代の遺物（１）
図版 78　古墳時代の遺物（２）
図版 79　古墳時代の遺物（３）
図版 80　古墳時代の遺物（４）
図版 81　弥生時代の遺物（１）
図版 82　弥生時代の遺物（２）
図版 83　弥生時代の遺物（３）
図版 84　石器（１）
図版 85　石器（２）
図版 86　石器（３）
図版 87　木製品・その他の時代の遺物

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

日本海東北自動車道（以下、「日東道」という。）は、新潟市の新潟中央ジャンクション（以下、「JCT」という。）から秋田県河辺 JCT に至る高速自動車道である。新潟県内では新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」という。）～中条 IC 間が平成 14 年度に完成している。中条 IC 以北は、平成元年および平成３年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する中条 IC ～荒川 IC 間は平成 10 年４月に施工命令が出された。これを受けて、東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」という。）[1] と新潟県教育委員会（以下、「県教委」という。）との間で、法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

中条 IC ～朝日 IC 間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という。）が平成 11 年度に実施した。その結果、道路法線内に８か所の遺跡確認地点（新発見を含む）と 27 カ所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。試掘確認調査は、同じく県教委からの委託を受けた埋文事業団が、中条 IC 北近接地～村上 IC 南近接地間について平成 13 ～ 15 年度に実施した。その結果、本遺跡を含む 20 遺跡で本発掘調査が必要であることが判明し、その旨を県教委に報告した。本遺跡の試掘確認調査は平成 12 ～ 14 年度の３か年にわたって、58,280 ㎡を対象として実施した。その結果、本遺跡は古墳時代前期と後期および縄文時代の集落遺跡であることが確認され、35,400 ㎡で本発掘調査が必要であることが判明した。また、基本的に古墳時代の上層と縄文時代の下層との２面の遺構確認面が存在することから、本発掘調査が必要な面積は上層 35,400 ㎡・下層 32,300 ㎡の延べ 67,700 ㎡となった。ただし、この時点で平成 13 年度に 8,000 ㎡（4,000 ㎡× ２面）、平成 14 年度に 11,000 ㎡（上層 7,000 ㎡・下層 4,000 ㎡）が既に本発掘調査を実施していたことから、平成 15 年度以降に本発掘調査を要する面積は上層 24,400 ㎡・下層 24,300 ㎡の延べ 48,700 ㎡となった。

平成 15 年 10 月１日の東日本高速道路・新潟県教育庁文化行政課（以下、「文化行政課」という。）および埋文事業団の三者協議において、東日本高速道路が示した平成 16 年度の調査要望は膨大なものであった。しかし、この要望も「民営化」や「事業の見直し」などの諸問題を抱える東日本高速道路にあっては、その時点で確定したものではなかった。同年 10 月８日、文化行政課と埋文事業団は平成 16 年度の受託事業について協議した。そして、日東道建設が決定し要望どおりの調査量が提示された場合、この時点での調査体制ではこれに対応できないことから、専門職員の増員を県に求めるが、これが認められない場合には、日東道の調査に限り民間調査機関に全面委託する、という方針を決定した。翌年の１月８日、国土開発幹線自動車道建設会議が終了し、日東道は東日本高速道路で建設することが可能になった旨が文化行政課に伝えられた。その後、２月 20 日に最終的な三者協議が行われ、日東道の本発掘調査を、埋文事業団の管理・監督の下に民間調査組織に全面委託することで合意した。道端遺跡の本発掘調査は平成 16 年度に古墳時代前期を中心とする延べ 22,900 ㎡において実施し、古墳時代後期を中心とする 12,200 ㎡を平成 17 年度に実施し、平成 18 年度以降に残りの 13,600 ㎡を実施することとなった。

---

[1] 日本海東北自動車道の事業は、日本道路公団の分割民営化により、平成 17 年 10 月１日に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれた。本文中では日本道路公団分を含め、「東日本高速道路」と統一して表記する。

２　調査と整理

Ａ　調　　査

１）　試掘確認調査

前述したように道端遺跡に関わる試掘確認調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が、平成 12 ～ 14 年度の３か年にわたり、調査対象面積延べ 58,280 ㎡で実施した。調査対象面積の内訳は、平成 12 年度が 20,340 ㎡、13 年度が 29,000 ㎡、14 年度が 8,940 ㎡である。調査方法は、任意に確認トレンチを設定し、バックホー・人力により徐々に掘り下げ、土層の堆積状況、遺構・遺物の有無の確認・精査を行ったものである。以下その詳細について述べる。

平成 12 年度の調査では、古墳時代後期の多量の土師器・若干の須恵器、古墳時代の土坑・柱穴・溝などの遺構を検出し、当該時代の集落の存在を確認した。また、ほとんど同一の層位から弥生時代中期の遺物の出土をみたほか、厚さ 30 ～ 50cm の間層をはさみ、縄文時代後期の土器・石器も出土した。両時代の遺物包含層の密度は希薄なものの、縄文時代の遺物については、調査区域の南北両端で出土していることから、調査未了の対象範囲全体に広がっている可能性もあった。その結果、古墳時代（上層）と縄文時代後期（下層）については、対象面積 20,340 ㎡全域に本調査が必要であると判断した。本書で報告する調査は、この平成 12 年度の試掘確認調査の対象範囲に含まれる。

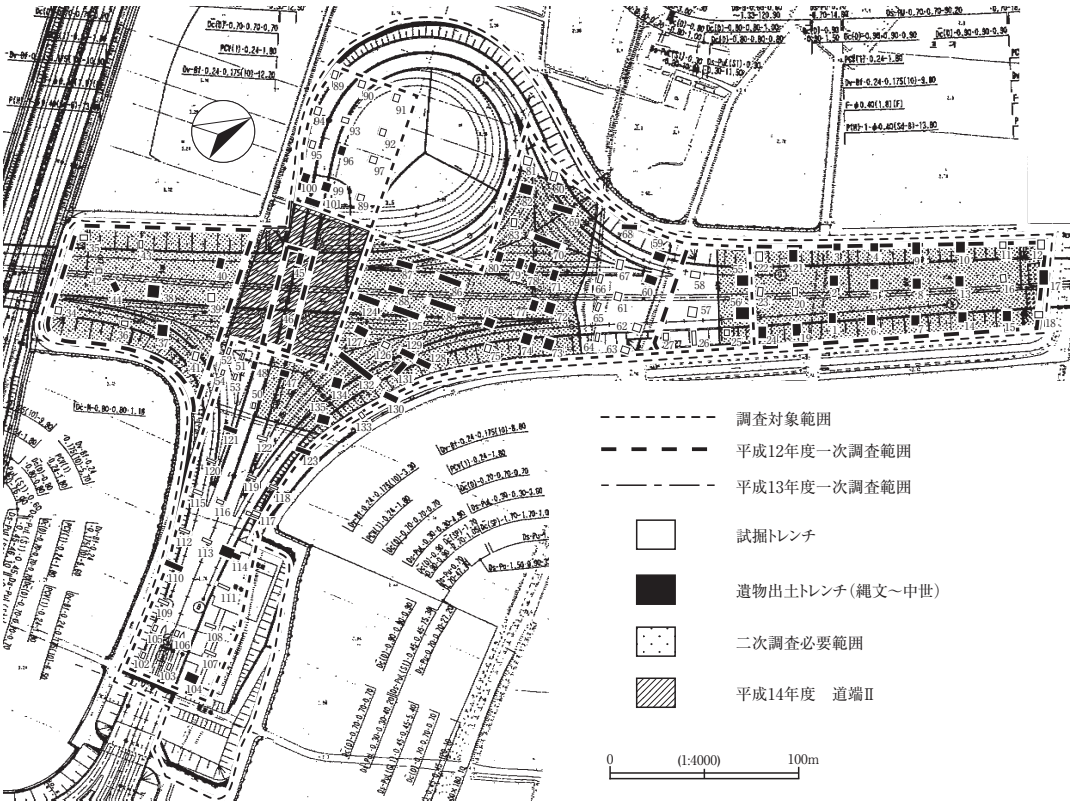
平成 13 年度は、上層の調査において古墳時代後期ではなく、古墳時代前期の遺物が多く出土した。縄文時代の遺物は少量で、耕作土中からは、近世・中世陶磁器・漆器・砥石などが混在して出土した。古墳時代の遺構は、76 トレンチでピット１基、79 トレンチで土坑１基とピット１基を確認した。また、遺跡の東側には埋没河川も検出され、その覆土中からは、古墳時代の遺物が多く出土したが、縄文時代の遺物は確認されなかった。今回の調査結果と前回（平成 12 年度）の調査結果を合わせると、本遺跡は、古墳時代前期・後期の良好な集落であることが判明し、29,400 ㎡（上層・下層合わせて延べ 58,800 ㎡）について本調査が必要であると判断された。

平成 14 年度の調査では、148・154・164・166 トレンチで古墳時代の遺物が、156 トレンチで縄文時代後期の遺物が出土した。また、東側の 136・140 ～ 143・145 トレンチでも、古墳時代の遺物が耕作土中より出土している。最終的に３か年にわたる試掘確認調査の結果から上層 35,400 ㎡・下層 32,300 ㎡の延べ 67,700 ㎡について本調査が必要である、と判断した。

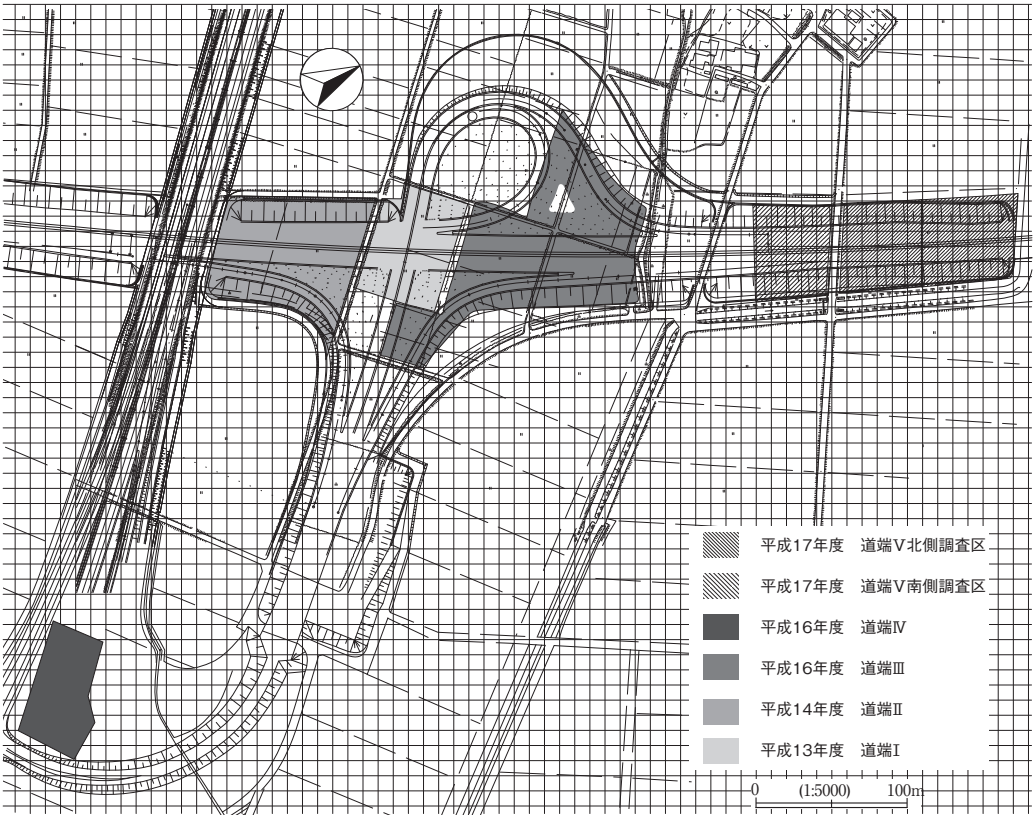
２）　本調査の経過と概要

道端遺跡は、現在まで四度の本調査が行われ、報告書もすでに刊行済みである。それらが第２図に示した道端遺跡Ⅰ（平成 13 年度、日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅲ）・道端遺跡Ⅱ（平成 14 年度、日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ）・道端遺跡Ⅲ（平成 16 年度、日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ）・道端遺跡Ⅳ（平成 16 年度、一般国道 113 号　荒川道路関係発掘調査報告書Ⅰ）である。平成 17 年度の本調査（道端遺跡Ⅴ）は、試掘確認調査結果に基づき、当初 12,200 ㎡の予定で着手したが、調査範囲の追加変更により、最終面積は、上層（古墳時代後期、弥生時代中期）9,600 ㎡、下層（縄文時代後晩期）2,800 ㎡の計 12,400 ㎡であった。以下その詳細について述べる。

本年度の調査範囲は、当初 41 ～ 51 M～Ｓグリッド列であったが、上層終了後、下層確認トレンチで調査した結果遺構・遺物が存在しないことが判明したため、52 ～ 58 L～Ｒグリッド列も本年度調査範囲に



第1図　調査区対象範囲トレンチ位置図



第2図　調査区位置図

加えることとなった。また46グリッド列を東西に横断する町道部分も調査の対象としていたが、撤去不可能なパイプラインが埋設されており、次年度以降の日東道建設工事に伴う町道撤去の際に追加して調査することとなった。よって調査は、町道部の南側（以下南区）と北側（以下北区）に各１班を配置して行うこととなった。その後、調査の進展に伴い町道の両脇に遺構、遺物がないことが、明らかとなったため、最終的に町道下の本発掘調査は不要と判断した。

調査区の現況は水田で低湿地であるため、まず、東側を除く三方にコの字形に暗渠を施設し、24時間の強制排水を行った。暗渠掘削は、バックホーを用いたが、その際調査員がつき、土層の観察と必要な記録をデジタルカメラなどで撮りながら、作業を進めた。

また、調査区全域の基本土層の確認と包含層の層位、遺構・遺物の検出・出土位置、全体の作業量などの情報を収集するため、調査区の大グリッドに沿って東西南北方向20ｍ毎に、計９本のセクションベルトを設定し、そのセクションベルトの南側・西側に幅約１ｍ、深さ約１～1.4ｍの確認トレンチを入れた。確認トレンチの掘削は、耕作土をバックホーで除去したほかは人力で行った。

遺構の精査は、これらの調査準備作業から得られた情報をもとに、調査員の指示で耕作土をバックホーで除去した後、包含層掘削を行い、出土遺物を回収しつつ慎重に行った。包含層、遺構確認面層は、粘性の強い土であるため、スコップの先端を切断し、電動サンダーなどで刃をつけたものを使用し、薄く削り作業の効率化をはかり、その後三角ホーなどを用い、遺構の有無を確認した。

遺構の図化は、断面図は手作業による実測、平面図はトータル・ステーションを用い、デジタル図化を行った。

次に調査経過の詳細を述べる。

４月11日より、プレハブ設置、暗渠掘削準備の予定であったが、工事用道路の敷設の遅れにより、４月26日より暗渠掘削を開始し、連休明けの５月９日から作業員の一部を投入し、確認トレンチ掘削と表土除去を並行して行った。暗渠の掘削が終了したのは、５月17日、表土除去が完全に終了したのは、５月23日のことであった。

調査は、前述したように46グリッド列を東西に横断する町道部を境に調査区を北区と南区に分け、調査員２名を一組とし、各々１班、合計２班を５月後半から投入した。大グリッドに沿った確認トレンチの人力掘削を行いつつ、北区、南区ともに本格的な遺構精査に入ったのは、６月に入ってからのことであった。

南区の調査は、北区と合わせて東西・南北の大グリッドに沿った土層の検討から、古墳時代後期の包含層、確認面層を認識し、面的な人力掘削を行った。両調査区とも耕作により、古墳時代後期の包含層はほとんど残っておらず、本来の遺構掘り込み面も撹乱を受けていた。また、南区は調査区面積の1/3程度を河川跡が占めており、最終的に検出された古墳時代の遺構は、SK １～３の土坑３基のみであった。河川跡を含め、６月22日に古墳時代の調査を終了したが、確認トレンチの下部から、弥生土器片(壺)がまとまって出土したことにより、急遽弥生遺構の確認トレンチを十数か所入れることとした。その結果、調査区の中央部からやや南西よりの42・43Ｏグリッドに竪穴建物２軒と土坑５基が検出された。竪穴建物は、炉と小規模ながら柱穴を伴うが、周溝は確認できなかった。竪穴建物からは弥生時代中期小松式の壺口縁が出土した。南区では、北区とともに７月15日に古墳時代の遺構面の空中撮影を行い、前述した弥生時代の遺構群を対象に８月20日に現地説明会を行った。その後、遺構写真撮影、平面図化などを行い、縄文時代の下層トレンチ調査を経て９月初頭に南区の調査は、すべて終了した。

北区の調査も、６月以降南区同様に、土層の検討から古墳時代の遺構確認面を認識し、耕作土下部の人

力掘削から包含層掘削、遺構精査という順番で作業を進めた。遺構精査時の古墳時代の遺物は、その大部分が包含層と考えている土層からではなく、耕作土中より出土した。その７割が北区南西部から出土した須恵器片などもその例に漏れず、遺構の遺存状況が、極めて悪いことが、精査を続けることによって次第に明らかになっていった。耕作土を取り除いても、牛馬の踏み込みの足跡が、小破片に破砕された遺物とともにそこかしこに確認面に残り、遺構精査を難渋させた。その間、古墳時代の確認面層の下に面的な広がりを有する炭化物層が水田跡である可能性を検証するため、プラントオパール分析を先行して行い、炭化物層の性格を検討した。また、その上下で遺構精査・等高線測量を実施するとともに、水田面の可能性を検証した。

南区でこの層に類似する層の下層で弥生時代の遺構が検出されたこともあり、遺物は、出土していないもののこの層が弥生時代の包含層である可能性も想定された。分析の結果、この炭化物層にクマザサ属などのプラントオパールが検出され、比較的乾燥した環境下での堆積物であることが判明した。盛夏にさしかかった８月上旬に北区の調査の目途がつき、南区と合わせて当初の調査範囲である41～51Ｍ～Ｓグリッド列の古墳時代の遺構を対象とした空撮を行い、その後河川跡の掘削、平面図化、等高線の測量、遺構のないか所での縄文下層トレンチ調査などを終え、８月５日に47～51Ｍ～Ｓグリッド列の調査を完了した。この時点で北区の古墳時代の遺構は、50･51グリッド列に掘立柱建物１棟、土坑１基、ピット６基であった。弥生時代の遺構は、性格不明遺構１基が、50Ｎグリッドより検出されており、その北側に検出された河川跡からは、弥生時代中期の甕がほぼ完形で出土した。

当初の調査範囲の調査が、予定より早く終了したため、かねてからの懸案であった52～58Ｌ～Ｒグリッド列も新たに本年度の調査範囲に加えることとし、８月２日よりこの区域の確認トレンチの掘削、表土掘削を開始した。その結果、古墳時代の遺構と弥生時代の包含層の広がりが、52～57Ｐ～Ｒグリッド列に集中していることが判明した。古墳時代の遺構は、竪穴建物１軒、土坑１基、性格不明遺構２基、河川跡の北縁に古墳時代後期の６か所の土器集中か所が検出された。弥生時代の遺構は、３枚の包含層直下の遺構確認面でそれぞれ複数検出されたが、弥生土器片と各面の間に介在する炭化物を含む包含層の存在によりそれらの遺構群の平面的な検出は、困難を極めた。そこで包含層の範囲に数本のサブトレンチを入れ、遺構の立ち上りと切り合いを検討しながら、調査を進めた。その結果、炉・柱穴を伴う周溝を有する建物跡８軒と土坑を伴う長楕円形の周溝遺構４基、土坑５基、性格不明遺構４基、溝跡５条を検出した。先に述べた性格不明遺構１基を含めて、これらが北区における弥生時代の全遺構の種別と総数である。９・10月は好天に恵まれ、弥生時代の遺構の調査は、順次進展し、10月８日の豪雨の中、二度目の現地説明会を開催した。11月に入ると雨も多くなったが、貴重な好天に恵まれた11月21日、弥生時代の遺構群を中心に、二度目の遺跡全景空中撮影を行った。その後悪天候に悩まされつつも、縄文時代の下層トレンチ調査を行い、12月１日に現場撤収・引渡しを終え、約７ヶ月にわたる発掘調査をすべて完了した。

Ｂ　整　　理

整理は、現場調査期間の６月以降から現場作業棟で図面修正、写真整理、遺物の洗浄を、新潟市の国際航業北陸調査事務所において図面トレース、遺物の注記・接合・復元・実測の一部を行い、現場作業終了後の12月以降、同調査事務所で本格的な整理作業を行った。遺構図面トレース･図版組み･写真図版の作成、遺物の実測・トレース・遺物図面図版組み・遺物写真撮影・遺物写真図版組みなどを12～１月末にかけて行い、１～２月上旬にかけて原稿執筆、編集作業を行った。

Ｃ　調査・整理体制

試掘確認調査と平成 17 年度の本調査及び整理作業は、以下のような期日と体制で行った。

［試掘確認調査］

調査期間　平成 12 年 10 月 23 日～ 11 月 10 日、平成 13 年 3 月 29 日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　（理事長　野本　憲雄）

管　　理　須田　益輝（専務理事・事務局長）

長谷川司郎（総務課長）

戸根与八郎（調査課長）

庶　　務　椎谷　久雄（総務課主任）

調査指導　寺崎　裕助（調査課公団担当課長代理）

調査担当　小田由美子（調査課主任調査員）

調査職員　後藤　　孝（調査課主任調査員）

小林　芳宏（調査課主任調査員）

尾崎　高宏（調査課文化財調査員）

調査期間　平成 13 年 8 月 29・30 日、9 月 25 日～ 11 月 6 日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　（理事長　板屋越　麟一）

管　　理　須田　益輝（専務理事・事務局長）

長谷川司郎（総務課長）

岡本　郁栄（調査課長）

庶　　務　椎谷　久雄（総務課主任）

調査指導　寺崎　裕助（調査課公団担当課長代理）

調査担当　沢田　　敦（新潟県教育庁文化行政課主任調査員）

石川　智紀（調査課主任調査員）

調査職員　後藤　　孝（調査課主任調査員）

渡辺　　弘（調査課主任調査員）

田中　一穂（調査課嘱託員）

［本調査（平成 17 年度分）・整理作業］

調査期間　平成 17 年 4 月 11 日～ 12 月 6 日

整理期間　平成 17 年 12 月 7 日～平成 18 年 3 月 31 日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　（理事長　武藤　克己）

管　　理　波多　俊二　（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）

長谷川二三夫（同　総務課長）

藤巻　正信　（同　調査課長）

監　　督　鈴木　俊成　（同　調査課日東道担当課長代理）

沢田　　敦　（同　調査課日東道担当班長）

山田　秀樹　（同　調査課日東道担当主任調査員）

庶　　務　長谷川　靖　（同　総務課班長）

調査組織　国際航業株式会社

現場代理人　大西　孝幸　（国際航業株式会社　文化事業部　主任技師）

調 査 担 当　前川　雅夫　（同　文化事業部　主任研究員）

調 査 職 員　辻　　弘和　（同　文化事業部　研究員）

丹下　昌之　（同　文化事業部　研究員）

田村　典雄　（同　文化事業部　研究員）平成 17 年 4 月 1 日～ 6 月 10 日

福井　流星　（同　文化事業部　研究員）平成17年6月13日～平成 18年 3 月31日

片山　博道　（同　文化事業部　研究員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的・歴史的環境

道端遺跡は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端 97 番地ほかに所在する。道端遺跡の立地する新潟平野は、新潟県北東部に位置する堆積平野で、北側は海岸に平行して、海岸砂丘が発達しており、北東部には西朝日岳（1814 m）などが連なる朝日連峰が山形県との境をなしている。南東部には北股岳（2025 m）飯豊山（2105 m）三国岳（1644 m）などの山々が連なる飯豊連峰がそびえている。新潟平野北東部にはこれらの山々から多くの河川が流入している。新潟平野北東部を流れる最大の河川は荒川である。荒川は大朝日岳山（1870 m）に源を発し、飯豊連峰の北麓から流れ出す沼川・大石川などと合流しながら日本海に注いでいる。第二の河川は、飯豊連峰に源流をもつ胎内川である。胎内川は古くは「たいな川」「鯛の川」と呼ばれており、1888（明治 21）年に日本海に向けて開削されるまで海岸砂丘の南側に平行して北上し、荒川町海老江で荒川と合流していた。このため、洪水を繰り返し、1967（昭和 42）年の羽越水害に代表されるような大きな水害は、記録に残っているものとしては最古の平安時代後期の 1090（寛治４）年以来、19 回余りに及んでいる。特に、江戸時代中頃の 1757（宝暦７）年５月 23 日の大洪水などでは復旧に 50 数年を要したといわれている［建設省 1975］。

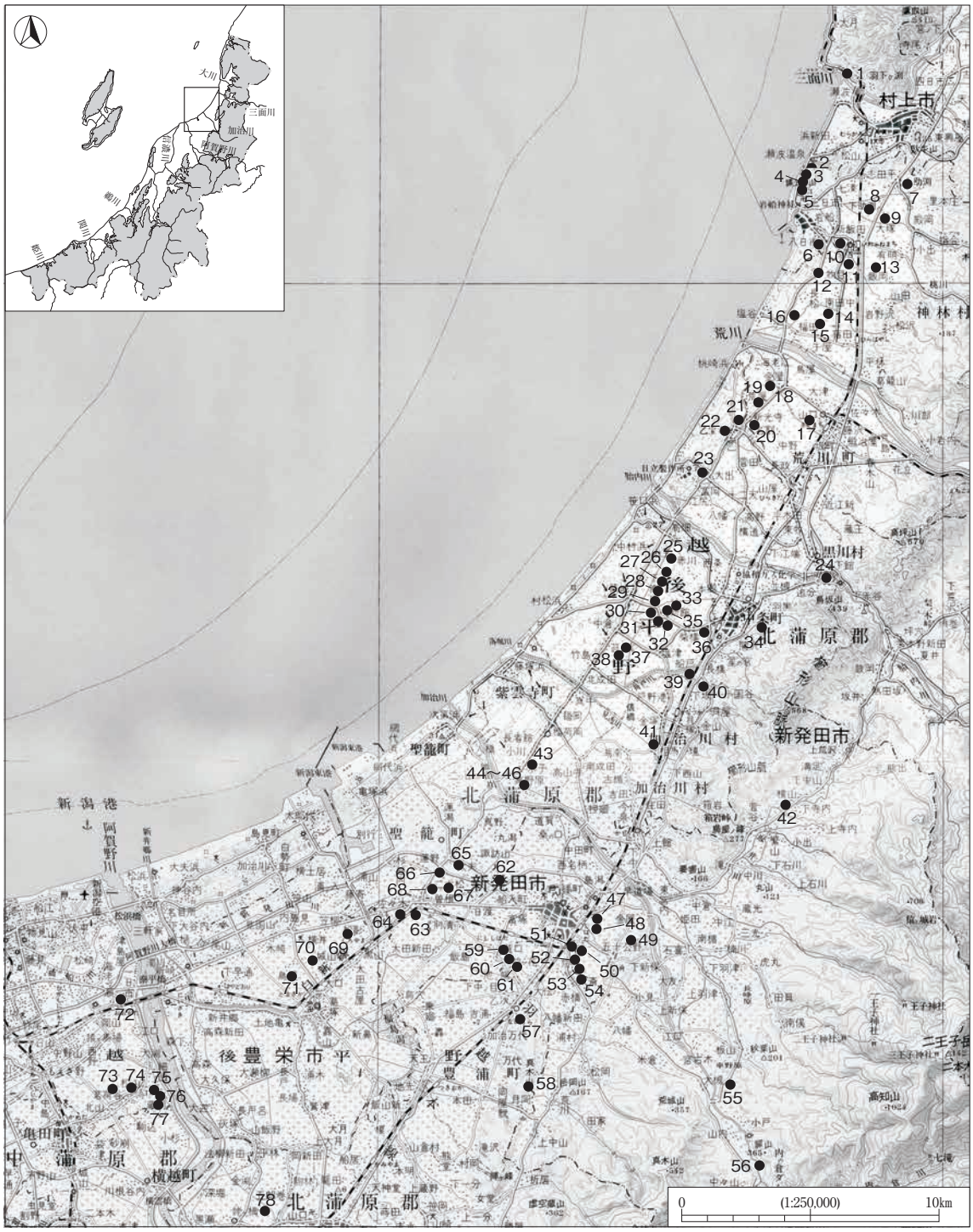
道端遺跡は胎内川扇状地と荒川扇状地に挟まれた低地に位置し、標高は約 2.0 ～ 2.7 mを測る。ここは、旧河川や湖沼跡の粘性土を主体とした堆積物の分布地帯であり、いわゆる後背湿地である。地下水は飽和して、地表面が低湿な状態になっている。この地域の地層は細砂、埋木、シルト及び泥炭などで構成され、暑さ 10 m以上にわたって堆積している所もある。本遺跡を含めたこの付近では、伏流水も被圧地下水に転化し、幅広い自噴帯を形成している［石橋ほか 1977］。このため、遺跡とその近辺の地盤は軟弱な部分が多い。

歴史的環境については［石川・内藤ほか 2002；渡邊・内藤ほか 2003］に詳しいので、参照されたい。

2　阿賀野川以北の古墳時代の遺跡

道端遺跡が含まれる阿賀野川以北の地域には、近年の大規模なほ場整備や日東道建設などに伴って、多くの古墳時代の遺跡が発見された。古墳時代の遺跡は砂丘、丘陵端部及び沖積低地に置ける微高地上などに分布する。

村上市内の磐舟浦田山古墳群は、浦田丘陵端部に位置し、1957（昭和 32）年に調査され「石廓堡」という名称で磐舟柵関連の施設として認識されていたが、1994（平成６）年に新潟大学の調査によって古墳時代後期の古墳群であることが再確認された［甘粕ほか 1996］。周辺には、古墳時代後期の遺跡が存在する。神林村では圃場整備に伴い、調査された遺跡が多数存在する。衣田遺跡からは古墳時代中期～後期の遺物が発見され［田辺ほか 2001］、金曲遺跡からは TK47 期の須恵器杯蓋及び杯身が出土し［田辺ほか 2002b］、高田遺跡では MT15 ～ TK10 期の須恵器杯蓋及び杯身が出土している［田辺ほか 2003b］。胎内市（中条町）では、日東道建設やアクセス道路の建設に伴う調査の結果、多くの遺跡が発見された。反貫目遺跡からは



第３図　弥生・古墳時代の主要な周辺遺跡（国土地理院１：200,000「村上」・「新潟」を縮小）

土坑２ 基とその周辺から完形に近い土器と臼玉が多量にまとまって出土した。［寺﨑・佐藤ほか2004］。また、ほ場整備関連でも多くの遺跡調査が行われた。野付遺跡からは破片ではあるが、初期須恵器杯蓋の口縁部が出土し［水澤 1999］、屋敷遺跡からは滑石製紡錘車が６世紀中頃～後半にかけての遺構から出土しており、その他に MT15 ～ TK209 期にかけての土器が出土している［水澤・吉村 2004］。聖篭町周辺には、多くの古墳時代の遺跡が存在する。新潟砂丘列上に位置する山三賀Ⅱ遺跡は、古墳時代前期～中期にかけての集落で、12 軒の住居が検出されている［坂井 1989］。新発田市の曽根遺跡からは、山三賀Ⅱ遺跡と同

番号	遺跡名	時代
村　上　市		
1	滝ノ前遺跡	弥生
2	磐舟浦田山古墳群	古墳
3	清水沢遺跡	弥生
4	宮の上遺跡	弥生
5	三角点下遺跡	古墳
6	砂山遺跡	弥生･古墳
神　林　村		
7	八幡山遺跡	弥生
8	水尻遺跡	古墳
9	金曲遺跡	弥生･古墳
10	大野地遺跡	弥生
11	館跡遺跡	古墳
12	高田遺跡	弥生
13	在ヶ付Ⅲ遺跡	弥生
14	衣田遺跡	弥生･古墳
15	中部北遺跡	弥生
16	長松遺跡	弥生･古墳
荒　川　町		
17	坂町宮ノ腰D遺跡	古墳
18	桜林遺跡	古墳
19	中曽根遺跡	弥生･古墳
20	道端遺跡	弥生･古墳
胎　内　市		
21	乙遺跡	弥生･古墳
22	城山遺跡	弥生
23	富岡遺跡	古墳
24	仁谷野遺跡	弥生
25	一杯田遺跡	古墳

番号	遺跡名	時代
26	六斗蒔遺跡	古墳
27	反貫目遺跡	古墳
28	西川内北遺跡	古墳
29	西川内南遺跡	古墳
30	土居下遺跡	古墳
31	福田遺跡	古墳
32	上屋敷遺跡	古墳
33	天野遺跡	古墳
34	野付遺跡	古墳
35	東川内中興野遺跡	弥生･古墳
36	極楽寺遺跡	弥生
37	一の割遺跡	弥生
38	四の割遺跡	弥生･古墳
39	升川遺跡	弥生
新　発　田　市		
40	舟戸川崎遺跡	古墳
41	村尻遺跡	弥生
42	野中土手付遺跡	古墳
43	王子山遺跡	弥生
44	山草荷Ⅱ遺跡	弥生
45	山草荷Ⅰ遺跡	弥生
46	山草荷Ⅴ遺跡	弥生
47	金屋遺跡	弥生
48	松橋遺跡	弥生
49	山崎西遺跡	古墳
50	福島遺跡	古墳
51	家裏南遺跡	古墳
52	蛇塚遺跡	古墳
53	大真木遺跡	古墳

番号	遺跡名	時代
54	太斎遺跡	古墳
55	上車野E遺跡	弥生
56	小戸A遺跡	弥生
57	石蔵遺跡	古墳
58	瑞波遺跡	弥生
59	中谷内遺跡	古墳
60	八幡野遺跡	古墳
61	曽根遺跡	弥生･古墳
62	念仏塚遺跡	古墳
63	馬見坂遺跡	古墳
64	佐々木山遺跡	古墳
聖　籠　町		
65	山大夫遺跡	弥生
66	山三賀Ⅰ遺跡	弥生･古墳
67	二本松東山遺跡	古墳
68	二本松遺跡	弥生
新　潟　市		
69	松影A遺跡	弥生･古墳
70	正尺A遺跡	弥生･古墳
71	正尺C遺跡	弥生･古墳
72	石動遺跡	弥生･古墳
73	東囲遺跡	弥生･古墳
74	小丸山遺跡	弥生
75	中山遺跡	弥生
76	城山遺跡	弥生
77	笹山前遺跡	弥生
阿　賀　野　市		
78	猫山遺跡	弥生

第1表　弥生･古墳時代の主要な周辺遺跡一覧表

じ時期の遺物が出土し ており、その関係が注目される［家田 1981・1982；川上 1997］。新潟市では新潟砂丘列上に位置する松影Ａ遺跡から TK23 ～ TK10 期のの須恵器杯身･杯蓋･瓹･甕などが出土している［加藤ほか 2001］。

3　阿賀野川以北の弥生時代の遺跡

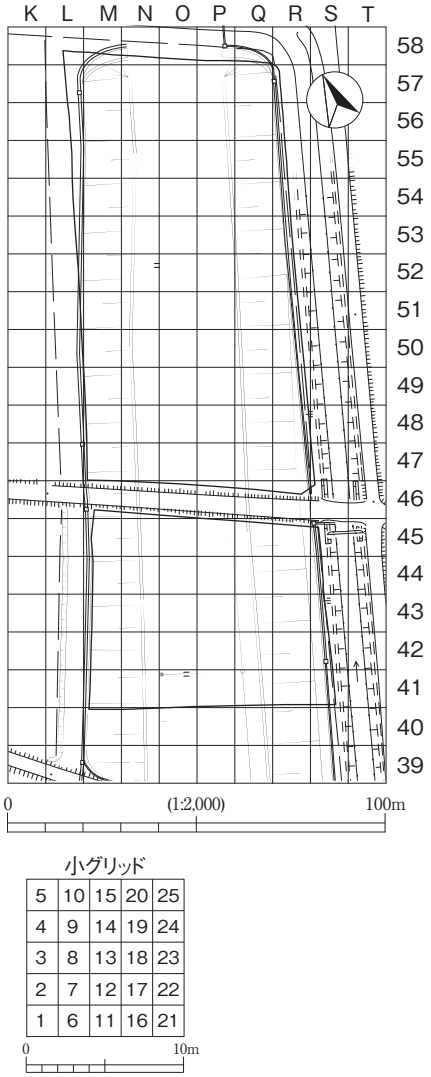
阿賀野川以北では弥生時代に登録されている遺跡の件数は少なかったが、古墳時代と同様に近年の大規模なほ場整備などに伴って、多くの弥生時代の遺跡が発見された。弥生時代の遺跡は沖積地、砂丘及び山間部に分布している。この地域の遺跡は、ほとんどの遺跡において遺構が検出されず、遺物だけが出土する。

村上市には、滝ノ前遺跡がある。三面川右岸の河口近くの河岸段丘上に立地しており、新潟県内で初めて天王山式の土器を伴う住居跡が確認され、環状石斧・アメリカ式石鏃なども出土した［関 1972］。砂山遺跡は新潟砂丘上に立地しており、天王山式の土器やアメリカ式石鏃などが出土している［滝沢 2003］。神林村では、長松遺跡から天王山式、宇津ノ台式などの土器やアメリカ式石鏃、管玉未成品などの石器が出土し［田辺 1991］、衣田遺跡からは後期の高杯杯部と甕が出土し［田辺ほか 2001］、金曲遺跡からは天王山式の土器が出土し［田辺ほか 2002］、高田遺跡からも天王山式の土器が出土している［田辺ほか 2003b］。道端遺跡の所在する荒川町では、坂町宮ノ越Ｄ遺跡からアメリカ式石鏃や天王山式の土器が出土している。胎内市には道端遺跡に近接している乙遺跡があり、山草荷式、小松式や天王山式の土器や碧玉製管玉未成品などが出土している［戸根ほか 1982］。新発田市には、山草荷式の標識遺跡である山草荷遺跡などが所在する。櫛形山脈と二王子岳麓にはさまれた谷底平野の微高地に位置する村尻遺跡からは中期前半の再葬墓９基、土坑２基が検出されている［田中ほか 1982］。金屋遺跡からは小松式や天王山式の土器や磨製石斧などが出土している［鶴巻・田中 1994］。新潟市では東囲遺跡から小松式や天王山式の土器が出土し［朝岡・諫山 2003］、松影Ａ遺跡からは宇津ノ台式や天王山式の土器が出土している［加藤ほか 2001］。

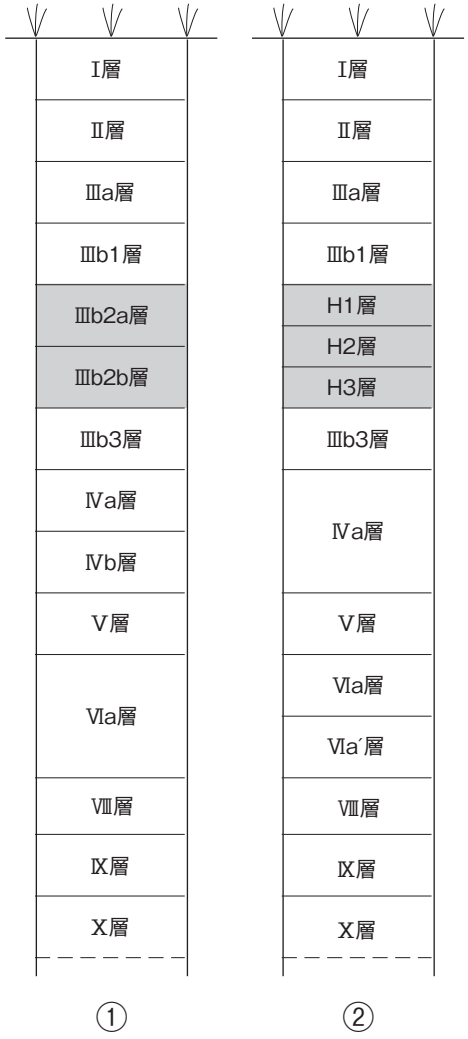
第Ⅲ章　調査の概要と経過

1　グリッドの設定

平成 14 年度調査［渡邊・内藤ほか2003］で設定したグリッドを今回の調査においても使用し、日本海東北自動車道のセンター杭である STA.370+00（日本測地系 X=235159.995，Y=80309.888）と STA.374+00（同 X=23519.131、Y=80845.549）を結んだラインを南北方向の主軸とした。グリッド南北方向の主軸は、真北から約 26°東偏している。主軸と直交する東西の軸は、平成 14 年度調査の STA.370+00（11 P）を基点として、順次北へグリッドラインを設定していった（第４図）。



第4図　グリッド設定図



第5図　基本層序模式図

グリッドは、大グリッドと小グリッドからなり、大グリッドは、10m 四方を単位とし、小グリッドは、大グリッドを２m 四方に 25 等分したものである。大グリッドの名称は、南西隅を基点とし、南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットとして［41 P］のように呼称した。小グリッドは、１～25 の算用数字で表し、南西隅を１、北東隅を 25 とした。表記は、大グリッドの後につけて［41 P 18］のように呼

称した。平成 16 年度調査区は、南北方向は、40 から 58、東西方向は、ＬからＳまでの範囲となる。

２　基本層序と包含層

本遺跡の基本土層は、第５図に示すとおりであるが、北区と南区でⅢｂ１層以下の基本堆積土層・包含層に若干の相違が見られる。まず、Ⅲ b2a 層については、南区でも、観察されたものの北区のような面的な広がりは持たない。また、弥生時代包含層（Ｈ１～Ｈ３層）については、北区の一部（54 ～ 56 Q・Ｒグリッド）で明確に観察され、南区においては、認識することができなかった。そのため遺構のほとんどないか所と集中するか所の二つの柱状図を第５図に①・②として掲載した。包含層と遺構の関係などの詳細については、第Ⅳ章第３節Ａ項２）で述べる。以下基本堆積土層と包含層について簡潔に記述する。

Ⅰ層　　黒褐色粘質土。現水田耕作土。

Ⅱ層　　暗褐色粘質土。腐植土層。いわゆるガツボ層で本調査区では、局部的に観察される。

Ⅲａ層　　灰褐色粘質土。古墳時代包含層と推定。大半が後世の撹乱を受け局部的に観察される。

Ⅲ b1 層　　灰白色粘質土。古墳時代遺構検出面層。

Ⅲ b2a 層　　灰白色粘質土。炭化物を含む。北区の南側（48 ～ 51 Ｌ～Ｒグリッド）に分布する南区にも局部的に観察される。

Ⅲ b2b 層　　Ⅲ b2a 層に弥生土器片を含む層。遺構のほとんどないか所に広がる。53 Ｐ～Ｒグリッド区の北側、54･56 Ｐ～Ｒグリッド区に局部的に分布する。後述するＨ３層に相当する。

Ⅲ b3 層　　灰白色粘質土。弥生時代遺構確認面層。

Ⅳａ層　　青灰色粘質土。

Ⅳｂ層　　灰色粘質土。Ⅳａ層より色調が暗く南区にのみ分布。

Ⅴ層　　暗褐色粘質土。腐植土層（ガツボ層）。

Ⅵａ層　　青灰色シルト。

Ⅵａ′層　　青灰色シルト。Ⅵａ層より若干砂質で色調が暗い。

Ⅷ層　　明青灰色粘質シルト。

Ⅸ層　　灰色粘質シルト。少量の骨片含む。

Ⅹ層　　暗灰色粘質シルト。少量の骨片含む。

遺構集中区の 54・56 Ｐ～Ｒ区に分布する弥生時代包含層は、以下に分層した７層が主な土層である。場所によって若干の相違をみせるが、標高がほとんど同じであることや土層の色調や質感が酷似していることからＨ１・Ｈ２・Ｈ３層に枝層があると考えた。

Ｈ１層　　灰白色シルト。微量の炭化物粒と石器片・土器片を含む。

Ｈ１′層　　明褐灰色シルト。微量の炭化物粒と石器片・土器片を含む。

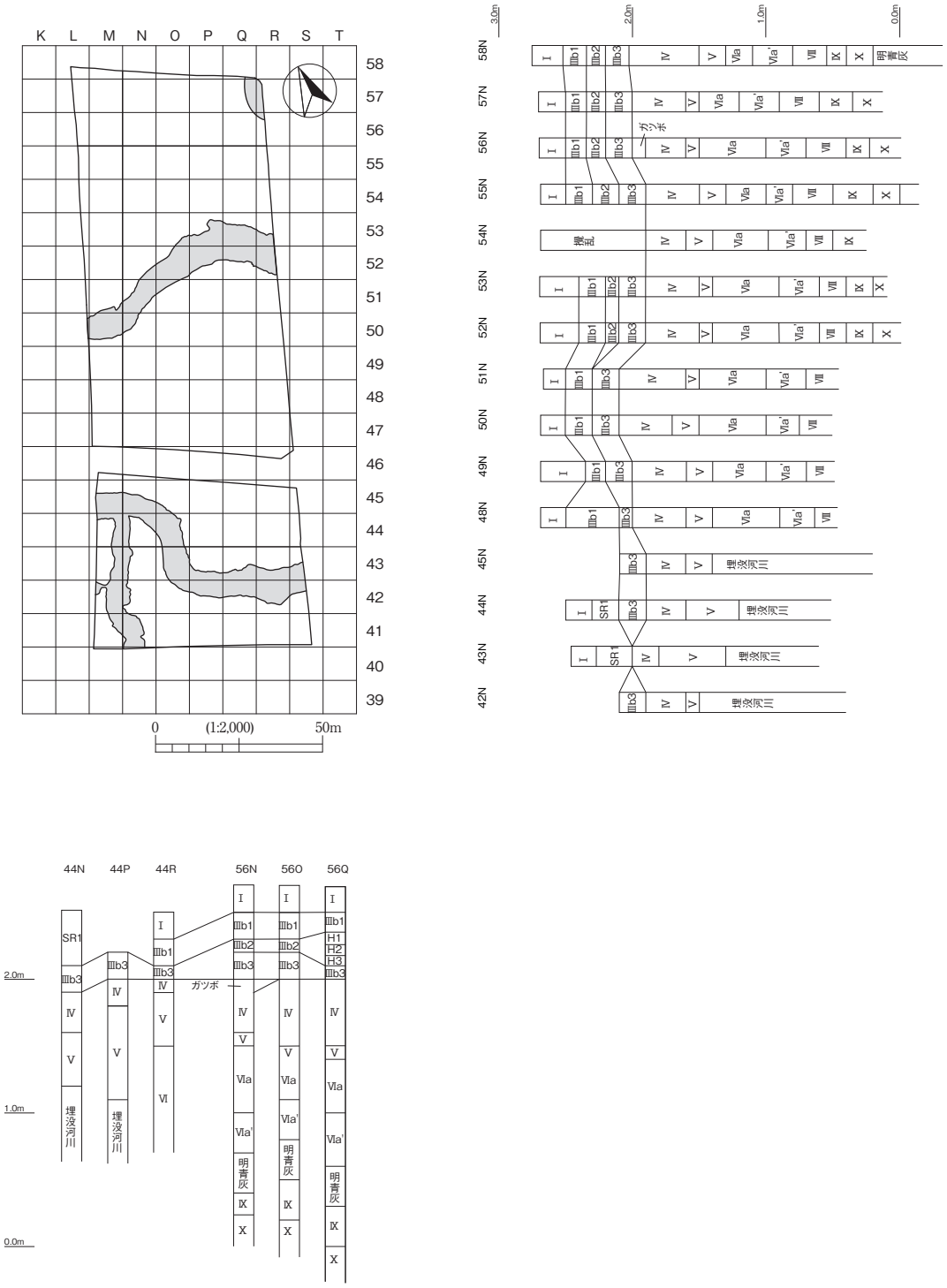
Ｈ２－１層　　灰白色粘質シルト。少量の炭化物粒と石器片・土器片を含む。

Ｈ２－１′層　　灰白色粘質シルト。中量の炭化物と石器片・土器片を含む。

Ｈ２－２層　　明褐灰色粘質シルト。微量の炭化物と石器片・土器片を含む。

Ｈ３－１層　　褐灰色粘質シルト。多量の炭化物と中量の石器片・土器片を含む。

Ｈ３－２層　　明褐灰色粘質シルト。少量の炭化物と微量の炭化物と石器片・土器片を含む。


K L M N O P Q R S T
58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39
0 (1:2,000) 50m
3.0m
2.0m
1.0m
0.0m
58N 57N 56N 55N 54N 53N 52N 51N 50N 49N 48N 45N 44N 43N 42N
明青灰
ガツボ
攪乱
埋没河川
44N 44P 44R 56N 56O 56Q
SR1
ガツボ
埋没河川
H1 H2 H3

第6図　基本層序柱状図

第Ⅳ章　遺　　構

1　古墳時代の遺構

A　遺構の概要

ここでは、確認された遺構の種別と数、位置及び全体の傾向と、遺構の平面・断面形態・主軸方位の測定方法とその特徴について述べる。

1）概　　要

今次調査においては、総じて古墳時代の遺構はあまり検出されなかった。遺構の種別ごとでは、北区で竪穴建物が１軒（SI ６）と掘立柱建物が１棟（SB107)、土坑（SK）が２基、河川跡が１条（SR ２a)、性格不明遺構（SX）が４基、ピット（P）が６基である。南区では土坑が３基、河川跡が１条（SR １）である。南北両調査区あわせて竪穴建物が１軒と掘立柱建物が１棟、土坑が５基、河川跡が２条、性格不明遺構が４基、ピットが６基である。遺構の種別を問わずに合計しても 19 に過ぎない。

遺構が少ない理由としては、北区・南区ともに耕地開発によると考えられる古墳時代包含層と遺構面の攪乱と削平、また水田耕作による多数の踏み抜き跡により遺構の検出が困難であったことが挙げられる。

昨年度確認できた古墳時代遺物包含層（Ⅲａ層）が、今年度調査においてはほとんど確認できなかったか、確認できた場合でも、表土の耕作に伴う踏み込み跡の間に残る程度というように安定した状況の確認は出来なかった。特に南区では古墳時代の遺構確認面を掘り込む河川跡（SR １）が調査区の約半分の面積を占めるという不幸も重なった。

北区では竪穴建物と掘立柱建物が一つずつ確認できたものの、それ以外には広がりを見せなかった。全面積に対してみると南区以上に遺構密度が希薄である。ただしおよそ 54 列以北、O列以西の範囲では土師器の出土数より須恵器が多いという特徴と、51 ～ 54 列、N～O列の範囲では遺構こそ確認できなかったものの、碗が４個体分以上出土したことが注目される。

2）平面・断面形態

a　平 面 形 態

なお遺構の平面および断面形態の呼称は、和泉Ａ遺跡の分類［荒川・加藤 1999］に従った。

円　形：長径が短径の 1.2 倍未満のもの。

楕円形：長径が短径の 1.2 倍以上のもの。

方　形：長軸が短軸の 1.2 倍未満のもの。

長方形：長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの。

不整形：凹凸で一定の平面形を持たないもの。

b　断面形態

台形状：底部に平坦面を持ち、緩やか～急角度に立ち上がるもの。

箱　状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。

弧　状：底部に平坦面を持たない皿状で、緩やかに立ち上がるもの。

半円状：底部に平坦面を持たない椀状で、急角度に立ち上がるもの。

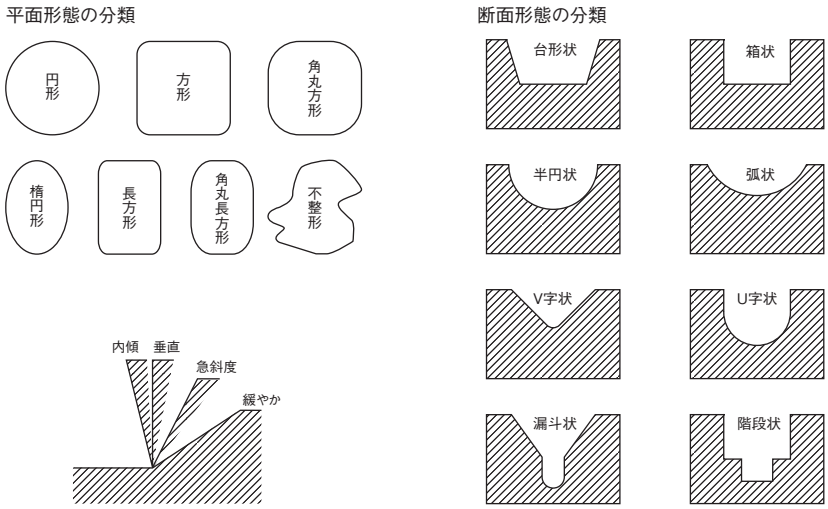
Ｕ字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。

Ｖ字状：点的な底部を持ち、急角度に立ち上がるもの。

漏斗状：下部がＵ字状、上部がＶ字状の二段構造からなるもの。

3）主軸方位

遺構の主軸方位は、長軸を基準に真北からの角度を測定し、［Ｎ－23°－Ｗ］、［Ｎ－16°－Ｅ］のように表記した。



第７図　遺構の平面形態と断面形態の分類図（［荒川・加藤 1999］に加筆）

Ｂ　遺構各説

1）竪穴建物

SI６（図版５・26・50・51・77）54・55 Ｑ・Ｒグリッドに位置する。長径 3.5 m、短径 3.3 mの隅丸不整方形で、主軸方位は、Ｎ－60°－Ｗである。遺構の遺存状況は極めて悪く、壁･床面が削平･撹乱され、カマドの火床面も一部撹乱を受けた状態でⅢ b1 層下面において検出された。床面は平坦で、掘り方の深さは、５～10 ㎝を測る。住居の床面層は硬くしまった小砂利を含む灰白色シルト、掘り方層が明褐灰色シルトである。住居内施設は西壁中央にカマド、南部隅に地床炉が、住居内の西壁寄りに３基のピット・中央部やや東寄りに２基のピットが検出されたが、周溝は検出されていない。遺存していたカマドの火床面は、長径 120 ㎝・短径 48 ㎝厚み最大４㎝の不整形を呈し、主軸方位は、Ｎ－67°－Ｗである。火床面の東側に炭化物の濃く分布するカマド前庭部が観察され、火床面範囲の両脇には、構築された袖の基底部が遺存していた。カマド掘り方は長径 1.1 m、短径 0.8 mの楕円形を呈し、袖掘り方は、長径 80 ㎝、短径 25～30 ㎝の内湾する長楕円形である。カマド内覆土は、火床面層が暗赤褐色シルト・カマド掘り方層が明

褐灰色 シルト・袖基底部は明褐灰色シルトに褐色土ブロックを混入する。炉は長径30㎝・短径20㎝の不整形で、主軸方位はカマドに等しく、灰赤色シルトの焼土層の厚みは２㎝である。ピットは、15～25㎝の円形または楕円形で深さは確認面から15～20㎝を測る。断面形は半円状もしくはＵ字状で、主な覆土は灰黄色粘質シルトである。重複関係はSI15を切り、炉の火床面直上出土の砥石（１）を掲載した。

２）掘立柱建物

SB107（図版６・26・44・52・77・87） 50・51 Ｐグリッドに位置し標高2.47ｍ、Ⅲb1層精査中に検出した。規模・形態は桁行２間(3.44ｍ)×梁行１間(2.92ｍ)、面積約10㎡の側柱建物跡で、主軸方位をＮ－１°－Ｅにとる南北棟の建物である。柱間寸法はＰ１－Ｐ２：1.9ｍ、Ｐ２－Ｐ３：1.5ｍ、Ｐ３－Ｐ４：2.8ｍ、Ｐ４－Ｐ５：1.8ｍ、Ｐ５－Ｐ６：2.9ｍ、Ｐ６－Ｐ１：2.8ｍである。柱穴掘り方の平面形は円形、楕円形があり、規模は直径24～40㎝、断面形はＵ字状で、検出面からの深さは30～50㎝である。また、全てのピットで柱材を検出した。遺物はＰ５掘り方覆土から土師器小片が４点出土し、そのうち高杯（２）、柱材（331～335）を図示した。

３）土　　坑

SK １（図版７・26・53・77） 43 Ｏ１・２・６・７グリッドに位置し、Ⅲb1層上面で検出された。覆土は単層。灰白色シルトで、金雲母粒子を多く含む。すぐ東を流れるSR １の覆土にも金雲母粒子を含むことから、この遺構の埋没過程にこの旧河川が影響を及ぼしたことが伺われる。土師器甕（３・４）などが出土した。

SK ２（図版７・26・53・77） 43・44 Ｑ・Ｒグリッドに位置し、Ⅲb1層上面で検出された。覆土は２層に分層でき、１層は暗灰黄色シルト、２層は灰白色シルトである。SK ２とSK ３は近接して存在するが、切り合い関係はない。土師器甕（５）などが出土した。

SK ３（図版７・53） 43 Ｒ４・５グリッドに位置し、Ⅲb1層上面で検出された。覆土は３層に分層でき、１層は灰黄色粘質シルト、２層は灰黄褐色粘質シルト、３層は灰白色シルトである。２層から土器小片１点が出土しており、甕胴部片であると推測される。

SK102（図版８・53） 50 Ｑ８グリッドに位置し、Ⅲb1層上面で検出された。覆土は４層に分層でき、全ての層に酸化鉄粒を含む。１層は灰白色砂質シルト、２層は黄灰色シルトで炭化物と灰を含む。３層は赤灰色シルトで、焼土もしくは腐植土層である。４層は黄灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

SK116（図版８・26・54・77） 54・55 Ｑグリッドに位置し、Ⅲb1層で検出された。主な覆土は、６層に分層でき、１・２層は炭化物と土器片を多量に含む層、３層は炭化物層、４～６層は無遺物層で、腐植土に類似した土でしまりはない。１・２層は検出面から深さ15cmを測る。３層の炭化物層は厚さ約５cmを測る。遺構地山のⅢb1層より下位のⅢb2b層も土坑と同様に凹んでいる。この凹みは、人為的痕跡を確認できず、自然によるものと判断した。遺物は１・２層から多量の土器片が炭化物と一緒に出土した。炭化物の中には径５㎝大の木材も確認できる。出土遺物はほぼ完形になるまでに復元できるものばかりであり、出土状況はSR ２ａの土器集中地点（№１～６）と類似する。SK116は日常生活での廃棄土坑と非日常生活での埋納土坑の２通りの見解がある。類似する遺構はSR ２ａの土器集中地点（№１～６）・SX119・50 Ｍグリッドの土器集中地点・SK １・２ を挙げることができ、どの遺構も出土遺物はほぼ完形に復元できるもので、多量の炭化物を含むことも合わせてこれらの遺構には共通性が認められる。

４）河　川　跡

ａ　概　　要

北区、南区ともに１条ずつ確認された。北区の河川跡 SR ２は、50 M～ 53 R グリッド付近にかけて、やや北に弧を描くように調査区を東西に横断する形で認められた。幅は広いところで約 10 mである。弥生時代から古墳時代まで継続していた自然流路で、この項で弥生時代についても触れることとする。

南区の河川跡 SR １は調査区西端を 45 Mグリッド付近とし、45 Nグリッド付近で分流する。一本はほぼ真南に流れ、41 Nグリッド付近で調査区外へ延びる。この流路は前年度調査で確認された河川跡とつながる可能性が高い［前川ほか2005］。もう一本は一旦南へ蛇行した後東へ流れ、43 Sグリッド付近で調査区外へ延びる。

いずれの河川跡も、その形成は弥生時代にあり、それ以前の時期にはおそらく基本土層のⅤ層（ガツボ層）を形成した、非常に広範囲に及ぶ、湿地が形成されていたと考えられる。弥生時代にはその湿地が次第に狭くなり、流路となっていた状態と想像される。その後、次第に自然堆積によって埋没していき、古墳時代にはほぼ埋まりかけた状態であったと考えられる。また､流路内に太い流木が入っていることから、自然堆積といっても土石流のように一時に流路を埋めるような洪水が何度かあったことが想定される。東方の高坪山方面から流れ出た旧胎内川の一支流ではないかと考えられ、大きく西に向かって流れていたと推定される。

ｂ　各　　説

SR １（図版 24・27・54・77）　５本のトレンチセクションにより堆積状況を確認した。

セクションＡ　42 M・Nグリッドの約９mの東西セクションである。最深部はほぼ中央で標高 1.2 mとなる。表土（Ⅰ層）もレンズ状に堆積しており、ごく最近まで河川の名残があったようである。覆土は４層に分層される。１層は上面の凹凸がかなり激しく、耕作による踏み込み跡が顕著である。褐灰白色シルトで、腐植木質細片を微量に含む。２・３層はほぼ中央が下がるレンズ状堆積を示す。２層は黄灰色シルトで、１層よりも大きな腐植木質片を少量含み、３層は黒褐色腐植土層で、１・２層でみられた腐植木質細片を多量に含むとともに、太い流木も含んでおり、土石流などの強い流れにより、この河が埋没したことを示している。４層は、３層覆土のほかに、粒径１㎜以下の砂粒を含んでいる。これらの覆土は、古墳時代遺構確認面であるⅢ b1 層を削りこんでいる。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

セクションＢ　44・45 Oグリッドの約８mの東西セクションである。最深部はほぼ中央で標高 1.4 mとなる。ここでは表土（Ⅰ層）は、ほぼ水平堆積である。ところどころに耕作によると思われる踏み込みによる凹凸もみられる。覆土は３層に分層される。１層は上面の若干凹凸があり、耕作による踏み込みにより乱れている。暗緑灰色粘質シルトで、２・３層は黒褐色腐植土層で、太い流木を含むかどうかで分層した。２層には太い流木が含まれる。この場所においては流路最下部には砂層が認められなかった。水平に近いレンズ状堆積を示す。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

セクションＣ　44 M･Nグリッドの約 10 mの南北セクションである。最深部は 45 Oグリッド杭付近で、ほぼ中央で標高 1.6 mとなる。表土（Ⅰ層）が、耕作による踏み込みのため下面が乱れている。覆土は３層に分層される。１層は表土の影響により上面に凹凸がある。黄灰色シルトで､腐植木質細片を少量含む。２層は黒褐色粘質シルト層で、流木・腐食木質細片を縞状に含む。３層は浅黄橙色砂層で、粒径は１㎜程

度である。レンズ状堆積を示す。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

セクションD　44 O・Pグリッドの約９mの東西セクションである。最深部は東端部で、標高 1.5 mとなる。表土（Ⅰ層）は、耕作による踏み込みのため下面が激しく乱れている。覆土は５層に分層され、レンズ状に堆積する。１層は表土の影響により上面に凹凸がある。黄灰色粘質シルト。２層は暗緑灰色粘質シルト層。３層は黒褐色腐植土層で、木質細片を非常に多く含む。４層は黄橙色粘質シルトブロックで、基本土層の古墳時代遺構面であるⅢ b1 層のブロックと考えられる。５層は同じく黄橙色で、粒径１㎜程度の砂層である。金雲母をやや多く含む。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

セクションE　42・43 Qグリッドの約９mの南北セクションである。最深部は南端近くで標高 1.5 mとなる。覆土は３層に分層され、ほぼ水平に堆積する。１層は黄灰色粘質シルトで、腐植植物を少量含む。２層は黒褐色腐植土層で、木質細片を極多量に含み、太い流木も若干混じる。３層は黄橙色で、粒径１㎜程度の砂層である。金雲母を非常に多く含む。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

このセクションEより東の区画の 43 Rグリッドにおいて、２層最下部ないし３層上部で土師器甕胴部破片が出土した。そのほかには、図化できたものとして土師器椀破片（13）があげられるに過ぎない。

以上のセクションの検討からその形成について述べる。存続時期は後述する弥生時代の遺構との切り合い関係および、SR ２aのセクションと比較検討すると弥生時代には存在せず、古墳時代に形成されたものとみられる。43 Rグリッドで土師器が出土していることから埋没もおそらく古墳時代のある時期以降に進んだものとみられる。しかし、表土・耕作土直下で河川の輪郭を確認できたことから、完全に埋没したのは比較的新しい時期であると思われる。

直径数十㎝を超える太い流木も覆土に含まれていることから、埋没は時間をかけて徐々にというよりも、何回かの土石流のような大きな流れにより、一気に埋没していった可能性が高い。河川跡の覆土にほとんど遺物が含まれなかったのもこうした要因があるのではないかと考えられる。

SR ２a・２b（図版 24・25・27 ～ 29・44・54・55・77 ～ 79）　弥生時代から古墳時代まで継続して存在した自然流路である。51 Mグリッド付近では２本の流路の切り合いとして確認でき、南側の新しい流路を SR ２a、北側の古い流路を SR ２bとした。

Aセクション　SR ２aのみ確認した。弥生期の覆土まで含めて４層に分層できた。最下層の４層は灰色中粒砂層で腐植木片を多量に含み、BセクションのSR ２aの５・６層に相当すると考えられる。古墳期の覆土は１・２層である。検出面から最も深いところでも 30 ㎝程度の深さしかなく、この深くなった部分も上部は半分ほどが、現代の攪乱により掘り込まれてしまっている。このように、古墳期に SR ２aは、Aセクション付近の位置ではほとんど河川が埋まっていた状態であったと思われる。１層は褐灰色粘質シルトで、古墳時代の遺物のほかに、中近世の陶器片なども含むことから、表土の攪乱の影響も受けているものと思われる。２層は黒褐色粘質シルトで、粒径５～ 10 ㎜大の木炭を多量に含むとともに、後に詳しく述べるが、古墳時代後期の土器片を多量に含んでいた。河川の埋没の最終段階に、投棄ないしは自然の流れ込みにより堆積したものと思われる。河川の埋没時期を考える上で重要な資料である。３・４層が弥生期の河跡と考えられる。３層は砂層であるが、色調および夾雑物により２層に細分できる。３a 層は黄色粗粒砂で、所々に灰黄色粘質シルトが層状に入り、この層には弥生土器が含まれる。付近の攪乱の影響もあると思われるが、若干、土師器も含まれる。３b 層は灰黄色中粒砂層で、腐植木質細片堆積層が互層をなす。遺物は含まない。４層は灰色中粒砂層で、腐植木質細片堆積層を互層に含む。遺物はこの層の最下部に含まれ、大きな破片が多い。断面形は弧状を呈する。河床の４層は基本土層のⅤ層を切る。

SR ２a の出土遺物は、弥生土器は（164 ～ 198）、石器は（281 ～ 284）、不明土製品（198）などが出土している。とりわけほぼ完形の甕（180）と大型石包丁（284）は注目される。

Ｂセクション　SR ２a と SR ２b の切り合いを確認できた。SR ２a は、検出面から約 90 ㎝の深さがある。覆土は６層に分層できる。１層は灰色粘質シルトで、粒径１㎜以下の炭化物を微量含み、金雲母をやや多く含む。２層は灰色砂と灰色砂が混じる層。３層は黄褐色砂と灰色粘質シルトの混砂層。堆積時の流れの影響と思われる層の乱れが認められる。４層は浅黄色砂層に、灰色砂が縞状に入る。５・６層は灰色砂層で、自然流 木を多量に含み、Ａセクションの４層に対応すると考えられる。径 30 ㎝を超えるものも含む。

SR ２b は、平面的には 51 Ｍグリッド付近にみられ、SR ２a に切られる。覆土は３層に分層される。すべて砂層である。１層は灰色砂と褐灰色粘質シルトの混層で、２層は灰色砂質シルト、３層は灰色砂と褐灰色粘質シルトの混層である。断面形は弧状を呈する。河床の４層は基本土層のＶ層を切る。遺物は、３層から出土し、河床に突き刺さった状態のものも認められた。

以上のセクションの検討から、SR ２a は弥生時代以前に存在しており、弥生時代中期頃から埋没が始まったと思われる。埋没過程は SR １と同様に、太い流木が含まれていたことから、洪水や土石流などで埋没していき、古墳時代後期に完全に埋没したものと思われる

土器集中か所　53 Ｑ・Ｒグリッドにかけて、６か所の集中か所を図示した。これは SR ２a 覆土の２層の上部において、多量の土師器を中心とした遺物が出土し、砕片などを検出過程で取り上げ、大きな破片およびまとまった個体になりそうな破片を残して調査を進めていった結果、このような分布状態となったものである。出土状況としては、甕などの大型の土器で完形になる個体はほとんどなく、底部のみあるいは胴部破片のみという状況である。かろうじて完形に近い状態で出土したものは、杯・椀類のような小形の土器であった。このように各集中か所において、完形になる個体が限られていることなどから祭祀など意図的に廃棄したものではないと考えられる。ただし注目されるのは、須恵器甑破片が２点、単孔の甑底部破片が１点など特殊な土器が含まれていたことである。北区の 54 列以北、Ｏ列以西の古墳時代の包含層でも、甑破片が確認されていることとも関係があろうと推測される。椀が多く出土したか所（№１地点）については、出土状況を図化した。出土遺物は、椀（14 ～ 36）、高杯（37・38）、壺（39 ～ 41）、甑（42・43）、土師器甕（44 ～ 69）、須恵器杯身ないし杯蓋（70）、甑（71）、そのほかに砥石（72）などが出土している。

５）性格不明遺構

SX104（図版８・44・56・87）　50 Ｑグリッドに位置し、Ⅲ b1 層上面で検出された。遺構下部に柱材（338）を検出したため SX104 の周りを精査したが、住居跡や掘立柱建物等の遺構を検出出来ず、単独の遺構であるため性格不明遺構にした。柱材は約 24°傾いて打ち込んでいる。覆土は２層に分層でき、全ての層に炭化物と酸化鉄を含む。１層は黄灰色砂質シルト、２層は黄灰色粘質シルトである。

SX118（図版８）　53 Ｑ・Ｒグリッドに位置し、Ⅲ b1 層上面で検出された。東端を近代の攪乱溝によって切られる。覆土が検出面まで上がっているところもあり、遺構上部がかなり削平されているものと思われる。覆土は１層であり、褐灰色シルトで、粒径数㎜～ 10 ㎜大の炭化物を含み、底部付近に層状に炭化物を多量に含む。土師器小破片が出土したのみである。

SX119（図版８・30・56・79）　52 Ｏグリッドに位置し、SR ２a 直上で検出された。遺構直上の北東から南西にかけて土師器小片が出土したため、東西南北に断ち割りを入れると、河川跡（SR ２）を掘り

込み数個体の土師器（甕･甑）が充填されていた。覆土は１・２層とも部分的に木の根に撹乱されていたが、上部の土師器を取り上げつつ掘り進めると、窪みの底面に土師器の甕１個体が半分に割れ、敷かれたような状態で検出された。遺物の出土状況からこの窪みを良好な一括遺物を伴う人為的な掘り込みと考え、遺構と認定した。遺構の性格は、祭祀に伴う埋納遺構と考えられる。

SX121（図版８）　55 Ｒグリッドに位置し、Ⅲ b1 層で検出された。遺構のほとんどが調査区外にある。平面形は残存部分より楕円形と推測できる。出土遺物は図示できるものはないが、弥生土器の破片が数点出土している。土師器は確認できないが、検出面がⅢ b1 層であることから、SX121 を古墳時代の遺構であると判断した。

２　弥生時代の遺構

Ａ　遺構の概要

１）概　　要（図版４）

弥生時代の遺構群は、その大部分が、南区の 42 ～ 44 Ｏグリッドと北区の 53 ～ 56 Ｐ～Ｒグリッドに集中して検出されている。ここでは、調査区全体を概観しつつ、弥生時代の包含層とこれらの遺構群を中心に述べる。

本調査区の現況は水田であり、過去の水田耕作およびほ場整備により弥生遺構検出面においても撹乱がはげしい。そのため当該時代の生活環境及び原地形は、往時の面影を残していないが、弥生時代中期にこの場所に住みついた人々の選地の仕方を遺構の位置と調査区内を流れる河川跡の関係によって知ることができる。42 ～ 44 Ｏグリッドでは、SR １の西岸沿いに遺構が集中し、53 ～ 56 Ｐ～Ｒグリッドでは、河川跡の西岸の湾曲部を居住区とし、河川跡が調査区東側に張り出す湾曲部を SD122・125 などの溝によってつなぐことにより、居住区を区画しているように思える。これらの居住区の立地は、北区と南区で様相が異なる。南区の居住区の 42 ～ 44 Ｏグリッドは、標高 2.1 ～ 2.2 ｍで周囲とあまり変わらないが、北区の居住区は 2.5 ～ 2.65 ｍを測り、周辺部と比較すると 10 ～ 20 ㎝標高が高い、いわゆる微高地である。また、北区においてＰ列以西のＭ～Ｐ列においても、SD125・127 ～ 129、SR ４によって 55 ～ 57 Ｍ～Ｏグリッド、56･57 Ｏ～Ｑグリッドという２か所に区画がなされているように見える。この２か所においては、遺構は検出されておらず、畦畔は確認されていないが、水田などの生産域の可能性も疑われる。なお、出土遺物の年代観・系譜については、第Ⅶ章で言及するが、これらの遺構群は、弥生時代中期後半の遺構群と考えられる。（第 21 図）

２）弥生時代の包含層と遺構群（第６・21 図）

ａ　北区の弥生時代包含層と遺構群

弥生時代の遺構群の包含層は、北区の 53 ～ 56 Ｐ～Ｒグリッドにおいて層序の観察から３層認識されている。本報告では、これらをＨ１層、Ｈ２層、Ｈ３層とした。土層の特徴はいずれも灰白色粘質土で下層になるほど炭化物の密度が濃く、包含する遺物も多い。それぞれの包含層の下に遺構確認面、すなわち各層の直下から掘り込まれた遺構群を確認した。これらの関係は、言わば遺構確認面相互の重複関係であり、そのことから個別の遺構間に直接的な、あるいはほかの遺構を介した間接的な切り合い関係がなくとも、

面の異なる遺構間の重複関係を認めることができる。

層序・発掘所見から各面への帰属が明らかな遺構は、以下のとおりである（第21図）。Ｈ１層直下の遺構は、SI ９～12・15などの平地式建物、SK126・132などの土坑、屋外炉の可能性のあるSX117・123・135のほかに、SX117周辺の54Ｑ・Ｒグリッドのピット群、55・56Ｑ・Ｒグリッドのピット群である。Ｈ２層直下の遺構は、唯一の竪穴建物であるSI ８、平地式建物のSI14、周溝墓の可能性のある１号周溝遺構、土坑のSK130・134である。また、Ｈ３層直下の遺構は、平地式建物SI13、２～４号周溝遺構という周溝墓の可能性のある遺構群とその付属施設の遺構である。SD122・125・127～129などのほかの遺構群を区画する溝については、確認トレンチの土層の観察からＨ１層直下の遺構と考えているが、これらの溝と包含層・各遺構との関係の詳細については、第Ⅶ章で再度言及する。なお、各層直下の遺構の同一面での重複関係については、各遺構図版及び各遺構事実記載を参照していただきたい。各面への帰属不明の遺構は、土坑のSK120、性格不明遺構としたSX111とその周辺のピットであるP112・113であり、これらは、発掘所見からⅢb3層中で検出された遺構といいうるのみである。最後にⅢb2層の無遺物層をⅢb2a層、Ⅲb2a層に弥生土器片を含む層をⅢb2b層としたが、この層は、遺構の確認されないか所にその広がりを持つ層で、遺構集中か所の各包含層との色調・含有物・標高などの比較からＨ３層に相当する層と考えられる。

ｂ　南区の遺構群

南区では、SI １・３の２軒の建物跡とSK ４～８の土坑群、SX136の炭化物集中か所が、42～44Ｏグリッドで集中して検出されている。これらの遺構群は、基本土層のⅢb3層中で検出され、包含層の存在は、確認できなかった。建物跡と推定したSI １・３は、周溝を持たず、遺構の中央部に炭化物集中か所と小規模ながらも柱穴と杭を有する。また､SK ４は柱穴が検出されなかったため､建物跡としなかったが、炭化物集中か所が土坑底面に検出され、建物跡の可能性もある。SI １・３、SK ４については、SI １・３が浅い掘り込みを持つ平地式建物、SK ４は、浅い掘り込みを持つ竪穴建物とも考えられるが、これらの遺構群は石鏃・剝片の出土量にくらべ土器の出土量も少なく、住居というよりも、作業小屋もしくは簡易な構造の建物と考えるのが妥当であろう。SK ５～８については、遺物の出土も少なく遺構の性格は不明である。

Ｂ　遺 構 各 説

１）周溝を有する建物跡

ａ　平地式建物

SI ９（図版11･33･62･81）　56Ｐ･Ｑグリッドに位置する。遺構はＩ層を除去すると､すぐに検出できた。Ｈ１層はほとんど残っていなかったが、部分的に残っていたＨ１層との関係から、Ｈ１層下面で検出できることを確認した。検出面はSR ４の上層にみられる暗黄褐色の細砂に似ているもので、少量の炭化物を含んでいる。これはSR ４から流れてきたものと考えられ、SR ４周辺に広がっているが、そのほかの所ではみられない土である。平面形は、やや不整形な隅丸方形を呈する。規模は、周溝外径で長径7.0m（推定)、短径5.9m（推定)、主軸方位は、Ｎ－10°－Ｗである。付属施設は炉・柱穴４基・周溝である。炉は中央よりやや南よりに位置し、平面形は不整円形で、径85㎝（推定）×60㎝（推定）である。火床は

やや凹んだ部分にあり、被熱部は褐色に変色し、酸化している。被熱部の厚みは約 10 ㎝である。覆土は黄褐色の焼土粒・炭化物層で、上層にはＨ１層が部分的に確認できる。掘り方は検出面から深さ約 25 ㎝を測る。覆土は灰オリーブ粘質土で、炭化物を少量含んでおり、Ⅲ b2b 層より暗い。掘り方には地山の土とほぼ同様のものが埋め戻されており、上面には粘土を貼った痕跡は確認できなかったことから、火床は埋め戻した土の直上であったと推測される。炉から北東方向にかけて炭化物の集中する部分が広がっているが、これは炉からかき出された炭化物であると考えられる。

柱穴は南東方向に４基検出できた。東側は確認トレンチにより検出できなかった。平面形はいずれも円形を呈しており、径 15 ～ 25cm、深さは検出面から 15 ～ 25cm を測る。検出面は旧水路跡の撹乱を受けており、撹乱の底面となる。主な覆土は、上層が灰オリーブ色粘質土、下層が灰色粘質土で、いずれも炭化物を多少の差はあるが含んでいる。Ｐ４は炉の東側に隣接しており、規模は径約 10 ㎝、深さ 15 ㎝を測り、ほかのものより小型である。また、長さは残存部で約 14 ㎝、径約５㎝の柱材を検出した。

周溝は幅 30 ～ 40 ㎝、断面形はＵ字状で、深さは検出面から 10 ～ 15cm を測る。覆土は黄褐色粘質土を主体として、炭化物を少量含んだもので、北側では部分的に細砂を含む。西側はⅢ b3 層において周溝底面のなごりと推測できる部分を検出したのみで、全形は不明確である。新旧関係では南側においてⅢ b2b 層下面で３号周溝遺構の周溝を確認している。SI ９が直接３号周溝遺構を切っていないが、Ⅲ b2b 層を間層に挟んでいることから、両者は層位的に時期差を確認できる。出土遺物は炉跡と炭化物集中範囲から甕（141）が出土している。また、SI ９の上層はほ場整備等により撹乱を受けており、Ｉ層に巻き上げられている可能性が高く、Ｉ層として取り上げた（254）も SI ９の可能性がある。また、撹乱から出土した（255）と図示はしていないが甕（216）と同様のものも出土しており、これらは類似資料と考えられる。

SI10（図版 12・33・63・81）　56 Ｑグリッドに位置する。遺構は SI ９と同様に、Ｉ層直下において検出され、炉の被熱面が露出していた。Ｈ１層はわずかに確認できる程度で、Ｈ２層がほとんど見えている状況であり、ほ場整備等による撹乱の影響を強く受けている状況が窺える。また、SR ４から流出した細砂が北側において確認できる。平面形は、やや不整な楕円形を呈する。規模は、周溝外径で長径 5.35m、短径 4.45m、主軸方位は、Ｎ－ 30°－Ｅである。付属施設は炉・柱穴 15 基・周溝である。炉はほぼ中央に位置し、平面形は不整円形で、径約 60 ㎝である。火床は検出面と同レベルで検出され、覆土は不明である。被熱部は褐色に変色し、酸化している。被熱部の厚みは約５㎝である。掘り方は検出面より深さ 10 ㎝を測り、覆土・構造等は SI ９と同様である。

ピットは周溝内側に大小２種類確認できる。大きい方のＰ１～５の５基が柱穴と考えられ、小さい方は柱穴とは考えにくい。ピットとし､Ｐ６～ 10 の５基である。柱穴の平面形はいずれも円形を呈しており、径 20 ～ 35 ㎝、深さは検出面から 30 ～ 40 ㎝を測る。覆土は暗灰黄色粘質土を主体として、炭化物を少量と粗砂を多量に含む。P4 は SI11･12 と共有している可能性がある。覆土は暗灰黄色粘質土を主体として、炭化物を少量と粗砂を多量に含む。Ｐ６～ 10 は炉の周囲に並んでいることから、炉に関連したピットであると推測される。P12・13・15 は不明である。

周溝は幅 20 ～ 30 ㎝、断面形はＵ字状で、深さは検出面から 10 ～ 15cm を測る。覆土は黄褐色粘質土を主体として、炭化物を少量と細砂を含む。細砂は SR ４から流出したものと考えられる。新旧関係はＰ９が SI12 の周溝を切っていることと、SI10 の周溝は SI11 と SI12 の周溝を切っていることから、SI10 が古いことを確認できる。SI ９とは新旧関係を確認できないが、Ｈ１層下面で検出されているので、ほぼ同時期であると考えられる。遺物は周溝中から甕１点（142）を出土しているのみである。類似資料とし

ては56 Qグリッドの I 層から出土しているものを挙げることができ、SI 9と同様である。

SI11・12（図版13・39・63・64・84）　56 Q・Rグリッドに位置する。検出面・検出状況はSI10と同様で、H 1層下面において検出されたと推測される。SI11とSI12はほぼ同じ位置で重複するが、SI11が約1.2 m西方向にある。SI11がSI12を切っており、建物が西側へ移動したことが想定できる。東側は調査区外で未検出であるが、用水路により消失している。SI11とSI12は1・2号周溝遺構を切っている。SI12はSX123を切っている。平面形は、楕円形を呈する。規模は、SI11が周溝外径で長径5.6m（推定）、短径4.5m、主軸方位は、N－81°－Wである。SI12が周溝外径で長径6.2m（推定）、短径5.1m、主軸方位は、N－82°－Wである。付属施設はSI11とSI12の周溝内において炉・柱穴・ピットがある。炉はSI 9・SI10と同様の構造である。被熱部は褐色に変色し、酸化している。被熱部の厚みは約10 ㎝である。掘り方は検出面から深さ約20 ㎝を測る。覆土は灰オリーブ色粘質土で、炭化物を少量含む。炉は両者ともに1号周溝遺構の上面につくられている。

ピットはSI 9･10と同様に大小2種類のものを確認できる。大型のものは柱穴とし、小型のものはピットとする。柱穴・ピットは不規則に並んでおり、どれがSI11・12のいずれかに伴うものか断定することは困難であり、また、共有している可能性も考慮して通し番号で図示した。柱穴はP 1～5の5基で、ピットはP 6～8の3基である。柱穴の平面形はいずれも円形を呈しており、直径約20～25 ㎝、検出面からの深さは15～30 ㎝を測る。覆土は暗灰黄色粘質土を主体として、炭化物を少量、粗砂を多量に含む。ピットの平面形はいずれも円形を呈しており、直径約10 ㎝、検出面からの深さは10 ㎝を測る。覆土は暗灰黄色粘質土を主体として、炭化物を少量、粗砂を多量に含む。SI11またはSI12に属する柱穴・ピットは明確に断定できないので、位置関係などから推測する。まず、周溝の重複からP 1がSI11、P 2がSI12に属する。西側にはP 3のみであることから、共有している可能性がある。P 4はSI11、P 5はSI12に属すると推測する。P 6はSI11、P 7はSI12に属し、両者とも炉に隣接していることから、炉に関連したものと想定される。P 8に関しては不明である。周溝はSI11が幅15～35 ㎝、SI12が幅20～30 ㎝を測る。SI11・12の断面形・深さ・覆土は同様で、断面形はU字状を呈しており、深さは検出面から10～20cmを測る。覆土は黄褐色粘質土を主体として、炭化物を少量と細砂を含む。細砂はSR 4から流出したものと考えられる。

遺物はSI12の周溝から石鏃（270）が1点出土しているのみである。類似資料としては、SI 9・10と同様に56 Qグリッドの I 層出土のものが挙げられる。

SI13（図版16・64・65）　55 Rグリッドに位置する。H 3層直下で検出された。周溝を有する平地式建物で、東側半分が調査区外へ延びている。検出された規模と平面形は、周溝外径で南北方向の径が4.7 mで隅丸方形を呈すと推定される。周溝区画部内は平坦で付属施設は、炉と3基のピットが検出されている。炉は極端に西側に寄り、平面形は東西に長い不正五角形を呈し、規模は長径46 ㎝、短径36 ㎝である。掘り方を持ち、炉床は灰オリーブ色粘質シルトで、炉床の上面に厚さ1 ㎝の灰赤色の火床面が観察された。3基のピットは炉の付近北側に偏在する。ピットは、径約20 ㎝の円形で深さ検出面から約30 ㎝を測る。周溝の幅22～36 ㎝、深さ検出面から6～10 ㎝を測り、断面形は浅い皿状で、主な覆土は少量の炭化物を含む明緑灰色シルトである。これらの付属施設は、SI13に帰属させたが、平面的な位置関係から単独の遺構の可能性もあろう。掲載可能な遺物は、出土していないが、周溝内より櫛描文系土器が出土している。重複関係は、SI14、SX121に切られる。

SI14（図版16・64）　55 Q・Rグリッドに位置する。H 2層直下で検出された。東側半分が調査区外

へ延びており、南側の周溝の一部は、検出できなかった。検出された限りの規模と平面形は、周溝外径で北東～南西方向の径が４ｍを測る隅丸方形を呈すと思われる。周溝区画部は平坦で検出された付属施設は、２基のピットのみである。ピットは周溝区画部の北部と中央やや西よりに位置すると思われる。その規模は、径約 20 ㎝の隅丸方形と楕円形を呈し、深さは検出面から 12 ～ 20 ㎝を測る。周溝の幅は 16 ～ 40 ㎝で、深さは検出面から 10 ㎝を測る。断面形は浅い皿状で、主な覆土は多量の炭化物を含む明褐色シルトである。掲載可能な遺物は出土していないが、櫛描文系土器が出土している。重複関係は、SX121 に切られ、SI13 を切る。

SI15（図版 14・65） 54 Q・Ｒグリッドに位置する。検出面はＨ１層下面と考えられる。周溝を有する建物跡で平面形は楕円形を呈する。規模は周溝外径で長径 4.5 ｍ、短径 3.7 ｍを測る。主軸方位はＮ－19°－Ｗである。覆土は確認できず、平地式建物と考えられる。付属施設は、炉がほぼ中央に位置し、平面形は不整形で、長径 1.6 ｍ、短径 1.1 ｍである。炉の上部が大部分削平され火床部分が薄く残るのみである。掘り方の深さは２㎝程度である。火床は周囲の床面に比べ、やや粗い砂が含まれていた。

柱穴は建物跡の東半部で、周溝から 40 ㎝以内の距離で内側をめぐるように、検出面において５か所確認できた。中軸線より西側では柱穴を確認できなかったが、上層で検出された 54 Ｒ－Ｐ５は、位置的にこの建物に伴う柱穴であった可能性もある。Ｐ１は長径 23 ㎝、短径 19 ㎝の楕円形で深さは検出面から 17 ㎝を測る。断面形は階段状を呈す。中央の一段深くなっているところが、柱痕と考えられる。柱痕部分は直径約６㎝である。覆土は単層で、黄灰色粘質シルトで、粒径１㎜未満の細かい砂粒を多量に含み、粒径１～３㎜大の炭化物を少量含む。Ｐ２は長径 35 ㎝、短径 28 ㎝の楕円形で深さは検出面から 20 ㎝を測る。断面形は台形状を呈す。覆土は２層に分層でき、１層はＰ１に共通である。２層は灰白色シルトで、酸化鉄を斑文状に多量に含む。Ｐ３は長径 38 ㎝、短径 31 ㎝の楕円形で、深さは検出面から 19 ㎝を測る。断面形はＵ字状を呈す。覆土は２層に分層でき、Ｐ２に共通する。Ｐ４は直径 28 ㎝の円形で、深さは検出面から 19 ㎝を測る。断面形は階段状を呈す。一段深い部分が柱痕と考えられる。柱痕部分は直径 10 ㎝程度である。覆土は単層で、Ｐ１に共通する。Ｐ５は長径 46 ㎝、短径 37 ㎝の楕円形で深さは検出面から 32 ㎝を測る。断面形は漏斗状を呈し、先端部が柱痕と考えられ、直径約 10 ㎝を測る。覆土は単層で、黄灰色粘質シルトで、粒径数㎜～ 10 ㎜大の炭化物を多量含む。

周溝は幅 27 ～ 32 ㎝、断面はＵ字～半円形で深さは検出面から 14 ～ 19 ㎝を測る。覆土は単層で、にぶい褐色シルトで、やや砂質を帯びる。

出土遺物は床面で、検出作業中に土器小破片が出土したのみである

ｂ　竪穴建物

SI１（図版９・33・57 ～ 59・81） 42・43 Ｎ・Ｏグリッドに位置する。Ⅲ b3 層中で検出された。浅く掘りくぼめられた建物で、竪穴建物と平地式建物の中間的なものと考えられる。西側を確認トレンチによって切られているが、平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径が残存部分で 3.30 ｍ、短径 3.35 ｍを測る。主軸方位はＮ－ 63°－Ｗである。付属施設は炉と推定される砂と炭化物集中か所、柱穴５基、溝がある。炉と推定される砂と炭化物集中か所の平面形は楕円形で、掘り方は確認できなかった。規模は、長径が残存部分で 1.90 ｍ、短径 0.95 ｍ、厚さは床面より約 10 ㎝を測る。層位は２層に分層でき、１層は灰オリーブ粘質土に粗砂と径５㎜程度の炭化物を含み、２層は灰オリーブ粘質土に粗砂と径１～２㎜程度の炭化物を含む。砂層は炭化物を多量に含んでいる部分とそうでない部分とに分かれ、砂層全体の範囲は長径 2.90

m、短径 1.80 mを測る。炭化物を多量に含んでいる砂層はひとまわり小さくなり、長径 2.20 m、短径 1.40 mを測る。炭化物を多量に含む範囲の中でも、特に炭化物が極多量に含まれていた部分が炉の中心と考えられ、２か所確認できた。範囲は長径 40 ～ 50cm を測る。北側の炭化物の中から骨片が出土した。

柱穴は建物内の南側に２基（Ｐ４・５）、建物外に３基（Ｐ１～３）検出した。平面形は円形で、径 10cm ～ 20cm で、深さは検出面から 10 ～ 20cm を測る。Ｐ１・３は掘り方を持たず、幅５cm 程度の杭状の木材を検

出した。Ｐ３の木材は図示している（339）。Ｐ２・４は掘り方を持ち、同様の杭状の木材を検出した。Ｐ５は木材が検出できず、覆土に粗砂が混入していた。溝は北側に確認できる。覆土は灰色粘質土ブロックを多量に含むものである。断面形は弧状を呈する。機能等は不明である。切り合い関係はSI ３、SX136 を切っている。出土遺物は甕２点（138・139）である。

SI ３（図版 10・33・39・44・57・59・60・81・84・87）　43 Ｏグリッドに位置する。Ⅲ b3 層中で検出された。SI １と同様で、浅く掘りくぼめられた建物で、竪穴建物と平地式建物の中間的なものと考えられる。平面形は SR １により切られているが、残存部分は楕円形を呈する。規模は、長径 4.70 m、短径は残存部分で 2.60 mを測る。主軸方位はＮ－ 18°　－Ｅである。施設は炉跡とそれに伴うピット・柱穴を検出した。床面は検出面から深さ約 5cm を測る。明確な貼床をもたないが、遺物が面でひろがりをもつことと、柱穴・土坑がすべてこの面において検出できることから床面であると判断した。

柱穴は 11 基検出した。平面形態はすべて円形を呈する。径約 10 ～ 25cm、深さは床面から 15 ～ 25cm を測る。Ｐ１・２・４～６・９・11 の７基は断面において柱痕を確認でき、その痕跡から直径約 12 ～ 20cm の木材を柱として使用していたと推測できる。掘り方覆土はⅢ b 相当層が主体で、灰色砂質シルトを粒状に少量含んだ土である。柱穴は不規則に並んでいる。炉跡は、平面形態が楕円形を呈しており、長径 50 ㎝、短径 30cm、深さは床面から 15cm を測る。浅い掘り方をもち、覆土は２層に分けることができる。1 層はⅢ b3 相当層を主体として、灰色砂質シルトを粒状または塊状に少量含んだ土の中に炭化物と遺物を多量に含んでいる。２層は１層と同様の土であるが、灰色砂質シルトを多量に含む土からなり、炭化物と遺物を含まない。炉跡は浅く掘りくぼめた後、土を埋め戻し、その上に粘土を貼ったことが確認できる。また、酸化した面が２面確認でき、それらが西から東へずれていることから、少なくとも２回以上の作り変えを想定できる。ピットは炉跡の周囲に４基隣接して検出された。ピットは円形（P10･12）と楕円形（Ｐ９・11）で、円形の方は、径 15 ～ 20cm、深さ５～ 10cm を測る。覆土はⅢ b 相当層の中に炭化物を多量に含んだもので、炉から出た炭化物・灰などを廃棄するためのピットと考えられる。また、炉跡の南側には小石と砂粒が厚さ５～ 10cm 堆積し、長径 60 ㎝、短径 45cm の楕円形に広がっている。南北断面を観察すると、小石・砂粒の層が炉から伸びていることを確認でき、これらは炉からかき出されたものであることが分かる。この建物は南東角において SI １に、東半分を SR １により切られる。また、南東には炭化物集中か所を確認でき、これを切っている。出土遺物は甕（140）と石鏃（261・262）・剥片等（263・264・266 ～ 269）がある。SI ３では（264）のように楔形石器が出土していることと、多量の剥片等が出土していることから、石器製作の場を想定できる。

SI ８（図版 15・66・67）　55 Ｑ・Ｒグリッドに位置する。Ｈ２層直下で検出された。浅い掘り方を有する竪穴建物で、規模は長径 6.2 m、短径 2.5 m、平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈す。床面は厚み 0.5 ～ 3 ㎝の褐灰色砂質シルトでしまっており、炉を中心に分布し周縁部にはない。付属施設は、炉とピットが６基検出されている。炉は、中央部東側寄りに検出され、規模は長径 55 ㎝・短径 40 ㎝、平面形

は隅丸不正方形を呈す。掘り方を持ち、炉床は明褐色シルト（４層）で部分的に炭化物の混入した暗赤褐色土（５層）が観察された。炉床の上面に厚さ１～２㎝の厚みを持つ橙色の火床面が観察された。炉床内に径10㎝の灰白色粘土の側面の焼けた円柱が２本並んで検出されているが、火床面の上の焼土層（２層）を炉の上屋根の崩落層とすれば、これらの粘土の円柱は上屋根を支えた支脚と考えられる。ピットは、２基１組で東・中央・西側にそれぞれ検出されている。各ピットは、径15～30㎝の円形及び楕円形を呈し、深さは検出面から25～30㎝を測る。周溝の幅は、25～35㎝で深さは検出面から10㎝を測る。重複関係は、SI14、SK130・134に切られ、SI13、１・２号周溝遺構を切る。掲載遺物はないが、土器は櫛描文系土器が出土している。

２）周 溝 遺 構

ａ　概　　要

周溝遺構は、55・56 Q・Rグリッドに２基ずつが重複して計４基検出された。いずれも周溝外径で長径が８～10ｍの南北方向に長い長楕円形の周溝がめぐり、周溝内部に炉および上屋根を支えるに十分な柱穴を持たず、建物跡と認定しなかった周溝を有する遺構群である。これら４基のうち１号周溝遺構のみが、北部に開口部をもつことが確認されており、２・３号周溝遺構には、周溝内のやや北寄りに土坑が検出されている。

ｂ　各　　説

１号周溝遺構（図版17・67・68・81・83・85）　55・56 Q・Rグリッドに位置する。Ｈ２層直下で検出された。周溝の平面形・周溝区画部は長楕円形を呈し、規模は周溝外径で長径10.2ｍ、短径5.8ｍを測り、主軸方位はＮ－50°－Ｅである。周溝は北部で約1.8ｍ途切れ、開口部を有する。周溝の幅は、0.3～1.1ｍを測るが、南部と北部の屈曲部で最もその幅が広くなる。深さは、検出面から20～25㎝を測り、断面形は逆台形状である。主な覆土は、少量の炭化物を含む灰白色粘質土層だが、南部の屈曲部にほかの層にくらべ、炭化物を多く含む層（９～11層）が観察された。周溝内は、ほぼ平坦で、明確な盛り土の痕跡は、確認されていないが、当該遺構の中央やや西よりに検出された長径1.5ｍ、短径１ｍの炭化物集中範囲が周囲にくらべ若干標高が高い。この炭化物集中範囲の下には掘り込みもなく、焼土面も含め炉などの施設は検出されていない。ピット（柱穴）は２基検出され、径20～30㎝の円形で深さ確認面から15～24㎝を測る。柱根（痕）が遺存し、明確な掘り方を有するのは、Ｐ１のみであった。主な覆土は、炭化物を含む灰白色・褐灰色である。これらのピット（柱穴）は、この１号周溝遺構を建物跡と考えると、上屋根を支えるには規模が小さく、炉などの施設が検出されなかったことから建物跡としなかった。土器は周溝区画部内から（148・149）、石器は直上から出土の（296～299）を掲載した。重複関係は、SI８に周溝南部を切られ、２号周溝遺構の周溝の大部分を切っている。

２号周溝遺構（図版17・67・69・81・83・85）　55・56 Q・Rグリッドに位置する。Ｈ３層直下で検出された。周溝の平面形・周溝区画部は長楕円形を呈し、検出された限りにおける規模は、周溝外径で長径8.2ｍ、短径は計測不能、主軸方位はＮ－54°－Ｅである。周溝は、北部で約1.8ｍ途切れ開口部を有すると思われる。周溝の幅は、30～60㎝、深さは検出面から15㎝を測り、断面形は浅い皿状である。主な覆土は、微量の炭化物を含む灰白色粘質土である。周溝内は平坦で炉及び柱穴は検出されていないが、周溝内北部で長径1.4ｍ、短径1.2ｍの不整隅丸方形の土坑が検出されている。土坑の断面形は逆台形状で

底面は平坦であり、覆土は褐灰色で中量の炭化物を板状に含む。土器は周溝区画部内から（223 ～ 237)、周溝から（150)、石器は周溝出土の石鏃（273)、直上出土の石鏃・磨製石包丁（300 ～ 305）を掲載した。重複関係は、１号周溝遺構に切られる。

３号周溝遺構（図版 18・33・37・42・70・71・81・85）　55・56 Ｑグリッドに位置する。Ｈ３層直下で検出された。周溝の平面形・周溝区画部は、長楕円形を呈し、規模は周溝外径で長径 10.6 ｍ、短径４ｍを測り、主軸方位は、Ｎ－ 32°－Ｅである。周溝の幅は 24 ～ 44 ㎝で、深さは検出面から 15 ～ 20 ㎝を測り、断 面形は半円状である。主な覆土は、極微量の炭化物を含む灰白色粘質土である。付属施設は、平坦な周溝区画部内に土坑１基、ピット２基が検出された。土坑は周溝区画部中央からやや北東部に位置し、長径 3.4 ｍ、短径 1.5 ｍの不正楕円形の掘り方を持ち、規模は長径 1.56 ｍ、短径 0.8 ｍ、平面形は長方形を呈す。断面形は、掘り方、土坑ともに逆台形状であり、掘り方部は、検出面から深さ 16 ～ 24 ㎝を測り、土坑は、16 ～ 20 ㎝を測る。土坑は、掘り方部の中央やや北側に位置し、直上の北西から南西方向にかけて長径 330 ㎝、短径 144 ㎝、厚み約１㎝の炭化物層の広がりが観察された。炭化物層の分布密度には濃淡があり、北西部が濃く土層断面で表現可能な箇所である。南北土層断面の土坑南壁には、幅２～３㎝の木質腐植土が底面から上端まで直線状に観察された。土坑直上及び土坑内から掲載可能な遺物は出土しなかったが、以上の発掘所見からこの土坑は掘り方を有する木棺と推定される。ピットは、周溝区画部中央やや南寄り、南西部隅に検出された。Ｐ１・２は、径 30 ㎝と 20 ㎝の円形及び隅丸三角形を呈し、深さは確認面から 16 ㎝と 30 ㎝を測る。炉は、検出されていない。土器は周溝区画部内から（220 ～ 222)、土坑の直上から（152)、石器は直上から出土の（306 ～ 309）を掲載した。重複関係は、４号周溝遺構を切る。

４号周溝遺構（図版 18・37・42・70・83・85）　55・56 Ｐ・Ｑグリッドに位置する。Ｈ３層直下で検出された。周溝の平面形・周溝区画部は長楕円形を呈し、検出された限りにおける規模は、周溝外径で長径 10.3 ｍ、短径 5.2 ｍを測り、主軸方位は、Ｎ－ 26°－Ｅである。周溝の幅は８～ 30 ㎝、深さは検出面から 15 ～ 18 ㎝を測る。周溝区画部内は平坦で､付属施設は検出されていない。土器は周溝区画部内から(238 ～ 241)、石器は直上から出土した（310）を掲載した。重複関係は３号周溝遺構に切られる。

３）土　　坑

SK ４（図版 20・33・39・60・81・84）　Ⅲ b3 層で検出された。層位は４層に分層でき、１層はⅢ b3 層相当の中に炭化物粒を少量と遺物を多量に含む。２～４層は炭化物集中範囲に堆積する。炭化物集中範囲は１層を除去した後に検出でき、確認トレンチに壊されているが、2/3 程度残存する。残存部分から推測すると、平面形は楕円形で、規模は不明である。断面形は弧状で、深さは炭化物集中範囲の検出面から 10 ㎝を測る。覆土は２層が炭化物層で、厚みは５㎝程度である。３層は炭化物と焼土粒の層で、厚みは５㎝程度である。４層は１層と似ているが、炭化物粒をやや多量に含んでいる。同層は多量の炭化物・焼土粒などが堆積していることから浅い掘り方をもつ炉とも考えられる。周辺に柱穴などの施設を確認できないことから、建物とは考えにくく、遺構の性格等は不明である。出土遺物は甕片が東側にまとまって出土し、胴部下半を復元できた（153)。

SK ５（図版 20）　Ⅲ b3 層中で検出した。平面形・規模・主軸方位は西側半分を確認トレンチに切られており、不明である。平面形は残存部分より楕円形であると推測できる。

SK ６（図版 20）　Ⅲ b3 層中で検出した。

SK ７（図版 20）　Ⅲ b3 層中で検出した。

SK ８（図版 20）　Ⅲ b3 層中で検出した。出土遺物は覆土中から確認できなかったが、この直上に人頭大の河原石が出土した。河原石の性格等は不明である。

SK120（図版 22）　55 Ｐグリッドに位置する。Ⅲ b3 層中で検出された。覆土は単層で、褐灰色砂質シルトで、粒径１㎜程度の炭化物を含む。出土遺物は、小破片がわずかに出土したのみである。

SK126（図版 21・33・39・71・81・84）　53 Ｒグリッドに位置する。検出面はＨ１層下面と考えられる。覆土は２層に分層でき、１層は浅黄色シルトで、酸化鉄を斑紋状に含む。２層は黄灰色シルトで、やや粘性を帯び、木炭を多量に含む。底面において柱穴そのほかの施設の確認を行ったが確認できず、駄目押しでさらに掘り下げて確認を行ったが施設の確認はできなかった。弥生土器（154・155）、石器（275 ～ 279）が出土した。特筆すべき点は、２層から剝片が多く出土し、その剝片の一部が接合（278）したことである。底面で施設は確認できなかったものの､何らかの特別な意味を有する土坑であった可能性が高い。SK118 に切られ、SD122 を切る。

SK132（図版 21・72）　54 Ｒグリッドに位置する。Ｈ１層下面で検出された。覆土は２層に分層でき、１層は灰黄色砂質シルト、２層は黄灰色シルトで、２㎜程度の炭化物をやや多く含み、10 ㎜大の大きな粒も微量含む。弥生土器破片が少量出土しているが、類別可能な破片は認められなかった。

SK134（図版 22・33・72・81）　55 Ｐグリッドに位置する。Ｈ２層直下で検出された。長径 1.65 ｍ、短径 1.2 ｍの東西に長い不正楕円形を呈し、深さは検出面から 12cm を測る。SI ８を掘削中の床面上で検出されたが、SI ８の周溝を切っていたため SI ８の付属施設とはしなかった。主な覆土は、暗灰色で多量の炭化物を含む。出土遺物は、弥生土器片のうちから（156）を掲載した。加飾性の強い小形短頸壺で土坑の西壁際に出土した。検出層位は、１層の上部であり供献・埋納土器と考えられる。当該遺構は、SI ８の中にほぼ納まるため SI ８が廃棄される時期に掘られた可能性もあろう。重複関係は、SI ８を切るのみである。

４）溝　　跡

SD122（図版 23・72・81）　53 Ｑ・Ｒグリッド及び 54 Ｐ・Ｑグリッドに位置する。Ｈ１層直下で検出された。53 Ｒグリッドで約 150°折れ曲がっている。覆土は２層に分層でき、１層は灰オリーブ色シルトで炭化物を含む。２層はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を層状に含む。遺物は弥生土器で少破片が多く、大半が１層中から出土した。図化したものは土器（157・158）、石器（280）である。

SD125（図版 23・72・81）　55 Ｍ～ 57 Ｑグリッド付近に位置する。Ｈ１層直下で検出された。55 Ｏグリッドで約 120°折れ曲がっている。東側は扇状に広がり SR ４と接する。西側は攪乱で切られているため、遺構範囲は不明である。覆土は６層に分層でき、１層は灰白色砂質シルトで炭化物を含む。２層は灰色粘質シルトで炭化物を含む。３層は灰色粘質シルトで炭化物と明黄褐色砂を含む。４層は灰色粘質シルトと灰色砂質シルトの混層でにぶい黄橙色砂を含む。５層は黄灰色砂、６層は褐灰色粘質シルトで腐植木質片、炭化物及び灰色粘質土ブロックを含む。この層は SR ４が埋まっていく過程で同時に堆積している。断面では確認できなかったが、遺構内の落ち込み部分では SD127 ～ 129 で確認された黄灰色砂が確認できた。遺物は弥生土器の少破片が多く、56 Ｐグリッドで下層から集中して出土した（159 ～ 162）。重複関係は SR ４とほぼ同時期で、SD127・129 より古い。

SD127（図版 23・73）　55 Ｍ～ 57 Ｑグリッド付近に位置する。Ｈ１層直下で検出された。北東部分は確認トレンチ 57 Ｏグリッド部分で確認出来ないため、58 Ｎグリッドに伸びるか、57 Ｎグリッド内で終

結すると思われる。南側は攪乱が入り込んでいるため、遺構範囲は不明である。覆土は２層に分層でき、１・２層とも褐灰色砂質シルトであるが、２層のほうがより砂質である。１層は上面の凹凸がかなり激しく、耕作による踏み込み跡が顕著である。２層は下部に黄灰色砂を含む。土層観察よりSD129と同時期のものと考えられる。遺物は出土しなかった。重複関係はSD125より新しい。

SD128（図版23･73）　57Ｎ･Ｏグリッドに位置する。Ｈ１層直下で検出された。覆土は２層に分層でき、１・２層とも褐灰色砂質シルトであるが、２層のほうがより砂質である。２層の下部に黄灰色砂を含む。遺物は出土しなかった。

SD129（図版23・73・81）　56Ｏ・Ｐグリッドに位置する。Ｈ１層直下で検出された。覆土は単層、褐灰色シルトで下部に黄灰色砂を含む。遺構の標高を見ると、北西から南東にかけて低くなっている。出土遺物は図化した甕（163）のみである。重複関係はSD125より新しい。

５）河　川　跡

この時期の河川跡は、すでに古墳時代の遺構で述べたSR ２a・bと、弥生遺構面で確認できたSR ４の計３条で、いずれも北区で確認された。ここでは、SR ２a・b はすでに触れているので、SR ４についてのみ触れることとする。

SR ４（図版24・36・82）　57Ｑグリッドを中心として確認された。東は調査区外北東方へ伸びていたとみられる。西部はSD125とつながっている。流路方向など詳細は不明である。SD125との関係は、SR ４と同時存在していたものと考えられる。SR ４が埋まり始めた後（覆土７層）､SD125と共通する覆土（５層）をもっていることから同じような状況で埋没していったものと考えられる。底面まで掘り切ることはできなかったものの､断面形は緩やかな弧状を呈しているものと考えられる｡出土遺物は､弥生土器甕(199)のほか、器種不明破片（200～203)、剝片などが出土している。

６）性格不明遺構

SX111（図版22・40）　50Ｎグリッドに位置し、Ⅲb3層精査中に検出した。検出面にて焼土を確認したが、埋没後に形成された攪乱土より新しいものであることを土層観察にて確認したため、本遺構と関連性のないものと判断した。覆土は１層でⅢb1層に近似した灰白色土が主体をなす。遺物は覆土より土器細片、石器（285～287）が出土した。

SX117（図版21・36・75・82）　54Ｑグリッドに位置する。Ｈ１層下面で検出された。層位は３層から構成されており、１層は暗灰黄色粘質土で、炭化物をやや多量含む。２層は厚さ１㎝程度の炭化物を含む。３層は１層とよく似ており、部分的に粗砂を含む。焼土などは確認できないが、２層の炭化物の直上には甕の胴部片を確認できる。これらの土器片は炭化物の上面に内面を上方に向け、敷き並べられた状態で検出された。機能等は不明であるが、多量の炭化物などから炉跡のような機能を備えていたと考えられる。３層は掘り方覆土と考えられる。地山が粘性の強い土で、水分を多量に含むことから、一度掘り返して乾燥した土を埋め戻し、炉として使用していたと推測する。出土遺物は１層から甕（204・205）と２層上面の甕の胴部片が出土した。

また、この周辺にはピットが16基検出されている。SX117は当初単独の炉跡状の遺構と考えていたが、積極的に建物として考えると、これらのピット群との関連を考慮しなくてはならない。SX117に隣接してSI ６とSI15がある。Ｐ１～６はSI ６に関連したピットであると考えられる。P13がP16を切っており、

これらのピットはどちらかがSI15のピットと考えられるが、明確に分けることはできなかった。SX117に属するピットはＰ７～16と考えられる。規模に大小あるが、Ｐ７とＰ８は小型で柱穴とは考えにくい。主な覆土は、暗灰黄色粘質土に粗砂・炭化物を含む。P12からは土器片（206）が出土している。SX117は周溝を確認できなかったが、周溝を有する平地式建物である可能性がある。

SX123（図版21・75・84）　56Ｒグリッドに位置する。Ｈ１層直下で検出された。上部が撹乱されているが、掘り込みをもった遺構で、南西部に長径20㎝･短径15㎝の楕円形、北東部に長径1.1ｍ･短径0.45ｍの偏平な楕円形、長径20㎝・短径15㎝の楕円形の三か所の火床面が検出されており、炉床などは敷設されておらず、遺構の底面で直接火がたかれている。遺構の性格は、周囲に建物群が検出されていることから、屋外の炉ではないかと考えられる。掲載可能な遺物はないが、覆土内から弥生土器片が出土した。

SX136（図版４・40・85）　42Ｏグリッドに位置する。検出面はⅢb3層である。炭化物と小石・砂粒の広がりを確認でき、小石・砂粒は炭化物から北側にむかって扇状に広がる。周囲に建物の施設などを検出できなかったことから、建物跡とは考えにくい。これと同様のものはSI３の炉跡周辺からも検出されていることから、屋外炉の可能性を指摘するに留める。SI１・３とSR１によって切られている。また、東側に炭化物集中範囲を検出したが、炭化物のみで、施設なども検出されなかったことから、自然によるものであると判断した。出土遺物は炭化物層中から石鏃（288）が出土した。

３　下層の調査

Ａ　調査の概要

下層の調査は上層の調査が終了したグリッドから順次行った。上層の調査の前に、20ｍごとにⅥａ層上面まで南区・北区とも東西・南北に幅１ｍ、深さ１ｍ程度の確認トレンチを掘削しており、その際縄文時代の包含層の存在は確認されず、また、遺構も平面や土層セクションの観察において検出されなかった。それ故、下層の調査は埋文事業団の指導により、調査区全体の約３割を目途とした部分調査に切り替えた。

調査は第９図のようなトレンチを設定して行った。トレンチ幅はバックホーを使用するため、６ｍに設定し、約20ｍ間隔で調査を行った。南区で３本、北区で４本の計７本設定した。トレンチ番号は南区の東端をトレンチ１とし、西に向かって順番に番号を付け、北区も同様に東端をトレンチ４とし、西に向かって番号を付けた。トレンチ４は調査の工程上、Ｌ字状に掘削をしている。また、トレンチ５～７までは調査の工程上、２回に分けて掘削しているため、掘削深度が異なっている。トレンチの掘削深度は地表面から 平均して2.0ｍ程度とし、Ｘ層相当層が確認できるまで掘削を行ったが、遺構･遺物の検出はなかった。

Ｂ　調査の経過

以下、各トレンチの調査成果を列記する。

トレンチ１は41～45Ｒグリッドまでの約45ｍを掘削した。掘削深度は平均して標高0.6ｍである。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ２は41～45Ｐグリッドまでの約45ｍを掘削した。掘削深度は平均して標高0.4ｍである。42Ｐグリッドより北側ではⅥａ層中に粗砂や流木などがブロック状に混入している。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ３は41～45Ｎグリッドまでの約45ｍを掘削した。掘削深度は平均して標高0.3ｍである。

45 Nグリッドより南へ４ｍの場所から南側はⅥａ層を切るように埋没河川の存在が見られた。埋没河川はトレンチの掘削深度より深いため、埋没河川の規模は不明である。土層観察では、埋没河川が埋まった後にⅤ層が堆積していることを確認した。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

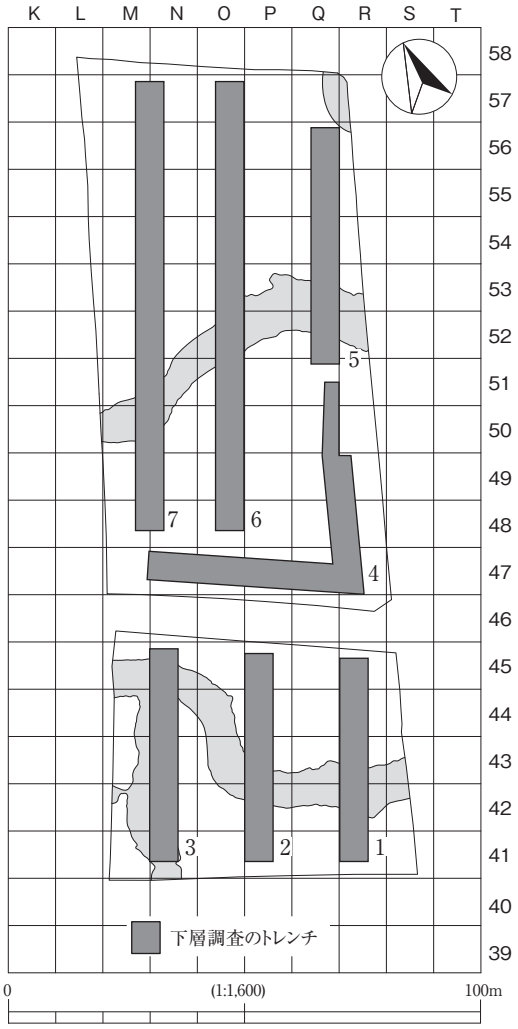
トレンチ４は 47 M～Rグリッド、48･49 Q・Rグリッド、50･51 Qグリッド部分の約 85 ｍを掘削した。掘削深度は平均して標高 0.9 ｍである。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ５は 52 ～ 57 Qグリッドまでの約 50 ｍを掘削した。掘削深度は平均して標高 0.0 ｍである。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ６は 48 ～ 57 Oグリッドまでの約 95 ｍを掘削した。掘削深度は平均して標高 0.2 ｍである。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ７は 48 ～ 57 Nグリッドまでの約 95 ｍを掘削した。掘削深度は平均して標高 0.2 ｍである。56N グリッド付近のⅢ b3 層とⅣ層間においてガツボ層が見られた。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

すべてのトレンチにおいてⅤ層が確認された。そのため、この付近は広範囲に渡ってⅤ層が広がっているものと思われる。トレンチ３で見られた埋没河川はトレンチ２・４には見られないため、調査区の東側には広がらないものと思われる。トレンチ２で見られたⅥａ層中の粗砂や流木はほかのトレンチ内では確認できないため、トレンチ２内で収束するかもしくは、埋没河川の影響により混入したものと思われる。トレンチ７で見られたガツボ層は 55・57 Nグリッド及び 56 Pグリッドでは確認できなかったが、56 Nグリッドの西側掘削時に確認できたため、ガツボ層は西側に伸びていると思われる。



第8図　下層トレンチ位置図

第Ⅴ章　遺　　物

1　古墳時代の土器・石製品

A　概　　要

1）出土遺物の概要

古墳時代の遺物は、土師器・須恵器・石製品がある。遺物は主に包含層とSR２ａから出土しており、SR２ａからはまとまった状態で出土した。遺構ではSK116とSX119から多量の遺物が出土している。出土遺物の分布（大グリッド）をみると、土師器と須恵器ではその分布に差異がみられる。土師器の分布は遺構の分布とおおよそ一致しているのに対して、須恵器では西側に集中してみられ遺構の分布と一致しない。出土量は浅箱（深10㎝×幅34㎝×奥行54㎝）で、土師器20箱・須恵器２箱・石製品１箱である。年代は５世紀中葉から６世紀中葉を中心とする。以下では、器種分類を行い（第９・10図）、各遺構及び河川・包含層出土の遺物について記す。時期については第Ⅶ章で述べることとする。

2）器 種 分 類

分類の対象となるのは土師器（黒色処理を施されたものも含む）と須恵器である。分類は３段階設定し、大分類（器種）・中分類（Ａ・Ｂ・Ｃ･･･）・小分類（ａ・ｂ・ｃ･･･）とする。大分類は椀・高杯・器台・甑・壺・甕・手づくね土器などの器種に基づき、中分類は大分類の中での器形を主たる分類とし、小分類はハケメ・ミガキ等製作技術による分類とする。また、法量により小さい方から順にⅠ・Ⅱ・Ⅲ･･･とする。須恵器もこれに準じる。

ａ　土　師　器（第９図）

椀

全体を復元できるものが少ないので、主に口縁部の形態により分類を行った。大きく分けると、①口縁部が内湾するもの、②口縁部が外反するもの、③口縁部が外反し、口縁部と体部の境に稜をもつものの３種に分類できる。

Ａ：口縁部が内湾するもの。全体を復元できるものでは底部に不定方向のヘラケズリを施し、底部は平底に近い丸底を呈する。調整等により２種に分類できる。

ａ：黒色処理を施さないもの。

ｂ：内面に黒色処理を施し、ハケメまたはヘラナデを施す。

Ｂ：口縁部が強く外反し、短いもの。調整等により３種に分類できる。

ａ：黒色処理を施さず、内外面ともにミガキを施すもの。

ｂ：黒色処理を施さず、体部外面にハケメ、体部内面にヘラナデを施すもの。

ｃ：内面にミガキと黒色処理を施すもの。法量により２種確認でき、Ⅰ類・Ⅱ類に分類できる。

Ｃ：口縁部の外反が弱く、口縁部が短いもの。調整等により２種に分類できる。

ａ：内面と外面の口縁部～体部上半にミガキを施し、体部下半にヘラナデを施すもの。法量により３種確認でき、Ⅰ～Ⅲ類に分類できる。

ｂ：内面にミガキと黒色処理を施し、外面はヘラナデを施すもの。

Ｄ：口縁部が弱く外反し、長いもの。調整等により２種に分類できる。

ａ：黒色処理を施さず、外面にヘラナデを施すもの。

ｂ：内面と外面の口縁部～体部上半にミガキと黒色処理を施すもの。法量により３種確認でき、Ⅰ～Ⅲ類に分類できる。

Ｅ：口縁部がわずかに外反し、口縁端部を丸くおさめるもの。内面にミガキと黒色処理を施す。

ａ：黒色処理を施さないもの。調整等は不明。

ｂ：内面にミガキと黒色処理を施すもの。

Ｆ：口縁部がわずかに外反し、口縁端部を面取りするもの。調整等は不明。

Ｇ：口縁部は体部からほぼ直線的に立ち上がるもの。体部外面はヘラナデ、内面にはナデを施す。

Ｈ：口縁部～体部にかけて大きく湾曲し、断面形態がＳ字状を呈するもの。口縁端部は面取りする。内外面ともにナデを施す。

Ｉ：口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部の傾きが小さく、口縁端部を面取りするもの。

Ｊ：口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部の傾きが小さく、口縁端部を丸くおさめるもの。内面と外面の口縁部から体部上半にミガキと黒色処理を施す。体部外面は不明。

Ｋ：口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部の傾きが大きく、口縁端部を丸くおさめるもの。内面と外面の口縁部～体部上半にミガキと黒色処理を施し、体部外面にはヘラナデを施す。法量により２種確認でき、Ⅰ類・Ⅱ類に分類できる。

高　　杯

杯部は確認できないので、脚部のみで４種に分類した。

Ａ：脚部が緩やかに外反し、裾部で大きく外反するもの。調整等により３種に分類でき、また、法量により、２種確認でき、小さなものをⅠ類、大きなものをⅡ類とする。

ａ：黒色処理を施さないもの。Ⅱ類のみ確認できる。

ｂ：杯部内面には黒色処理を施し、脚部外面にはヘラナデを施すもの。法量により２種確認でき、Ⅰ類・Ⅱ類に分類できる。

ｃ：杯部と脚部の境にはナデの痕跡を明瞭に残し、杯部内面には黒色処理を施すもの。Ⅰ類のみ確認できる。

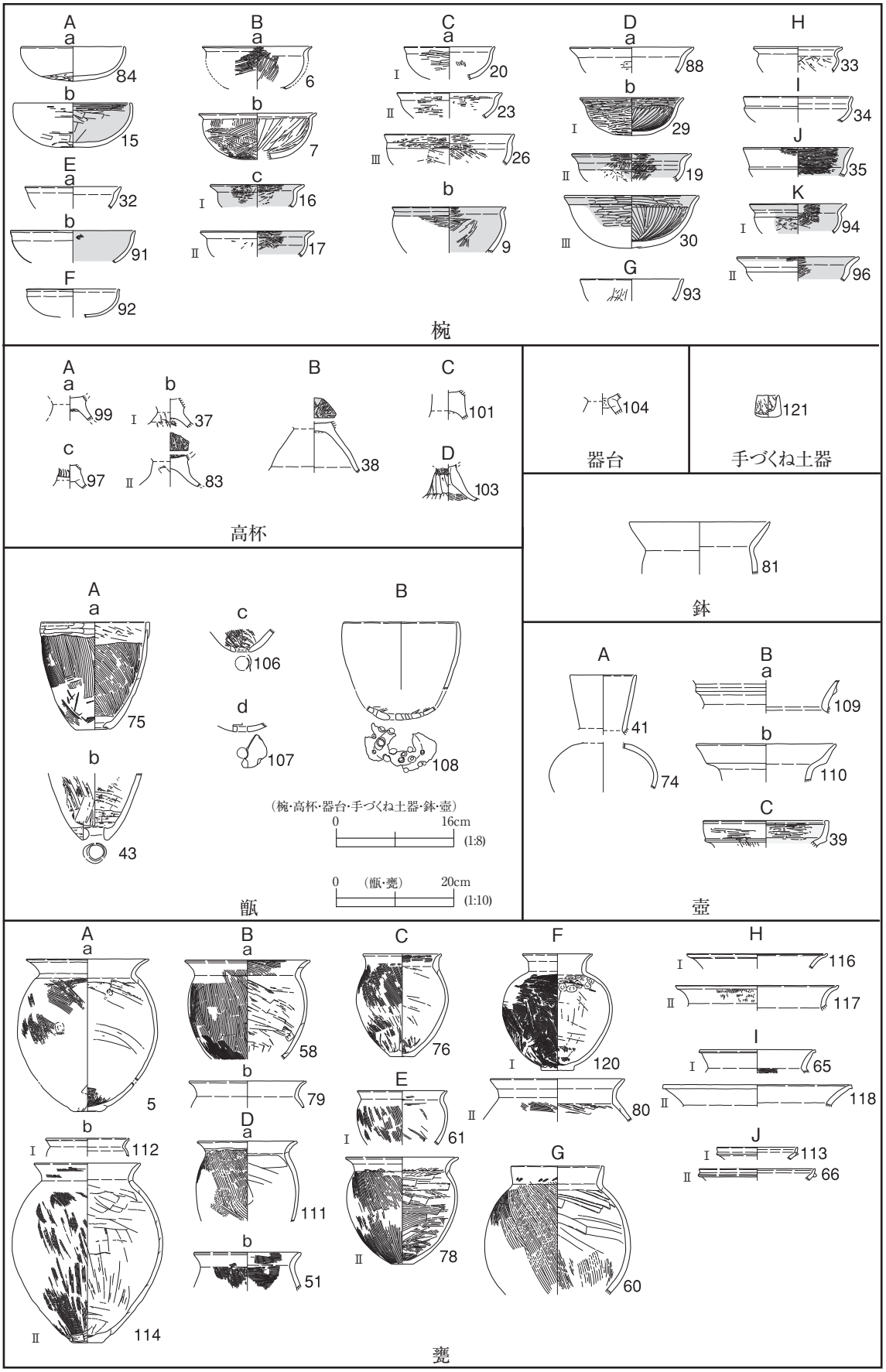
Ｂ：杯部と脚部の境の径がやや大きく、脚部が中央でふくらむもの。杯部内面にはミガキと黒色処理を施す。

Ｃ：杯部と脚部の境が筒状を呈しており、厚みのあるもの。

Ｄ：脚部が緩やかに外反し、裾部で大きく外反するもの。Ａ類と類似するが、脚部内面に屈曲部をもつことからＡ類とは別に分類した。杯部と脚部の境にはハケメ、脚部にはヘラナデ、脚部内面にはハケメを施す。

器　　台

受部～脚部にかけての部分的なもので、調整等は不明である。１点確認できる。



第９図　古墳時代（土師器）器種分類図

甑

胎土は粗い。形態はU字状を呈する。底部の穿孔により２種に分類できる。

Ａ：単孔のもの。底部・穿孔部の形態と調整により４種に細分できる。

ａ：口縁部は面取りし、体部は緩やかに内湾する。穿孔部は内外面からの穿孔の痕跡を残す。孔径は大きい。調整は内外面ともに口縁部がヘラナデ、体部にはハケメを施す。

ｂ：穿孔部は内外面からの穿孔の痕跡を残し、底部が厚い。孔径はやや大きい。調整は内外面ともにヘラナデを施す。

ｃ：穿孔部は内外面からの穿孔の痕跡を残し、底部は薄い。孔径は小さい。調整は内外面ともにハケメを施す。

ｄ：穿孔部は内外面からの穿孔の痕跡が不明瞭で、端部は方形を呈し、底部は薄い。孔径は小さい。調整等は不明。

Ｂ：多孔のもの。口縁部はやや内湾する。内面はヘラナデ、外面は磨耗により不明。

手づくね土器

指圧痕を明瞭に残す粗雑な作りのもの。形態は箱型のもののみ確認できる。小型品。

壺

出土点数は６点確認でき、これらを３種に分類した。

Ａ：全体を復元できるものはないが、口縁部と胴部から小型丸底壺と推定する。胴部はほぼ中央に最大径があり、口縁部は直線的にやや開いて立ち上がる。内外面ともにミガキを施す。

Ｂ：口縁部が二重口縁状を呈するもの。成形により、２種に分類できる。

ａ：頸部～口縁部は二重に外反し、緩やかに外反する口縁部に断面三角形の粘土紐を外面に張り付け、二重口縁を形成するもの。

ｂ：頸部～口縁部は強く屈曲し、口縁部は二重に外反するもの。その際、内外面は同様に二重に外反する。

Ｃ：口縁部が受口状を呈するもの。頸部は緩やかに外反し、口縁部との境では稜をもつ。稜部からはやや内湾して口縁端部にいたる。口縁端部は面取りする。内外面ともにミガキを施し、内面には赤彩をわずかに確認できる

甕

全体を復元できるものが少ないので、主に口縁部の形態により分類を行った。その他、頸部の屈曲・胴部の形態にも注目した。

Ａ：頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はやや外反して立ち上がるもの。口縁端部の形態により２種に細分できる。最大径は胴部のほぼ中央にあり、胴部は卵倒形、底部は平底を呈する。頸部外面には強いナデにより、浅く凹む。胴部外面は斜位のハケメを施し、内面はヘラナデ、底部はハケメを施す。口縁部～頸部は部分的にハケメの痕跡を確認できるが、丁寧にナデ消されている。

ａ：口縁端部を丸くおさめるもの。

ｂ：口縁端部を面取りするもの。

Ｂ：頸部がくの字状で、屈曲は弱くなり、湾曲ぎみとなる。内面には稜をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がるもの。口縁端部の形態により２種に細分できる。口径と胴部最大径はほぼ同じで、胴部最大径は肩部にあり、やや肩の張った形態を呈する。底部は確認できない。胴部外面は斜位のハケ

メ、内面はヘラナデを施す。口縁部～頸部はハケメを残す割合が高い。

ａ：口縁端部を丸くおさめるもの。

ｂ：口縁端部を面取りするもの。

Ｃ：頸部は緩やかに外反し、内面に弱い稜をもつ。頸部は厚い。口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部のほぼ中央にあり、胴部は卵倒形、底部は平底を呈する。胴部外面には斜位のハケメ、内面にはヘラナデ、底部はハケメを施す。口縁部～頸部にはハケメを残す割合が高い。

Ｄ：頸部はＢ類と同様であるが、内面の稜は弱くなる。また、胴部はＡ類とほぼ同様であるが、やや長胴化傾向が強くなる。調整では口縁部においてハケメを残す割合が高い。胴部内面の調整により２種に分類できる。

ａ：胴部内面にヘラナデを施すもの。

ｂ：胴部内面にハケメを施すもの。

Ｅ：全体的にはＢ類と同様であるが、頸部内面の稜が弱い点が異なる。底部は平底を呈する。また、法量により２種確認でき、Ⅰ類・Ⅱ類に分類できる。

Ｆ：頸部は直立し、口縁部中央で強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部の中央よりやや上部にあり、やや肩の張った形態を呈する。底部は平底を呈する。胴部外面はハケメ、内面はヘラナデ、底部はハケメを施す。口縁部から頸部はナデを施し、ハケメは確認できない。法量により２種確認でき、Ⅰ類・Ⅱ類に分類できる。

Ｇ：頸部は直立し、口縁部はやや開くが、ほぼ直立する。口縁端部は面取りし、口縁端部内面をややつまみ出す。最大径は胴部の中央にあり、球形に近い。底部は確認できない。胴部外面には斜位のハケメ、内面上半にはヘラナデ、下半にはハケメを施す。口縁部～頸部には若干ハケメを残す。漆町分類［田嶋 1986］のＪ類に類似する。

Ｈ：口縁部から肩部のみ確認できる。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部では内側に曲げ、面取りする。頸部～肩部にかけて縦または斜位のハケメ、内面はヘラナデを施す。口縁部～頸部には若干ハケメを残す。法量により２種確認でき、Ⅰ類･Ⅱ類に分類できる。漆町分類［田嶋 1986］のⅠ類に類似する。

Ⅰ：口縁端部を外側に曲げるもの。口縁端部は面取りする。口縁部は内外面ともにナデを施す。法量により２種確認でき、Ⅰ類・Ⅱ類に分類できる。

Ｊ：受口状口縁のもの。口縁端部を上下につまみ出したような形態をしており、縁帯状を形成する。法量により２種確認でき、Ⅰ類・Ⅱ類に分類できる。

ｂ　須　恵　器（第 10 図）

杯　Ｈ　蓋

天井部は扁平なドーム状を呈しており、天井部と口縁部の境には明瞭な稜をもつ。口縁部はほぼ直線的に口縁端部にいたる。口縁端部は内傾し、面をもつ。天井部の約３分の１にヘラケズリを施す。

杯　Ｈ　身

底部は丸底状と平底状のものがあり、２種に分類できる。

Ａ：底部が丸底状を呈するもの。体部は内湾し、受部にいたる。受部は弱く外反する。立ち上がりは欠損する。底部～体部の約３分の２にヘラケズリを施す。

Ｂ：底部は平底状を呈するもの。体部は緩やかに内湾し、受部にいたる。立ち上がりはほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部～体部の約３分の１にヘラケズリを施す。

杯　Ｇ　蓋

口縁部内面にかえりがつくもの。天井部は平坦で、天井部～口縁部にかけて斜め下方へ直線的にのび る。かえりは短く内傾する。ヘラケズリは天井部～口縁部にかけてほぼ外面の全体に施される。

無 蓋 高 杯

口縁部は外傾し、弱く外反して立ち上がる。口縁部と体部の境には２条の突帯状のものがあり、この下部には波状文を施文する。体部下半にはヘラケズリを施す。脚部は裾部で大きく広がり、ほぼ垂直に屈曲して端部にいたる。端部の断面形態は三角形を呈する。長方形の３方透かしを確認できる。

瑕

形態と文様より５種に分類できる。

Ａ：頸部の長さが短いもの。波の高さと幅が短い波状文を施文する。体部は最大径が上部にあり、肩が張った形態を呈する。波状文と円形の孔は体部最大径に確認できる。波状文は緩やかな波で、上下に凹線を施す。体部下半にはヘラケズリを施す。

Ｂ：頸部の長さが長く、体部は扁平な球形のもの。波状文は口縁部・頸部・体部にそれぞれ施文される。口縁部には緩やかな波状文、頸部には低く狭い波状文を粗雑に施し、体部には列点状の擬波状文を施文する。体部中央よりやや下部にヘラケズリを施す。円形の孔は体部のほぼ中央に穿つ。

Ｃ：体部が肩部の張った形態を呈しており、肩部に２条の凹線を巡らす。体部中央には緩やかな波状文と円形の孔を施す。体部中央よりやや下部にヘラケズリを施す。

Ｄ：口縁部と頸部の境に突帯状の稜をもち、頸部には波の高さが高い波状文を施文する。

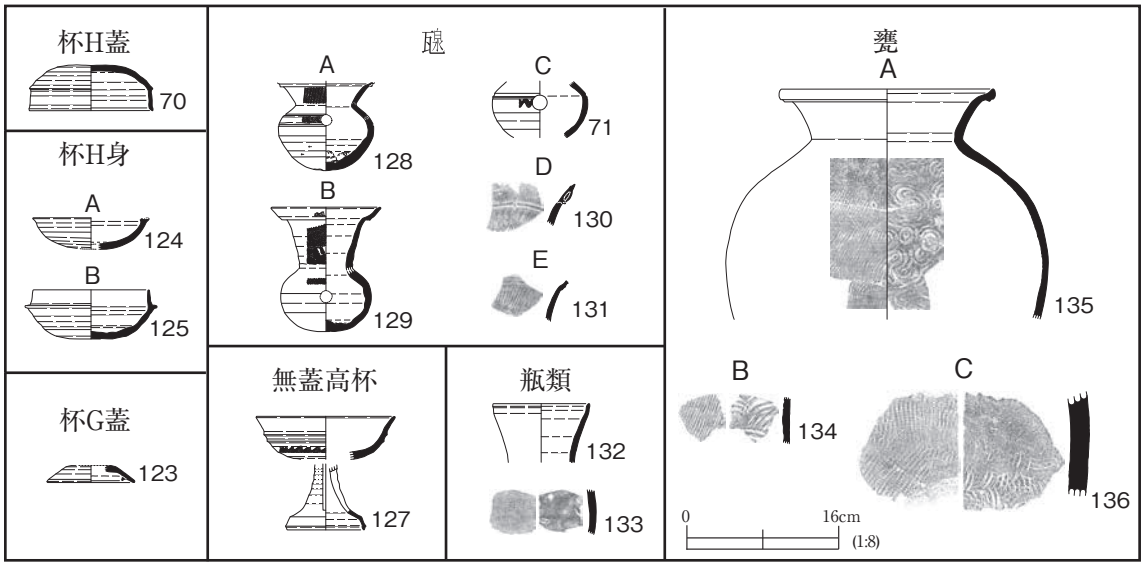
Ｅ：口縁部と頸部の境に段状の稜をもち、頸部には波の高さが高い波状文を施文する。

瓶　　類

口縁部と胴部片を確認できるのみで、全体を復元できるものはない。提瓶もしくは平瓶と推定する。

甕

全体を復元できるものがないので、胴部外面のタタキ痕により３種に分類した。



第10図　古墳時代(須恵器)器種分類図

Ａ：口縁部～胴部上半を確認できる。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は肥厚し、受口状を呈する。胴部は球形で、外面には平行タタキ後、横ナデを施し、内面は同心円文当具痕を残すもの。

Ｂ：胴部外面に平行タタキ後、カキメまたはハケメを施し、内面は同心円文当具痕を残すもの。

Ｃ：胴部外面に格子目タタキを施し、内面は同心円文当具痕の上からハケメを施すもの。

Ｂ　各　　説

SI６（図版26・77）　砥石１点（１）を図示した。全面を砥面として使用しており、６面確認できる。その内の１面には１条の溝を確認できる。

SB107（図版26・77）　土師器のみ出土しており、高杯１点（２）を図示した。ＡｂＩ類に分類した。全体的に磨耗を受けているが、杯部内面には黒色処理を確認できる。ミガキの単位は確認できないが、黒色処理とともにミガキを施しているものと推定する。

SK１（図版26・77）　土師器のみ出土しており、甕２点（３・４）を図示した。３はＧ類、４はＡｂⅡ類に分類した。３は頸部～口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は磨耗により丸くなっているが、方形または隅丸方形であったと推定する。口縁部内面にはナデによる浅い凹みが生じ、口縁端部をややつまみ出したような形態を呈する。４は頸部がくの字状に屈曲し、頸部内面には稜をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は３と同様である。頸部と肩部の間にはナデによる浅い凹みが生じている。

SK２（図版26・77）　土師器のみ出土しており、甕１点（５）を図示した。Ａａ類に分類した。口縁部～胴部下半と底部は接合しないが、胎土等から一個体であると判断した。頸部はくの字状に屈曲し、頸部内面には稜を有する。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。頸部と肩部の間にはナデによる浅い凹みが生じている。最大径は胴部中央よりやや上部にあり、肩部はややなで肩を呈する。胴部の形態は卵倒形を呈しており、底部は径の小さな平底で、単体で自立することは難しい感じを受ける

SK116（図版26・77）　土師器のみ出土しており、椀４点・甕３点（６～12）を図示した。

椀（６～９）　６はＢａ類、７はＢｂ類、８はＣａⅢ類、９はＣｂⅡ類にそれぞれ分類した。６は一部表面に剝落があるが、内外面には全体的にミガキを施す。外面と口縁部内面に横位のミガキ、体部内面には縦位のミガキを施しており、部位によりミガキの方向を使い分けている。７は口縁部の内外面ともにナデを施す。体部は外面に粗いハケメを不定方向に施し、内面には縦位のヘラナデを施す。８は全体的に磨耗しており、調整等は不明確であるが、内外面ともにミガキを施していると推定する。９は内面にミガキと黒色処理を施す。ミガキは口縁部が横位、体部が縦位に施される。黒色処理は外面にまで及んでおり、口縁部と体部上半の一部に確認でき、境界は波状になる。黒色処理の部分にはミガキも確認できる。体部外面は磨耗により調整等を確認できない。７と８は底部を確認することができ、平底状の丸底で、６と９もこれらと同様であろう。

甕（10～12）　10はＤａ類、11はＡｂⅡ類に分類した。10の頸部はくの字状であるが、屈曲が弱くなり、湾曲する。口縁部はやや強く外反し、口縁端部を丸くおさめる。最大径は胴部中央付近にあり、胴部は長胴化傾向にある。口縁部は内外面ともにナデで、部分的にハケメが残る。胴部外面は斜位のハケメを施し、内面は頸部が横位のヘラナデ、胴部が縦位のヘラナデを施す。全体的に厚みがある。11の頸部はくの字状に屈曲し、内面には稜をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は方形または隅丸方形を呈しており、部分的に形態が異なる。最大径は胴部中央よりやや上部にあると想定でき、５と同様の形態と

なる。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部外面は斜位の粗いハケメを施し、内面では頸部付近において横位のヘラナデを施す。12 は甕の底部である。胴部外面は横位のヘラケズリ、底部外面にはＺ状にヘラケズリを施しており、底部のつくりは丁寧である。底部内面は中心より放射状にハケメを施す。胎土等から 10 と同一個体と推定する。

SR １（図版 27・77）　土師器のみ出土しており、椀１点を図示した。ＣｂⅡ類に分類した。内外面ともにミガキを施し、外面と口縁部内面が横位、体部内面が縦位である。また、内外面ともに黒色処理

が施されているが、色調は黒褐色である。これは炭素の吸着が弱かったために完全に黒色とならなかったと推定される。

SR ２a（図版 27 ～ 29･77 ～ 79）　土師器と須恵器と石製品が出土している。土師器は、椀 23 点･高杯２点･壺３点・甑２点・甕 26 点、須恵器は、杯Ｈ蓋１点・瑳１点、石製品は、砥石１点を図示した。

土　師　器

椀（14 ～ 36）　14 はＡａ類、15 はＡｂ類、16 はＢｃⅠ類、17 はＢｃⅡ類、20 はＣａⅠ類、21 ～ 24 はＣａⅡ類、25・26 はＣａⅢ類、27 ～ 29 はＤｂⅠ類、18・19 はＤｂⅡ類、30・31 はＤｂⅢ類、32 はＥａ類、33 はＨ類、34 はⅠ類、35 はＪ類にそれぞれ分類した。14 は全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。15 は内面に黒色処理を施しているが、内外面ともにミガキではなく、ヘラナデを施しているためか、炭素の吸着は弱い。16 は体部外面の上半～内面にかけて、黒色処理とミガキを施す。17 は口縁端部～内面にかけて黒色処理とミガキを施し、体部外面にはヘラナデを施す。Ｃ類は図示したものはすべてａ類で、ｂ類も出土しているが、細片のみで図示できなかった。調整等が確認できるものでは、外面と口縁部内面に横位のミガキ、体部内面に縦位のミガキを施す。27 は全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。18・19・28 ～ 31 は口縁部外面～内面にかけてミガキと黒色処理を施す。ミガキは口縁部内外面は横位、体部内面は縦位に施す。体部外面にはヘラナデを施す。31 は口縁部が肥厚する。32 の口縁部はわずかに外反し、口縁部と体部の境の内面には稜をもつ。調整等は磨耗により不明確である。33 の口縁部は強く外反し、体部は強く肩が張ったような形態をしており、口縁部～体部はＳ字状を呈する。口縁端部はややつまみあげる。外面～口縁部内面はナデで、体部内面は粗いヘラナデを施す。Ⅰ類（34）・Ｊ類（35）はほかとは様相が異なり、須恵器杯Ｈ模倣と推定する。いずれも口縁部と体部の外面の境に稜をもち、口縁部は稜から一段下ったところから立ち上がる。34 は口縁部が短く、口縁端部をつまみ上げる。内外面ともにナデを施す。35 は口縁部が長い。口縁部外面～内面にかけて横位のミガキと黒色処理を施す。36 は椀の底部片で、内面に黒色処理を確認できる。外面にはヘラ状工具による「×」印を確認できる。

高杯（37・38）　37 はＡｂⅠ類に分類した。杯部内面は黒色処理を施し、脚部外面にはヘラナデを施す。脚部の形態は 83 と同様と推定する。38 はＢ類に分類した。脚部は内湾しており、端部では外反する。杯部内面にはミガキと黒色処理を確認できる。

壺（39 ～ 41）　39 はＣ類に分類した。口縁部は受口状を呈する。内外面ともにミガキを施し、内面にはわずかに赤彩の痕跡を確認できる。40・41 はほぼ同類と推定され、Ａ類に分類した。胴部を欠損しており、全体は不明確であるが、74 のような胴部になると推定する。41 は全体的に磨耗しており、調整等を確認できないが、40 では内外面ともにミガキを施す。

甑（42・43）　42 は口縁部のみ確認できる。口縁部には粘土紐の痕跡を明瞭に確認でき、粗雑なつくりをしている。口縁端部は面取りする。口縁部は内外面ともに強くナデを施しており、器壁が薄くなる。体部外面にはヘラナデを施し、内面にはハケメを施す。43 はＡｂ類に分類した。全体的な形態は 75 と同様

と推定する。底部の穿孔径は約 1.5 ㎝である。底部の器壁は厚い。体部外面は縦・斜位のヘラナデ、底部付近はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。

甕（44 ～ 66）　44・47 ～ 49 はＡａ類、45・46 はＡｂⅡ類、54 ～ 58 はＢａ類、50 はＢｂ類、52・53 がＤａ類、51 はＤｂ類、61 はＥⅠ類、62 はＥⅡ類、59・60 はＧ類、63・64 はＨⅠ類、65 はＩⅠ類、66 はＪⅡ類にそれぞれ分類した。Ａ類の口縁部は内外面ともにナデを施すが、44 は部分的にハケメを残し、49 では口 縁部内面下半に横位のハケメを残す。胴部外面は 46 で確認でき、斜位のハケメを施す。内面では横位のヘラナデを施す。Ｂ類の胴部の形態は 58 で確認でき、最大径が肩部にあるが、口径とほぼ同じになる。口縁部は内外面ともにナデを施すが、ハケメを多く残す。胴部外面は縦位のハケメを施し、58 は胴部下半において目の細かいハケメを施す。内面は横位または斜位のヘラナデを施す。Ｄ類の口縁端部は丸くおさまる。口縁部は内外面ともナデを施すが、部分的にハケメを残す。胴部外面は斜位のハケメを施す。61・62 の胴部外面には、縦位のハケメを施す。口縁部内面には、部分的にハケメを残す。Ｈ類は口縁端部を内側に曲げるまたはつまみあげたような形態を呈する。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部外面は 63 では斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデを施す。65 は口縁端部を外側に曲げるまたは下方につまみ出したような形態を呈する。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部内面は横位のハケメを確認できる。外面は不明確である。66 は口縁部が受け口状を呈する。調整は内外面ともにナデを施す。

須　恵　器

杯Ｈ蓋（70）　天井部がやや扁平なドーム状を呈しており、天井部と口縁部の境には稜をもち、稜部はヘラ状工具により整形される。口縁部は稜部からほぼ垂直にのび、口縁端部は内傾し、面をもつ。天井部には４～５回転の左回転のヘラケズリを施しており、それは天井部中央にも施され、天井部の３分の１程度である。天井部のヘラケズリされていない部分はロクロナデをそのまま残している。口縁部外面から天井部内面もロクロナデのままである。

瓹（71）　71 はＣ類に分類した。体部の形態は肩の張ったもので、その部分に上が幅広く下は幅が狭い２条の凹線を施す。その下部には約２㎝の幅で波状文が施文されている。波状文は１単位７～８本の櫛状工具を用いている。波状文を施文後、径約 1.5 ㎝の円形の孔を穿つ。体部下半には２回転のヘラケズリを施す。内面はロクロナデを明瞭に残す。体部外面上半と体部内面下半には自然釉が付着する。

砥石（72）　全面を砥面として使用しており、円形の孔を穿つ。

SX119（図版 30・79）　土師器と須恵器が出土している。土師器は、椀１点・壺１点・甑１点・甕５点・鉢１点、須恵器は、甕１点を図示した。他に杯Ｈ身と考えられるものが１点出土しているが、小破片であるために図示することができなかった。

土　師　器

椀（73）　73 はＫⅡ類に分類した。外面の調整は磨耗を受けており不明確である。内面は、口縁部が横位のミガキ、体部が縦位のミガキを施す。

壺（74）　74 は小型丸底壺の頸部～胴部と推定する。口縁部は欠損しているので、不明確であるが、40・41 のような口縁部になると推定する。胴部の最大径はほぼ中央にある。全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。

甑（75）　75 は甑の中で唯一全体を確認できる資料である。Ａａ類に分類した。全体的な形態はＵ字状を呈する。底部には径 3.2 ㎝の円形の孔を穿つ。体部は底部から直に立ち上がり、底径と円形の孔径がほぼ同じになる。口縁端部はヘラナデにより面取りされる。体部は縦位のハケメを施し、全体的には粗いつ

くりである。

甕（76 ～ 80）　77 はＢａ類、79 はＢｂ類、76 はＣ類、76 はＥⅡ類、80 はＦⅡ類にそれぞれ分類した。77 は頸部がくの字状を呈する。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部から頸部は内外面ともにナデを施し、頸部～胴部の内面には横位のヘラナデを施す。79 は頸部がくの字状を呈しており、内面で は稜をもつが、外面では湾曲する。口縁部はやや強く外反して立ち上がり、口縁端部は方形～隅丸方形である。全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。76 は小型の甕である。頸部は、内面に稜をもち、外面は弱く外反する。口縁部は弱く外反して短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部中央よりやや上部にあり、胴部は卵倒形を呈する。底部は平底である。口縁部～頸部外面にはナデを施し、胴部には斜位のハケメを施す。胴部のハケメは口縁部下半にまで及ぶ。口縁部～頸部内面は横位のハケメを施し、胴部は斜位のヘラナデ、胴部下半～底部にかけては底部の中心から放射状にハケメを施す。78 は全体を復元できる。頸部は内外面ともに湾曲する。口縁部は強く外反し、口縁端部を丸くおさめる。最大径は肩部にあるが、口径とほぼ同じになる。口径に対して器高が低い。底部径は小さく、単体では立てない大きさである。口縁部～頸部はナデで、胴部上半は斜位のハケメ、下半は縦位のハケメを施す。胴部のハケメは口縁部下半に及ぶ。口縁部～頸部内面はナデを施すが、部分的にハケメが残る。胴部内面は横位のヘラナデで、底部は中央から放射状のハケメを施す。80 の頸部は内面に稜をもち、口縁部は頸部からほぼ直立して立ち上がり、中央付近で強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部にあるが、胴部の形態は不明確である。口縁部～頸部は内外面ともにナデを施す。肩部外面は斜位のハケメ、内面は斜位のヘラナデを施す。

鉢(81)　81 は口縁部～体部上半を確認できる。体部から口縁部にかけてくの字状に屈曲し､大きく開く。調整等は磨耗により不明確である。

須　恵　器

甕（82）　82 は甕の胴部片で、ゆがみがある。外面は平行タタキの後、ナデを粗く施す。内面は同心円文当具痕を確認できる。135 と類似する。

P101（図版 30・79）　土師器のみ出土しており、高杯１点（83）を図示した。ＡｂⅡ類に分類した。杯部を欠損する。脚部は中央付近までほぼ垂直で、中央付近では強く外反し、大きく開く。杯部内面にはミガキと黒色処理を施す。脚部外面にはヘラナデを施しているが、磨耗により部分的に確認できるのみである。

遺構外出土遺物（図版 30 ～ 32・79・80）　土師器と須恵器と石製品が出土している。土師器は椀 13 点・高杯７点・器台１点・甑４点・壺２点・甕 10 点・手づくね土器２点、須恵器は杯Ｇ蓋１点・杯Ｈ身３点・無蓋高杯１点・甕４点・提瓶２点・甕３点、石製品は紡錘車１点を図示した。

土　師　器

椀（84 ～ 96）　84 はＡａ類、85 はＢｂ類、86 はＣａⅠ類、88 はＤａ類、87 はＤｂⅠ類、89 はＤｂⅡ類、90 はＤｂⅢ類、91 はＥｂ類、92 はＦ類、93 はＧ類、95 はＪ類、94 はＫⅠ類、96 はＫⅡ類にそれぞれ分類した。84 は体部～口縁部は内湾し、底部は平底に近い丸底である。全体的に磨耗しているが、底部ではヘラケズリを確認できる。85 の口縁部は短く、屈曲させる。全体的に磨耗をしており、調整等は不明確である。86 の口縁部は短く、弱く外反させる。口縁部外面はナデで、体部はヘラナデを施す。内面はミガキのみで黒色処理を施されていない。ミガキの方向は口縁部で横位、体部が縦位である。88 は口縁部内外面にナデを施す。体部外面にヘラナデを施し、内面は不明確である。87・89・90 は口縁部外

面～内面にかけてミガキと黒色処理を施す。ミガキは、口縁部内外面は横位、体部内面は縦位である。91の口縁部はわずかに外反する程度で、口縁端部を丸くおさめる。全体的に磨耗しており、調整等は不明確であるが、内面には黒色処理と部分的にミガキを確認できる。92の口縁部は91と同様であるが、口縁端部は面取りされる。全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。93の口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部外面～内面にかけてナデを施し、体部外面にはヘラナデを施す。95は口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は外反して立ち上がり、傾きは小さい。口縁部外面～内面にかけて横位のミガキと黒色処理を施す。94・96は口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は外反して立ち上がり、傾きは大きい。口縁部外面～内面にかけてミガキと黒色処理を施す。ミガキは、口縁部の内外面は横位、体部内面は斜位である。体部外面はヘラナデを施す

高杯（97～103）　99はＡａ類、98はＡｂ類、97はＡｃ類、100はＢ類、101・102はＣ類、103はＤ類にそれぞれ分類した。97～99は杯部上半と脚部下半を欠損するが、脚部の形態は83と類似する。99は杯部内面に黒色処理を施さない。97・98は杯部内面に黒色処理を施しているが、97は杯部と脚部の境に縦位のナデを明瞭に残す。100は杯部上半と脚部下半を欠損するが、脚部の形態は38と類似する。杯部内面には黒色処理を施す。磨耗により調整等は不明確である。101・102は杯部と脚部の境のみで、杯部と脚部の形態は不明確である。杯部と脚部の境は厚く作られている。103は杯部と脚端部を欠損する。脚部外面は縦位のヘラナデを上半と下半の２段確認でき、杯部と脚部の境にはハケメを明瞭に残す。内面は下半に横位のハケメを施す。

器台（104）　104は受部と脚部を欠損する。受部の底部には径約３㎝の円形の孔を穿つ。調整等は不明確である。

甑（105～108）　105は口縁部のみである。口縁部は強いナデにより器壁は薄くなり、端部は面取りする。体部は内外面ともに斜位のハケメを施すが、内面では粘土紐の接合痕を明瞭に残し、粗雑なつくりである。106はＡｃ類、107はＡｄ類、108はＢ類に分類した。106・107は底部のみ確認できる。106は穿孔部の断面形態がくの字状を呈しており、内外面から穿孔していることを確認できる。穿孔部径は約2.2cmである。穿孔部径と底部径はほぼ同様で、体部は直に底部から立ち上がる。体部外面には縦位のハケメ、内面にはヘラナデを施す。107は穿孔部の断面形態が方形を呈する。穿孔部径は約1.8cmである。体部は底部から緩やかに湾曲して立ち上がる。調整等は磨耗により不明確である。108は底部に多数の孔を確認できる多孔の甑である。本遺跡では唯一の資料となる。一個体分と考えられるが、体部と底部は接合しない。穿孔部は15個確認できる。穿孔部の断面形態はくの字状と方形がある。穿孔部径は約0.5～1.0cmと多種にわたる。底部は平底に近い丸底であり、体部～口縁部は弱く内湾し、口縁端部を丸くおさめる。調整等は磨耗により不明確であるが、底部内面ではヘラナデ調整を確認できる。

壺（109・110）　109はＢａ類、110はＢｂ類に分類した。109は口縁部内面が直線的で、外面は断面三角形の粘土を貼り付けて、二重口縁状に成形する。110は頸部が直立して立ち上がり、口縁部との境は強く外反し、斜め上方に屈曲して口縁端部にいたる。調整等は磨耗により不明確である。

甕（111～120）　112はＡｂⅠ類・114はＡｂⅡ類、111はＤａ類、120はＦⅠ類、115・119はＧ類、116はＨⅠ類、117はＨⅡ類、118はⅠ類、113はＫ類にそれぞれ分類した。112は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は面取りする。114は頸部がくの字状に屈曲するが、112より弱い。口縁部は弱く外反し、口縁端部を丸くおさめる。胴部最大径はほぼ中央にあり、底部は径の小さな平底である。口縁部は内外面ともにナデを施すが、部分的に横位のハケメを残す。胴部外面では上半が

斜位のハケメ、下半には縦位のハケメを施す。底部付近はヘラケズリを施して整形する。111 は頸部が湾曲し、口縁部は頸部から連続する。口縁端部は丸くおさまる。胴部は長胴化傾向にある。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部外面は粗い斜位のハケメを施す。胴部のハケメは口縁部下半にまで及び、ハケメの上端には工具痕を沈線状に明瞭に残す。胴部内面にはヘラナデを施す。120 は口縁部が頸部から直立して立ち上がり、中央付近で強く外反し、口縁端部は丸くおさまる。胴部最大径は肩部にあり、やや肩の張った形態を呈する。底部は胴部との境に段をもち、底径はやや大きい。口縁部は内外面ともにナデを施す。外面は肩部が横位のハケメ、胴部下半は主に縦位のハケメで、部分的に斜位のハケメを施す。内面は胴部上半がヘラナデを施し、肩部には指頭圧痕を明瞭に確認できる。底部付近にはハケメを施す。115・119 の口縁部は頸部からほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は面取りされ、口縁端部内側をわずかにつまみ出す。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部外面は不明確で、内面には横位のヘラナデを施す。116・117 の口縁部はやや強く外反し、口縁端部は上方に曲げ、面取りする。口縁部は内外面ともにナデを施すが、117 ではハケメを部分的に残す。118 は胴部を欠損する。口縁部の傾きは大きく、直線的に立ち上がり、口縁端部は下方につまみ出したような形態を呈する。内外面ともにナデを施す。113 は口縁部のみ確認でき、受け口状を呈する。調整は内外面ともにナデを施す。

手づくね土器（121・122）　121・122 は全体を確認できる。底部は平底で、体部は底部からほぼ直立して立ち上がる。つくりは粗雑で、全体的に指頭圧痕を明瞭に残す。

須　恵　器

杯Ｇ蓋（123）　123 は天井部の中央部を欠損する。天井部は確認できる範囲において平坦で、口縁部は斜め下方に屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面には、短く内傾するかえりがつく。天井部～口縁部にかけて３回転のヘラケズリを確認できる。内面はロクロナデを残す。

杯Ｈ身（124 ～ 126）　124 はＡ類、125・126 はＢ類に分類した。124 は立ち上がりを欠損する。受部は他のものより小さい。底部～体部は内湾する。底部中央はヘラ切り後未調整で、ヘラケズリは底部～体部の半分に５回転施される。その他の部分はロクロナデを施す。受部には重ね焼きの痕跡と自然釉を確認できる。125・126 は底部が平坦で、体部は底部から緩やかに内湾し、受部では外反する。立ち上がりはほぼ直立し、口縁端部を丸くおさめる。底部はヘラ切り後未調整で、ヘラケズリは体部の３分の１程度に左回転で３回転施される。ほかの部位はロクロナデを施す。

無蓋高杯（127）　127 の杯部と脚部は接合しないが、一個体と推定する。杯部は口縁部が外反し、体部には２条の突帯と波状文を巡らす。波状文は１単位８～９本の櫛状工具で施文される。波状文の下部には右回転で３回転分のヘラケズリを確認できる。内面はロクロナデを施す。脚部は方形の３方透かしを穿つ。裾部で下方に屈曲し、端部は断面三角形を呈する。内外面ともにロクロナデを施す。

瑳（128 ～ 131）　128 はＡ類、129 はＢ類、130 はＣ類、131 はＤ類にそれぞれ分類した。128 は口縁部と頸部の境に突帯を巡らし、頸部には波状文を施文し、頸部の高さいっぱいに使い、幅の広い櫛状工具により施文される。この波状文は体部のものとは異なり、工具を連続的に使用しているのではなく、止めながら断続的に施文する。体部は上部に最大径があり、肩の張った形態を呈する。波状文は肩部に施文され、上下に凹線を巡らし、区画を形成する。この部分に径約 1.2cm の円形の孔を穿つ。波状文は１単位８～９本の櫛状工具を用いており、連続的に施文される。体部下半には２～３回転のヘラケズリを施す。内面はロクロナデを施し、底部内面には指頭圧痕を明瞭に確認できる。129 の口縁部が外傾し、外面には波状文を確認できる。口縁部と頸部の境は屈曲し、頸部には波状文を施文する。この波状文は断続的なもので、

頸部全体に確認できる。施文は粗雑で、２～３回重ねて施文される。体部はやや扁平な球状を呈しており、肩部に施文、中央に径約 1.2cm の円形の孔を穿つ。施文は１単位７～８本の櫛状工具により列点状に施され、擬波状文を作り出す。体部中央よりやや下部に２回転のヘラケズリを施す。130 は口縁部から頸部のみ確認できる。全体的に火ぶくれによる亀裂が生じており、口縁部は肥厚する。口縁端部は内傾する。口縁部と頸部の境には稜をもつ。頸部には波が大きく連続的な波状文を施文する。131 は口縁部と頸部の境に段を有しており、頸部には波が高く連続的な波状文を施文する。

瓶類（132・133）　132 は提瓶の口縁部で、133 がその体部と推定する。132 はやや外反して立ち上がり、端部ではわずかに内湾させる。内外面ともにロクロナデを施す。133 は外面にカキメを施し、内面は指頭圧痕を確認できる。

甕（134 ～ 136）　135 はＡ類に分類した。口縁部はやや内湾し、口縁端部は肥厚させる。外面は段を有する。頸部は直線的に外傾し、胴部は球状を呈すると推定する。口縁部～頸部はロクロナデを施す。胴部は外面に平行タタキ後ナデを施し、内面には同心円文当具痕を明瞭に確認できる。当具は４条の同心円の溝により構成される。134・136 は胴部片である。134 はＢ類に分類した。外面に平行タタキ後カキメを施し、内面は同心円文当具痕を明瞭に確認できる。136 はＣ類に分類した。外面に格子目タタキを施し、内面には同心円文当具痕の上からハケメを粗く施す。

紡錘車（137）　137 は滑石製のものである。平面形は円形で、断面形は台形を呈する。径６㎜の円形孔を穿つ。全面に擦痕を確認できる。

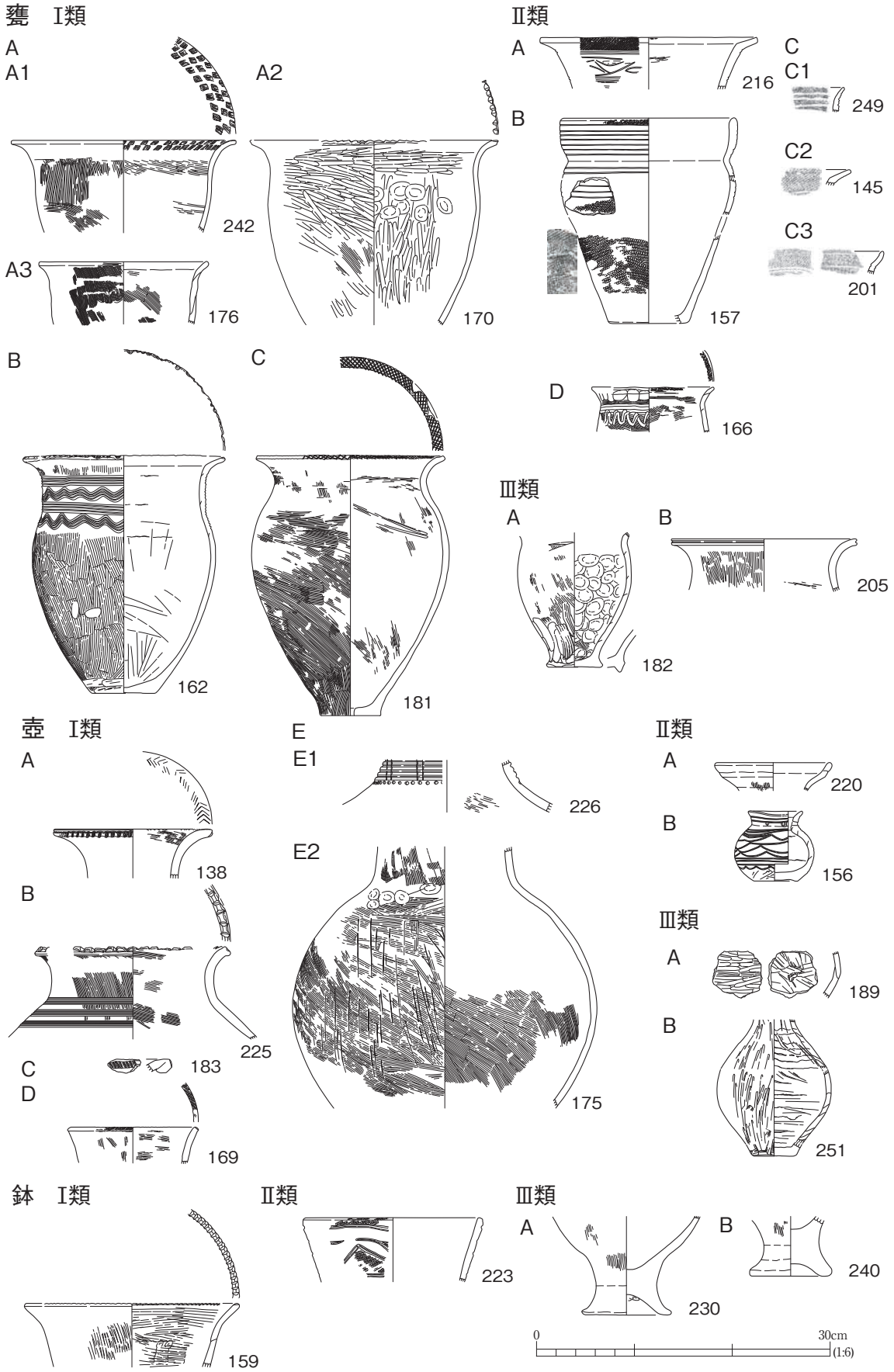
２　弥生時代の遺物

Ａ 土器・土製品

１）概　　要

本遺跡出土の弥生土器は、三枚の包含層（Ｈ１、Ｈ２、Ｈ３層）とそれぞれの包含層直下の各遺構、河川などを中心に出土し、掲載遺物を含めその総点数は 4,373 点である。中心となる年代は、Ｈ１・２・３層全て弥生時代中期後半であると思われる。本報告書掲載の弥生時代土器の系譜については、原則的に北陸系・東北系・中部高地系などとは呼称せず、施文方法から大別し櫛描文系と沈線文系（縄文を施文するものを含む）と呼称することとしたが、その割合は櫛描文系と無文の体部片が 90% を越え、沈線文系と明確にわかるものは全体の約３％（121 点）に過ぎず、遺物図版がそのまま本遺跡出土の土器のイメージをあらわしているわけではないことを断っておきたい。阿賀野川以北では弥生時代中期の遺跡の発掘例が少ないため不明な部分が多く、加えて本遺跡の出土土器は水田耕作の影響で遺存度が悪く、また当方の力不足もあって全体の器形を十分にあらわせなかった。そこで出土土器については、できる限り類似例の参考文献名、ページ数、報告番号を本文に記した。文中引用の参考文献は以下のように簡略化した。『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書平田遺跡』［坂上ほか 2000］は「平田」、『新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相』［滝沢ほか 2003］は「三面・2」、『関東・東北弥生土器と北海道続縄文の広域編年 2005』［石川ほか 2005］は「関東・東北編年」、『南関東の弥生土器』［シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編 2005］」は「南関東」と表記し、その後に該当頁・図版番号・遺物番号を付した。

以下器種分類を行い、各遺構、包含層、遺構外の出土土器について述べる。



第11図　弥生土器器種分類図

２）器 種 分 類

分類は壺・甕・鉢類に器種分類した後、各器種ごとに施文方法（櫛描文系・沈線文系・その他）に注目した大分類、頸部・口縁部・口唇部の形状による小分類、さらに可能なものについては細分（Ａ１～Ａ３など）を行った。なお、主な各部位の呼称は、壺、甕が、上から口唇部、口縁部、頸部、胴部、底部、鉢は胴部を体部と呼称した。

壺

Ⅰ類　櫛描文系

Ａ：外反する口縁を持つ長頸壺。胴部は卵倒形を呈すと思われる。

Ｂ：外反する口縁を持つ短頸壺。胴部は卵倒形を呈すと思われる。

Ｃ：外反する口縁を持つ折り返し状口縁のもの。

Ｄ：直立しつつ外傾する口縁を持つもの。

Ｅ：大型の壺。

Ｅ１：頸部に装飾のあるもの。

Ｅ２：頸部に装飾のないもの。

Ⅱ類　沈線文系

Ａ：受け口状口縁を持つもの。

Ｂ：加飾性の強い小型短頸壺。

Ⅲ類　その他

Ａ：胴部が強く屈曲するもの。

Ｂ：細首の長頸壺。

甕

Ⅰ類　櫛描文系

Ａ：胴部から頸部への湾曲は弱く口縁部から外反するもの。口径が最大径になると思われる。

Ａ１:口縁の最大径と胴部最大径に開きがあり、胴部が張らずそのまま底部まで収束するもの。

Ａ２：口縁の最大径と胴部最大径にあまり差がなく、胴部がゆるやかな弧状を呈するもの。

Ａ３：頸部・口縁部の短いもの。口縁の外反は弱く筒状の胴部を持つと思われるもの。

Ｂ：頸部が直線で口縁部から屈曲・外傾し口唇部に至るもの。口径と胴部最大径がほぼ等しいと思われる。

Ｃ：胴部から頸部にむかって内湾し頸部が締まり、口縁部から外反して口唇部にいたるもの。わずかに胴部が最大径になるものもある。

Ⅱ類　沈線文系

Ａ：頸部が直線で口縁部から屈曲・外傾し口唇部に至るもの。胴部器形は、Ⅰ類Ｂと同様。

Ｂ：胴部からすぐに直立しつつ内湾する口縁部に至るもの。

Ｃ：頸部からわずかに外反する短い口縁に至るもの。

Ｃ１：直線状に伸びる頸部からわずかに外反し、口唇部に至るもの。

Ｃ２：外反のやや強いもの。

Ｃ３：頸部からわずかに外反し、内湾しつつ口唇部に至るもの。

D：外反する口縁から胴部がゆるやかな弧状を呈するもの。胎土と口縁内面の羽状の連続刺突から沈線文系としたが、文様のモチーフは、櫛描文系に多いものである。

Ⅲ類　その他

A：胴部が筒形で頸部・口縁の区別がなく、口縁から軽く摘み上げて口唇部にいたるもの。

B：外反する口縁を持ち、口唇部に面を持ち凹線を巡らしたもの。

鉢　　類

Ⅰ類　櫛描文系

頸部が胴部に向かって内傾するもの。口縁部の外傾は弱い。

Ⅱ類　沈線文系

体部下半から外傾しつつそのまま口唇部に至るもの。

Ⅲ類　その他（脚台）

A：脚台が高く底部に厚みのないもの。鉢の脚である。底部から外反しつつ頸部、口縁部からわずかに内湾し口唇部に至る器形か。

B：脚台が高く底部が厚い柱状を呈するもの。鉢の脚である。

3）土器各説

SI１（図版33－138・139）　138は体部以下を欠損する。壺Ⅰ類Ａの長頸壺である。口縁部外面に櫛描刺突列を施し、口縁部内面に櫛描綾杉文を巡らす。内面はハケ調整を施す。139は甕か壺Ⅰ類の口縁である。口縁部内面に２列の斜行短線文を施す。

SI３（図版33－140）　140は口縁部内面に２列の斜行短線文を施す壺Ⅰ類である。139と同一個体の可能性もある。

SI９（図版33－141）　141は甕Ⅲ類Ｂである。頸部から強く外反する口縁を有する。口唇部に面を作り出し凹線を巡らしていることから弥生時代後期の可能性もあり、胎土も他の弥生時代中期の土器とは異なる（平田・図版35－32）。

SI10（図版33－142）　142は壺か甕Ⅰ類である。口縁部外面に櫛描刺突列を施す。

SI８（図版33－143～147）　143は142同様壺か甕Ⅰ類である。口縁部内外面に櫛描刺突列を施す。144は口径と頸部の形状から甕Ⅰ類Ｃと思われる。145は甕Ⅱ類Ｃ２である。口縁部から口唇部にかけてＬＲ縄文を施文し、頸部に一条の平行沈線を巡らす（三面・２・４図－89・90）。146は壺Ⅱ類の頸部と思われるが、小片のため断定できない。沈線山形文の下に平行沈線２条を巡らす（平田・図版37－79）。147は甕Ⅰ類の底部である。

１号周溝遺構周溝（図版33－148・149）　148は甕Ⅰ類ＢかＣであろうか。口縁部外面に櫛描刺突列を施す。149は甕Ⅱ類である。口縁部が欠損している。２本の平行沈線による区画帯に刺突列を施し、その下にさらに２本の平行沈線を巡らす（三面・２・９図－271・272）。

２号周溝遺構周溝・１号土坑（図版33－150・151）　周溝出土の150は甕Ⅰ類の底部片である。１号土坑出土の151は甕Ⅰ類Ａ１かＡ２であろうか。頸部から強く外反する口縁で胎土・焼成の堅致・良好な大形の甕である。口縁部内面に櫛描綾杉文を巡らす。

３号周溝遺構１号土坑（図版33－152）　152は壺Ⅰ類の胴部が卵倒形を呈する大形の壺底部片である。外面にハケ調整を施す。

SK ４（図版 33 － 153）　153 は甕Ⅰ類の底部から胴部である。内外面にハケ調整が施される。胎土は粗く焼成は悪い。櫛描文系が在地化し変容を受けた土器か。

SK126（図版 33 － 154・155）　154 は甕Ⅰ類の口縁である。口唇部に刺突列を巡らし内外面にハケ調整を施す。外面に煤が付着する。155 は大形の壺または甕Ⅰ類の底部である。粘土紐接合部で欠損する。内外面に煤が付着し､意識的に打ち欠いた後､火にかけて使用するなどの二次利用をしたものかもしれない。

SK134（図版 33 － 156）　156 は壺Ⅱ類である。加飾性の強い小型の短頸壺である。頸部に平行沈線２条、体部は上位３条、下位３条の平行沈線で区画し、４条の沈線による下向き連弧文を描き、下位の区画線の直下にさらに下向き連弧文を施す。なお、口縁部下端に１対ずつ合わせて４つの孔が穿たれている。底部から体部が丸く張り出し、頸部から口唇部に向かってやや外傾し口唇部を丸く収める。

SD122（図版 34 － 157、158）　157 甕Ⅱ類Ｂの深鉢形のものである。平底の底部から立ち上がり胴部下位は直線状に外傾し、胴部上位でゆるやかに内湾しつつ屈折する頸部に至り、長い口縁部は直立しつつわずかに内湾し、口唇部は丸くおさめる。口縁上部を沈線で区画しＬＲ縄文を施文し、口縁部に６条１組の平行沈線を施文する。一部欠損のため断定できないが、体部上位にも同様に６条１組の平行沈線を施文していると思われる。体部下半にはＬＲ・ＲＬ縄文を施文する。（関東・東北編年・P18・４図－ 22・５図－ 19）にそれぞれ器形・文様のモチーフが酷似するが、これについては、Ⅶ章で詳細を述べる。158 の器種は不明である。地文にＲＬ縄文を施文し、平行沈線と工字文の組み合わせか。

SD125（図版 34 － 159 ～ 162）　159 は鉢Ⅰ類Ａである（平田・図版 50 － 289）。やや弱く外反する口縁部から体部があまり張らず底部に収束する。口唇部に櫛描刺突列を巡らす。外面に煤が付着し内外面にハケ調整を施す。160 は甕Ⅰ類ＢかＣであろうか。口唇部外面に刺突列を施すが、整然と列をなしておらず施文が雑である。内面にハケ調整を施す。櫛描文系が在地化し、変容を受けた甕か。161 は壺か甕Ⅰ類である。口唇部に櫛描刺突列を巡らす。162 は壺か甕Ⅰ類の底部片である。内外面にハケ調整を施す。底部中央に焼成前穿孔がある。

SD129（図版 34 － 163）　沈線文系土器の破片である。体部外面にＬＲ縄文を施す。

SR ２ａ（図版 34 － 164 ～ 174､図版 35 － 175 ～ 181､図版 36 － 182 ～ 198）　164 は沈線文系の蓋である。上から２条の平行沈線、波状文、上向き重連弧文、１条の平行沈線をはさんで上向き重連弧文、２条の平行沈線を施文し、内面にハケ調整を施す（関東・東北編年・P18・５図－ 16）。165 は、鉢Ⅱ類Ａである。体部からわずかに外傾しつつ立ち上がる。地文にＲＬ縄文を施し、６条の平行沈線を施文する。166 は甕Ⅰ類Ｄである。口縁部内面に沈線文系の刺突列、頸部から体部にかけてのハケ調整後に、やや幅広の棒状工具で浅い波状文を２条、前後にずらして重ねて施文している。口縁部外面に指頭押圧による整形、内面にハケ調整を施す。施文工具は、沈線文系、施文のモチーフは、櫛描文系であろうか。167 は壺Ⅰ類Ａである。口唇部に平坦面を作り出し沈線を巡らせる。口縁部内面に刺突による綾杉文を２列施文する。外面にハケ調整を施す。168 は壺Ⅰ類Ｅ１である。７本単位の櫛歯状工具で直線文、連続斜行短線文を交互に施文する。内面にハケ調整を施す。169 は壺Ⅰ類Ｄである。口唇部に連簾文を巡らせる。内外面にハケ調整を施す。170 は甕Ⅰ類Ａ２である。口唇部に刺突列を施し、波状口縁を作り出す。内外面にハケ調整後、口縁部内外面横位・胴部縦位・斜位のヘラ磨きを施す。171 ～ 173 は甕Ⅰ類ＢかＣであろうか。口唇部に刺突列を施す。172 は内外面にハケ調整を施す。174 は甕Ⅰ類Ａ１かＡ２であろうか。口縁部外面に刺突列、内面にハケ調整を施す。175 は壺Ⅰ類Ｅ２である。大形の壺で内外面にハケ調整後、縦方向にヘラナデを施す。器形は球胴で中央部が丸く張り出し、頸部はまっすぐ上方に立ち上がる（平田・図版 68 － 503）。

176 は甕Ⅰ類Ａ３である。内外面にハケ調整を施す（平田・図版 68 － 506・507）。177 は甕Ⅰ類Ｂである。口縁部内面に７本単位の櫛歯状工具で短い連簾文を巡らす。直線的に立ち上がる頸部から強く外反する口唇部に至る。178 は甕Ⅰ類Ｃである。口縁部内面 に櫛描刺突列を施し、口唇部を小波状に作り出す。179 は壺Ⅰ類Ａである。180 は甕Ⅰ類Ｂである。口唇部に雑な櫛描刺突列、頸部に４本単位の櫛歯状工具で直線文、波状文の文様帯を２単位施文する。外面上位にハケ調整が施されるが、胴部下位にヘラケズリ整形を施し、内面にハケ調整はない。181 は甕Ⅰ類Ｃである。口縁部内面に櫛描斜格子文を巡らし、外面は胴部上位に横方向のハケ調整、下位に斜方向のハケ調整、内面はハケ調整後部分的にナデ消す。底部中央に焼成前穿孔がある。182 は甕Ⅲ類Ａである。外面は縦方向のハケ調整後ナデ消し、内面は指頭押圧による整形を施す。183 ～ 185・187 は壺Ⅰ類の口縁部である。183 はⅠ類Ｃの折り返し状口縁で外面に櫛描刺突列を施す。184・187 はⅠ類Ｄである。ともに口唇部に櫛描刺突列を施す。185 はⅠ類Ａ口縁部内面に櫛歯による斜行短線文、口唇部に櫛歯状工具３本１組の刺突列を施す。胎土、焼成良好で加飾性に富む。186 は甕Ⅰ類Ａである。口縁部内外面に櫛描刺突列を施す。188 は胴部下位に櫛描刺突列を施す。器種は不明だが後期によく見られる施文である。189 は壺Ⅲ類Ａである。外面にミガキ、内面にヘラケズリ調整を施す。胴部が強く屈曲する東海系のものか。190・191・194 は、壺Ⅰ類の底部で、192・193・195・196 は甕Ⅰ類の底部である。内面はハケ調整が施されたものが多い。190 は低台状の底部である。194 の底部には、焼成後の穿孔がある。197 は甕Ⅱ類の胴部下半から底部である。地文にＲＬ縄文を施す。198 は手づくね整形の円盤状土製品である。中央に穿孔がある。

SR ４（図版 36 － 199 ～ 203）　199 は壺Ⅰ類Ａである。200 は甕Ⅰ類Ａ３である。ともに口唇部に櫛描刺突列を施す。201 ～ 203 は、甕Ⅱ類Ｃである。201 はⅡ類Ｃ３である。口唇部から口縁部外面の地文にＬＲ縄文を施し、内外面にそれぞれ２条の平行沈線を施す（三面・２・５図－ 137）。202 は外面の地文にＲＬ縄文を施し、２条の平行沈線を施す。203 は外面の地文にＬＲ縄文を施し４条の沈線を施す。

SX117（図版 36 － 204・205）　204 は甕か壺Ⅰ類の口縁部である。205 は甕Ⅲ類Ｂである。口唇部に面を作り出し、沈線を巡らせる（図版 33 － SI9 － 141 参照）。

54 Ｒ－Ｐ２（図版 36 － 206）　沈線文系土器の小破片で、器種は不明である。２条の平行沈線を施文する。籾殻圧痕がある（図版 82 － 206 参照）。

Ｈ１層（図版 36 － 207 ～ 210）　207 は甕Ⅰ類Ａ１である。口縁部内面に米粒形の刺突による綾杉文を施文する。208 は器種不明の沈線文系のものである。胴部上位に細く浅い沈線を４条施す。209 は甕Ⅰ類の底部である。210 は壺Ⅰ類の低台状の底部か。ともに胎土、焼成が悪い。在地の粗製か。

Ｈ２層１号周溝遺構直上（図版 36 － 211 ～ 216、図版 37 － 217 ～ 219）　211・212・214 は、壺か甕Ⅰ類である。211 は口縁部内面に斜行短線文、口唇部に櫛描刺突列を施し、口唇部を小波状に作り出している。212 は口縁部内面に櫛描綾杉文を施す。214 は内面にハケ調整を施す。213 は甕Ⅱ類Ｃ２である。口縁外面に２条の平行沈線を施し、その直下と口唇部にＲＬ縄文を施す。215 は壺Ⅰ類Ａである。216・217 は同一個体で、甕Ⅱ類Ａである。頸部から外傾し、口縁部で屈曲して面として作り出された口唇部に至る。口縁部外面上位から口唇部にＬＲ縄文を施文する。頸部は平行沈線で区画し、内部に重菱形文を施す（三面・２・４図－ 78）。218・219 は沈線系の土器片で器種は不明である。218 は地文にＬＲ縄文を施し、平行沈線によって区画した内部に沈線山形文を施文する（三面・２・５図－ 145）。219 は上下５条の平行沈線で区画した内部に崩れた沈線山形文を施文する（三面・２・５図－ 133・134）。

Ｈ２層（図 37 － 220 ～ 222）　220 は壺Ⅱ類Ａで受け口状口縁であり形状からⅡ類としたが、Ⅰ類との

折衷か。221 は甕Ⅰ類である。222 は鉢Ⅱ類Ａである。口縁部外面上位にＬＲ縄文を施文し、２条の沈線による区画内に沈線菱形文を施したものか。

Ｈ３層２号周溝遺構直上（図版 37 － 223 ～ 237）　223 は鉢Ⅱ類Ａである。地文にＬＲ縄文を施し幅５㎜の棒状工具で施文した上下１条の平行沈線の区画内部に稚拙な沈線山形文もしくは菱形文を施文する。区画内部の縄文は、擦り消している。224 は壺Ⅰ類Ａである。口縁部内面に櫛描綾杉文を施す。225 は壺Ⅰ類Ｂである。頸部に３条１組の櫛描直線文を２組施文する。口唇部に円周に沿った刺突列と円周に垂直方向に施した刺突列を組み合わせる。226 は壺Ⅰ類Ｅ１である。頸部に３条の櫛描直線文を巡らし、頸部と体部の境界に円形の刺突列を施す。外面にハケ調整を施す。227・228 は壺か甕Ⅰ類である。ともに口唇部に刺突列を施す。229 は、器種不明の脚である。台付きの甕か鉢であろうか。230 は、鉢Ⅲ類Ａである。外面にハケ調整を施し、胎土軟質で焼成不良である。231 ～ 235 は器種不明の沈線文系のものである。231 は地文にＲＬ縄文を施し、３条の平行沈線の上下に沈線山形文を施文する。甕の胴部か。232 は４条の沈線を施文する。233 は地文にＬＲ縄文を施し、２条の沈線を施文する。234 は地文の縄文を擦り消し、９条の沈線を施す。235 は６条の平行沈線を施す。地文の縄文は擦り消しか。236・237 は甕Ⅰ類の底部である。

Ｈ３層４号周溝遺構直上（図版 37 － 238）　238 は、甕Ⅰ類Ａ１である。口縁の外反はやや弱い。口縁部内面、口唇部に櫛描刺突列を施す。内外面にハケ調整を施す。

Ｈ３層（図版 37 － 239 ～ 241）　239 は甕Ⅰ類Ｃである。胴部外面に４本１組の櫛歯状工具で上から直線文、波状文、浅い刺突を連ねて施文し、波状文、直線文の順で文様帯を形成する。口縁部内面に斜行短線文を施す。口縁はゆるやかに外反する。240 は鉢の脚Ⅲ類Ｂの脚部である。胎土・焼成不良で粗雑な整形である。241 は甕Ⅰ類Ａの底部である。

Ⅲ b2b 層（図版 38 － 242 ～ 246）　242･246 は甕Ⅰ類Ａ１である。口縁部内面に三列の斜行短線文を施し、胴部内外面にハケ調整を施す。243 は鉢Ⅱ類Ａである。地文にＲＬ縄文を施し、縦横４条の沈線で区画し内部に工字文を施文か。165 と同一個体の可能性もある。244 は甕Ⅱ類Ｂである。７本の平行沈線文を施文する。157 と同一個体の可能性が高い。245 は甕Ⅰ類ＢかＣであろうか。口唇部と内面に刺突列を加え、口唇部を波状に作り出す。内外面にハケ調整を施す。。246 は甕Ⅰ類Ａである。口唇部に櫛描刺突列、口縁部内面に綾杉文を施文する。

遺構外出土土器（図版 38 － 247 ～ 260）　247 は甕Ⅰ類Ａ１である。口縁内面に三列の斜行短線文を施し、口唇部に櫛描刺突列を施文する。248 は壺Ⅰ類Ａである。口唇部が肥厚し、櫛描刺突列を施す。249 は甕Ⅱ類Ｃ１の口縁部でミガキを施したのち沈線３条を施す。250 は甕か壺Ⅰ類である。口唇部に櫛描刺突列、口縁部内面に櫛描綾杉文を施す。251 は壺Ⅲ類Ｂである。外面縦方向のヘラミガキの後黒漆を塗布する。内面はヘラケズリ後、ヘラナデを施す。器形は、平底の底部から胴部中央が丸く張り出し、頸部が締まる細首の器形になると思われる（南関東・P36・２図－ 40・42）。252 ～ 255 は、器種不明の沈線文系の土器である。252 は沈線３条を施す。253 は 208 と同一個体か。細く浅い沈線や胎土が酷似する。254 は２条の沈線に区画された内部に沈線山形文を施文し、直下に平行沈線１条を施文する。255 は、沈線５条の下に重菱形文を施文する。256 は壺Ⅰ類の高台状底部である。257･258･260 は甕Ⅰ類の底部である。258 は、内面にハケ調整を施す。260 は底面に工具によるキズがある。259 は、甕Ⅱ類の底部である。外面にＬＲ・ＲＬ縄文を施す。外面に煤が付着する。

B　石　　器

1）概　　要

石器は包含層から126点（8830 g）、遺構内から126点（5540 g）出土した。時期は耕作撹乱により判断し難いものも含むが、石器属性や分布状況から概ね弥生時代中期に属すると思われる。器種は石鏃（30点）、石匙（1点）、石錐（3点）、スクレイパー（2点）、楔形石器（2点）、剥片（146点）、石核（2点）、扁平片刃石斧（1点）、環石（1点）、大型石包丁（1点）、石包丁（1点）、大型直縁刃石器（2点）、擦切具（1点）、砥石（7点）、敲石（7点）、磨石（2点）、管玉（1点）があり、製品では石鏃が最も多く出土した。石材は頁岩が全体の68%を占め、その他に凝灰岩（9%）、チャート（5%）、流紋岩（4%）、安山岩（3%）、砂岩（2%）、花崗岩（2%）、鉄石英（2%）、軽石（2%）、閃緑岩（1%）、粘板岩（1%）、緑色凝灰岩（0.7%）、蛇紋岩（0.3%）がみられる。これらの多くは荒川流域にて採取可能なため、石器の多くは遺跡周辺で製作されたと思われる。その中で、搬入品の可能性が高い環石や、県内において出土例の少ない大型石包丁は、他地域との交流や当時の生業を知る上で貴重な資料といえる。以下、遺構内出土石器、包含層出土石器、遺構外出土石器に大別し所見を述べる。

2）各　　説

遺構内出土石器（図版39・40・84・85 － 288）

SI 3（図版39・84 － 261 ～ 269）　石鏃、石鏃未成品、楔形石器、剥片が出土しており、石鏃2点、石鏃未成品1点、楔形石器1点、剥片4点を図示した。

石鏃・石鏃未成品（261 ～ 263）　いずれも頁岩製で261は凸基有茎鏃、262は比較的抉りの浅い凹基有茎鏃である。263は石鏃未成品で両面両側縁に粗雑な剥離調整が施される。

楔形石器（264）　頁岩製で周縁に階段状の剥離痕が密集し、側面には両極剥離による剪断面［岡村1983］がみられる。

剥片（265 ～ 269）　石材は全てチャートで、267の上端には階段状の剥離痕がみられるため、両極剥片の可能性がある。

SI12 周溝（図版39・84 － 270）　石鏃が1点出土した。

石鏃（270）　流紋岩製の凹基有茎鏃で剥離面がほかに比べ大きい印象を受ける。先端部及び茎部が欠損する。

2号周溝遺構1号土坑（図版39・84 － 271・272）　石鏃が2点出土した。

石鏃（271・272）　271は流紋岩製で長さが幅に比して長い平基有茎鏃、272は頁岩製で長さが短く、平面形が正三角形に近い小型の凹基有茎鏃である。272は左側かえしが欠損している。

2号周溝遺構周溝（図版39・84 － 273）　石鏃が1点出土した。

石鏃（273）　頁岩製の凹基有茎鏃で、抉りが浅く長さが幅に比して長い。茎部が欠損している。

SK 4（図版39・84 － 274）　剥片、石核、石鏃が出土しており、石鏃1点を図示した。

石鏃（274）　頁岩製の凹基有茎鏃で長さが幅に比して長く、剥離面の大きい粗雑な剥離調整が施される。

SK126（図版39 － 275 ～ 278・40 － 279・84 － 275 ～ 279）　石鏃、石錐、剥片、磨石が出土しており、石鏃2点、石錐1点、剥片接合資料1点、磨石1点を図示した。

石鏃（275・276）　275はチャート製の凹基有茎鏃で、長さが幅に比して長い。先端部及び茎部が欠損

している。276 は頁岩製の凸基有茎鏃で、ほかの石鏃に比べ茎部が太く、剥離調整も粗雑な印象を受ける。

石錐（277）　頁岩製で平面形は棒状、断面形は菱形を呈する。錐部は一端のみに作出している。

剥片接合資料（278）　剥片が 48 点出土した。石材は色調が黒褐色で白色鉱物を斑に含む頁岩（17 点）、色調が黄灰色で葉理構造がみられる頁岩（21 点）、色調が褐色で灰褐色の斑点を多く含む頁岩（５点）、色調が灰白色の頁岩（２点）、320 の石材に類似する凝灰岩（３点）を確認したが、接合したものは色調が黄灰色で葉理構造がみられる頁岩の４点１例のみで、同一打面から同方向に剥離作業を行った後、打面を転移し剥離作業を加えたものと考えられる。

磨石（279）　砂岩の扁平な円礫を素材とする。周縁の一部を両面より打ち欠き､底面を磨面としている。

SD122（図版 40・84 － 280）　剥片、石鏃が出土しており、石鏃１点を図示した。

石鏃（280）　頁岩製で長さが短く、平面形が正三角形に近い小型の凹基有茎鏃である。

SR ２ a（図版 40・84 － 281 ～ 284）　スクレイパー、剥片、敲石、大型石包丁、原石が出土しており、スクレイパー１点、剥片１点、大型石包丁１点、敲石１点を図示した。

スクレイパー（281）　頁岩製で、刃部は主剥離面のみに作出される。

両極剥片（282）　石材は頁岩で周縁が潰れており、両極剥離痕がみられる。

敲石（283）　砂岩の扁平な円礫を素材とする。表面及び両側面に敲打痕がみられる。

大型石包丁（284）　全面が研磨された大型石包丁である。粘板岩製で残存する大きさは長さ 23.8 ㎝、幅 14.0 ㎝、厚さ 1.6 ㎝で左側体部が一部欠損している。刃部は両刃で長軸に平行するように研磨痕がみられ、部分的に刃こぼれがある。背部には敲打、剥離痕がみられる。

SX111（図版 40・84 － 285 ～ 287）　石鏃、スクレイパー、剥片が１点ずつ出土しており全て図示した。

石鏃（285）　頁岩製の平基有茎鏃で長さが幅に比して長く、両側縁がやや内湾する形状を呈す。先端部が欠損している。

スクレイパー（286）　頁岩製で両端が潰れ、両極剥離痕が残る剥片を素材とする。刃部は裏面にのみ剥離調整を加え作出する。

剥片（287）　石材は鉄石英である。Ｈ３層２号周溝遺構直上において鉄石英製の管玉（303）が出土していることから、管玉製作時に出た剥片の可能性がある。

SX136（図版 40・85 － 288）　石鏃が１点出土した。

石鏃（288）　頁岩製の凹基有茎鏃である。最大厚が１㎝とほかに比べ厚く、剥離面も大きく調整が粗雑なため未成品の可能性も考えられる。

包含層出土石器（図版 41・42 － 306 ～ 312・85 － 289 ～ 311・86 － 312）

Ｈ１層（図版 41・85 － 289 ～ 295）　石鏃４点、石錐１点、管玉工程残核１点、磨製石斧１点を図示した。

石鏃（289 ～ 292）　いずれも頁岩製で、289・290 は長さが幅に比して長い凹基有茎鏃、291 は長さが幅に比して短く、側縁はやや丸みを帯びる平基有茎鏃である。292 は凸基有茎鏃である。289 は右側縁が内湾して、左右非対称の形状を呈し、裏面右側縁の剥離調整が左側縁に抜け出す。

石錐（293）　頁岩製で平面形は棒状、断面形は三角形を呈し、錐部を一端のみに作出している。

管玉工程剥片（294）　石材は緑色凝灰岩で、大きさは長さ３㎝、幅２㎝、厚さ２㎝、平面形は三角形を呈する。石材および上面一端に施溝痕を有することから、管玉製作において角柱状剥片を作る際に出た剥片と考えられる。

扁平片刃石斧（295）　安山岩製の扁平片刃石斧で、平面形は基端のみ弧状を呈し、ほかの部位は幅に差

がなく方形を呈する。表裏面と側面の稜は明確であり、断面形は長方形を呈する。基部には剝離痕がみられ、刃部は一部欠損している。

Ｈ２層１号周溝遺構直上（図版 41・85 － 296 ～ 299）　石鏃、石錐、石包丁、砥石、剝片が出土しており、石鏃１点、石錐１点、石包丁１点、砥石１点を図示した。

石鏃（296）　頁岩製の凹基有茎鏃で長さが幅に比して長く抉りが深く、側縁はやや丸みを帯びる形状である。右側かえし及び茎部を欠損している。

石錐（297）　頁岩製で平面形は棒状、断面形は台形状を呈する。両極剝片を素材とし、一端に錐部を作出している。

石包丁（298）　凝灰岩製で体部に穿孔が施される。形状、石材からＨ３層２号周溝遺構直上出土のもの（302）と同一個体と考えられる。

砥石（299）　凝灰岩製の小型のものである。表裏面を砥面とし、中央部がやや窪む。

Ｈ３層２号周溝遺構直上（図版 41・85 － 300 ～ 305）　石鏃、石包丁、管玉、敲石、礫石器が出土しており、石鏃２点、石包丁１点、管玉１点、敲石１点、礫石器１点を図示した。

石鏃（300・301）　300 は緑色凝灰岩製の凹基有茎鏃で他の石鏃に比べ、抉りが深く先端部の幅が狭い。また、側縁はやや内湾する形状である。301 は頁岩製の凸基有茎鏃で茎部が欠損している。右側かえしの調整が粗雑なため左右非対称な形状を呈する。

石包丁（302）　凝灰岩製で体部に穿孔が施され、刃部断面形は「Ｕ」字状を呈する。刃部には長軸に平行する研磨痕がみられる。先述したように形状、石材からＨ２層１号周溝遺構直上出土のもの（298）と同一個体と考えられる。

管玉（303）　鉄石英製で大きさは長さ 1.5 ㎝、直径 2.5 ㎜、孔径１㎜程である。表面には 13 面の研磨面が残り、断面形は円形を呈する。自然化学分析による石材産地分析を行っていないため確実性を欠くが荒川流域で採取可能な石材であること、管玉製作に関連する遺物が出土していることから本遺跡周辺で製作された可能性が高い。

礫石器（304）　用途不明だが、棒状礫を素材とし、周縁全面に敲打痕がみられる閃緑岩製の礫石器である。

敲石（305）　花崗岩の円礫を素材とする。表面、両側面に敲打痕がみられる。また、上面からの剝離も敲石として使用した際に生じたものであろう。

Ｈ３層３号周溝遺構直上（図版 42・85 － 306 ～ 309）　石鏃、石核、礫石器、磨石、剝片が出土し、石鏃１点、石核１点、礫石器１点、磨石１点を図示した。

石鏃（306）　流紋岩製の凸基有茎鏃で長さが幅に比して長く、丁寧な剝離調整が施される。側縁はやや丸みを帯びる形状を呈する。茎部が欠損する。

石核（307）　石材は鉄石英で、分割礫から僅かに剝片を作出した段階で剝離作業を終了している。

スクレイパー（308）　砂岩製の扁平な円礫を素材とし、両面片側に剝離調整を加え、刃部を作出している。

磨石（309）　安山岩の円礫を素材とし、表面、底面に磨面がみられる。

Ｈ３層４号周溝遺構直上（図版 42・85 － 310）　石鏃が１点出土した。

石鏃（310）　頁岩製の凹基有茎石鏃である。抉りは比較的浅く、長さが幅に比して長い。

Ⅲ b2b 層（図版 41 － 311・312・85 － 311・86 － 312）　石鏃１点、大型直縁刃石器１点が出土し、いずれも図示した。

石鏃（311）　頁岩製の平基有茎鏃で、長さが幅に比して長く、先端部が僅かに欠損している。

大型直縁刃石器（312）　粘板岩製で刃部は外湾し、断面形は「Ｖ」字状を呈する。背部・両側縁が剝離により調整される。表面の剝落が顕著であるが、顕微鏡による刃部観察では長軸に対し、平行する研磨痕がみられ、刃部磨製と思われる。

遺構外出土石器（図版 42 － 313 ～ 322・43・86 － 313 ～ 330）

石鏃（313 ～ 320）　頁岩製のものが主体をなし、全体的に基部から先端部の順に剝離調整を施す傾向がみられる。313 ～ 316 は凹基有茎鏃で長さが幅に比して長く、側縁の形状は直線的なものが多い。314 は流紋岩製のもの、316 は長さ２㎝程で小型のものである。317・318 は頁岩製の平基有茎鏃で 317 は長さが幅に比して長く、318 は長さが短く平面形が正三角形に近い形状を呈する。319 は頁岩製の凸基有茎鏃で南区から出土したものである。320 は唯一出土した円基鏃で、石材は凝灰岩である。他に比べ調整が大きい印象を受ける。

石匙（321）　南区 43 Ｒグリッドから出土した。頁岩製の縦型石匙で、縦長剝片を素材とする。つまみ部は両面加工で背面・裏面とも右茎部、左茎部の順に調整を加えている。刃部は背面にのみ調整を加え作出する。

剝片（322）　44 点出土しており、１点を図示した。石材は頁岩で両極剝離痕がみられる。

大型直縁刃石器（323）　頁岩製のもので、最大厚が約４㎝と厚手で背面に大きく原礫面を残す。刃部は片刃で、主剝離面側には長軸に対し平行する研磨痕がみられる。なお、顕微鏡による刃部観察では使用痕を確認できなかった。

擦切具（324）　２点出土しており、１点を図示した。流紋岩製で方形状、台形状、三角形状の３個体が接合したものである。残存状況は 1/2 程度で、復元される大きさは長さ 18 ～ 20 ㎝、幅７㎝、厚さ１㎝前後である。平面形は刃部が外湾する半月形を呈すると思われ、刃部断面形は「Ｕ」字状を呈する。層状に剝離する石材特徴を利用し、板状に加工した後、両面加工により刃部を作出したものと考えられる。なお、形状、石材から同一個体と考えられる板状片が１・２・４号周溝遺構直上から出土している。

環石（325）　蛇紋岩製のもので、残存状況は 1/3 程度、復元される大きさは直径 10 ㎝、厚さ３㎝、孔径２～３㎝前後である。周縁に刃部は作出されていない。表面及び周縁には研磨痕、敲打痕がみられる。蛇紋岩は周辺流域にて採取が確認されていない石材であるため、搬入品の可能性が高い。

砥石（326 ～ 328）　６点出土しており、３点を図示した。326 は粘板岩製で表裏面を砥面とする。327・328 は凝灰岩製で、327 は南区から出土しており、全面が砥面で端部に敲打痕・剝離痕がみられる。328 は表面のみ砥面である。

敲石（329）　４点出土しており、１点を図示した。凝灰岩製で両側面には打ち欠きによる抉りが施される。表裏面に敲打痕がみられる。

打製石斧（330）　流紋岩製で全面に剝離調整を施す。刃部には磨耗痕がみられる。

３　木　製　品

古墳時代に属すると思われる木製品は図示できたもので、８点出土している（図版 44 － 331 ～ 337・図版 87）。すべて北区で出土したもので、器種はすべて建築材（柱材）である。また、櫂状木製品（図版 44 － 347・図版 87）は 55 Ｑ区の撹乱土から出土したものであるが、出土した撹乱の掘り込みが古墳時代の面より上であったこと、周辺では古墳時代より新しい遺物は出土していないこと、また、側面の加工痕

から中世以降には下らないと考えられることから、この時期に属する可能性が高いと考えられるのでこの項で触れることとする。

柱材（図版 44 － 331 ～ 337･図版 87）　今回の調査で確認された掘立柱建物は北区の SB107 のみである。１間×２間の総柱で６か所の柱穴が確認され、すべてで柱根が残存していた。比較的残りのよいものもあるが、腐植が進んでほとんど土化していたものもあり、図化できたものは５点である。331 はピット１の柱根である。残りは良いが、表面は腐植が進んでおり、加工痕を観察するのも困難である。上端部を欠く。下端部は柱材を切断したときの加工痕がかろうじて残っている。鉄製と思われる斧で切断した後、端部を若干２次加工し、平らにしているようである。斧の刃幅は４～５㎝と推定される。通直な材を使用している。332 はピット３の柱根である。全体的に腐植がかなり進んでおり、図化できたのは、下端部のみである。

周囲から下端に向かって切り込んだ加工痕が認められる。334 のように平坦に加工しようとした跡は認められず、丸みを帯びた尖底となっている。斧の刃幅は４㎝程度と推定される。333 はピット４の柱根である。全体的に腐植がかなり進み、割れが入っており、表面では加工痕の観察は困難である。下端から 20 ㎝程度の部分が残るのみである。柱材を切断した時の切り込みは認められないが、底面を平坦にするための加工痕が残る。鉄製の斧によるとみられ、刃幅は５㎝程度である。334 はピット５の柱根である。SB107 で検出された柱根の中では最も残存状態がよく、全体的に比較的残りが良いが、表面では加工痕の観察は困難である。柱材の切断痕が一部に認められ、その後、底面を平坦にした際の２次加工の痕が残る。底面の加工は２面から行っている。加工は鉄製の斧によるとみられ、刃幅は３～４㎝である。樹種はヤマグワで、331 と同様に通直な材である。335 はピット６の柱根である。腐植が進み、表面には割れが多数入り、表面の加工痕の観察は困難である。上端部を欠く。下端部にかろうじて加工痕が認められる。柱材を切断した後に、端面を平坦に２次加工した跡が認められる。切断時は比較的水平に近い切断の仕方をしているようである。刃幅は８㎝程度である。樹種はヤマグワである。

以上の柱根５本は木取りがすべて芯持ちの丸太材を利用し、しかも太さもほぼ一定していることから共通の規格を持って切り出された材木を利用していることが明らかである。さらに樹種同定は 335 の材のみであったが、すべて同じ樹種であると考えられる。ヤマグワは、材質が重硬で強度および耐久性が強いという特徴を有することから柱材としては適材である。また生育場所は河道沿いなどの低地であることから、遺跡周辺から伐採されてきたものである可能性が高い。

336 は P109 で検出されたものである。掘立柱建物とはならず、単独で確認されたものである。腐植が進み、非常に残りが悪く、表面の加工痕の観察は困難である。上端部を欠く。下端部には、斜めに入る加工痕が認められる。おそらく柱材を切断した際の跡と推定される。鉄斧によるとみられる鋭利な刃痕である。刃幅は５～６㎝程度である。337 は P110 で検出されたものである。336 と同様に、単独で検出された柱穴から出土したものである。腐植が進み、土化してしまっており、図化できたのは下端部のみである。端面は平坦になっており、何らかの加工が加えられたとみられるが、はっきりと加工痕と断定できる痕跡は観察できなかった。338 は SX104 で検出されたものである。掘立柱建物になるのか、単独の柱穴か遺構の性格は不明である。やや曲がりのある材を利用している。上端部を欠く。下端部に立ち木の切断時の跡が斜めに明瞭に残る。２次加工は認められない。加工は鉄斧によるとみられ、刃幅は５㎝以上あるとみられる。

櫂状木製品（図版 44 － 347・図版 87）

347 は 55 Q グリッドで出土したものである。残りはよいが、全体的に腐植により丸みを帯びているため、明瞭な加工痕は観察できなかった。用途としては、杓子ないし匙など食膳具としては、サイズ的に大きく、

舟の櫂のようなものではないかと考えられる。確証に乏しいことから櫂状木製品と仮称した。柾目板を厚さ1.5㎝に削り、柄部と身部を肩によって区分している。柄部断面は隅丸長方形をなす。柄部上端をわずかに欠く、身部は原形を保つと思われる。先端部がやや薄く削られているようである。具体的な用途は不明である。

弥生時代に属すると思われる木製品は８点で、その内で７点が北区のSR ２ａから出土したものである。器種は建築部材・杭・加工材である。これらは全て弥生時代中期の土器の出土している４層から出土したものである。その他に、南区の弥生時代の建物跡SI １の柱根が１点ある。

建築部材（図版44 － 341・342・図版87）　SR ２ａから２点出土している。341は柾目の板材である。両端を欠く。断面形状は片側がやや薄く削られているようである。表面は表裏ともに平滑になっており、何らかの加工が施されたことは明らかであるが、明瞭な加工痕は観察できない。どのような建築材であるのかは不明である。樹種はトネリコ属である。AMS年代測定の結果、B.C.180 ± 40年という年代が出ている。342は柾目のやや厚手の板材である。両端を欠く。断面形状は楔状をなす。表面にはかすかに長軸方向の切削痕が認められる。341と同じくどのような建築材であるのかは不明である。

柱材（図版44 － 339･図版87）　339のみである。42O区のSI １に伴うと考えられる柱穴から出土した。上端部を欠く。下端部は、鉄製と思われる斧様の工具によって４面以上から切削し、先を尖らせている。形状から杭であった可能性も残る。

杭（図版44 － 343 ～ 346・図版87）　SR ２ａより４点出土している。すべて刺さった状態で出土しており、中には新しい後世の杭も含まれる可能性もある。343は、みかん割した材の一端を尖らせたものである。上端を欠く。腐植が進み、残存状況は良くない。先端部は鉄製と思われる斧ないし鉈状の工具で切削した加工痕が残る。４面から面取りしている。344は、343と同じくみかん割した材の一端を尖らせたものである。上端を欠く。先端部の加工痕はやや不明瞭であるが、鉄製と思われる斧様の工具で切削した加工痕が残る。材の残り具合から、新しい時期のものである可能性もある。345は、344と同じく、４分割にみかん割した材の一端を尖らせたものである。表面には樹皮が残る。上端を欠く。中央より下よりに枝瘤が残る。先端部には、鉄製と思われる斧または鉈様の工具で切削した加工痕が認められる。材の残り具合から、比較的新しいものである可能性もある。346は、丸材の一端を尖らせたものである。表面には樹皮が残る。上端を欠く。先端部は２面から切削を施し尖らせている。非常に鋭利な鉄製の工具で切削した加工痕が認められる。材の残り具合や加工の仕方からみて、新しいものである可能性が強い。

加工材（図版44 － 340・図版87）　340のみである。SR ２ａより出土した。特徴的なことは、偶然と考えられるが、この加工材が出土したのは、完形の弥生時代後期の土器内から発見されたことである。小形の板目板状の材の一端に薄く尖らせるように切削が加えられている。もう一端は面をなすが、人為的なものかどうかは不明である。建築部材の一部の可能性が高い。樹種はコナラ属である。AMS年代測定の結果、B.C.109 ± 40年という年代が出ている。

4　その他の時代の遺物

本遺跡から出土した弥生時代及び古墳時代の遺物として認定し得ない遺物は、土器では縄文土器の鉢、珠洲焼の鉢、甕、擂鉢である。金属製品では銭貨である。

土器（図版46・87 － 348 ～ 353）　348は縄文土器で半精製の鉢もしくは台付鉢である。器形は胴部が

直線的に立ち上がり、口縁部でやや内湾し、口縁端部には刻み目が施され小波状を呈する。口縁部は７条からなる多条沈線文を施文後、２列の刺突列が施される。また、同部位には穿孔痕があり、２個１対の補修孔の可能性がある。胴部はＬＲ原体による斜行縄文、結節縄文を地文とする。縄文時代晩期、大洞ＢＣ～Ｃ２式の時期に帰属するものと思われる。349 は珠洲焼の鉢である。口縁端部が外傾している。時期は吉岡康暢の編年区分［吉岡 1994］のⅡ期にあたると思われる。350 は珠洲焼の鉢である。口縁端部に波状文が施されており、焼きが良好であることから、時期は吉岡編年のⅤ期にあたると思われる。351 は珠洲焼の擂鉢片である。卸目は、一単位 14 本で幅 3.5 ㎝を図る。卸目が一単位しか認められないので、時期は吉岡康暢の編年区分でのⅢ期にあたると思われる。352 は珠洲焼の甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は舌状である。形状から、時期は吉岡編年のⅡ期である。353 は珠洲焼の甕である。内面に指頭痕、外面に平行タタキ痕が認められる。時期は不明である。

銭貨（図版 46・87 － 354 ～ 358）　354 は天保通宝である。初鋳年は 1835 年であるが、広郭のため鋳造は弘化 4 年以降のものである。355 は淳化元宝である。初鋳年は 990 年の北宋銭である。裏面は無文である。356 は永楽通宝である。初鋳年は 1403 年の明銭である。裏面は無文である。357 は皇宋通宝である。初鋳年は 1039 年の北宋銭である。通の文字が長い。裏面は無文である。358 は寛永通宝である。所謂、古寛永である。初鋳年は 1626 年である。裏面は無文である。「寛」字の後足の跋の向きが上ないしは外側である。

第Ⅵ章　自然科学分析

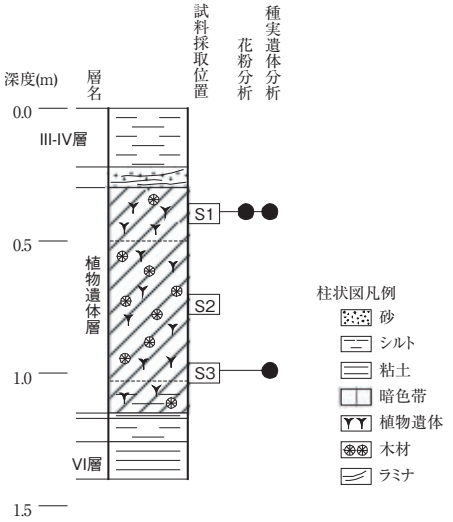
1　はじめに

道端遺跡は新潟県荒川町大字南新保字道端97番地ほかに所在し、胎内川扇状地北端を沿うように流れる荒川の支流である乙大日川東側の自然堤防及び後背湿地に立地している。本遺跡はこれまでにも発掘調査が実施され、縄文時代後期後葉～古墳時代にかけての遺構・遺物が多数確認されている。特に、平成16年度調査区からは、古墳時代前期と考えられる竪穴建物や円形周溝状遺構、掘立柱建物、杭列等が検出されたことから拠点的集落跡の可能性が示唆されている。

今回の発掘調査では、弥生時代中期及び古墳時代後期の遺構・遺物、弥生時代中期頃に集落内を流れていたと考えられる河川跡が確認されている。本項では、これらの発掘調査成果から課題とされた、1）遺構及び河川跡の年代推定、2）弥生時代中期頃の古植生および植物利用の検討、3）遺構内の内容物推定、の3点について自然科学分析を用いて検討する。

2　試　　料

試料は、上記の分析目的を考慮し、各遺構及び河川内、さらに、基本土層から採取された土壌、植物遺体等からなる（第2表）。なお、上記の古植生の検討に際しては、河川跡（SR 2a）の埋積物の採取を行っている。確認トレンチ地点の土層観察では、SR 2aは、基底は塊状無層理の青灰色シルト－粘土であり、その上位には不整合で流路埋積物が堆積し、下位より植物遺体層、中～細粒砂、Ⅲ－Ⅳ層相当と考えられる暗褐色を呈するシルトからなる。このうち植物遺体層は、堆積構造や砂粒の粒径、土層中の植物



第12図　SR2a模式柱状図及び資料採取位置

サンプル					試料の質	備考	分析項目※					
グリッド	遺構名	地点・試料名・日付					14C	W	P	土理	S	PO
56O	Ⅲ b1 層			051122	土壌							●
57O	Ⅲ b1 層			051122	土壌							●
	Ⅲ b2a 層	炭化物層				旧 X(エックス) 層						●
	SB107		ピット柱材		生材	334		●				
57Q1	SD125	4 層 (腐植層)	土壌サンプル	051124	土壌							●
43O	SI 3	焼土サンプル			土壌		●					
43O	SI 3	土壌サンプル		050824	土壌	大袋					●	
	2 号周溝遺構	1 号土坑 1 層炭化物			土壌					●	●	
55Q-22	1 号周溝遺構	周溝	6 層	051113	土壌					●		
54Q	SI 6	カマド焼土層		051011	土壌						●	
55Q-22	3 号周溝遺構	1 号土坑		051126	土壌					●		
	SI 8		炉サンプル	051117	土壌		●				●	
	SK134	1 層上	土壌サンプル	051021	土壌	土壌ｻﾝﾌﾟﾙ　洗出				●		
	SI11	炉焼土層	焼土サンプル		土壌	2 袋あり	●					
53Q	SR 2a	4 層			生材	342	●	●				
	SR 2a	4 層	180 土器内		生材	340	●	●				
52Q	SR 2a	4 層最上部			生材			●				
	SR 2a	植物遺体層	S 1		土壌	植物遺体層上部			●		●	
	SR 2a	植物遺体層	S 3		土壌	植物遺体層下部					●	
55R	Ⅲ b2a 層	X 層			土壌						●	

※ 14C：放射性炭素年代測定、W：樹種同定、P：花粉分析、土理：土壌理化学分析、S：種実遺体分析、PO：植物珪酸体分析

第2表　分析試料および分析項目一覧

化石の状況から３層に細分されることから、各層を対象に３試料（上部よりＳ１・Ｓ２・Ｓ３）を採取している。分析では、大型植物化石の種類の変化も合せて検討するため、当層の上部（Ｓ１）と下部（Ｓ３）を対象試料としている。

3　分析方法

A　放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-２）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

B　樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、［島地・伊東 1982］および［Wheeler *et al.* 1998］を参考にする。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、［林 1990］、［伊東 1995，1996，1997，1998，1999］や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

C　花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９，濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入して

プレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類を対象に200個体以上同定･計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉･胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は20㎛以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表として示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

D　土壌理化学分析

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、腐植含量はチューリン法［土壌養分測定法委員会1981；土壌標準分析・測定法委員会1986］による。以下に、各項目の操作工程を示す。

リン酸、カルシウム含量

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容しろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5 mg /g）を求める。

腐 植 含 量

風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜のふるいを全通させる（粉砕土試料）。粉砕土試料0.100-0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液 10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

E　種実遺体分析

各試料を秤量後水に一晩浸し、0.5㎜目の篩を通して水洗する。残渣を粒径別にシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。現生標本および『原色日本植物種子写真図鑑』［石川1994］、『日本植物種子図鑑』［中山ほか2000］等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を求めて表に示す。イネの穎は、基部の果実序柄の個数を数え、1000個以上は容量を表示する。分析後の種実遺体等は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

F　植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水･塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤［2004］の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物１ｇあたりの個数に換算）を求める。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物１ｇあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

4　結　　果

A　放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果（第３表）、SI ３焼土サンプルは 2200 ± 40BP、SI11 炉焼土層は 2190 ± 40BP、SI ８炉サンプルは 2150 ± 40BP、SR ２a － ４層出土材は 2130 ± 40BP、SR ２a － ４層 180 土器内出土土材は 2060 ± 40BP を示す。一方、暦年校正結果（第４表）のうち測定誤差 σ として計算させた結果は、SI ３焼土サンプルは cal BC 359-204、SI11 炉焼土層は cal BC 357-194、SI ８炉サンプルは cal BC 349-112、SR ２a － ４層出土材は cal BC 340-93、SR ２a － ４層 180 土器内出材は cal BC 160-2 を示す。

なお、暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過

試料名		試料の質	種類	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
SI ３	焼土サンプル	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	2,200 ± 40	-28.88 ± 0.68	2,270 ± 40	8877-1	IAAA-51942
SI11	炉焼土層	炭化材	広葉樹	2,190 ± 40	-25.00 ± 0.97	2,190 ± 40	8877-2	IAAA-51943
SI ８	炉サンプル	炭化材	ハンノキ属ハンノキ亜属	2,150 ± 40	-19.12 ± 0.70	2,050 ± 40	8877-3	IAAA-51944
SR ２a	４層	木材	トネリコ属	2,130 ± 40	-33.37 ± 0.68	2,270 ± 40	8877-4	IAAA-51945
SR ２a	４層　180 土器内	木材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	2,060 ± 40	-27.09 ± 0.95	2,090 ± 40	8877-5	IAAA-51946

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

第３表　放射性炭素年代測定結果

試料名		補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）												相対比	Code No.
SI ３	焼土サンプル	2,204 ± 41	σ	cal	BC	359	-	cal	BC	340	cal	BP	2,309	-	2,290	0.141	8877-1
				cal	BC	328	-	cal	BC	276	cal	BP	2,278	-	2,226	0.420	
				cal	BC	259	-	cal	BC	204	cal	BP	2,209	-	2,154	0.438	
			2 σ	cal	BC	383	-	cal	BC	176	cal	BP	2,333	-	2,126	1.000	
SI11	炉焼土層	2,187 ± 41	σ	cal	BC	357	-	cal	BC	282	cal	BP	2,307	-	2,232	0.611	8877-2
				cal	BC	257	-	cal	BC	244	cal	BP	2,207	-	2,194	0.078	
				cal	BC	235	-	cal	BC	194	cal	BP	2,185	-	2,144	0.311	
			2 σ	cal	BC	383	-	cal	BC	160	cal	BP	2,333	-	2,110	0.982	
				cal	BC	133	-	cal	BC	117	cal	BP	2,083	-	2,067	0.018	
SI ８	炉サンプル	2,146 ± 36	σ	cal	BC	349	-	cal	BC	313	cal	BP	2,299	-	2,263	0.267	8877-3
				cal	BC	208	-	cal	BC	149	cal	BP	2,158	-	2,099	0.545	
				cal	BC	140	-	cal	BC	112	cal	BP	2,090	-	2,062	0.188	
			2 σ	cal	BC	357	-	cal	BC	284	cal	BP	2,307	-	2,234	0.279	
				cal	BC	256	-	cal	BC	247	cal	BP	2,206	-	2,197	0.010	
				cal	BC	234	-	cal	BC	85	cal	BP	2,184	-	2,035	0.671	
				cal	BC	80	-	cal	BC	54	cal	BP	2,030	-	2,004	0.041	
SR ２a	４層	2,129 ± 39	σ	cal	BC	340	-	cal	BC	329	cal	BP	2,290	-	2,279	0.062	8877-4
				cal	BC	203	-	cal	BC	93	cal	BP	2,153	-	2,043	0.938	
			2 σ	cal	BC	353	-	cal	BC	292	cal	BP	2,303	-	2,242	0.158	
				cal	BC	230	-	cal	BC	218	cal	BP	2,180	-	2,168	0.017	
				cal	BC	214	-	cal	BC	46	cal	BP	2,164	-	1,996	0.825	
SR ２a	４層　180 土器内	2,059 ± 42	σ	cal	BC	160	-	cal	BC	133	cal	BP	2,110	-	2,083	0.183	8877-5
				cal	BC	117	-	cal	BC	37	cal	BP	2,067	-	1,987	0.722	
				cal	BC	29	-	cal	BC	22	cal	BP	1,979	-	1,972	0.039	
				cal	BC	11	-	cal	BC	2	cal	BP	1,961	-	1,952	0.056	
			2 σ	cal	BC	186	-	cal	AD	26	cal	BP	2,136	-	1,924	0.996	
				cal	AD	43	-	cal	AD	46	cal	BP	1,907	-	1,904	0.004	

註）RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用

第４表　暦年較正結果

去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5730 ± 40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例とされるが、将来的な暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表記している（第４表）。

また、暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いて、測定誤差σ・２σ双方の値の計算を行っている。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲であり、第４表の相対比は、σ・２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

B　樹種同定

木材は、全て落葉広葉樹で、４種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・エノキ属・ヤマグワ・トネリコ属に同定された（第６表）。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１- ３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

エノキ属（*Celtis*）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は２- ４列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１- ８細胞幅、１-50細胞高で鞘細胞が認められる。

ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は３- ５列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。小道管の管壁厚は中庸、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１- ６細胞幅、１-50細胞高。

トネリコ属（*Fraxinus*）　モクセイ科

環孔材で、孔圏部は１- ２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が放射方向に複合し、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１- ３細胞幅、１-20細胞高。

種　　類	SR２a 植物遺体層 試料番号　S1
木本花粉	
モミ属	2
マツ属複維管束亜属	5
マツ属（不明）	7
スギ属	7
ヤマモモ属	1
ノグルミ属	1
サワグルミ属	5
クルミ属	1
クマシデ属－アサダ属	1
カバノキ属	1
ハンノキ属	37
ブナ属	11
コナラ属コナラ亜属	40
コナラ属アカガシ亜属	3
クリ属	1
シイノキ属	1
ニレ属－ケヤキ属	32
エノキ属－ムクノキ属	15
カラスザンショウ属	1
キハダ属	1
アカメガシワ属	3
ウルシ属	1
モチノキ属	1
カエデ属	6
トチノキ属	38
ウコギ科	1
ミズキ属	1
エゴノキ属	9
イボタノキ属	1
トネリコ属	8
草本花粉	
ミズバショウ属	1
サジオモダカ属	1
イネ科	2
カヤツリグサ科	5
サナエタデ節－ウナギツカミ節	2
アカザ科	1
カラマツソウ属	1
マメ科	5
セリ科	2
オミナエシ属	1
ヨモギ属	3
不明花粉	13
シダ類胞子	
ゼンマイ属	2
他のシダ類胞子	14
合　計	
木本花粉	242
草本花粉	24
不明花粉	13
シダ類胞子	16
総計（不明を除く）	282
１ccあたりの微粒炭量[個]	5640

第５表　花粉分析結果

C　花粉分析

SR 2a　S 1からは花粉化石が豊富に産出（第５表、第 12 図）し、保存状態も良好である。なお、図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

遺構	層位	試料名	器種	時期	樹種	番号
SB107		ピット柱材	掘立柱建物の柱材	古墳時代中期～後期	ヤマグワ	334
SR 2a	4層	180 土器内	河川出土の甕の中の材	弥生時代	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	340
SR 2a	4層	53 Q	河川出土の建築部材	弥生時代	トネリコ属	342
SR 2a	4層最上部	52 Q	河川出土の丸太	弥生時代	エノキ属	

第６表　樹種同定結果

本試料の花粉化石群集は、木本花粉の占める割合が高い。産出した種類のうち、木本花粉は、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属が比較的多く産出し、マツ属、スギ属、サワグルミ属、ブナ属、エノキ属－ムクノキ属、カエデ属、エゴノキ属、トネリコ属などを伴う。一方、草本花粉は全体的に産出が少ない。カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属などが検出され、水生植物に由来するミズバショウ属、サジオモダカ属などの花粉も、僅かに検出される。なお、本試料に含まれる微粒炭量は、１cc あたり 5640 個である。

D　土壌理化学分析

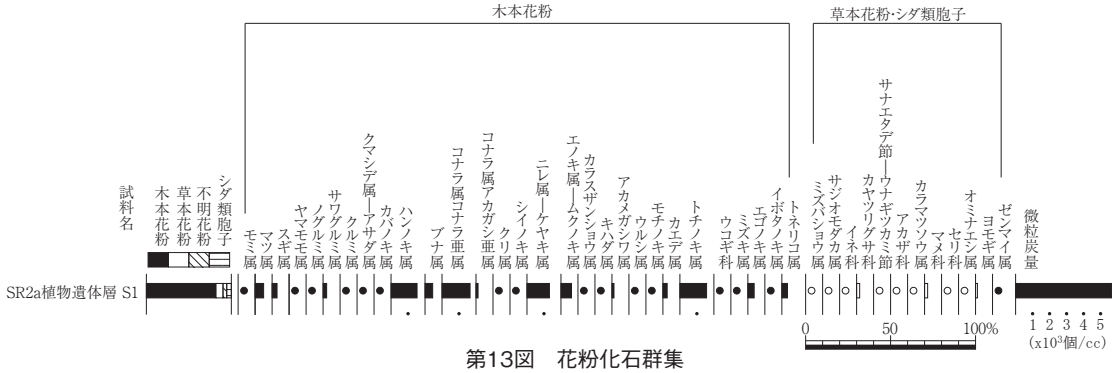
対象とした試料は、いずれもシルト質であり、国際法区分における野外土性［ペドロジスト懇談会編 1984］は SiL（シルト質壌土）～ SiCL（シルト質埴壌土）に分類される。なお、いずれの土壌もオリーブ黒～黒色を呈し、やや還元的な色調であることから、湿性な環境下におかれた経緯があることが推察される。

本分析結果（第７表）では、３号周溝遺構１号土坑、SK134 上と比較して、２号周溝遺構１号土坑１層 炭化物、１号周溝遺構周溝６層の覆土で腐植含量が 15% 以上と著しく高く、これらの試料に多量の有機物が集積されている事実が確認される。なお、集積されている有機物の本質的な性状に関しては、２号周溝遺構１号土坑１層炭化物では炭化物が集中して検出されている状況から、未分解の有機物の影響が考

試料名		土性	土色	腐植含量 (%)	P_2O_5(mg/g)
２号周溝遺構	１号土坑　１層炭化物	SiL	5Y2/1 黒	15.73	2.76
１号周溝遺構	周溝　６層	SiL	5Y2/1 黒	17.63	4.20
３号周溝遺構	１号土坑	SiL	5Y2/2 オリーブ黒	4.48	1.98
SK134	１層上	SiCL	5Y2/2 オリーブ黒	3.16	1.75

土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
SiL・・・シルト質壌土（粘土０～ 15%、シルト 45 ～ 100%、砂０～ 55%）
SiCL・・・シルト質埴壌土（粘土 15 ～ 25%、シルト 45 ～ 85%、砂０～ 40%）

第７表　土壌理化学分析結果



第13図　花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
●○は１％未満を示す。また、微粒炭量は、堆積物 1cc あたりに含まれる

		グリッド	54 Q グリッド	43 O グリッド	55 Q グリッド	55 Q グリッド	52 O グリッド	52 O グリッド	55 R グリッド
		遺構名	SI6	SI3	2 号周溝遺構	SI8	SR2a	SR2a	
		地点･試料名	カマド焼土層	土壌サンプル	1 号土坑 1 層炭化物	炉サンプル	植物遺体層 S1	植物遺体層 S3	Ⅲ b2a 層
		土壌分析量 (cc)	130	200	200	150	150	100	200
分類群		(g)	237.8	314.4	258.8	239.5	191.4	100.3	292.3
木本	ハンノキ亜属	果実	-	-	-	-	2	1	-
	ハンノキ属	果鱗	-	-	-	-	-	8	-
	コナラ亜属	殻斗	-	-	-	-	-	1	-
	ムクノキ	核	-	-	-	-	1+	1+	-
	クワ属	種子	-	-	-	-	3	6	-
	マタタビ属	種子	-	-	-	-	6	2	-
	アカメガシワ	種子	-	-	-	-	-	5	-
	カエデ属	果実	-	-	-	-	2	2	-
		種子	-	-	-	-	6	2	-
	トチノキ	幼果	-	-	-	-	1	-	-
		果実	-	-	-	-	1	-	-
		種子	-	-	-	-	-	1	-
	ブドウ科	種子	-	-	-	-	-	1	-
	イイギリ	種子	-	-	-	-	12	7	-
	ミズキ	核	-	-	-	-	-	4	-
	タラノキ	核	-	-	-	-	7	2	-
	ツツジ科	種子	-	-	-	-	5	3	-
	エゴノキ属	種子	-	-	-	-	-	7	-
	トネリコ属	果実	-	-	-	-	2	2	-
	ムラサキシキブ属	核	-	-	-	-	4	4	-
	クサギ	核	-	-	-	-	-	1	-
	タニウツギ属	種子	-	-	-	-	3	5	-
	ニワトコ	核	-	-	-	-	1	4	-
草本	ミクリ属	果実	-	-	-	-	-	1	-
	ヘラオモダカ	果実	-	-	-	-	2	-	-
	イネ	胚乳	-	8	81	6	-	-	-
		穎	-	14	1000+(1cc)	22	-	-	-
	アワ－ヒエ	胚乳	1	-	3	1	-	-	-
	イネ科	果実	-	-	-	1	-	-	-
	カヤツリグサ科	果実	3(1 個発芽)	-	-	-	3	9	-
	カラムシ属	果実	-	-	-	-	3	-	-
	タデ属	果実	-	-	-	-	5	-	-
	ナデシコ科	種子	-	-	-	-	2	-	-
	キケマン属	種子	-	-	1	-	-	-	-
	スミレ属	種子	-	-	-	-	1	1	-
	ウド	核	-	-	-	-	-	2	-
	セリ科	果実	-	-	-	-	-	1	-
	サクラソウ科	種子	-	-	-	-	1	-	-
	トウバナ属	果実	-	-	-	-	-	1	-
	キク科	果実	-	-	-	-	-	1	-
その他	木の芽		-	-	-	-	70+	14	-
	木材		-	20+	-	-	多量 (15cc)	多量 (70cc)	22+
	炭化材		50+(0.5cc)	多量 (1cc)	50+(0.5cc)	50+(2.5cc)	3	5	50+(0.5cc)
	不明炭化物		-	4	-	-	-	-	-
	蘚苔類		-	-	-	-	30+	20+	-
	昆虫		-	-	-	2	30+	20+	-
	動物遺存体		-		-	7	-	-	-
	土器		-	2	-	-	-	-	-
	高師小僧 (褐鉄鉱)		-	30+(1cc)	-	-	-	-	-

第８表　種実遺体分析結果

えられるが、１号周溝遺構周溝６層に関しては土壌腐植として存在しているものであるか、あるいは未分解の有機物として存在しているものであるか、本分析結果のみから判断することはできない。

一方、リン酸含量は、３号周溝遺構１号土坑、SK134 上で 2.0P_2O_5mg/g 程度であるのに対し、２号周溝遺構１号土坑 １層 炭化物では 2.76P_2O_5mg/g、１号周溝遺構周溝６層では 4.20P_2O_5mg/g ２号周溝遺構１号土坑１層 炭化物、１号周溝遺構周溝６層では腐植も多いことから、植物遺体に由来する可能性があり、一概に動物遺体等の遺体成分に由来する可能性を指摘することはできない。ただし、１号周溝遺構周溝６層は、２号周溝遺構１号土坑１層炭化物と比較して腐植含量はほぼ変わらないが、僅かにリン酸含量が高い傾向が認められる。

E　種実遺体分析

種実遺体分析では、被子植物 29 分類群 1300 個以上の種実等が検出された（第８表）。以下に、各試料における検出状況などを記す。

SI 6

栽培植物のアワ－ヒエの炭化胚乳が１個、カヤツリグサ科の果実が３個検出された他に、炭化材が確認された。カヤツリグサ科は、分析中に１個発芽するなど状態が極めて良好であり、後代からの混入と判断

される。そのため、本報告では結果表示と形態記載にとどめ、考察に関しては除外している。

SI ３、２号周溝遺構、SI ８

栽培植物のイネ、アワ－ヒエが炭化した状態で検出された。イネは、胚乳がSI ３から８個、２号周溝遺構から81 個、SI ８から６個検出され、穎は破片がSI ３から14 個、２号周溝遺構から1000 個以上（約１cc)、SI ８から22 個検出された。アワ－ヒエの胚乳は、２号周溝遺構から３個、SI ８から各１個検出された。この他に、２号周溝遺構からキケマン属が１個、SI ８からイネ科が１個検出された。種実以外では、木材、炭化材、木材組織が認められない種類･部位共に不明の炭化物、動物遺存体、昆虫、土器、高師小僧（褐鉄鉱）などが確認された。

なお、イネ科の果実表面には短毛が密生し、キケマン属の種子も遺存状態が極めて良好であることから、後代からの混入と判断される。そのため、本報告では結果表示と形態記載にとどめ、考察に関しては除外している。

SR ２a 植物遺体層（S １,S ３）

木本20 分類群（広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ムクノキ、クワ属、マタタビ属、アカメガシワ、カエデ属、トチノキ、ブドウ科、イイギリ、ミズキ、タラノキ、ツツジ科、エゴノキ属、トネリコ属、ムラサキシキブ属、クサギ、タニウツギ属、ニワトコ）125 個、草本13 分類群（ミクリ属、ヘラオモダカ、カヤツリグサ科、カラムシ属、タデ属、ナデシコ科、トウゴクサバノオ、スミレ属、ウド、セリ科、サクラソウ科、トウバナ属、キク科）33 個、計158 個の種実が検出された。種実以外では、木の芽、木材（多量)、炭化材、蘚苔類、昆虫などが確認された。S １、S ３の種類構成は、概ね同様である。

55 R グリッド　Ⅲ b2a 層

同定可能な種実は検出されず、木材、炭化材が確認された。

以下に、本分析にて得られた種実の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

＜木　　本＞

ハンノキ属ハンノキ亜属（*Alnus* subgen. *Alnus*）　カバノキ科

果実が検出された。茶褐色、広倒卵形で偏平。径４㎜程度。両側には質の薄い翼がある。

ハンノキ属（*Alnus*）　カバノキ科

果序を構成する果鱗の破片が検出された。黒褐色で木質。果序が完形ならば卵状楕円体。果鱗は扇形で背面に深い縦溝が目立つ。径５㎜程度。基部はやや薄く楔形、頂部はやや厚く反りかえるように突出し、３- ５つに分かれて開く。

コナラ属コナラ亜属（*Quercus* subgen. *Quercus*）　ブナ科

殻斗の破片が検出された。灰褐色、完形ならば椀状。破片の大きさは９㎜程度。表面には狭卵形の鱗片が覆瓦状に配列する。

ムクノキ（*Aphananthe aspera*（Thunb.）Planchon）　ニレ科ムクノキ属

核（内果皮）の破片が検出された。灰黄褐色､完形ならば広倒卵形､一側面は狭倒卵形で他方は稜になって薄く、基部に淡褐色の突起をもつ。破片の大きさは５㎜程度。内果皮は厚く柔らかく脆い。表面には微細な網目模様がありざらつく。断面は柵状。

クワ属（*Morus*）　クワ科

種子が検出された。黄褐色､三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で､他方は稜になりやや薄い。長さ2.2 ㎜、

径 1.7 ㎜程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

日本に分布するクワ属は、ケグワ、オガサワラグワ、ヤマグワ、ハチジョウグワの４種と栽培種のマグワがある。ケグワ、オガサワラグワ、ハチジョウグワは分布地が限られており、本地域には分布していないことから、ヤマグワやマグワに由来する可能性がある。

マタタビ属（*Actinidia*）　マタタビ科

種子が検出された。茶～黒褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ２㎜、幅 1.3 ㎜程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円 - 楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

アカメガシワ（*Mallotus japonicus*（Thunb.）Mueller- Arg.）　トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が検出された。黒褐色、完形ならば径４㎜程度の歪な球体。破片は基部にあるＹ字形の稜に沿って割れており、大きさは 3.8 ㎜程度。種皮は硬く、表面には瘤状突起を密布しゴツゴツしている。種皮断面には内側に湾曲する柵状構造がみられる。

カエデ属（*Acer*）　カエデ科

果実の破片と種子が検出された。果実は灰褐色、非対称楕円体でやや偏平。頂部の翼を欠損する。径１㎝、厚さ１㎜程度。基部は切形で２翼果の合着面は平ら。両面の正中線上に鈍稜がある。果皮表面には葉脈状の隆条模様がある。種子は黒褐色、径７㎜程度の左右非対称楕円形で偏平。表面には網目模様が同心円状に配列する。

トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　トチノキ科トチノキ属

幼果、果実、種子の破片が検出された。幼果、果実は、灰褐色、歪な倒卵体。幼果は径９㎜、果実は径 2.7cm 程度。頂部はやや尖り、基部は切形。基部と頂部を結ぶ３本の溝が走る。果皮は厚く、スポンジ状で弾力があり、表面には皮目状の斑点がある。種子は、径 3.2cm 程度の偏球体。表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、割れ方は不規則。

ブドウ科（Vitaceae）

種子の破片が検出された。黒褐色、完形ならば広倒卵形で側面観は半広倒卵形、基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。破片の大きさは４㎜程度。種皮は柵状で薄く硬い。同定の根拠となる背面が欠損した状態であったため、ブドウ科にとどめた。

イイギリ（*Idesia polycarpa* Maxim.）　イイギリ科イイギリ属

種子が検出された。灰 - 黒褐色、広倒卵体。径 1.7 ㎜程度。頂部に円形の孔がある。頂部から基部の臍にかけて１本の縦隆条がある。表面はスポンジ状の微細な網目模様があり、ざらつく。

ミズキ（*Cornus controversa* Hemsley）　ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）の破片が検出された。灰褐色、偏球体。径 4.5 ㎜程度。基部に大きく深い孔がある。内果皮は厚く硬く、表面にはやや深い縦溝が数本走る。

タラノキ（*Aralia elata*（Miq.）Seemann）　ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）が検出された。灰褐色、半円形でやや偏平。長さ２㎜、幅 1.1 ㎜程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面は粗面。

ツツジ科（Ericaceae）

種子が検出された。赤褐色。楕円形、長楕円形など不定形で偏平。長さ 1.8 ㎜、幅 0.9 ㎜程度。種子本

体は狭楕円形で偏平。縁には膜状の翼がある。翼表面には縦長の網目模様が配列する。

エゴノキ属（*Styrax*）　エゴノキ科

種子が検出された。灰 - 黒褐色、卵体など。長さ１cm、径６-7.5 ㎜程度。頂部はやや尖り、表面には頂部から基部にかけて３本程度の太い縦溝が走る。基部は斜切形で､灰褐色の着点がある。種皮は厚く硬く、断面は柵状。表面には微細な粒状の網目模様があり、ざらつく。

トネリコ属（*Fraxinus*）　モクセイ科

果実の破片が検出された。灰褐色、線状長楕円形で偏平、長さ１㎝、幅４㎜程度。頂部の翼を欠損する。果皮両面には数個の線条が縦列する。

ムラサキシキブ属（*Callicarpa*）　クマツズラ科

核（内果皮）が検出された。黄褐色、倒卵体で偏平。長さ 2.2 ㎜、径 1.5 ㎜程度。背面は丸みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し､側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損している個体がみられる。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

クサギ（*Clerodendron trichotomum* Thunb.）　クマツズラ科クサギ属

核（内果皮）の破片が検出された。灰褐色で広卵体、側面観は三日月形。長さ６㎜、幅４㎜、厚さ３㎜程度。背面は丸みがあり、腹面は平らで腹面方向にやや湾曲する。腹面の一端には裂け目状の発芽口がある。内果皮は厚く硬い。背面には大きな網目模様があり、腹面表面はやや平滑。

タニウツギ属（*Weigela*）　スイカズラ科

種子が検出された。淡 - 赤褐色、長楕円形で両凸レンズ形。長さ 1.2 ㎜、幅１㎜程度。縁にある淡褐色の翼を欠損する。頂部には稜角がある。表面には円 - 楕円形の凹みによる網目模様が発達している。

ニワトコ（*Sambucus racemosa* L. subsp. s ieboldiana（Miq.）Hara）　スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）が検出された。淡褐色､広倒卵体でやや偏平､長さ 2.3 ㎜､幅 1.5 ㎜程度。基部はやや尖り、背面は円みがあり、腹面の正中線上は鈍稜をなす。腹面基部正中線上には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

＜草　　本＞

ミクリ属（*Sparganium*）　ミクリ科

果実が検出された。淡灰褐色、紡錘状倒卵体。長さ 4.5 ㎜、径 2.5 ㎜程度。頂部は尖り、基部は切形。果皮はスポンジ状で、表面には数本の隆条が縦列する。

ヘラオモダカ（*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche）　オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。淡褐色、楕円形で偏平、基部は切形。長さ 2.2 ㎜、幅 1.5 ㎜程度。背部に深い縦溝が１本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。径１㎜程度。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳と多量の穎（果）の破片が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや偏平。長さ 4.5- ５㎜、幅２- ３㎜、厚さ 1.5 ㎜程度。胚乳は、基部は一端に胚が脱落した斜切状凹部がある。表面には２- ３本の隆条が縦列する。表面に穎が付着している個体もみられた。穎（果）は、基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。

アワーヒエ（*Setaria itarica*（L.）P.Beauv.-*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno）　イネ科

胚乳が検出された。炭化しており黒色。広楕円体でやや偏平。径 1.5 ㎜程度。背面は丸みがあり、腹面

は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。

イネ科（Gramineae）

果実が検出された。淡褐色、半挟卵体でやや偏平。長さ２㎜、径 0.5 ㎜程度。果皮は薄く柔らかく、表面には短毛が密生し、微細な網目模様が縦列する。

カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。淡 - 茶褐色。三稜またはレンズ状倒卵体。径１- ２㎜程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。

カラムシ属（*Boehmeria*）　イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径 1.3 ㎜程度。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。灰褐色、長さ４㎜、径 2.5 ㎜程度の三稜状広卵体で、果皮は薄く柔らかく、表面には微細な網目模様が発達しざらつく、ミゾソバ（*Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc.）に似る個体や、黒褐色、長さ３㎜、径 2.5 ㎜程度の両凸レンズ状広卵体で、正中線上に鈍稜があり、果皮表面には明瞭な網目模様がありざらつく、ヤナギタデ（*Polygonum hydropiper* L.）に似る個体を含む。

ナデシコ科（Caryophyllaceae）

種子が検出された。茶褐色、腎状円形でやや偏平。径１㎜程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、瘤状突起が臍を取り囲むように同心円状に配列する。

キケマン属（*Corydaris*）　ケシ科

種子が検出された。黒色、腎臓状円形で両凸レンズ形。径 1.7 ㎜程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面は平滑で光沢が強く、微細な網目模様が臍を取り囲むように同心円状に配列する。

スミレ属（*Viola*）　スミレ科

種子が検出された。淡灰褐色、広倒卵体。径 1.5 ㎜程度。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る１本の縫合線がある。種皮は薄く、種皮表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

ウド（*Aralia cordata* Thunb.）　ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）が検出された。淡褐色、半広卵形で偏平。長さ 1.5- ２㎜、幅１㎜程度。腹面はほぼ直線状で、片端は突起状に伸びる。表面はスポンジ状。

セリ科（Umbelliferae）

果実が検出された。黄褐色、楕円体でやや偏平。長さ 2.2 ㎜、幅１㎜、厚さ 0.5 ㎜程度。果実はスポンジ状で、表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

サクラソウ科（Primulaceae）

種子が検出された。茶褐色、倒台形、背面は平らで楕円状、菱形状などの４～５角形。径１㎜程度。

腹面は長軸方向に薄くなり稜状で、稜上の中央付近に広線形の臍がある。表面は５～６角形の凹みによる網目模様がある。

トウバナ属（*Clinopodium*）　シソ科

果実が検出された。茶褐色、倒広卵体で径 1.2 ㎜程度。背面は丸みがあり、下端は舌状にわずかに突出する。

腹面の正中線は鈍稜をなす。表面には微細な網目模様がありざらつく。

キク科（Compositae）

果実が検出された。淡褐色、長楕円体で腹面方向にやや湾曲する。長さ 3.5 ㎜、径 1.5 ㎜程度。頂部は切形で円形の臍がある。果皮表面には微細な網目模様が縦列する。

F　植物珪酸体分析

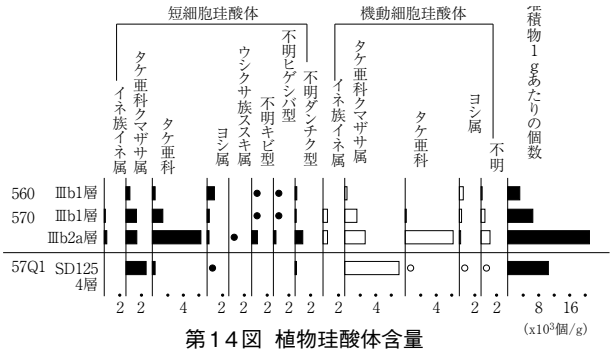
結果を第９表、第 14 図 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各試料の産状を述べる。

Ⅲ b1 層は、56 O グリッドと 57 O グリッドで植物珪酸体の産状や含量が異なり、56 O グリッドは植物珪酸体含量が 3000 個 /g であり、57 O グリッドよりも少ない。また、イネ属は、全く検出されず、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属等が認められ、特にヨシ属の産出が目立つ。一方、57 O グリッドでは、イネ属の短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が検出されるが、その含量は数百個 /g 程度である。クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属なども認められる。

Ⅲ b2a 層は、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、いずれも数百個 /g 程度である。この他に、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属なども認められる。

種　　類 試料番号	56O グリッド Ⅲ b1 層	57O グリッド Ⅲ b1 層	57O グリッド Ⅲ b2a 層	57Q1 グリッド SD125 4 層
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	0	143	330	0
タケ亜科クマザサ属	509	1,354	1,401	2,601
タケ亜科	363	1,354	6,263	359
ヨシ属	944	285	247	90
ウシクサ族ススキ属	0	0	82	0
不明キビ型	73	71	742	0
不明ヒゲシバ型	73	71	330	0
不明ダンチク型	218	143	989	179
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	0	570	577	0
タケ亜科クマザサ属	291	1,568	2,637	6,997
タケ亜科	0	143	6,181	90
ヨシ属	509	285	165	90
不明	145	499	1,154	90
合　　計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,179	3,422	10,384	3,229
イネ科葉身機動細胞珪酸体	944	3,065	10,713	7,266
総　計	3,123	6,487	21,097	10,495

第９表　植物珪酸体含量



第１４図 植物珪酸体含量

堆積物1ｇあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g未満の種類を示す。

SD125　４層（腐植層）は、イネ属が全く検出されない。クマザサ属の産出が目立ち、ヨシ属なども認められる。

5　考　　察

A　古　植　生

SR ２a の植物遺体層からは、花粉化石、種実遺体等が豊富に検出　された。木本類では、花粉化石ではハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属などが多く産出し、マツ属、スギ属、サワグルミ属、ブナ属、エノキ属－ムクノキ属、カエデ属、エゴノキ属、トネリコ属等と伴う。種実遺体では、ハンノキ属ハンノキ亜属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ムクノキ、クワ属、マタタビ属、アカメガシワ、カエデ属、トチノキ、ブドウ科、イイギリ、ミズキ、タラノキ、ツツジ科、エゴノキ属、ト

ネリコ属、ムラサキシキブ属、クサギ、タニウツギ属、ニワトコが検出された。

これらのうち、ハンノキ属（ハンノキ亜属を含む）やニレ属－ケヤキ属、サワグルミ属、ムクノキ、トチノキ、ミズキ、トネリコ属等は、河畔や低湿地などの適湿地を好む分類群であり、コナラ亜属は、ブナ属などとともに冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素である。本遺構の放射性炭素年代測定結果（SR 2　4層　木材）を考慮すると、約2100年前頃の遺跡周辺では、河川沿いなどにハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属などの湿地林や河畔林が分布し、後背の山地部や丘陵部などにコナラ亜属、ブナ属などを主体とする落葉広葉樹林が成立していたと推測される。落葉広葉樹林内では部分的にマツ属、スギ属などの針葉樹が林分を形成し、林縁部にはカエデ属、アカメガシワ、エゴノキ属などの高木類、タラノキ（ウコギ科）、タニウツギ属、ニワトコなどの低木類、マタタビ属、ブドウ科などの籐本類が生育していたことが推定される。

同様の植生は、高柳A遺跡（荒川町）の2460 ± 60BPを示す土層の花粉分析結果［株式会社古環境研究所1996］や昼塚遺跡・江添遺跡（胎内市）の花粉や大型植物化石を対象とした分析調査［パリノ・サーヴェイ株式会社2005c］に認められていることから、少なくとも約3700年前頃から同様の植生が分布していたと考えられる。また、検出された種実遺体分類群は、過去の本遺跡における調査成果［新山2003；吉川･吉川2005］と類似しており、特に、平成16年度調査区の古墳時代前期（4世紀中頃）と考えられる河川内堆積物より検出された種実遺体分類群［吉川･吉川2005］に類似している。

一方、草本類では、カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属などの花粉や、ミズバショウ属、サジオモダカ属などの水生植物の花粉が認められた。種実遺体ではミクリ属、ヘラオモダカ、カヤツリグサ科、カラムシ属、タデ属、ナデシコ科、トウゴクサバノオ、スミレ属、ウド、セリ科、サクラソウ科、トウバナ属、キク科が認められた。これらの多くは人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類であることから、調査区付近の草地などに生育していたと推測される。また、水生植物のミズバショウ属やミクリ属、ヘラオモダカ（サジオモダカ属）は、河川内や周辺の湿地などに生育していたものに由来すると考えられる。

SD125の植物珪酸体の産状に着目すると、周囲にはクマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属などのイネ科植物が生育していたことが窺われる。なお、多産したクマザサ属を含むタケ亜科は他のイネ科と比較して風化に強いことや、生産量の多いことが指摘されており［近藤1982；杉山・藤原1986］、他の種類よりも残留しやすいとされている。また、日本海側の多雪地域では、自然状態においてはブナを中心とした森林植生となり、ブナの林床はチシマザサ（クマザサ属の一種）が発達する［宮脇編著1985］。チシマザサは林床だけではなく、森林が失われた空間に侵入し、ササ林を作ることがあることから、クマザサ属は周辺の林分や林分付近の開けた場所に成立したササ林などから砕屑物と共に混入した可能性がある。

なお、古墳時代後期の遺構検出面とされるⅢb1層やその下位に相当するⅢb2a層においても、同様の植物珪酸体群集が検出されることから、当該期も同様の植生が認められた可能性がある。なお、56Oグリッドと57OグリッドのⅢb1層では植物珪酸体の産状が異なり、56Oグリッドではヨシ属の産出が目立った。ヨシ属が湿潤な場所に生育することから、56Oグリッドでは湿潤な状態にあった可能性があるが、この点については本地点の堆積環境と合せて再検討する必要がある。

B　植物利用状況

弥生時代中期の住居跡とされるSI 3、1号周溝遺構、SI 8からは、栽培植物のイネの胚乳と穎、アワ－ヒエの胚乳が検出された。このことから、当該期にはイネやアワ－ヒエが植物質食糧として存在し、こ

れらが利用されていたと推定される。また、全て炭化した状態であったことから、被熱の影響を受けたと考えられる。

ところで、本遺跡周辺では、反貫目遺跡や西川内南遺跡ではイネが確認され、六斗蒔遺跡ではイネやアワ－ヒエが確認されており［パリノ・サーヴェイ株式会社 2004，2005a，2005b］、これらはいずれも古墳時代前期と考えられる遺構から認められている。本遺跡では弥生時代中期と考えられる住居跡から、これらの植物質食糧となる種実が検出されたことから、本地域では当該期にはすでにイネやアワ－ヒエが存在し、利用されていたことが窺われる。

また、SR 2ａから検出された種実のうち、コナラ属コナラ亜属やトチノキなどの堅果類は、アク抜きを要するが食用･長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護されてきた有用植物である。さらに、ムクノキ、クワ属、マタタビ属、ブドウ科の一部は果実が食用可能である。これらの有用植物は、上述した栽培植物と共に本遺跡周辺で入手し、利用していた可能性がある。この他に、タラノキ、ウドや、エゴノキ属、カラムシ属、タデ属、セリ科、キク科やその他の種類にも、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種実以外の部位の利用形態が考えられ［青葉 1991］、今後種類の細分化が可能になれば、詳細な検討が可能となる。

また、同じく SR 2ａより出土した木材は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、トネリコ属、エノキ属であった。このうち、建築部材とされる木材に利用されたトネリコ属は、一般に重硬で強度が高いといった材質的特徴を有する。いずれの木材も、花粉化石及び種実遺体の産状から遺跡周辺に生育していたと推定されることから、恐らくこれらを入手し、利用したと考えられる。

一方、古墳時代後期の住居跡 SI 6のカマドからは、アワ－ヒエの炭化した胚乳が検出された。上述したように本遺跡周辺では古墳時代前期以降のイネやアワ－ヒエの利用が明らかとされており、当該期にもアワ－ヒエが植物質食糧として利用されていたと考えられる。

なお、古墳時代後期の遺構検出面である 57 Ｏグリッド Ⅲ b1 層やその下位に相当する土層の Ⅲ b2a 層からは、イネ属の植物珪酸体が数百個 /g 程度検出された。既存の研究によれば、稲作が行われた水田跡の土壌ではイネ属の機動細胞珪酸体が 5000 個 /g 程度検出されることが多く、安定した水田稲作が行われたと推定される［杉山 2000］。また､群馬県内の畦畔などが検出から水田と考えられる遺構を対象とした。

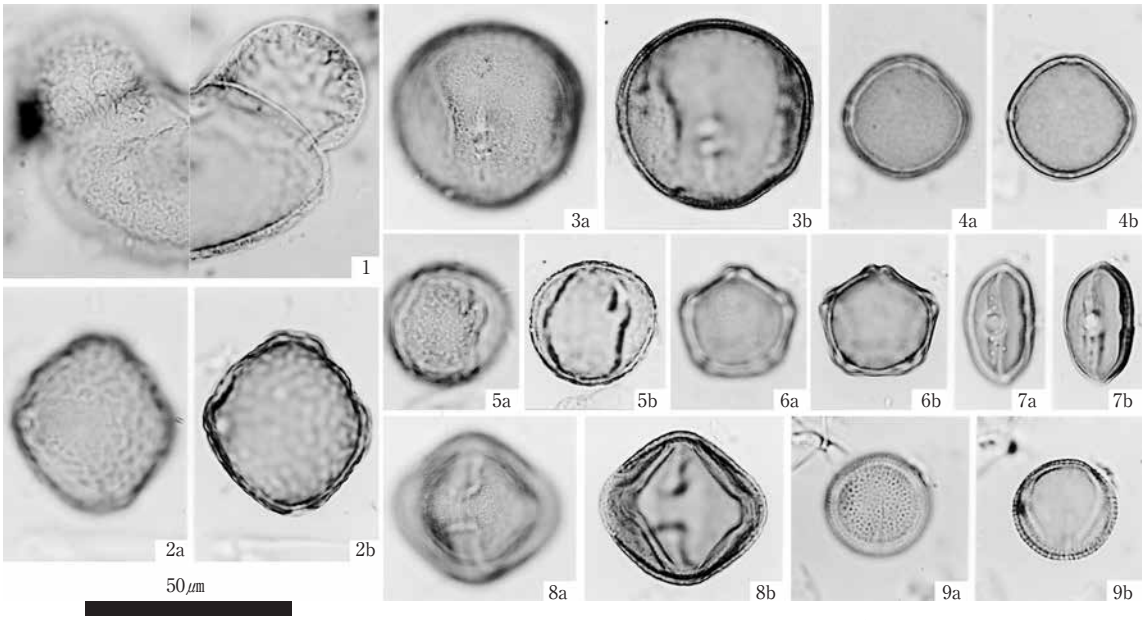
調査では、機動細胞珪酸体含量が 1000 個 /g 程度の事例もある［パリノ・サーヴェイ株式会社 2001，2002 など］。本分析結果は、これらの事例と比較しても少ないことや、試料の観察では植物の根に由来すると考えられる管状・糸根状の酸化鉄が発達しており、上位の耕作土等の影響が推測されることから、本地点での稲作等の栽培の可能性を支持することはできない。

また、掘立柱建物跡 SB107 の柱材は、落葉広葉樹のヤマグワに同定された。ヤマグワは、河道沿い等の低地に生育し、木材は重硬で強度および耐朽性が高いといった特徴を有する。なお、反貫目遺跡では、古墳時代前期の立木群が検出され、これらを対象とした調査が行われている。立木は河川跡北側の低地～微高地縁辺と考えられる地点から検出され、ハンノキ亜属やコナラ節、ヤマグワ、トネリコ属、コナラ節に同定されている［パリノ･サーヴェイ株式会社 2004］。したがって、当該期の古植生は不明であるが、本遺跡周辺の低地～微高地には、ハンノキ亜属やトネリコ属、コナラ節とともにヤマグワも生育しており、木材を入手・利用していた可能性がある。

C　内容物推定

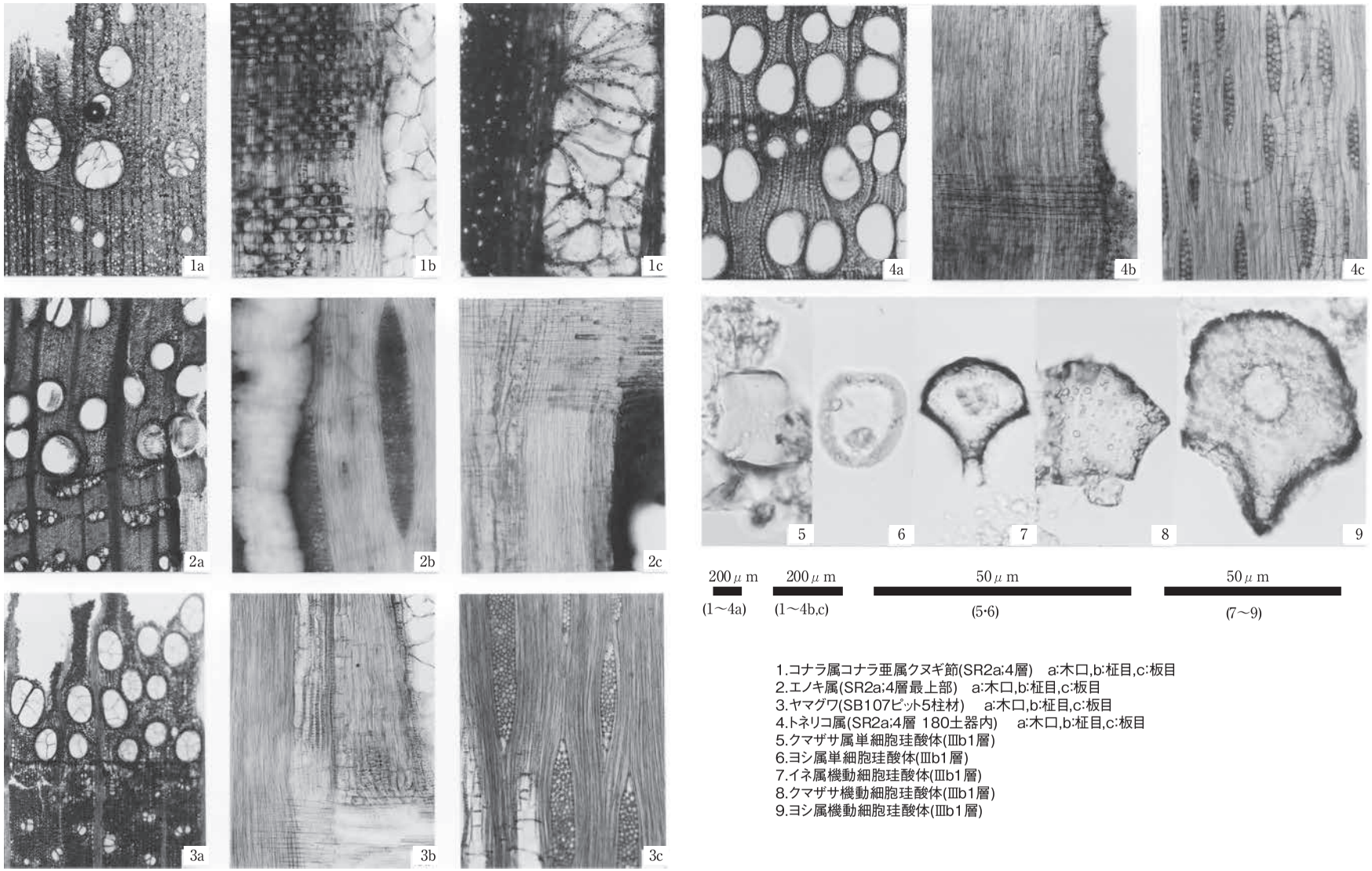
土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが［Bowen1983；Bolt・Bruggenwert1980；川崎ほか1991；天野ほか1991］、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0P_2O_5mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5P_2O_5mg/g［川崎ほか1991］という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では 6.0P_2O_5mg/g を越える場合が多い。

本分析試料では、１号周溝遺構周溝６層から天然賦存量を超えるリン酸が検出されたことから、何らかの形でリン酸が富化されていることが指摘される。覆土に残留する動物遺体に由来する成分が検出された可能性もあるが、植物遺体などに由来する可能性もある。特に、１号周溝遺構周溝６層試料の観察、焼土や炭化材が多く含まれていたことや、上述したように還元状況下におかれた経緯が予想されることから、リン酸富化の要因を一概に判断することはできない。なお引用文献は巻末にまとめた。



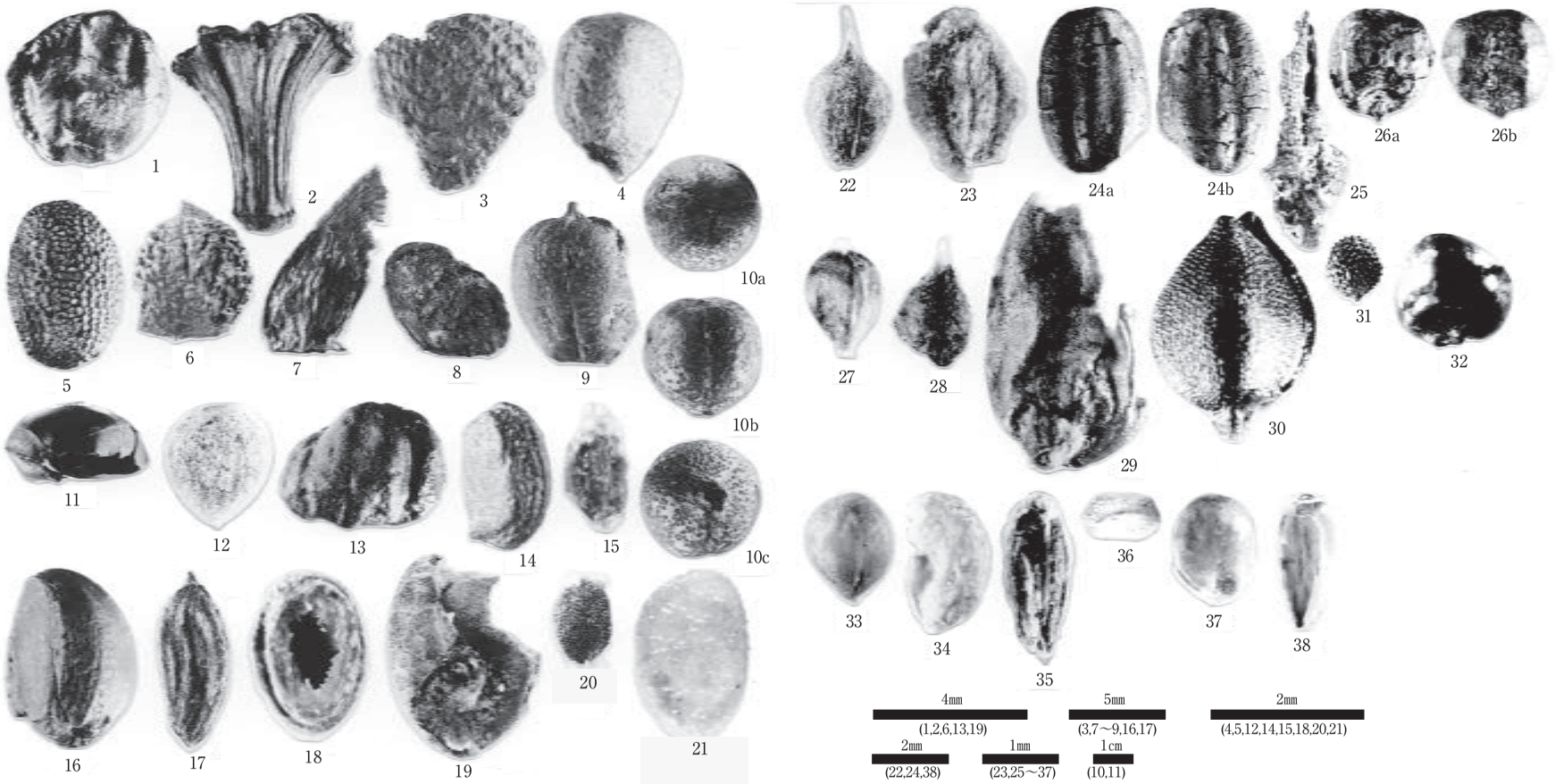
1．マツ属（SR2a；遺物遺体層 S1）　2．ニレ属ーケヤキ属 (SR2a；遺物遺体層 S1)　3．ブナ属（SR2a；遺物遺体層 S1）
4．エノキ属ームクノキ属 (SR2a；遺物遺体層 S1)　5．コナラ属コナラ亜属 (SR2a；遺物遺体層 S1)　6．ハンノキ属 (SR2a；遺物遺体層 S1)
7．トチノキ属 (SR2a；遺物遺体層 S1)　8．エゴノキ属 (SR2a；遺物遺体層 S1)　9．トネリコ属 (SR2a；遺物遺体層 S1

第15図　花粉化石



1.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(SR2a;4層)　a:木口,b:柾目,c:板目
2.エノキ属(SR2a;4層最上部)　a:木口,b:柾目,c:板目
3.ヤマグワ(SB107ピット5柱材)　a:木口,b:柾目,c:板目
4.トネリコ属(SR2a;4層 180土器内)　a:木口,b:柾目,c:板目
5.クマザサ属単細胞珪酸体(Ⅲb1層)
6.ヨシ属単細胞珪酸体(Ⅲb1層)
7.イネ属機動細胞珪酸体(Ⅲb1層)
8.クマザサ機動細胞珪酸体(Ⅲb1層)
9.ヨシ属機動細胞珪酸体(Ⅲb1層)

第16図　木材・植物珪酸体



1.ハンノキ属ハンノキ亜属 果実(SR2a;遺物遺体層 S1)
2.ハンノキ属 果鱗(SR2a;遺物遺体層 S3)
3.コナラ属コナラ亜属 殻斗(SR2a;遺物遺体層 S3)
4.クワ属 種子(SR2a;遺物遺体層 S3)
5.マタタビ属 種子(SR2a;遺物遺体層 S1)
6.アカメガシワ 種子(SR2a;遺物遺体層 S3)
7.カエデ属 果実(SR2a;遺物遺体層 S3)
8.カエデ属 種子(SR2a;遺物遺体層 S3)
9.トチノキ 幼果(SR2a;遺物遺体層 S1)
10.トチノキ属 果実(SR2a;遺物遺体層 S1)
11.トチノキ 種子(SR2a;遺物遺体層 S3)
12.イイギリ 種子(SR2a;遺物遺体層 S1)
13. ミズキ 核(SR2a;遺物遺体層 S3)
14.タラノキ 核(SR2a;遺物遺体層 S1)
15.ツツジ科 種子(SR2a;遺物遺体層 S1)
16.エゴノキ属 種子(SR2a;遺物遺体層 S3)
17. トネリコ属 果実(SR2a;遺物遺体層 S1)
18.ムラサキシキブ属 核(SR2a;遺物遺体層 S3)
19.クサギ 核(SR2a;遺物遺体層 S3)
20. タニウツギ属 種子(SR2a;遺物遺体層 S3)
21. ニワトコ 核(SR2a;遺物遺体層 S3)
22. ミクリ属(SR2a;遺物遺体層 S1)
23. ヘラオモダカ 果実(SR2a;遺物遺体層 S1)
24.イネ 胚乳(2号周溝遺構;1号土坑 1層炭化物)
25.イネ 穎(2号周溝遺構;1号土坑 1層炭化物)
26.アワーヒエ 胚乳(2号周溝遺構;1号土坑 1層炭化物)
27.カヤツリグサ科 果実(SR2a;遺物遺体層 S3)
28. カラムシ属 果実(SR2a;遺物遺体層 S1)
29.タデ属 果実(SR2a;遺物遺体層 S1)
30. タデ族 果実(SR2a;遺物遺体層 S1)
31.ナデシコ科 種子(SR2a;遺物遺体層 S1)
32.キケマン属(2号周溝遺構;1号土坑 1層炭化物)
34.ウド 核(SR2a;遺物遺体層 S3)
33.スミレ属 種子(SR2a;遺物遺体層 S1)
36.サクラソウ科 種子(SR2a;遺物遺体層 S1)
35.セリ科 果実(SR2a;遺物遺体層 S3)
37.トウバナ属 果実(SR2a;遺物遺体層 S3)
38.キク科 果実(SR2a;遺物遺体層 S3)

第17図　種実遺体

第Ⅶ章　ま　と　め

1　古墳時代の遺物

A　器種構成

本遺跡における古墳時代の遺物出土量は浅箱で24箱であり、検出された遺構数に比べて多量の遺物が出土している。その内訳は、包含層（15箱）、SR 2a（6箱）、各遺構（2箱）、撹乱（1箱）である。約6割が包含層、約3割がSR 2aで、包含層とSR 2aだけで約9割以上を占め、各遺構は1割弱である。この中で、まとまって一定量出土したのはSR 2、SK 1・2・116、SX119である。以下では、各遺構の器種構成について概観する。

SK 1・SK 2

SK 1とSK 2は甕のみ出土しており、他器種は出土していない。SK 1は甕G類1点（3）、甕Ａｂ類1点（4）の計2点出土し、SK 2aは甕Ａａ類1点（5）のみ出土している。両遺構ともに甕が100%である。

	甕	椀		高杯	甑	壺	手づくね土器	須恵器		計
		無	有					杯蓋	瓶	
No.1	5322g	929g	(14%)	14g	54g	19g	—	—		6338g
		142g	787g							
	(83%)	(16%)	(84%)	(1%)	(1%)	(1%)				
No.2	3263g	1192g	(23%)	—	—	42g	43g	134g	96g	4770g
		670g	522g							
	(68%)	(56%)	(44%)			(2%)	(2%)	(3%)	(2%)	
No.3	1411g	469g	(24%)	89g	—	—	—	—		1969g
		308g	161g							
	(72%)	(66%)	(34%)	(4%)						
No.4	4686g	1383g	(22%)	—	241g	9g	—	—		6319g
		1164g	211g							
	(74%)	(84%)	(16%)		(3%)	(1%)				
No.5	243g	201g	(39%)	—	75g	—	—	—		519g
		100g	101g							
	(47%)	(50%)	(50%)		(14%)					
No.6	2441g	274g	(10%)	—	—	—	—	—		2715g
		121g	153g							
	(90%)	(44%)	(56%)							
小計	17366g	4448g	(18%)	103g	370g	70g	43g	134g	96g	22630g
		2442g	1935g							
	(76%)	(54%)	(56%)	(1%)	(1%)	(1%)	(1%)	(1%)	(1%)	
52R	1568g	257g	(14%)	—	—	—	—	—		1825g
		153g	104g							
	(86%)	(60%)	(40%)							
53Q	14089g	4445g	(23%)	63g	—	—	—	杯		18603g
		2998g	1447g					6g		
	(76%)	(67%)	(33%)	(1%)				—		
53R	6479g	2002g	(23%)	102g	—	36g	—	—		8619g
		1076g	926g							
	(75%)	(54%)	(46%)	(1%)		(1%)				
小計	22136g	6704g	(23%)	165g	—	36g	—	—		29047g
		4227g	2477g							
	(75%)	(63%)	(37%)	(1%)		(1%)				
総合計	39502g	11152g	(21%)	268g	370g	106g	43g	140g	96g	51677g
		6669g	4483g							
	(76%)	(60%)	(40%)	(1%)	(1%)	(—)	(—)	(1%)	(—)	

第10表　遺物集中地点1重量比率表

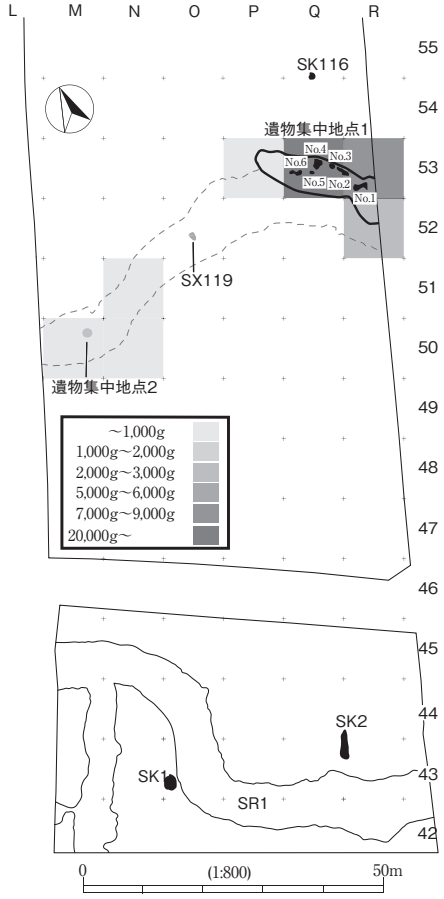
SK116

椀4点・甕2点が出土している。非掲載遺物は総破片数205点ある。椀は掲載遺物以外の個体は確認できない。甕は掲載遺物以外に2～3個体あると考えられるが、実測可能なものはない。椀はＢａ類（6）、Ｂｂ類（7）、Ｃａ類（8）、Ｃｂ類（9）、甕はＡｂ類(11)、Ｄａ類(10)である。椀は4点中1点が黒色処理を施したものである。椀と甕はほぼ同数出土している。

SX119

土師器と須恵器が共伴しており、土師器は椀・甑・鉢・壺・甕、須恵器は杯・甕が出土している。掲載遺物は10点あり、それ以外に非掲載遺物が総破片数279点ある。甕は掲載遺物の5点で、Ａａ類（77）、Ｂｂ類（79）、Ｃ類（76）、Ｅ類（78）、Ｆ類（80）である。椀は掲載遺物1点と非掲載遺物1点であり、掲載遺物はＫ類（73）で、非掲載遺物はＤ

類を確認でき、どちらも内面黒色処理を施す。甑は掲載遺物１点と非掲載遺物１点である。掲載遺物はＡａ類（75）で、非掲載遺物は口縁部を確認でき、75とは異なるものである。その他、壺Ａ類（74）、鉢（81）、須恵器は甕Ａ類（82）、非掲載遺物の杯がある。SX119では土師器椀２点・甑２点・鉢１点・壺１点・甕５点、須恵器杯１点・甕１点を確認できる。SK １・２・116とは異なり、器種が多種にわたる。その中で、甕の割合が多い。



第18図　遺物集中地点と重量分布図

SR ２a

SR ２a は調査区を東西に蛇行して検出され、層位は１・２層が古墳時代、３～５層が弥生時代に相当する。52・53 Q・Ｒグリッドでは河川跡の北側肩部分に列をなして多量の遺物が出土した。それらは特に６か所の集中か所があり、それぞれを No. １～６として取り上げた。ここでは、これらの集中か所がどういった意味をもつのか、器種構成等から検討していく。

器種構成は、遺物の重量をもとに検討を進める。重量を選択した理由は、出土遺物のほとんどが器種を判別できても細分類までは判別できない細片であるためである。SR ２a から出土した遺物についてグリッド・地点別に総重量と器種別の重量（第18図・第10表）を求めた。第18図では1,000 g を基準としてトーンを変えて表示した。No. １～６地点とグリッド出土土器の重量は別にしてカウントしている。第18図をみると、No. １～６地点のあるグリッド・52 O・50 Mグリッドの３か所に遺物集中範囲を確認できる。52 Oグリッドから出土している遺物はSX119に限られており、その他では出土していない。50 Mグリッドでは50 M 18・19グリッドに遺物の分布が集中している。ここは甕２点（56・60）が出土したところで、遺物は甕２点の破片がその大半を占める。遺物が包含されていた覆土は No. １～６地点とSX119の覆土と似ていて、炭化物を多量に含んでおり、同様の性格を持っているものと考えられ、第18図では50 Mグリッドの遺物集中地点を遺物集中地点２と表示した。

次に、最も出土量の多かったのは、No. １～６地点のあるグリッドで、53 Qグリッドが24,243 g と群を抜いている。No. １～６地点と集中地点のあるグリッドでは器種構成の重量比においてほぼ同じ様相を示している。甕が７～９割を占め、椀が残りの１～３割で、その他高杯・甑・壺・手づくね土器が１割にも満たない程度である。No. ２では須恵器の杯Ｈ蓋１点と甕１点が出土している。しかし、椀の黒色処理有無の比率ではその分布に異なった様相がみられた。第10表では各地点とグリッド別を表示した。黒色処理の無：有の比率では No. １が２：８、No. ２が６：４、No. ３が７：３、No. ４が８：２、No. ５が５：５、No. ６が４：６となる。これらの結果から、No. ２～６は黒色処理の比率が同等もしくはそれ以下で、逆に No. １は黒色処理の比率が高い傾向がみられる。この傾向より、No. １・No. ６（１群）、No. ２・No. ５（２群）、No. ３・No. ４（３群）の３群に分けることができる。そして、黒色処理の割合により、３群→２群→１群といった変遷の傾向が想定できる。しかし、遺物集中範囲の周辺は撹乱を受け、その影響により遺

物が動いているものと推測され、良好な一括資料とすることはできない。よって、次項の時期設定ではこの変遷を基にしつつも、個々の土器については形態等により、取捨選択している。No. 1～6は個々を集中か所とすることはできないが、遺物の出土状況から廃棄や埋納によって形成された可能性も指摘でき、ここをひとつの遺物集中か所と考え、第20図には遺物集中地点1とし、実線で表示した。

結果として、遺物集中地点1はSR 2aの埋没後、何度かの廃棄もしくは埋納が行われたと推測される。何度かというのは前述した黒色処理の割合により、遺物集中地点1を3群に分かれると推定したということで、少なくとも3回以上の廃棄もしくは埋納が行われ、おおよそ3群→2群→1群の順で行われた可能性を示唆している。なお、廃棄もしくは埋納については項を改めて検討する。

以上、器種構成を中心に検討を行ってきたが、器種構成の中心は、SK 1・2・遺物集中地点2が甕、SK116は甕・椀、SX119と遺物集中地点1は甕と椀であるが、その他に高杯・甑・壺・手づくね土器・須恵器が含まれる。この中に、遺物集中地点1を含めていないのは、遺物集中地点1は廃棄もしくは埋納を3回以上行っていると推測しており、3群→2群→1群もおおよその変遷であることから、器種構成をつかむことは困難であると考えたからである。器種構成はSK 1・2・遺物集中地点2→SK116→SX119の順で、器種構成のバラエティが増すことを確認できた。

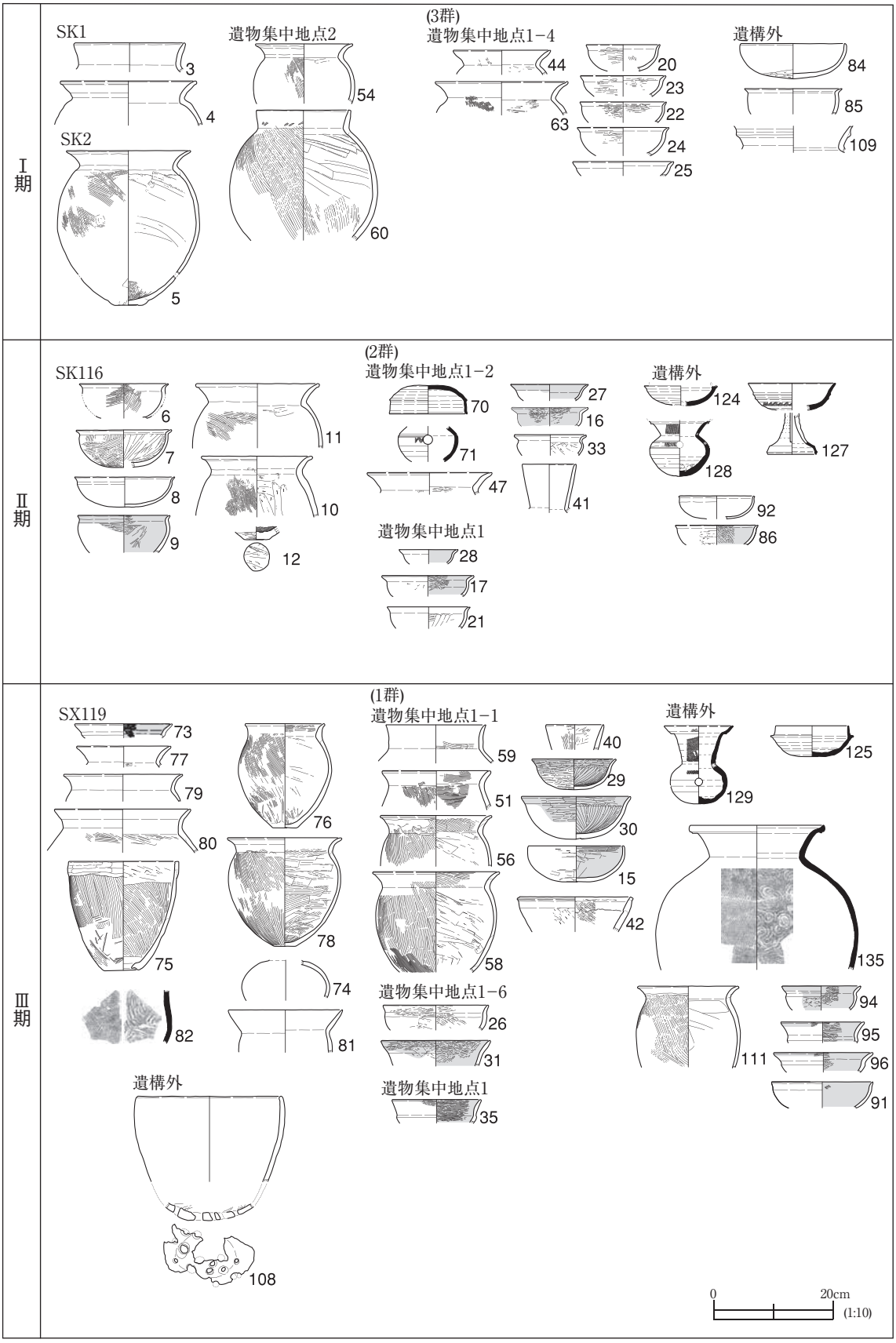
B　時期設定（第11表・第19図）

時期を設定するにあたっては、川村浩司の編年（以下、川村編年とする）［川村2000］を軸として、品田高志の編年（以下、品田編年とする）［品田1989］、相田泰臣の編年（以下、相田編年とする）［相田2004］、田嶋明人の編年（以下、田嶋編年とする）［田嶋1986・1987］を参考にした。須恵器は田辺昭三の編年（以下、田辺編年とする）［田辺1966・1981］を参考にする。

本遺跡の古墳時代の遺物は、中期後半～後期前半を中心とし、前期～中期前半の遺物も出土しているが、その量は少ない。時期設定における主要な遺物は出土量の多い椀・甕を中心とした。遺構内のものを主体として、遺構外・遺物集中地点1は補助的に扱う。よって、本報告では中期後半～後期前半について時期設定を行った。本遺跡の出土遺物の中心である時期は、川村編年の9～14段階まで確認でき、この間にⅠ～Ⅲ期の時期区分を設定した。第11表では本遺跡の所在する阿賀北地域の遺跡と県内の主要遺跡も合わせて掲載し、各遺跡との併行関係を示した。また、既存の編年案との対応も表中に掲載した。品田編年の列の(　)内は川村編年による品田編年との対比を引用したもので［川村2000前掲］、［品田1989］とは異なっており、両氏の対比案を掲載した。以下では時期ごとに概要を記す。

時期	道端遺跡		阿賀北の遺跡	県内主要遺跡	川村編年（2000）	品田編年（1989）	相田編年（2004）	田嶋編年（1986・1987）	田辺編年（1966・1981）
Ⅰ	遺物集中地点2 SK1　SK2	遺物集中地点1 3群	金曲	戸口B　北割 五分一稲場 月岡	9段階 ～11段階	Ⅱ－1 （Ⅲ－1）		13群	TK216 ～TK23
Ⅱ	SK116	包含層　2群	六百地	小丸山　笹山前 南原	12段階 ～13段階	Ⅱ－2 （Ⅲ－2）	Ⅰ期	14群	TK47 ～MT15
Ⅲ	SX119	1群	高田　六百地 千作り 屋敷2次 浦田山2号墳	高塩B　千刈 大久保 三王山5号墳	13段階 ～14段階	Ⅲ－1 （Ⅳ－1）	Ⅱ期	15群	MT15 ～TK10

第11表　古墳時代中・後期における道端遺跡の変遷と編年対応表



第19図　古墳時代中・後期における道端遺跡出土土器の変遷

Ⅰ　　期

前期からみられる器種は一部残存するのみとなり、器種は形骸化している。本遺跡では当時期に帰属する遺構からは甕のみで、椀の確実な出土を確認できないが、当時期の甕が川村編年９～11段階の資料と類似していること、９段階以降確実に椀を確認できることから、本来は椀が当時期に存在すると想定する［川村2000前掲］。よって、当時期は川村編年の９～11段階と併行させ、椀が確実に確認されるが、黒色処理を施さず、まだ一般的ではない時期とし、続くⅡ期への準備段階と想定する。

Ⅰ期の基準となる土器はSK １・２・遺物集中地点２出土土器である。SK １・遺物集中地点２は同様の土器組成で、甕Ａ類とＧ類で構成される。SK ２は甕１点で、Ａ類である。その他、遺物集中地点１ではおおよそ３群がこの時期に相当する。第19図には遺物集中地点１－４の資料を掲載した。Ⅰ期の特徴は次のとおりである。甕は胴部に最大径があり、胴部の張りが前期からみられる甕より弱くなる。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は丸形がやや優勢であるが、面取りも一定量確認できる。椀は遺構内出土の資料を確認できないが、川村編年では本報告の分類Ａ類・Ｂ類・Ｃ類を確認できることから［川村2000前掲］、当時期も同様であると考えた。椀は口縁部が弱く外反し、黒色処理を施されないことが特徴としてあげられる。109は二重口縁が形骸化したもので、この時期以降みられなくなると推定する。本遺跡ではⅠ期の須恵器を確認していないが、県内では大角地遺跡［青梅町教委1981］・五分一稲場遺跡［戸根1978］からTK208併行期の須恵器が確認されており、須恵器導入期とされている［川村2000；品田1989］。本報告でも県内の須恵器導入期を当時期とし、本遺跡での須恵器が確実に確認できるのはやや遅れてⅡ期となる。神林村金曲遺跡［田辺ほか2002b］では椀に黒色処理を施しておらず、須恵器は黒色処理とともに確認できることからも、「椀」→「椀に黒色処理を施す・須恵器」といった変遷を想定できる。黒色処理は富山県境野新遺跡［藤田1974］において田嶋編年の12～13群併行期に確認されている。当時期は黒色処理導入の動向により、２段階に分けられる可能性があり、また、川村編年ではこの時期を９～11段階の３段階に分けられているが、本遺跡では資料が不足しているため、細分を行なわず、１時期とした。

Ⅱ　　期

本遺跡において須恵器が確認でき、椀に黒色処理を施す時期。当時期をもって後期的土器様式の成立と考える。椀が遺構内から確実に確認でき、SK116からは椀４点・甕２点が出土している。遺物は１・２層から出土し、層位では明確に分けることはできず、出土状況から一括遺物と判断した。しかし、甕（10･11）では10が11より新しい様相を示している。10は頸部の屈曲が弱く、器壁は厚い。椀では古い様相を示している中に、黒色処理を施すもの（9）が含まれている。このことは、SK116が２時期に分かれる可能性を示唆しているが、ここでは出土状況から一括遺物として取り扱う。その他、遺物集中地点１ではおおよそ２群が当時期に相当する。第19図には遺物集中地点１－２出土土器を掲載した。また、遺物集中地点１の中には、遺物番号を付さずにグリッド単位で取り上げたものよりも、その中から当時期に相当すると考えられる資料も合わせて掲載した。

当時期の特徴は次のとおりである。甕は最大径が胴部にあるが、胴部の張りがより弱くなり、長胴化傾向にある。頸部はくの字状に屈曲するが、屈曲は弱くなる。口縁端部は丸形が大半を占めるが、面取りも少量ながら確認できる。口縁部はナデが粗くなり、ハケメが一部残存する。椀は内面に黒色処理を施すものを確認できるが、その量は少ない。種類は豊富になり、比較的小型のものが多くみられる。33と類似するものが福島県佐平林遺跡［福島県教委1978］から出土しており、報告ではTK47併行期とされている。

遺物集中地点１－２では小型丸底壺（41）が出土しており、この器種は前期からみられるものであるが、屋敷遺跡２次［水澤ほか 2004］の 28 号遺構から小型丸底壺が後期の遺物と共伴しており、報告では一括遺物としている。よって、報告においても、小型丸底壺が後期までみられると推定し、41 をこの時期のものと判断した。須恵器は TK47 と MT15 の両方の型式を合わせもつもので、TK47 ～ MT15 併行期とした。遺物集中地点１－２では杯Ｈ蓋（70）・瑳（71）が出土しており、形態等からも当時期に相当するもので、遺物集中地点１の２群がおおよそ当時期に相当するということと一致する。杯Ｈ身はヘラケズリが丁寧に施され、口径はやや小さい。杯Ｈ蓋の稜はやや明瞭である。高杯は脚部がやや長く、３方に透かしがある。口縁部はやや開き気味となる。瑳は頸部が短く、体部は肩の張った形状を呈する。孔は中央よりやや上部にある。

Ⅲ　　期

椀の多様化と黒色処理を施す土器の最盛期に相当する［品田 1989］。当時期はⅡ期で成立した土器様式が展開していく段階であると想定する。本遺跡では SX119 出土土器を基準とする。椀１点･甑１点･壺１点･鉢１点・甕６点・須恵器甕１点で、本遺跡では土師器と須恵器が共伴する唯一の遺構である。SX119 は SK116 と同様で、出土状況から一括遺物と判断した。73 は椀Ｋ類で、須恵器模倣と考えられ、当時期をもって須恵器模倣の土師器を確実に確認できる。また、甑は当時期から確実に確認でき、単孔・多孔がある。108 は遺構外であるが、SX119 と同様の 52 O 12 グリッドから出土しており、SX119 と関連するものと推定される。82 は胴部片であるが、外面の調整痕が 135 と類似していることから、135 と類似するものと推定される。その他、遺物集中地点１ではおおよそ１群が当時期に相当する。第21図には遺物出土地点１－１・６出土土器を掲載した。また、遺物集中地点１の番号のない資料も合わせて掲載した。

当時期の特徴は次のとおりである。甕は最大径が胴部にあるが、口径とほぼ同様になり、より長胴化が顕著となる。頸部は湾曲化する。口縁部はナデが粗くなり、ハケメを残す割合が高くなる。椀はＪ類・Ｋ類といった須恵器模倣と考えられるものが増加し、合わせて黒色処理を施したものと大型のものが増加する。須恵器は MT15 と TK10 の両方の特徴が見られ、MT15 ～ TK10 併行期とした。杯Ｈ身はヘラケズリが粗くなり、底部はヘラ切りのまま未調整である。口径はやや大きく、口縁端部は丸くおさめる。瑳は頸部が長くなり、体部は扁平な球状を呈する。孔はほぼ中央に穿つ。129 は口縁部・頸部・体部の３ヵ所に波状文を施すもので、県内ではあまり類例はないが、山形県では多数確認されている［小野 1980］。135 は保内三王山５号墳出土のものと類似している［荒木ほか 1989］。第 11 表では高塩Ｂ遺跡［坂井 1983］を当時期に含めているが、高塩Ｂ遺跡でみられるような椀を確認できず、高塩Ｂ遺跡よりやや古く位置づけられる可能性がある。

以上、本遺跡における時期設定を行ってきたが、既存の編年との対応により、土器変遷の大枠を把握することができたのではないかと思う。器種構成では、SK １・２・遺物集中地点２→ SK116 → SX119 の順で器種が増加していることを確認し、時期設定を行った結果、器種の増加傾向がほぼ土器の変遷と一致することを確認できた。

本遺跡の成果としては、「黒色処理を施した土師器椀と須恵器の導入期」「中期～後期への移行期」に相当する資料を提供できたことがあげられる。黒色処理については昨年度調査した道端遺跡において古墳時代前期の鉢などに多く確認でき、もともとこの地域で持っていた技術であると推定できる。黒色処理の技術は中期になると衰退し、須恵器の導入と共に盛行し、椀・高杯に施される。本遺跡では黒色処理を施した椀と須恵器が同時に出現していることから、黒色処理と須恵器との関連性が示唆される。

C　遺構の性格

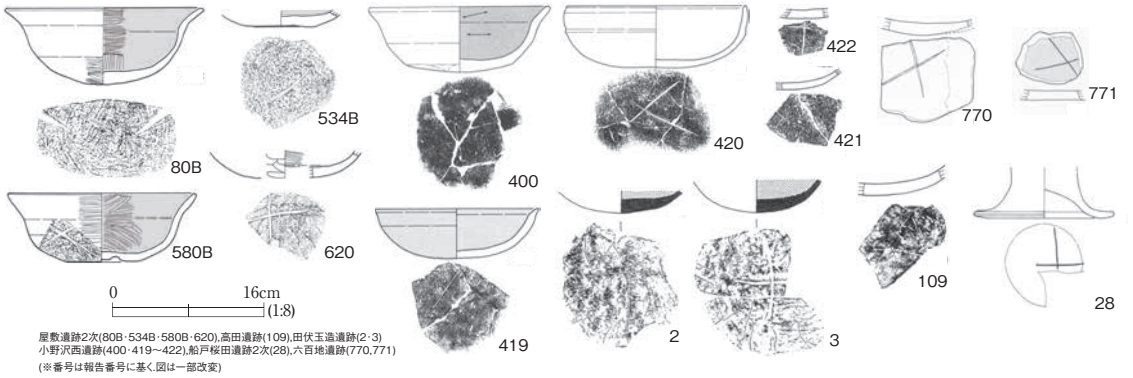
古墳時代の遺構が遺物の出土量に対して少ないことは前述したとおりである。その中で、注目される遺構は土器がまとまって出土したところで、SK １・２・116・SX119・遺物集中地点１・２がある。ここでは各遺構の性格についてみていくこととする。

建物跡はSI ６・SB107のみで、遺物が集中するまとまりは６か所ある（第18図）。このことは何を意味しているのだろうか。遺物が出土していることから、少なくとも人が近くに居住していたことは推測できる。集落がどこであるかは今後の調査に期待するとして、本遺跡は集落の端もしくは集落から離れたところに位置していると想定できる。この想定に基くと、遺物が集中するまとまりの性格は、日常生活で使用したものの廃棄場所と、もうひとつは祭祀に伴う埋納の２つの見解がある。各遺構に共通している点 は、ほぼ１個体分残存する土器が多い点、覆土に炭化物を多量に含んでいる点、遺物のそばには自然木を確認している点である。炭化物を多量に含んでいる点では、近くで火を焚き、使用しなくなった土器といっしょに廃棄・埋納したと考えられる。SK116・土器集中地点１では大きな炭化した木材が原型を留めて出土していることからもそのことが窺われる。以上の見解から、これらの遺構は、本遺跡周辺の集落からこの地に訪れて、木の近くで祭祀を行い、そこで使用したものを埋納したと想定し、ひとつの見解としたい。埋納の変遷はSK １・２・遺物集中地点２→SK116→SX119であると推測される。

D　ヘラ記号「×」のある土器

最後に、１点ではあるが、椀の底部外面にヘラ記号「×」を確認できた資料を紹介し、若干の考察を述べていくこととする。本遺跡では遺物集中地点１－No. ２より椀の底部外面に「×」印を刻んだものが１点確認できた。県内での類例（第20図）は屋敷遺跡２次［水澤ほか2004］・船戸桜田遺跡２次・高田遺跡［田辺1990］・六百地遺跡［田辺ほか2002］・小野沢西遺跡［土橋2004］・田伏玉作遺跡［関1972］をあげることができる。すべて道端Ⅲ期に帰属し、おおよそ６世紀前半に位置づけられる。ヘラ記号は須恵器において窯・工人の記号などと考えられているが、それでは、ヘラ記号が土師器に確認できるということはどういった意味をもつのだろうか。まず、各遺跡から出土したものをみていく。

本遺跡のものは内面に黒色処理を施すもので、全体の形態は不明である。田伏玉作遺跡では２点確認でき、どちらも内面に黒色処理を施すもので、丸底の底部に「×」印を確認できる。底部のみで全体を把握できないが、他の報告遺物から椀と推定できる。高田遺跡では１点確認でき、黒色処理は施さず、底部外



第20図　新潟県におけるヘラ記号のある土師器

面に「×」印を確認できる。屋敷遺跡２次では４点確認でき、そのうち２点は全体を確認できるものである。80 Ｂ・580 Ｂは道端分類のＤｂ類で、80 Ｂは底部外面、580 Ｂは体部外面に「×」印を確認できる。残りの２点は内面に黒色処理を施さないもので、底部片である。いずれも底部外面に「×」印を確認できる。六百地遺跡は２点確認でき、どちらも底部片である。770 は黒色処理を施さず、底部外面に「×」印を確認できる。771 は内面に黒色処理を施し、底部内面に「×」印を確認できる。小野沢西遺跡は５点確認でき、そのうち３点は全体を確認できるものである。400 は道端分類のＤｂ類、419 はＥｂ類、420 は道端分類にはないもので、口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部はやや内湾するタイプである。ここでは便宜的にＸ類としておく。残りの２点は内面に黒色処理を施さないもので、底部片である。いずれも底部外面に「×」印を確認できる。船戸桜田遺跡２次は１点確認でき、短脚の高杯脚部内面に「×」印を確認できる。

以上、各土器の共通点は、船戸桜田遺跡２次を除いてすべて椀であり、現在確認できる限りでは、器種が椀と高杯に限られていることが分かる。また、ヘラ記号を確認できる部位は底部外面がほとんどであるが、屋敷遺跡２次の 580 Ｂは体部外面に、また、六百地遺跡の 771 は底部内面に確認されている。屋敷遺跡２次・小野沢西遺跡では器形を確認でき、Ｄｂ類３点、Ｅｂ類１点、Ｘ類１点と３タイプにヘラ記号を確認できる。現在のところ、黒色処理を施したものに多く確認できる傾向にはあるが、黒色処理を施さないものにも確認でき、多種にわたって「×」印を確認できると想定する。また、６世紀前半は、県内において須恵器が多くの遺跡で確認できる時期であり、類例の遺跡からも須恵器が出土している。ヘラ記号が須恵器において多くみられることも合わせ、須恵器と黒色処理された土師器椀が極めて密接な関係にあることを指摘しておきたい。

２　弥生時代の遺構と遺物

Ａ　低地の発掘調査の問題点と自然科学分析の成果について

本遺跡の景観・往時の住民の選地の仕方・包含層別の遺構群については第Ⅳ章２節で述べたが、ここでは自然科学分析の結果を踏まえ、再度南区の遺構群及び北区の包含層別の遺構群に言及しつつ、遺構周辺の景観・調査の仕方・発掘所見と照合しながら現地調査担当者の視点からいくつかの問題点について具体的に述べてみたい。

Ⅲ章・Ⅳ章で述べたように本発掘調査においては、南区と北区によって基本土層・包含層の堆積状況及び遺構の検出状況が若干異なっている。

南区で検出された弥生時代の主な遺構はSI １・３、SK ４（図版９・10・20・58 ～ 60 参照）であり、この地区では包含層の存在を確認できなかった。いずれも遺構よりも新しい時期に形成された河川 SR １によって切られ、撹乱を受けていることがわかっている。SR １の直下にはガツボ層（植物腐食土層）が確認されているが、南区の三つの遺構は、このガツボ層の上に堆積したⅢ b3 層、Ⅳ層の掘削中に検出されたものである。これらの発掘所見から、本遺構群は比較的周囲の環境が安定した時期に、小河川の自然堤防上に築造されたものと推察できる。調査方法は平面的な確認に加えて全体の平面形を損なわない程度に、可能な限りのサブトレンチを入れつつ断面を観察しながら立ちあがりを探し、切り合いの有無を検討した。その結果遺構はすべて５～ 10cm の浅い窪みであり、かろうじて竪穴建物として認定することができた。周溝は検出されず柱穴の規模も数も不十分であったが、SI １・３からは北陸系櫛描文系（小松系）の壺（図版 33 － 138 ～ 140）が出土しており、小松期の平地式建物には周溝を伴う例が多いということも、

第21図　包含層（H1層-H2層-H3層）別遺構分布図

これらの遺構を竪穴建物と判断した少なからぬ根拠となっている。なお、自然科学分析の種実遺体分析によってSI３の炉と考えられる炭化物集中か所から、イネ･アワ･ヒエが炭化した状態で検出されたことは、当時の食料利用を明らかにする上で貴重な分析結果と言える。

北区では、最終的に弥生時代中期と考えられる三枚の包含層（Ｈ１～Ｈ３層）を認定したが、調査中に最も判断に苦慮したのは、これらの包含層が平地式あるいは竪穴建物跡や周溝遺構群の覆土である可能性

についてであった。それはまず第一に第21図に見られるようにこれらの遺構群が調査区東側に偏在し、これらの包含層も遺構群の集中区にしか観察されなかったこと、第二にこの遺構群が南区と同様非常に浅い掘り込みを持っている可能性があり、調査者が立ち上がりをみのがしてしまう可能性があること、第三に周辺の河川（SR ２aとSR ４が同じ河川ならばこれらの遺構群は河川の西岸の微高地にあることになる）の増水時の冠水により遺構の上に土砂が流入していることに加えて、各遺構間で激しく重複していることである。調査は住居の場合なるべく主軸となる部分、つまり炉があれば炉の中軸線に沿ってサブトレンチを入れ、ない遺構の場合は、遺物の集中する領域の中心にサブトレンチを入れ、断面を観察し周溝を検出する方法をとった。北区の遺構は、幸いにもすべて周溝を有していたため、なんとかその領域を決定することができ、主な遺物も覆土内遺物の可能性を考慮して、単に包含層内遺物として取り上げるだけでなく、各遺構直上の遺物として区別することができた。率直に言えば、平面確認が可能であるとは思えないほどの難度を持った遺構群であった。だが、どの調査地でも低地の調査は常にこうした遺構との格闘であろう。調査者は、あらゆる可能性を考慮しつつ、諦めず調査を続ける必要がある。及川は、弥生時代前期・中期の遺構調査に言及して「編年の基準となる資料のほとんどが、墓跡や土坑資料、包含層資料からなり、住居跡資料が少ないのは、調査者に住居跡と言えば深い掘り方の竪穴建物であるという思い込みがあることによる」［及川 2002］と調査者の思い込みからくる遺構の見逃しについて、厳しく指摘している。本調査においても当初そういう思い込みが、私たち調査者の目を曇らせていたことは否定できない。考古学研究には、なにより確かな資料の蓄積が必要であるが、確実に遺構であると各調査者が明確に認定できるものだけを調査対象としていけば、特に低地の調査では、重要な見落としをしてしまうという認識を新たにした。

次に包含層直下の遺構群と自然科学分析結果及びそれにかかわる問題点をあげてみる。包含層直下で検出した遺構を第21図に色分けして掲載した。Ｈ１層とした主な遺構は、SI ９～12・15、SK126、SX117と周辺のピット群などである。SD122・125・127・129の各溝は、検出状況からその廃絶時期をＨ１層の遺構が機能していた時期と考えたが、Ｈ２・Ｈ３層の各遺構が機能していた時期にもこれらの溝が開口しており、Ｈ１層の時期と同様に居住域を区画する溝として機能していた可能性もある。溝は、同じ場所でなんども浚われて利用されるからである。Ｈ２層直下で検出された主な遺構は、SI ８･14、１号周溝遺構、SK134である。Ｈ３層直下で検出された主な遺構はSI13、２～４号周溝遺構である。

北区ではAMS放射線炭素年代測定をＨ１層に属するSI11の炉、Ｈ２層に属するSI ８の炉の炭化物、SR ２a－４層出土の建築部材と小松期の完形甕（図版35－180）の中に入っていた炭化材の４点について行った。各資料はσ(確率68%)でSI11がBC357～194、SI ８がBC349～112、SR ２－４層出土の建築部材がBC340～93、甕内の炭化材がBC160～２という年代幅を示し、２σ（確率95%）の相対比の高いものでは、SI11がBC383～160（相対比98.2%）、SI ８がBC234～85（相対比67.1%）、SR ２aの建築部材がBC214～46（相対比82.5%）甕内の炭化材が；BC186～AD26（相対比99.6%）という年代幅を示した。この資料の解釈については、資料の履歴が明確で肉眼で観察できる大きな個体の数値のほうが信頼するに足る、という分析者の意見がある。それは資料の選択の段階で、より伐採年代に近い部分を採取することが可能だからである。具体的に述べれば、炉の中の材は、複数の伐採年代を持つ材の、どの個体を選んだかという偶然が生み出すあいまいさに加えて、樹木のどの部分なのかということが判断不能であるため、たとえば柱穴に遺存する柱根のような丸太材に比べれば、相対的にあいまいな資料とならざるを得ないということである。発芽して1000年後に伐採された樹木の幹が資料に混入していた場合、芯の

部分と表皮に近い部分では、極端な言い方をすると約1000年の年代差を生じるわけである。その意味で当該資料のうち、相対的に信頼するに足りるのは、肉眼で観察可能な大きな個体つまり履歴のより明確な、SR 2a－4層出土の建築部材と甕の中の炭化材である。これら二つの資料の示す最大年代幅は、σ；2σでBC340～2；BC214～AD26である。よって確率95%の2σの資料を合わせたBC214～AD26という最大年代幅のどこかに、北区の遺構群が機能した年代が重なる部分を持つ可能性は高いと言えよう。ここでの問題点は、調査段階での資料選択の重要さである。より良い資料を選択するためには、調査者が分析者であることが最も望ましいが、そうでない場合は、調査者が自然科学分析の各項目に対する理解を深めることが肝要で、このことを以後の課題としたい。

種実分析においては、SI 8の炉、1号周溝遺構周溝炭化物層から炭化したイネ・アワ・ヒエが、相当数検出された。南区同様北区においても食料利用について貴重な情報が得られた。本遺跡では、大型石包丁を含む収穫具としての直縁刃石器、籾殻圧痕の残る土器片（図版36・82－206）が出土しており、上記分析結果はこれらの出土遺物と合わせて、この時代の阿賀野川以北における稲作を含めたこれらの穀物栽培を証明する極めて重要な資料と言える。

土壌理化学分析においては、対象資料の2号周溝遺構1号土坑、1号周溝遺構周溝の覆土において自然状態より15%以上も多い腐植含量が認められた。このことは、覆土直上で土器集中や管玉の出土した2号周溝1号土坑に墓坑の可能性を示唆する。また1号周溝遺構のサンプル採取場所である周溝部は、そこだけ幅も深さもあり、遺体などの埋葬部とも考えられるが、検出された腐植が植物遺体などに由来する可能性もあり、分析結果から墓坑とは断定できない。

植物珪酸体分析においては、SD122・125・127～129によって区画された範囲に、水田などの生産域がある可能性を考慮し分析を試みたが、この場所における水田耕作の可能性は低いことが判明した。ただ当該時代の表土にあたるⅢb1層、Ⅲb2a層においてタケ亜科クマザサ属、タケ亜科、ヨシ属の順に産出が多く、これらのことから周囲にヨシなどの生えた湿地があるクマザサなどの繁茂する河川の自然堤防上を切り開いて、平地式建物や竪穴建物を築造し、人々が生活を営んでいるという往時の風景を思い描くことも可能である。

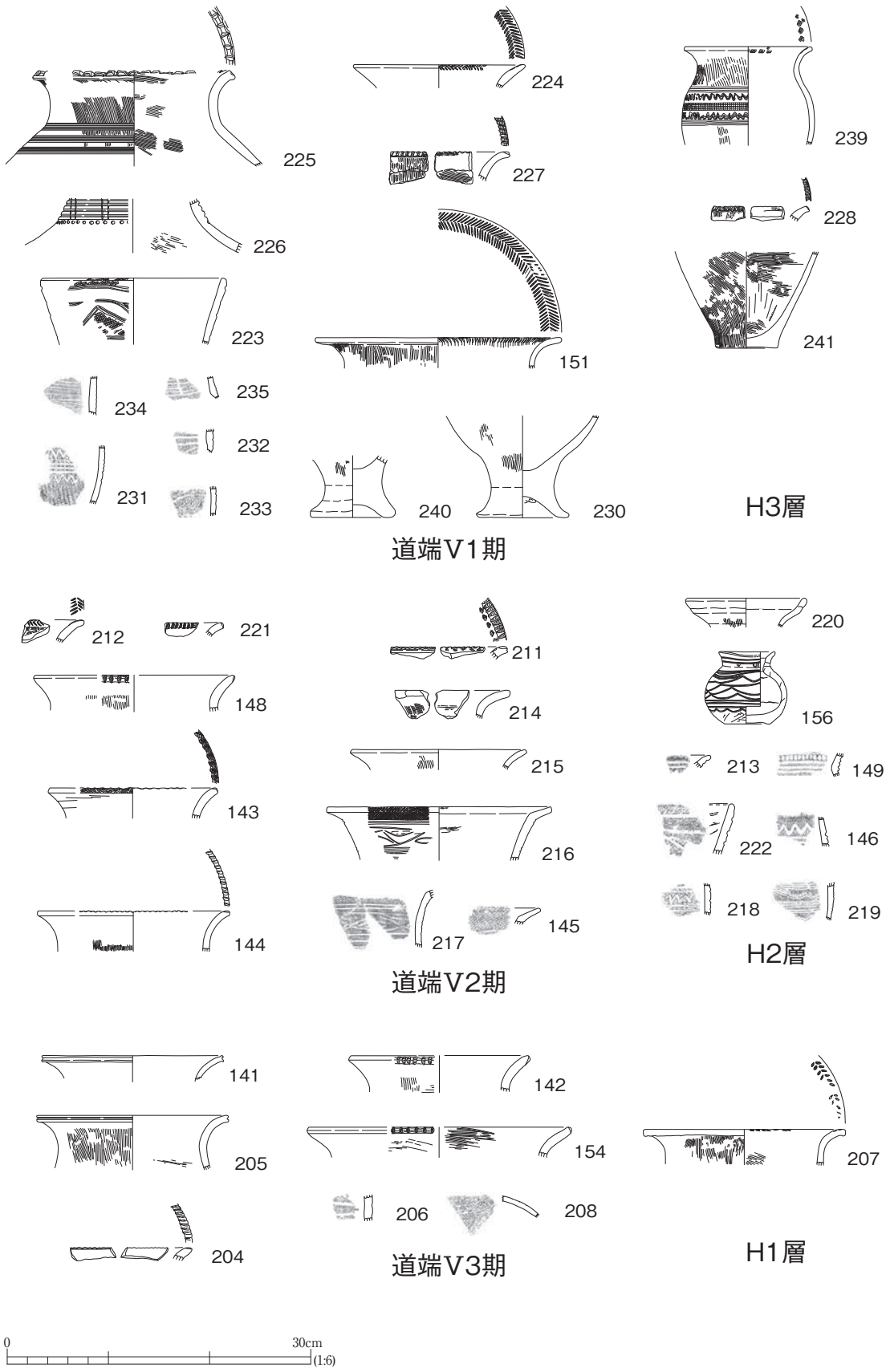
以上のことから本遺跡は、SR 2a・4などの河川の大きく東側に湾曲する自然堤防上を選地し、生産域は、確定できなかったが、稲作農耕を行い居住地を数条の溝で区画し生活を営んでいた、阿賀野川以北における弥生時代中期後半の集落跡と規定することができる。

B　遺　　物

1）土　　器

a　はじめに

本遺跡出土の弥生土器片の総数は、4373点を数える。そのうち掲載遺物点数は、123点である。口縁を中心に器形のわかる限り、また施文されているものは、小破片を含めそのほとんどを掲載したが、これらの掲載遺物が本遺跡全体の土器のイメージを示しているわけではない。これは、牛馬を使用した水田耕作やほ場整備により土器が、細かく破砕されていたことに加え、中心となる土器片の9割以上が内外面ハケ調整のみの無文の体部片であったことによる。沈線文系と明瞭にわかるものは、前述したように全体の約3％に過ぎない。第22図は、遺構出土のものを含めて北区の遺構集中か所（53～56 P～Rグリッド）



第22図　包含層別弥生土器

の出土土器（特徴の乏しい底部片は除く）を時期別に掲載したものである。以下これらの土器群について言及し、本遺跡出土弥生土器の時間系列的な問題及び空間系列的な問題に触れてみたい。なお引用文献は、第Ⅴ章で触れたもののほか以下のように簡略化した。『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第５　刈羽大平・小丸山』［品川 1985b］は「小丸山」、『南御山２式土器の成立と小松式土器の接触』［石川 2000］は「北越・11」、『金沢市戸水Ｂ遺跡』［中屋 1994］は「戸水Ｂ」と表記した。

ｂ　Ｈ３層に帰属する出土土器について

当該包含層の弥生土器は、櫛描文系の壺と甕８点、沈線文系の鉢と器種不明の土器片６点、その他としたハケ調整のあるやや軟質の胎土を有する鉢２点である。本遺跡出土の弥生土器の内でも最も古い相貌を持つ土器がみられる。櫛描文系の壺（225・226）は、いずれも胴部上位から頸部にかけて加飾があるものである。225 は口縁部内面と口唇部外面に交差する刺突列を巡らし、外面はハケ調整の後、櫛描直線文を３条一組で３組施文する。226 は頸部に３条の平行沈線を棒状工具により巡らし、それに直交する沈線を加え、さらに直下に円形刺突列を巡らす、という本遺跡出土土器のなかでも凝った施文を行っている。両者とも胎土・焼成があまりよくなく、丁寧な施文に比べ整形が雑である。239 の甕も明らかに古い相貌を持つ。胴部上位に櫛描直線文・波状文を交互に施文し文様帯を形成する。本遺跡の櫛描文系土器を観察すると口縁部以外に施文されたもの自体が極めて少なく、その意味で包含層最下層であるＨ３層から出土した 225・226・239 は、本遺跡の遺構群機能年代の上限を決める重要な資料の一つと言える。他の甕類・壺類は口縁のみであるが、151 は、焼成・胎土良好で、口縁部内面の綾杉文 も丁寧にしっかり施文されている。沈線文系の鉢 223 は、平行沈線の区画帯に沈線山形文かあるいは崩れた重菱形文を施文し、区画内の地文の縄文を擦り消している。当該土器の施文のモチーフは宇津ノ台式によく見られるものである。その他の沈線文系土器は、器種不明土器片 231 ～ 235 であるが、９条の沈線を施した 234 は縄文を擦り消しており、６条の沈線を施した 235 もその可能性がある。磨消縄文は、縄文以来の伝統的な施文技法と考えられるが、この手の土器群を時間系列の中でとらえ、山草荷式、下谷地式の前段階におく見解［小丸山;P324］がある。これ以外にも「南御山２式土器の成立と小松式土器との接触」［北越・11；P10・２～６行］で石川が、「磨消縄文をもつ一群を型式学的に古い」とする小滝の見解［小滝 1956］を優れたものとして披瀝している。遺跡の性格や地域性など空間分布からの観点を検討する必要はあるが、本遺跡出土の磨消縄文を施した土器の一群に、古層の可能性を考える根拠のひとつとしてここにあげる。230・240 は、整形の雑な台付きの鉢である［平田；図版 50 － 288；図版 60 － 418；図版 64 － 458 参照］。

Ｈ３層下の遺構の機能した時期は、櫛描文系の土器が、盛行期をやや過ぎた時期であろうか。225・226・239 などをみると盛行期櫛描文系土器の一種の華麗さの名残があるが、それでもこの手の相貌を持った土器片の数が少なすぎるからである。沈線文系の土器に至っては非掲載のものはただ１点に過ぎず、櫛描文系の土器を主体とする本遺跡の土器群に接触しはじめた時期と考えてよいと思われる。

ｃ　Ｈ２層に帰属する出土土器について

櫛描文系の壺、甕類（143・144・148・211・214・212・221）は、頸部の一部、胴部が欠損しているためこの図からは頸部や胴部の施文の有無は不明であるが、非掲載の土器片にも文様のある頸部・胴部片は見出されなかった。施文は口縁部に集約され、211（斜行短線文）212（綾杉文・刺突列）のほか、214・215 などは無文である。しかし、注目すべきは、沈線文系土器片の出現率であり、本遺跡の沈線文系土器片・

出土総点数 121 点中 73 点がこの層の出土である。216・217 は同一個体である。砂山遺跡出土の甕で、宇津ノ台２式とされているものと酷似する。145・218・219 も砂山遺跡出土の甕の小片に類似する。いずれも宇津ノ台２式とされているものである。146 は、平田遺跡出土の甕片に酷似する。宇津ノ台式とされている。149 は沈線文による区画部に刺突列が施文されている。220 は器形から沈線文系の壺の受け口状口縁としたが、調整をみると櫛描文系との折衷かもしれない。156 は、沈線文系小形短頸壺である。このように沈線文系では宇津ノ台式などに類似する東北系の土器の出現率がＨ１層、Ｈ３層に比べ格段に高い。

本遺跡では、Ｈ２層下の遺構の機能していた時期に、最も多く東北系の土器が、北陸系の土器に混入してくる。といっても遺跡全体の出土総量から言えばわずかな量（1.6%）に過ぎず、あくまで櫛描文系の土器が主体であることには変わりない。Ｈ２層下の遺構の機能した時期は、施文が口縁部に集約されるもの、口縁部無文の壺などが共伴していることからすでに櫛描文系の土器群が衰退期に入っている時期にあたることは確実であろう。

ｄ　Ｈ１層に帰属する出土土器について

142・154・204・207 などが、櫛描文系の壺・甕類である。やはり施文は口唇部のみに集約されており、142・154 は口縁部外面の刺突列、204 は、口縁部内面の刺突列である。いずれも雑な感じで簡略化されたものである。207 の甕なども、口縁部内面に綾杉状の施文がなされるが、Ｈ３層の 224・151 などと比べると明らかに刺突が雑で稚拙な印象を与え、すでにこの施文が形骸化していることが伺われる。しかし、この包含層に帰属する土器のうちで最も新しい様相をみせるものは、141・205 である。器形は、頸部が上方に立ち上り気味で口縁部に至りそこからやや強く外反する。特徴的なのは口唇部に面を作り出し沈線を巡らせている点で、焼成も他の櫛描文系土器にくらべ良好であり、胎土も堅致である。整形は、胴部以下が欠損のため不明で、頸部外面は縦位のハケ調整、頸部内面は磨耗のためやや不明瞭ではあるが、横位のハケ調整を施していると思える。口唇部の沈線に着目し、他遺跡出土土器の類例をあげると第Ⅴ章２節Ａ２）土器各説であげたもののほかでは、戸水Ｂ遺跡のＦ類［戸水Ｂ；P25・第６図］によく似ている。ただし、こうした口唇部の沈線は小松式併行期にも見られるもので、即断は出来ない。206・208 は沈線文系の器種不明の小片である。206 は焼成良好、胎土緻密で本遺跡出土の同系の土器群のなかで、やや異質な感じを受ける。なお、この破片には籾殻圧痕が観察された（図版 82 － 206 の拡大写真）。208 は、二ツ釜式の土器片で弥生時代中期後半に比定されるものである。

Ｈ１層下の遺構の機能した時期は、櫛描文系土器の衰退期が極まった時期にあると考えて差し支えなかろう。ただし、新潟県の弥生時代中期後半～末にかけての編年は、調査事例の少なさもあって未だ流動的である。本遺跡出土の口唇部に沈線を巡らせるものと戸水Ｂ遺跡のＦ類が同型式とすれば、Ｈ１層の時期は、戸水Ｂの時期に重なる部分があるのか、ここでは可能性を指摘して、今後の調査事例の蓄積を待ちたい。

ｅ　まとめ～道端遺跡の調査成果と編年的な位置について

新潟県内における弥生時代中期後半～末にかけての土器の様相は、櫛描文系については下谷地遺跡・小丸山遺跡、松ノ脇遺跡・平田遺跡、沈線文系については山草荷遺跡・砂山遺跡・滝ノ前遺跡などの調査・報告によって次第に判明しつつあるが、阿賀野川以北の弥生時代中期後半以降の遺跡の調査例が少ないことから当該地域の土器様相は、未だ判然としていない。本遺跡は、県内でも当該地域の弥生時代中期後半以降の遺構・遺物の検出例及び出土例として極めて重要な位置を占めると思われる。阿賀野川以北におけ

る弥生時代中期後半の土器群の従来のイメージは、沈線文系の土器群がその中枢を占めていた。ところが、本遺跡では、明らかに櫛描文系の土器群がその中心である。そういう意味では、本遺跡は、櫛描文系の土器群を中心に語られるべき遺跡といえよう。以下前出の他遺跡出土土器と本遺跡出土土器を比較しつつ、本遺跡の編年的位置に触れてみたい。

新潟県内の櫛描文系土器中心の本格的な編年は、下谷地遺跡［高橋 1979］出土土器によるものをその塙矢とするだろう。高橋はその後調査された小丸山遺跡［品田 1985］の品田の報告とその編年観を受ける形で、下谷地遺跡出土土器と後続の小丸山遺跡出土土器を、下谷地Ⅰ期・Ⅱ期、小丸山Ⅰ・Ⅱ期とそれぞれ二段階に分け、下谷地Ⅱ期と小丸山Ⅰ期を同時期とし、増山の編年案 [増山 1989] も考慮に入れ、県内の弥生時代中期後半を下谷地Ⅰ期（増山編年４期並行）→下谷地Ⅱ期＝小丸山Ⅰ期（増山編年５期並行）→小丸山Ⅱ期（増山編年５期並行）の三段階に区分した。［高橋 1990］。さらにその後、小丸山遺跡に後続すると考えられる松ノ脇遺跡［丸山 1998］が調査され、丸山によって前出の高橋の編年観を受け、久田の編年案［久田 1993］を一部改変する形で県内の弥生時代中期の越後の土器編年が、提示された。それによると畿内第Ⅲ様式並行に下谷地（増山編年４期並行）→小丸山（増山編年５期並行）を置き、畿内第Ⅳ様式並行に松ノ脇を置いている。また本報告で沈線文系とした東北系土器は、畿内第Ⅲ様式並行に山草荷・宇津ノ台式（増山編年４・５期並行）、畿内第Ⅳ様式並行に天王山式を置く。

ここで丸山が増山編年４期並行の下谷地段階としているのは、下谷地Ⅰ期のことである。本段階は越後における櫛描文系土器の盛行期で、施文に加飾性が強く多様である。甕は最大径が口径にあり器形は長胴で、胴部上位、口縁部内面、口唇部に施文されている。壺も長胴で頸部に装飾されているものがある。文様は、口縁部内面・口唇部に綾杉文・斜行短線文・円形及び三角状刺突列・押圧による波状口縁の作り出し・刻みなどを施文し、頸部・胴部上位には直線文・簾状文・扇状文・波状文などを施文する。またそれら多士済々な文様を組み合わせ、全体として非常に華麗な印象を与える土器群である。本遺跡出土土器の全体の印象では無文の小片が多く、下谷地Ⅰ期を過ぎつつある時期と考えられるが、甕の 239（Ｈ３層出土）・180（SR ２a 出土）、壺の 225・226（Ｈ３層出土）などが、本期に属するものである。180 は口唇部の施文が、226 は整形が雑で、また前述したごとくＨ３層出土土器片の多数は櫛描文盛行期にあるとは言い難いが、これらの土器は下谷地Ⅰ段階の土器群の名残をとどめつつ、次段階の小丸山段階（増山編年５期並行）に移行していく時期のものと考えたい。

小丸山段階の土器群は、櫛描文の衰退傾向が顕著で口縁部に加飾が集約される。本遺跡のＨ３～Ｈ１層出土土器の施文に関して言えば、胴部・頸部に簾状文・扇状文が見られるものがほとんどなく、口縁部内面･口唇部に施されるその大部分が刺突列、綾杉文、斜行短線文であり、それらの施文も上層にいくにつれ、簡略化され雑になっていく傾向がある。そういう意味でＨ３層のものが櫛描文盛行期から衰退期に向かう第１段階・Ｈ２層のものがその第２段階・Ｈ１層のものがその第３段階に相当すると考えられる。次に本遺跡のＨ１層に属する中心的な遺構から出土した口唇部に沈線を巡らした甕の口縁２点（141・205）に対する評価であるが、これらの甕片は口唇部の刺突を簡略化したものであり、櫛描文衰退期の象徴的な土器と言えよう。本遺跡の櫛描文系土器のうち、他に新相のものを探すと SR ２a 出土の 188 がある。胴部に櫛描刺突列を施文したもので小丸山遺跡Ⅱｃ層出土甕の第 132 図 14・27、戸水Ｂ遺跡の SK717 出土甕の第 41 図－ 42 などに類例があり、弥生時代中期末以降によく見られるようになる施文である。

以上のことから本遺跡の土器群は、櫛描文系土器を中心に見る限り、衰退期の過程をたどるばかりであるが、沈線文系土器と口唇部に沈線を巡らした甕などの本遺跡への搬入またはそれらの土器の背景にある

第23図　弥生時代中期の仙台平野の甕と本遺跡の出土の甕

異なる系譜の文化と櫛描文系の文化との交流を考えれば、少し違った様相が見えてくる。上述したごとくＨ２層においては、沈線文系の出現率が、Ｈ３・Ｈ１層に比べ極めて高いといえる。宇津ノ台２式と思われる 145・146、216 ～ 219、小形短頸壺 156 などのほかに、ＳＤ 122 出土の 157 などがある。特に 157 は、口縁から頸部に沈線を施文、胴部以下に縄文を施し、器形は口縁部が長く上方に立ち上がる特異なものである。類例を探すと仙台平野の高田Ｂ遺跡･中在家南遺跡出土の甕に酷似するものであることがわかった。第 23 図の１・２が高田Ｂ式の甕、３・４・５が中在家南式の甕である。１・２・４・５の施文部の濃い部分は、赤彩の施されたか所である。石川は、高田Ｂ式を南御山２式並行、中在家南式を二ツ釜式並行としており、第 25 図には掲載していないが、他に類似する施文・器形を持ったものは、福島県須賀川市土

取場Ｂ遺跡出土の甕［阿武隈地区遺跡分布調査報告（Ⅱ）；第19図・４］がある。甕157は、本遺跡の櫛描文系土器の様相から弥生時代中期中葉の所産であろう。そうすると断定はできないが、中在家南遺跡（二ツ釜式並行）の背景または周辺地域の文化との交流や人の移動などがあった可能性も浮上する。いずれにしろＨ２層下の遺構の機能した時期に複数の系譜の沈線文系の文化との交流があったという点で、この時期にもひとつの特徴を指摘できる。ただし、下層のＨ２層からは宇津ノ台式に類似する沈線文系土器が出土し、上層のＨ１層から二ツ釜式の土器片が出土しているとすれば、現在の編年観に合わないことであり、調査事例の蓄積を待って今後の検討を要すると思われる。

櫛描文系・沈線文系以外の系譜については、南区Ⅳｂ層出土の261、SR ２ａ出土の189の壺があるが、261は南関東第Ⅱ様式、宮ノ台式もしくは小田原式の細首の長頸壺と酷似する。これも弥生時代中期後半の所産である。189は、胴部の屈曲の仕方から東海系の壺と思われるが、器形は不明である。また上記261以外の南区出土の残りの掲載遺物にも触れておく。138の壺は、口縁部外面の刺突列と口縁部内面の櫛描綾杉文である。内面ハケ調整がある。139・140の壺もしくは甕は、２列の斜行短線文を施す。甕153の底部は内外面ハケ調整で、頸部から下の非接合の破片にも施文はなく頸部下無文のものである。これらの土器はすべて弥生時代中期後半の所産としてさしつかえなく、南区の土器群も北区の三枚の包含層とその下の遺構群出土の土器群の時期幅を出る可能性はないと思える。

最後に上述の所見を土台として本遺跡の編年的位置を以下のように設定する。越後の弥生時代中期を前葉・中葉・後葉の３期に分けると、本遺跡出土土器の中心となる時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。これは畿内の編年、高橋と丸山及び増山の編年案を下敷きにするとおおよそ畿内編年の第Ⅲ様式後半から第Ⅳ様式にさしかかる頃と考えられ、越後では、下谷地Ⅰ段階の最末期から下谷地Ⅱ期段階（＝小丸山Ⅰ期段階）・小丸山Ⅱ期段階（合わせて小丸山段階と総称する。）を経て松ノ脇段階に入ろうかという時期である。北陸では増山編年の５期を中心に次段階に入る頃、北加賀では、磯部運動公園段階から専光寺養魚場段階を経て戸水Ｂ段階にさしかかる時期に重なってくると思われる。よって弥生時代中期後葉を３段階に区分すると、本遺跡出土の弥生時代の土器群は、櫛描文系土器が衰退し始めた段階と考えられるＨ３層とＨ３層下の遺構出土土器群の「道端Ｖ１期」、衰退期の過程をたどる櫛描文系の土器群に沈線文系の土器群の混入してくるＨ２層とＨ２層下の遺構出土土器群の「道端Ｖ２期」、櫛描文系の土器の衰退期が極まり、弥生時代末から次段階の土器の新しい様相がほの見えてくるＨ１層とＨ１層下の遺構出土土器群の「道端Ｖ３期」の３段階に分けることができる。

<table>
<tr><th>畿内</th><th>北陸</th><th>北加賀</th><th>越後</th><th colspan="2">阿賀野川以北</th><th>会津</th><th>仙台</th></tr>
<tr><td rowspan="3">Ⅲ様式</td><td>増山４期</td><td>寺中Ⅱ次</td><td>下谷地</td><td colspan="2">（＋）</td><td>南御山２</td><td>高田Ｂ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">増山５期</td><td rowspan="2">磯部運動公園</td><td rowspan="2">小丸山</td><td rowspan="2">山草荷</td><td rowspan="2">道端Ｖ　　長松</td><td>二ツ釜</td><td>中在家南</td></tr>
<tr><td>川原町口</td><td>（＋）</td></tr>
<tr><td>Ⅳ様式</td><td>（＋）</td><td>専光寺養魚場
戸水Ｂ</td><td>松ノ脇</td><td>砂山</td><td>（＋）</td><td>御山村下
三百刈</td><td>十三塚</td></tr>
</table>

第12表　弥生時代編年対応表

２）　石器使用痕分析

a　分析の目的と対象資料

道端遺跡からは弥生時代中期の石器がまとまって出土し、いわゆる大型石包丁を含む大型直縁刃石器が含まれている。大型直縁刃石器は斎野裕彦によって設定された石器で、弥生時代の日本列島に広く分布し、除草や残藁刈りを含んだ根刈り具と推定された［斎野 1993；1994］。さらに、使用痕分析例も蓄積され、この推定を裏付ける結果が得られている［御堂島 1989 など］。新潟県内では柏崎市下谷地遺跡、長岡市（旧小国町）水上遺跡で使用痕分析が行われた［沢田 1995a；2005］。道端遺跡は県内最北の出土例となり、阿賀北地方における当該期の稲作農耕の証拠としても注目され、機能推定は重要な課題と考えられる。そこで、道端遺跡出土石器の農具としての機能を検証するため、使用痕分析を行う。分析対象は大型直縁刃石器３点（312・284）、磨製石包丁１点（302）の３点である。

b　分 析 方 法

ここでは高倍率法による観察を行う。高倍率法は主に 100 倍以上の倍率で石器表面を観察するもので、使用痕光沢面（ポリッシュ）、線状痕などの使用痕が観察対象となる。観察された使用痕から使用実験にもとづいて石器の運動方向や使用対象物が推定される。

今回は、落射照明金属顕微鏡（オリンパス製）を使用し、100 倍・200 倍・500 倍で観察を行い、必要に応じてデジタルカメラで写真撮影した。観察時の前処理は、エタノールによる油脂等の除去のみ実施した。使用痕光沢面の記述は梶原洋・阿子島香による頁岩におけるタイプ分類［梶原・阿子島 1981］と沢田による属性［沢田 1995b］を併記した（第 13 表）。あわせて、使用痕光沢面分布図を作成した（第 24 図）。使用痕の強度はＲ．グレースによる発達度分類の発達度Ａ（光沢綿のパッチが点在するもの）とＡ＋（パッチが発達して大きさ密度が増すが、お互い連結していないもの）を弱、Ｂ（パッチが連結したもの）を中、Ｂ＋（連結した単位が発達し、単位同士がさらに連結するなどしたもの）を強とした［Ｇｒａｃｅ 1989］。

c　観 察 結 果

大型直縁刃石器２点、磨製石包丁１点で使用痕光沢面を確認した。以下、観察結果を記す。

１（312）　刃部のみ磨製と思われるが、石器表面の剥落が著しく、詳細は不明である。石器には光沢を持つ鉱物と研磨痕を確認でき、その特徴は未使用の表面で明瞭に確認できる。鉱物は表面が虹色に干渉し、研磨痕は表面の粗い弱く鈍い光沢面である。鉱物は石器全面、研磨痕は残存する研磨面で一様に見られ、いずれも光沢面との識別は可能であった（第 25 図写真１）。

刃部付近の表面残存部で使用痕光沢面を確認した。残存部のみではあるが、光沢面は刃部縁辺中央付近でもっとも強く、最大で刃部から約 1.5 ㎝内側まで分布する。分布型（パターン）は刃部縁辺から離れるほど弱くなり、漸移的である。最大発達部における発達度はＢ＋である（第 25 図写真２）。光沢面の特徴は、パッチ縁辺が表面の微細な凹部に侵入するため、断面形が丸くしばしばドーム状となる。表面はなめらかである。線状痕は刃部と平行しており、「埋められた」と形容される微細なものや線状光沢が認められた。刃部摩耗度も高く、縁辺断面形は丸い。これらの特徴から、光沢面はＢタイプに分類される。

２（284）　全部磨製の大型直縁刃石器で、表面には研磨痕を確認できるが、１と同様の特徴を持ち、使用痕光沢面との識別は可能であった（第 25 図写真４）。

刃部縁辺を中心に使用痕光沢面を広範囲に確認した。光沢面の分布範囲は刃部縁辺の大半に及び、中央付近でもっとも強く、刃部から最大で約 2.8 ㎝内側まで広がる。分布型は漸移的で、最大発達部における発達度はＢ＋で視野の大部分が光沢に覆われるか所もある（第 25 図写真５）。光沢面の断面形は丸くしばしばドーム状となる。表面がなめらかなか所と、光沢面表面に微小な凹凸がありややなめらかさに欠けるか所があり、後者は研磨痕上で光沢面が形成されたことが要因であろう。線状痕は刃部と平行し、種類は「埋められた」線状痕を主体とする。刃部摩耗度は高く、刃縁断面は丸い。これらの特徴から、光沢面はＢタイプに分類されるが、視野の大半が光沢面で覆われる最大発達部では、Ａタイプとする。

３（302）　当初この石器は、石材などの特徴から擦切具としていたが、使用痕分析の結果を考慮して、磨製石包丁とした。表面には研磨痕が確認できるが、使用痕光沢面との識別は可能であった（第 25 図写真７）。

刃部縁辺を中心に使用痕光沢面を確認したが、破損により大半が失われており、全体的な分布状況は不明である。光沢面はａ面刃部左側でもっとも強く、最大で刃部から約 2.2 ㎝内側まで広がる。最大発達部における発達度はＢで（第 25 図写真８）、分布型は漸移的である。断面形が丸く、表面はなめらかで、線状痕は線状光沢が主体で刃部と平行している。ｂ面側の刃縁付近ではａ面に比べて光沢面の発達が弱く、研磨による刃部再生が行われたと考えられる。Ｂタイプに分類される。

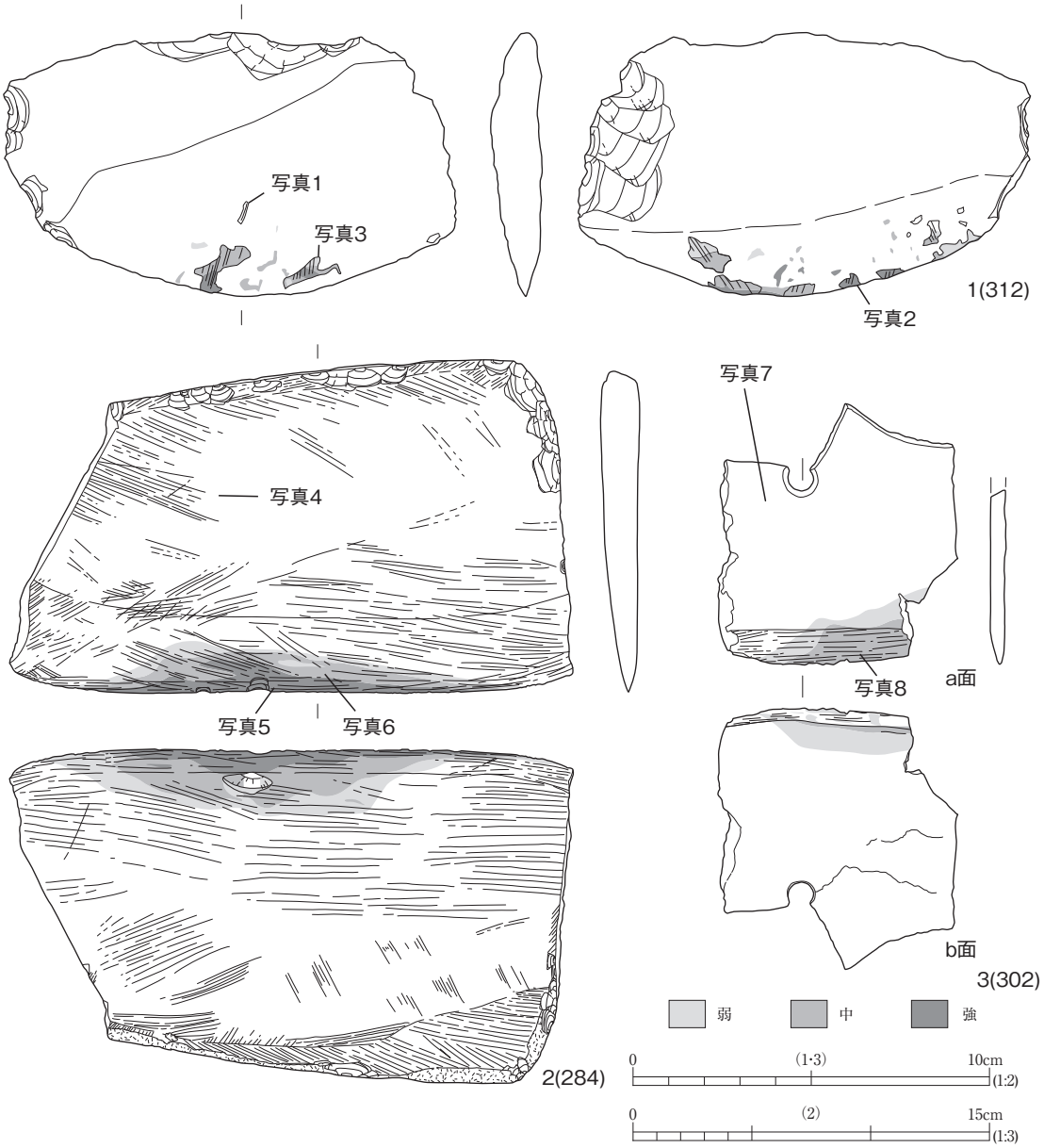
ｄ　機 能 推 定

観察結果から石器の用途を推定する。前述のとおり推定は使用実験に基づいている［梶原・阿子島前掲など］。１・２の大型直縁刃石器と３の磨製石包丁でＢタイプを中心に一部Ａタイプの使用痕光沢面を確認した。表裏両面対称に刃縁中央を中心として広範囲に分布しており、線状痕は刃縁に平行している。Ａタイプは稲科植物を対象とする作業で生じ、Ｂタイプは主に木の作業で生じるが、稲科植物の作業でも生じるとされている。今回確認された光沢面がきわめて広範囲に刃縁から奥まで分布することも考慮すると、３点とも使用対象物は株などの厚みのある稲科植物と考えられる。また、光沢面の分布状況や線状痕の方向から、石器は刃縁に平行な方向で操作されたと推定する。

今回の大型直縁刃石器の分析結果は、これまでの事例と調和的で、斎野の機能推定を支持している。一方、磨製石包丁は一般に穂詰み具とされており、これまでの使用痕分析もおおむねこれを支持している。しかし、今回の分析では磨製石包丁も大型直縁刃石器と対象物・運動方向が同じであった。これについては、石器の大半が欠損していたため、全体の形態が明確でないため、器種分類そのものに問題のある可能性もある。実際、３は刃部断面形が片刃でなく比較的刃角の小さい両刃であり、磨製石包丁よりはむしろ大型直縁刃石器と共通する特徴をもつ。分析例を蓄積してさらなる検討が必要であろう。

ｅ　ま　と　め

今回の分析により稲科植物を使用対象とした３点の石器を抽出することができた。ここでいう稲科植物とは珪酸体に富む稲科に代表される草本類の総称であり、ススキやアシなども含んでおり栽培植物としてのイネに限定することはできない。しかし、稲作農耕社会という時代背景と県内外の他遺跡の出土例を考慮すると、これらを石製農具とみなすことが妥当である。搬入品の可能性を考慮する必要はあるが、今回道端遺跡から出土した籾痕土器や炭化米と並んで、阿賀北地方における弥生時代中期の稲作農耕の証拠と見なすことができそうである。



第24図　使用痕光沢面分布図

	光沢面タイプ	刃部からの侵入度	巨視的断面形	微視的断面形	低部への侵入度	分布形	発達度	境界型	なめらかさ	ピット量	線状痕種類	線状痕方向	刃部摩耗度
1（312）	B	1㎝以上	丸い	丸い	中	広範	B＋	漸移的	なめらか	少ない	埋められた	平行	大
2（284）	A B	1㎝以上	丸い	丸い	中	広範	B＋	漸移的	なめらか	少ない	埋められた	平行	大
3（302）	B	1 mm 以上	丸い	丸い	低	広範	B	漸移的	なめらか	少ない	埋・線状光沢	平行	大

第 13 表　観察された光沢面のタイプと特徴

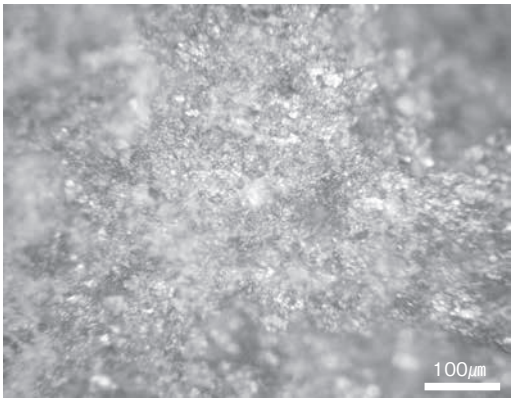


写真1　1未使用面

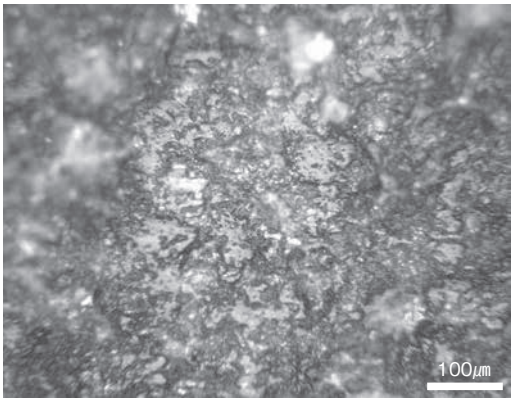


写真2　Bタイプ発達度B＋

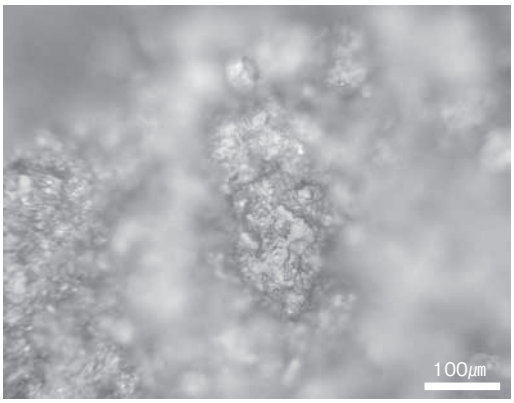


写真3　Bタイプ発達度A＋

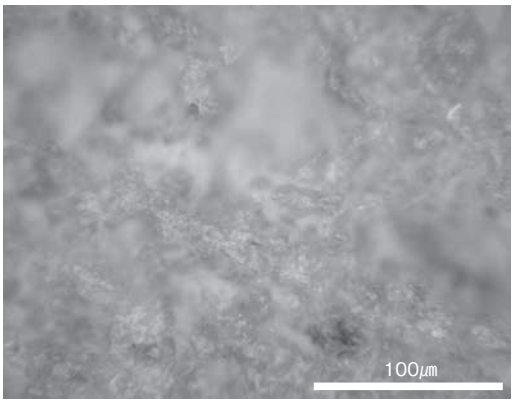


写真4　2未使用面の研磨痕

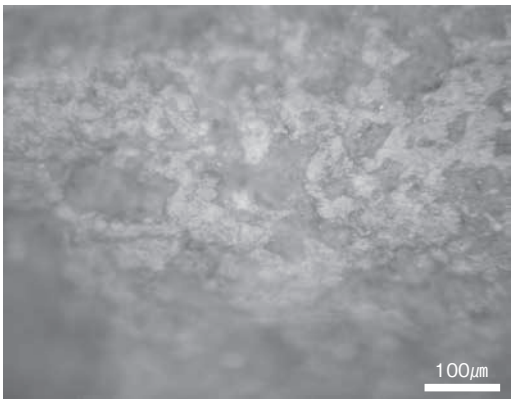


写真5　A～Bタイプ発達度B＋

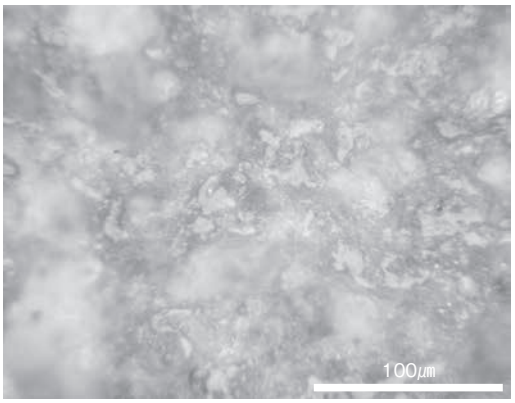


写真6　Bタイプ発達度B

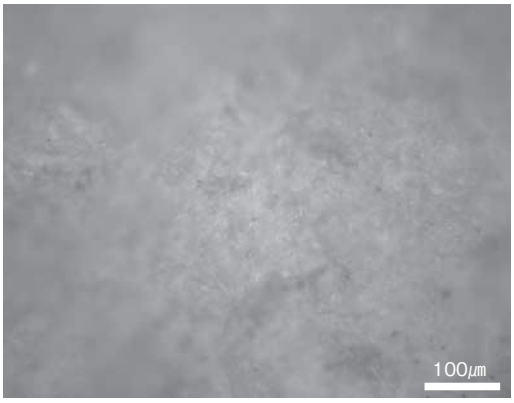


写真7　3未使用面

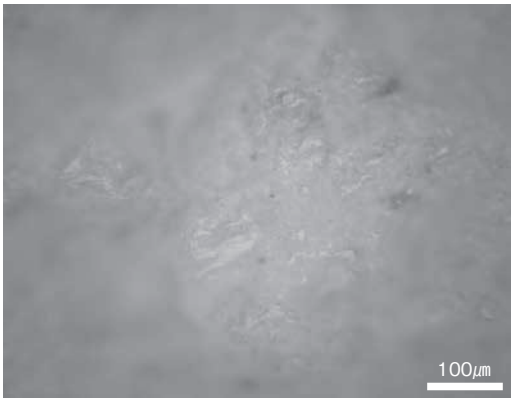


写真8　Bタイプ発達度B

第25図　使用痕光沢面写真

総　　括

本遺跡は、越後平野北東部を流れる荒川の支流の自然堤防上に位置する古墳時代中期から後期にかけての集落跡、および弥生時代中期後半の集落跡である。

古墳時代の主な遺構は、竪穴建物１軒、掘立柱建物１棟のほかに良好な一括遺物の出土した土坑、性格不明遺構、河川の北縁に検出された遺物集中か所である。遺構は、深い掘り込みを持つ柱穴以外の遺構は、ほとんど激しい後世の撹乱を受けており全容が明瞭ではないが、竪穴建物･掘立柱建物も検出されており、集落の一部と考えて良いと思われる。古墳時代の出土遺物は、当該時代の須恵器･土師器のほかに木製品･石製品などが、Ⅰ層（耕作土）・Ⅲａ層（古墳時代包含層）・Ⅲb1 層（遺構確認面層）・遺構内・河川跡から出土している。須恵器は、50 ～ 57 L ～ R グリッドのⅠ層・Ⅲａ層に出土した杯身・蓋・瑳・無蓋高杯・甕・瓶、土師器は、遺構集中地点の遺構確認面・遺構内から出土した椀・鉢・甕・甑・手づくね土器などである。出土土器の年代幅は須恵器の型式幅であらわすと、TK216 ～ TK10 型式で５世紀後半～６世紀前半と思われる。特に須恵器はⅠ層から出土するものが多く、遺構に伴わない個体がほとんどであるが、４個体の瑳の出土は、本遺跡の性格に何らかの関係を有するものと推定される。木製品は柱材・櫂状木製品、石製品は紡錘車・砥石である。

弥生時代の主な遺構は、平地式建物７軒、竪穴建物３軒、溝５条のほかに土坑、性格不明遺構、ピットであるが、南区・北区でその検出状況が異なる。南区の遺構群検出か所では包含層が確認されておらず、主な遺構である浅い掘り込みを持つ竪穴建物（SI １・３）からの出土遺物の量も北区に比べて少なく、相対的に土器より石鏃、剥片の割合が多い。北区では、遺構集中か所に三枚の包含層が確認され、それぞれの包含層下に平地式建物・竪穴建物など各遺構群が検出され、それらの遺構群は河川跡と連結する４条の溝によって囲繞され区画されている。出土遺物は弥生土器が甕・壺・鉢・蓋、石器が管玉・大型直縁刃石器（大型磨製石包丁を含む）・磨製石包丁・扁平片刃石斧・環石・石鏃・磨石・敲石・砥石・礫石器などである。弥生土器は従来の阿賀野川以北の出土例と異なり櫛描文系を中心とする土器群で、その時期幅は、畿内編年のⅢ様式後半にあたる弥生中期後葉と考えられ、県内の遺跡では下谷地遺跡に続く小丸山遺跡・松ノ脇遺跡の出土土器の時期に対応するものと思われる。石器の使用痕分析による稲科植物（ススキやアシも含む）の刈り取りに使用されたという所見から、大型直縁刃石器･磨製石包丁を石製農具と規定し、本遺跡での稲作農耕が行われたことを妥当と結論した。また土器片のイネの籾痕（図版 82 ― 206 拡大写真）や周溝や炉の炭化物層を対象資料とした種実同定結果から認められる相当量の炭化したアワ・ヒエ・イネは、この石器の使用痕分析を裏付けるものである。

ほかに自然化学分析からの情報のなかで興味深いものは、炉や周溝など覆土内炭化物や当該時代の甕のなかの炭化材などを対象とした放射性炭素年代測定であった。上述（第Ⅶ章２節Ａ）したように BC214 ～ AD26 年の年代幅のなかに、本遺跡の遺構の存続年代が重なる可能性は高く、放射線炭素年代測定と弥生時代中期以降の土器編年の整合性に一石を投じる分析結果となっている。

本遺跡は、阿賀野川以北における古墳時代中期から古墳時代後期及び弥生時代中期後葉の集落跡の調査事例として豊富な情報量を有する遺跡である。これらの情報が、当該時代の考古学研究の一助となれば、調査スタッフ一同それ以上の喜びはない。本遺跡の調査・報告が可能となったのは、新潟県内はもとより県外の多くの方々や機関からいただいた様々なご教示・ご協力のお陰である。この旨再度文末に記して厚く御礼を申し上げ、本稿の結びとしたい。

要　　約

1　道端遺跡は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端 97 番地ほかに所在する。

2　現況は水田で標高 2.0 ～ 2.7 mである。

3　発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成 17 年度に実施した。

4　調査面積は 12,400 ㎡（上層 9,600 ㎡、下層 2,800 ㎡）である。

5　本遺跡は荒川支流、乙大日川（旧胎内川）の自然堤防縁辺の後背湿地に位置する。

6　北区における遺構分布範囲は、法線内にとどまらず東側に広がっている。

7　本遺跡は、小河川に沿って営まれた古墳時代中期～後期、弥生時代中期後半の集落跡である。

8　古墳時代の遺構は、竪穴建物１軒、掘立柱建物１棟、土坑５基、性格不明遺構４基、河川跡２条、ピット７基である。

9　北区の河川跡北縁部に古墳時代の遺物集中か所が検出された。

10　古墳時代の遺物は、須恵器・土師器・石製品・木製品が出土した。

11　須恵器は杯身・蓋・甕・無蓋高杯・甕・瓶が出土し、甕は４個体を確認した。

12　土師器は椀・甕・甑が出土した。

13　弥生時代の遺構は、竪穴建物３軒、平地式建物７軒、周溝遺構４基、土坑９基、性格不明遺構５基、溝５条、ピット 24 基である。

14　北区の弥生時代の遺構は、Ｈ１～Ｈ３層の３枚の包含層にそれぞれ帰属し、その直下から掘り込まれ、居住区は数条の溝と河川跡によって囲繞されている

15　弥生時代の遺物は弥生土器・土製品・石器・木製品が出土した。

16　弥生時代の土器は壺・甕・鉢・蓋が出土した。

17　弥生時代の石器は管玉・石鏃・大型石包丁・大型直縁刃石器・環石・扁平片刃石斧などが出土した。

18　弥生時代の木製品は建築部材が出土した。

19　その他の時代のものは、中世の珠洲焼・銭貨・縄文晩期の土器が出土した。

20　弥生土器片に籾痕が観察された。

21　種実同定により炉、土坑の覆土内から相当量の炭化したアワ・ヒエ・イネが検出された。

22　弥生時代の石器には、大型石包丁・大型直縁刃石器などの農耕具がある。

23　22 の石器使用痕分析により稲科植物を刈り取った痕跡を確認した。

24　20 ～ 23 から本遺跡の弥生時代中期後半に稲作農耕が行われていたことが証明された。

引用・参考文献

相田泰臣　2004　「越後における古墳時代後期を中心とした土器の一様相―頸城・魚沼地域の土師器を中心として―」『新潟考古』第15集新潟県考古学会

青葉　高　1991　『野菜の日本史』　八坂書房

朝岡政康・諫山えりか　2003　『東囲遺跡』　新潟県新潟市教育委員会

阿部明彦　1989　「山形県における黒色土器出現の様相と展開」『東国土器研究』第２号　東国土器研究会

甘粕　健ほか　1992　『古津八幡山古墳測量調査報告』　新潟県新津市教育委員会

甘粕　健ほか　1996　『磐舟浦田山古墳群発掘調査報告書』　新潟県村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信　1991　「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』　農林水産省農林水産技術会議事務局編

新井市教育委員会編　1985　『月岡遺跡 範囲確認緊急調査報告書』　新潟県新井市教育委員会

荒井　格ほか　2000　『仙台市文化財調査報告書 第242集 高田Ｂ遺跡』　宮城県仙台市教育委員会

荒川隆史・加藤　学　1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉Ａ遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川町　1974　『荒川町郷土史』新潟県荒川町

荒川町教育委員会 編　1991　『あらかわ歴史散歩』　新潟県荒川町

荒川町史編纂委員会編　1988　『荒川町史』資料編３　新潟県荒川町

荒木勇次ほか　1989　『新潟県三条市保内三王山古墳群測量・発掘調査報告書』　新潟県三条市教育委員会

家田順一郎　1981　『曽根遺跡Ⅰ』新潟県豊浦町教育委員会

家田順一郎　1982　『曽根遺跡Ⅱ』新潟県豊浦町教育委員会

石川茂雄　1994　『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会

石川智紀・内藤真一ほか　2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第112集 道端遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川日出志　2000　「南御山２式土器の成立と小松式土器の接触」『北越考古学』第11号　北越考古学会

石川日出志　2005a　『関東・東北弥生土器を北海道続縄文土器の広域編年』明治大学文学部考古学研究会

石川日出志　2005b　『南関東の弥生土器』六一書房

石野博信ほか　1994　『古墳時代の研究』第２巻　雄山閣

石橋輝樹ほか　1977　「Ⅶ地下資源　４水資源　４・２地下水」『新潟県地質図説明書』新潟県

磯崎正彦　1979　『新潟・燕線特殊改良工事にかかわる緒立遺跡第１次発掘調査報告書』新潟県黒崎町教育委員会

磯崎正彦編　1980　『新潟・燕線特殊改良工事にかかわる緒立遺跡第２次発掘調査報告書』新潟県黒崎町教育委員会

伊藤廉倫ほか　1993　『二本松東山遺跡』　新潟県聖籠町教育委員会

伊東隆夫　1995　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1996　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1997　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1998　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所

青梅町教育委員会編1979　『大角地遺跡―飾玉とヒスイの工房址―』新潟県青海町教育委員会

大阪府立弥生博物館2001　『弥生クロスロード―再考・信濃の農耕社会―』大阪府立弥生博物館

大阪府立弥生博物館2005　『北陸の玉と鉄　弥生王権の光と影』大阪府立弥生博物館

岡村道雄　1983　「ピエス・エスキーユ楔形石器」『縄文文化の研究』７　雄山閣

岡本淳一郎　2003　「周溝をもつ建物」の基礎的研究」『蜃気楼』秋山進午先生古稀記念富山大学考古学研究室論集　富山大学考古学研究室

及川良彦　1998　「関東地方の低地遺跡の再検討」『青山考古』第15号　青山学院大学

及川良彦　1999　「関東地方の低地遺跡の再検討（2）」『青山考古』第16号　青山学院大学

及川良彦　2001　「関東地方の低地遺跡の再検討（3)」『青山考古』第 18 号　青山学院大学
及川良彦　2002　「住居と掘立柱建物跡」『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会
小滝利意　1956　『南御山遺跡出土の土器に就いて』　孔版
小野　忠　1980　「山形県における古式須恵器」『―酒井忠一氏還暦記念特集―庄内考古学』第 17 号　庄内考古学研究会
梶原　洋・阿子島香1981　「頁岩製石器の実験使用痕研究―ポリッシュを中心とした機能推定の試み―（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その２)」『考古学雑誌』第 67 巻第１号
片野徳蔵　2004　『胎内川流域のわが郷土』　私家版
加藤　学ほか 2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 106 集 松影Ａ遺跡』　新潟県教育委員会・(財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
金子正典・滝沢規朗・丸山一昭　1999 「第３章２節 土器　第３項弥生後期」『新潟県の考古学』　高志書院
神林村史編纂委員会 編 1985 『神林村誌』通史編　新潟県神林村
唐古・鍵考古学ミュージアム 2005 『唐古・鍵遺跡と周辺の弥生遺跡』　唐古・鍵考古学ミュージアム
川上貞雄　1997　『曽根遺跡Ⅲ』　新潟県豊浦町教育委員会
川上貞雄・木村宗文・鈴木郁夫　1989 『新津市史』資料編第１巻　原始・古代・中世　新潟県新津市教育委員会
川崎弘・吉田澪・井上恒久 1991 「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』　農林水産省農林水産技術会議事務局編
川村浩司　1988　「(第 18 回発表要旨）越後の古墳時代中・後期の土器について」『新潟考古学談話会会報』第１号　新潟考古学談話会
川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相―関川右岸下流を中心に―」『上越市史研究』第５号新潟県上越市
木本元治　1989　「福島県内の黒色土器（古墳時代～奈良時代)」『東国土器研究』第２号　東国土器研究会
工藤哲司ほか 1996　『仙台市文化財調査報告書 第 213 集 中在家南遺跡他』仙台市教育委員会
建設省北陸地方建設局羽越工事事務所 編　1975『羽越災害復旧工事誌』　建設省北陸地方建設局羽越工事事務所
小池邦朋・藤塚　明　1993『新潟市的場遺跡』　新潟県新潟市教育委員会
小林青樹　2004　「東海以東」『季刊考古学』86 号　雄山閣
駒形敏朗　2001　『五斗田遺跡―県営ほ場整備事業に伴う発掘調査―』　新潟県長岡市教育委員会
近藤錬三　2004　「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48
近藤錬三　1982　「Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究」『昭和 56 年度科学研究費 (一般研究Ｃ) 研究成果報告書』
坂上有紀・田海義正・高橋　保　2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 98 集 県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』　新潟県教育委員会・(財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
斉藤基生・高橋　保　1979 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第19 北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡』新潟県教育委員会
斉野裕彦　1993　「弥生時代の大型直縁刃石器（上)」『弥生文化博物館研究報告』２　大阪府立弥生文化博物館
斉野裕彦　1994　「弥生時代の大型直縁刃石器（下)」『弥生文化博物館研究報告』３　大阪府立弥生文化博物館
坂井秀弥　1983　『新潟県刈羽郡西山町高塩Ｂ遺跡発掘調査報告書』　新潟県西山町教育委員会
坂井秀弥　1989a 「新潟県の黒色土器―６～８世紀を中心に」『東国土器研究』第２号　東国土器研究会
坂井秀弥ほか 1989b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 53 集　新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
沢田　敦　1995a 「下谷地遺跡出土『石包丁』の使用痕分析―収穫具からみた弥生時代の越後における稲作農耕の形態―」『新潟考古』６　新潟県考古学
沢田　敦　1995b 「五丁歩遺跡出土板状剥片石器の使用痕分析」『研究紀要』　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

沢田　敦　2005　「水上遺跡出土大型磨製石包丁の使用痕分析」『水上遺跡』　新潟県小国町教育委員会
品田高志　1985a　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第４吉井遺跡群―新潟県柏崎市・吉井遺跡群発掘調査報告書―』　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志　1985b　「 柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第５ 刈羽大平・小丸山―東京電力新潟原子力発電所建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―』　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志　1987　『柏崎市史』資料集考古編２　新潟県柏崎市史編さん室
品田高志　1987　『柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書 第７　西岩野―新潟県柏崎市長崎西岩野遺跡発掘調査報告書』柏崎市教育委員会
品田高志　1987　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第８ 帝国石油新長岡ライン埋蔵文化財発掘調査報告書（試掘確認調査報告・吉井水上Ｉ遺跡・戸口遺跡)』　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志　1989　「越後における古墳時代土器の変遷―柏崎平野の中期～後期を中心に―」『柏崎市博物館館報』４　新潟県柏崎市立博物館
品田高志　1990　「越後の後期弥生土器とその諸相―柏崎平野における北陸系土器群と人の移動―」『新潟県考古学談話会会報』第６号　新潟県考古学談話会
島地　謙・伊東隆夫　1982　『図説木材組織』　地球社
上越市史編さん委員会　2003　『上越市史』資料編２考古　新潟県上越市
杉山真二　2000　「植物珪酸体 (プラント・オパール)」『辻誠一郎編著　考古学と自然科学３　考古学と植物学』同成社
杉山真二・藤原宏志　1986　「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19
鈴木俊成・春日真実ほか　1994　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第60集 一ノ口遺跡東地区』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
聖籠町史編纂委員会　2004　『聖籠町史』資料編４ 近現代　新潟県聖籠町
関　雅之　1972a　『滝ノ前遺跡』　新潟県村上市教育委員会
関　雅之　1972b　『田伏玉作遺跡』　新潟県糸魚川市教育委員会
関　雅之　1982　『新発田市埋蔵文化財調査報告第４ 村尻遺跡Ｉ』　新潟県新発田市教育委員会
関　雅之　1999　『葛塚遺跡』　新潟県豊栄市教育委員会
胎内川沿岸土地改良区 編　2002　『胎内川沿岸土地改良区５０年のあゆみ 』　新潟県胎内川沿岸土地改良区
滝沢規朗ほか　2002　『元屋敷遺跡Ⅱ（上段)』　新潟県朝日村教育委員会
滝沢規朗・野田豊文2002　「新潟県北部地域の弥生時代中期後半から後期の土器ついて」『新潟県考古学談話会会報 』第26号　新潟県考古学談話会
滝沢規朗ほか　2003　「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に－」『三面川流域の考古学 第２号』　三面川を考える会
高橋　保　1990　「県内の弥生中期の土器―櫛描分系土器を中心として」『新潟県考古学談話会会報』第６新潟県考古学談話会
田嶋明人　1986　『漆町遺跡Ｉ』　石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人　1987　『永町ガマノマガリ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
辰巳和弘　1997　「古墳社会の信仰」『季刊考古学』59号　雄山閣
田中　靖・丸山一昭　1999　「第３章２節 土器 第２項弥生中期後半」『新潟県の考古学』　高志書院
田辺早苗　1990　『神林村埋蔵文化財調査報告 第２高田遺跡発掘調査概報』　新潟県神林村教育委員会
田辺早苗　1991　『神林村埋蔵文化財調査報告 第３長松遺跡発掘調査報告書』　新潟県神林村教育委員会
田辺早苗ほか　2001　『神林村埋蔵文化財調査報告 第９衣田遺跡・道上遺跡』　新潟県神林村教育委員会
田辺早苗ほか　2002a　『神林村埋蔵文化財調査報告第13六百地遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗ほか　2002b　『神林村埋蔵文化財調査報告第14金曲遺跡』　新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗　2003a　『神林村埋蔵文化財調査報告第16千作り遺跡・平林城跡・千眼寺跡・持体遺跡』　新潟県神

林村教育委員会
田辺早苗ほか 2003b 『神林村埋蔵文化財調査報告第17 高田遺跡』 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ研究論集 第10集
田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
田村浩司 2004 「三条市吉津川遺跡・藤ノ木遺跡の調査概要」『新潟県考古学会第16回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
鶴巻康志・田中耕作 1994 『新発田市埋蔵文化財調査報告第15 平成5年新発田市遺跡範囲確認調査報告書 金屋遺跡 佐々木山遺跡 上車野E遺跡』 新潟県新発田市教育委員会
寺﨑裕助・佐藤優一ほか 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第135集 反貫目遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
寺島文隆・長島雄一 1982 「土取場塚群・土取場B遺跡」『阿武隈地区遺跡分布調査報告(Ⅱ)』 福島県教育委員会
東海考古学フォーラム 1996 「鍋と甕 そのデザイン」『第4回 東海考古学フォーラム』 東海考古学フォーラム
富樫秀之ほか 2002 『アチヤ平遺跡上段』 新潟県朝日村教育委員会
戸根与八郎 1978 『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書 五分一稲場遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第14 新潟県教育委員会
戸根与八郎ほか 1982 『中条町史』資料編第1巻 新潟県中条町教育委員会
土壌標準分析・測定法委員会編 1986 『土壌標準分析・測定法』 博友社
土壌養分測定法委員会編 1981 『土壌養分分析法』 養賢堂
土橋由理子 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第131集 上信越自動車道関係発掘調査報告書 小野沢西遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
豊栄市史編纂委員会 1988 『豊栄市史』資料編1 考古編 新潟県豊栄市
中島栄一ほか 1973 『千刈遺跡調査略報』 新潟県加茂市教育委員会
中屋克彦 1994 『金沢市戸水B遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会
新潟県北蒲原郡役所 1916 『新潟縣北蒲原郡是』 新潟県北蒲原郡役所
新潟県教育委員会・村上市教育委員会 1962『新潟県文化財調査報告書第9 磐舟－磐舟柵跡推定地調査報告書－』 新潟県教育委員会・新潟県村上市教育委員会
新山雅広 2003 「種実同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第127集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ 道端遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会
日本貨幣商協同組合 2004 『日本貨幣カタログ』 日本貨幣商協同組合
布尾和史・布尾幸恵 2002 『藤江C遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 『新版標準土色帖』
橋本正博・福海貴子 2003 『千代・能美遺跡』 石川県小松市教育委員会
林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社 2001「亀里平塚遺跡の自然化学分析」『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第280集 亀里平塚遺跡 主要地方道前橋・長瀞線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社 2002「横手南川・横手湯田遺跡の自然化学分析」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第292集 横手南川・横手湯田遺跡 北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 第1分冊(本文編)』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「自然化学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第135集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅵ 反貫目遺跡』 新潟県教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2005a 「自然化学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第143集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅷ 六斗蒔遺跡』 新潟県教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2005b 「自然化学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第146集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅹ 西川内北遺跡・西川内南遺跡』 新潟県教育委員会

パリノ・サーヴェイ株式会社　2005c 「自然化学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第147集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＩ 昼塚遺跡Ｉ・江添遺跡』 新潟県教育委員会
久田正弘　1991 「能登における弥生時代中期の一様相（1)」『石川県考古学研究会会誌 第34号』 石川県考古学研究会
久田正弘　1993 「能登における弥生時代中期の一様相（2)」『石川県考古学研究会会誌 第36号』 石川県考古学研究会
平田天秋　2005 「珠洲・珠洲系」全国シンポジウム『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』 全国シンポジウム『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』実行委員会
広瀬和雄　1998 「弥生時代の神殿」『都市と神殿の誕生』 新人物往来社
廣野耕造　1996 『石動遺跡　平成７年度発掘調査概報』 新潟県新潟市教育委員会
福海貴子　2003 『八日市地方遺跡』 石川県小松市教育委員会
福島県教育委員会　1978 『福島県文化財調査報告書　第67集　母畑地区遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 福島県教育委員会
福田　聖　2004 「方形周溝墓と周溝を有する建物跡」『方形周溝墓の再発見』 同成社
藤野富士夫　1974 『富山市境野新遺跡発掘調査報告書　古墳時代住居跡』 富山県富山市教育委員会
古澤妥史　2003 「弥生時代前半期の土器」『三面川流域の考古学　第２号』 奥三面を考える会
ペドロジスト懇談会編　1984 『土壌調査ハンドブック』 博友社
前川雅夫ほか　2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第142集 道端遺跡Ⅲ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
増山　仁　1989 「北陸の考古学Ⅱ 小松式土器の再検討」『石川県考古学研究会会誌 第32号』 石川県考古学研究会
町田勝則　1995 「石器の研究法－報告文作成に伴う観察・記録法②－」『長野県埋蔵文化財センター紀要』 4 （財）長野県埋蔵文化財センター
町田勝則　1996 「石器の研究法－報告文作成に伴う観察・記録法①－」『長野県の考古学』 1 （財）長野県埋蔵文化財センター
丸山一昭　1998 『松ノ脇遺跡』 新潟県和島村教育委員会
水澤幸一　1999 『中条町埋蔵文化財調査報告第17集 町内遺跡Ⅴ』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一ほか　1999 『中条町埋蔵文化財調査報告第22集 主要地方道中条紫雲寺線改築工事に伴う発掘調査報告書Ｉ 船戸桜田遺跡２次』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2002 『中条町埋蔵文化財調査報告 第24集 船戸川崎遺跡４次』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一・吉村光彦　2002 『中条町埋蔵文化財調査報告 第25集 船戸桜田遺跡４次・５次 船戸川崎遺跡６次』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一・吉村光彦　2004 『中条町埋蔵文化財調査報告 第31集 屋敷遺跡２次』 新潟県中条町教育委員会
御堂島正　1989 「有肩扇状石器の使用痕分析―南信州弥生時代における打製石器の機能―」『古代文化』41 3 考古學協會
宮脇　昭編著　1985 『日本植生誌　中部』 至文堂
村上市史編纂委員会　1999 『村上市史』通史編１ 原始・古代・中世　新潟県村上市
村上市史編纂委員会　2000 『村上市史』別編 絵図・地図、年表　新潟県村上市
安　英樹　2002 「北陸の弥生集落概観」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
山田隆一　2004 「近畿－大型建物の変遷とその性格について－」『季刊考古学』86号　雄山閣
吉川昌伸･吉川純子　2005 「道端遺跡の河川内堆積物から産出した植物化石群」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第142集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ 道端遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会
渡邊朋和　1990 「新潟県における縄文時代晩期終末から弥生時代中期前葉の土器」『新潟県考古学談話会会報』第６号　新潟県考古学談話会
渡邊裕之　1999 「第３章２節 土器 第１項弥生前期・中期前集」『新潟県の考古学』 高志書院
渡邊裕之・内藤真一ほか　2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第127集 道端遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・（財）

新潟県埋蔵文化財調査事業団
渡邊裕之・辻　範朗　2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第145集 道端遺跡Ⅳ』 新潟県教育委員会・(財)
新潟県埋蔵文化財調査事業団
Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M. 1976『SOILCHEMISTRY』[岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行(訳)
1980『土壌の化学』 学会出版センター]
Bowen,H.J.M. 1979『Environmental Cemistry of Elements』[浅見輝男・茅野　充男(訳) 1983『環境無機化学.
元素の循環と生化学』 博友社]
G race, R . 1989 *Interpreting the Function of Stone Tools: The Quantification and Computerization of Microwe ar Analysis. BAR International Series 474,Oxford.*
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編) 1998『広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト
伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修)』 海青社

掘立柱建物（SB107）

柱穴番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	柱材	主軸方位
P1	楕円形	U字状	40	34	50	有	N－1°－E
P2	円形	U字状	30	30	46	有	
P3	円形	U字状	32	30	30	有	
P4	楕円形	U字状	36	30	30	有	面積
P5	楕円形	U字状	36	28	48	有	10.05㎡
P6	楕円形	U字状	25	25	40	有	

土坑

遺構名	遺構図版	写真図版	グリッド	平面形態	断面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	方位	検出面	出土遺物	切り合い関係
SK1	7	53	43O1・2・6・7	円形	弧状	270	210	13	1層	N-1－-E	Ⅲb1層	193・273	無
SK2	7	53	43Q24・25、43R4・5、44Q21、44R1	楕円形	弧状	500	150	15	2層	N-1－-E	Ⅲb1層	64	無
SK3	7	53	43R4・5	楕円形	台形状	100	52	11	3層	N-90－-E	Ⅲb1層	—	無
SK4	20	60	43・44N、O	楕円形	弧状	—	265	10	1層	N-15－-E	Ⅲb3層	153・274	無
SK5	20	—	43N・O	楕円形	弧状	—	—	5	1層	-	Ⅲb3層	土器片	無
SK6	20	—	43O	楕円形	弧状	55	40	5	1層	N-7－-E	Ⅲb3層	土器片	無
SK7	20	—	43O	楕円形	弧状	70	55	5	1層	N-1－-E	Ⅲb3層	—	無
SK8	20	—	43O	楕円形	弧状	65	60	5	1層	N-24－-E	Ⅲb3層	—	無
SK102	7	53	50Q8	楕円形	弧状	64	27	16	4層	N-72－-E	Ⅲb1層	—	無
SK116	8	54	54Q	楕円形	半円状	115	110	30	1層	N-28－-E	Ⅲb1層	6～12	無
SK120	22	—	55P20・25	円形	弧状	110	76	8	2層	N-74－-E	Ⅲb3層	—	3号周溝遺構
SK126	21	71	53R3・4・7～9	—	弧状	390	220	15	2層	N-38－-W	H1層	154・155・275～279	SD122・SX126
SK130	22	—	55Q	楕円形	台形状	130	45	8	1層	N-22－-W	H2層直下	—	SI8
SK132	21	72	54R1・2・6・7	楕円形	弧状	170	120	12	2層	N-68－-E	H1層	—	無
SK134	22	72	55P16	楕円形	弧状	165	120	12	1層	N-83－-W	H2層直下	156	SI8

溝跡

遺構名	遺構図版	写真図版	グリッド	断面形態	長径(m)	短径(cm)	深さ(cm)	方位	傾斜	検出面	出土遺物	切り合い関係
SD122	23	72	53Q・R、54P・Q	V字状	—	—	—	—	西→東	H1層直下	157・158・280	SK121
SD125	23	72	55M～57Q	台形	—	—	—	—	西→東	H1層直下	159～162	SD127・129
SD127	23	73	55M～57Q	弧状	(29.11)	90.4	35.8	N-75－-E	西→東	H1層直下	—	SD125
SD128	23	73	57N・O	台形	12.5	60.2	8.4	N-75－-E	西→東	H1層直下	—	無
SD129	23	73	56O・P	弧状	11.5	44.5	6.3	N-138－-E	北西→南東	H1層直下	163	SD125

性格不明遺構

遺構名	遺構図版	写真図版	グリッド	平面形態	断面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	方位	検出面	出土遺物	切り合い関係
SX104	8	56	50Q8・9	楕円形	V字状	23	18	37	2層	N-69－-E	Ⅲb1層	338	無
SX111	22	—	50N	不整形	不整台形	204	176	16	1層	N-47－-W	Ⅲb3層	285～287	無
SX117	21	75	54Q	楕円形	弧状	128	96	20	3層	N-3－-E	H1層	204～206	無
SX118	8	—	53Q4・5、53R4・5・9	不整形	不整形	220	190	8	1層	-	Ⅲb1層	—	無
SX119	8	56	52O	楕円形	弧状	(128)	(40)	(24)	2層	N-17－-W	SR2直上	73～82	無
SX121	8	—	53R3・4・7～9	不整形	弧状	390	220	15	2層	N-39－-W	Ⅲb1層	178～180・291・351・359・395	SX118、SD122
SX123	21	75	55R	楕円形	不整形	(234)	90	10	3層	N-34－-E	H1層直下	—	無
SX135	4	—	55Q	不整形	-	55.6	22	-	-	N-95－-E	H2層	—	1号周溝遺構
SX136	4	—	42O	不整形	不整形	61.6	57.6	-	-	N-38－-E	Ⅲb3層	228	無

ピット

遺構名	グリッド	平面形態	断面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	柱根（痕）	検出面	出土遺物	切り合い関係
54Q-P1	54Q23	楕円形	U字状	23.1	21.0	18.0	無	H1層	—	無
54Q-P2	54Q24	楕円形	U字状	21.0	18.0	38.0	無	H1層	—	無
54Q-P3	54Q24	楕円形	U字状	21.0	18.0	7.0	無	H1層	—	無
54Q-P4	54Q19	円形	U字状	23.7	22.2	10.0	無	H1層	—	無
54Q-P5	54Q24	円形	半円状	34.5	33.6	11.0	無	H1層	—	無
54Q-P6	54Q20	円形	V字状	19.8	19.8	9.0	無	H1層	—	無
54R-P1	54R1	楕円形	漏斗状	35.4	27.9	22.0	無	H1層	—	無
54R-P2	54R2	楕円形	V字状	28.2	25.8	16.0	無	H1層	206	無
54R-P3	54R3	楕円形	漏斗状	47.7	41.1	51.0	無	H1層	—	無
54R-P4	54R4	楕円形	漏斗状	30.3	28.5	46.0	無	H1層	—	54R-P5
54R-P5	54R4	円形	V字状	31.8	27.6	32.0	無	H1層	—	54R-P4
55Q-P1	55Q22	円形	漏斗状	40.8	39.3	24.0	無	H1層	—	1・2号周溝遺構、SI8
55Q-P2	55Q24	楕円形	階段状	36.0	25.8	32.0	無	H1層	—	1・2号周溝遺構
55R-P1	55R3	楕円形	U字状	30.6	27.0	27.0	無	H1層	—	SI13
55R-P2	55R3	楕円形	U字状	32.1	23.1	32.0	無	H1層	—	無
56Q-P1	56Q6	円形	U字状	23.1	22.5	22.0	無	H1層	—	3号周溝遺構
56Q-P2	56Q13	楕円形	V字状	19.5	17.1	20.0	無	H1層	—	SI10
56Q-P3	56Q13	円形	U字状	19.2	18.6	6.0	無	H1層	—	SI10
56Q-P4	56Q18・23	円形	U字状	30.3	32.7	35.0	無	H1層	—	SI10
56Q-P5	56Q18	円形	階段状	24.9	23.1	26.0	無	H1層	—	SI10
56Q-P6	56Q16・17・21	楕円形	階段状	37.8	29.7	30.0	無	H1層	—	SI11・12
56R-P1	56R2	円形	U字状	27.0	25.5	30.0	無	H1層	—	SI11・12
P101	50Q4	楕円形	台形状	46.4	39.2	12.5	無	Ⅲb1層	2	無
P103	50Q3	楕円形	台形状	45.6	36.8	16.7	無	Ⅲb1層	—	無
P106	51P7	楕円形	弧状	52.8	33.6	9.2	無	Ⅲb1層	—	無
P108	50Q9	円形	漏斗状	43.2	38.4	28.0	有	Ⅲb1層	—	無
P109	50Q10	円形	台形状	32.0	28.0	42.0	有	Ⅲb1層	336	無
P110	50Q10・51Q6	円形	箱状	34.4	28.0	14.0	有	Ⅲb1層	337	無
P112	50N17	楕円形	台形状	37.6	32.0	11.4	無	Ⅲb3層	—	無
P113	50N18	円形	台形状	36.0	34.4	13.6	無	Ⅲb3層	—	無

古墳時代の土器観察表

凡例

1 種　　別　　土：土師器、須：須恵器
2 法　　量　　（　　）の数値は推定値である。
3 色　　調　　『新版　標準土色帳』〔小山・竹原 2002〕
4 鉱　　物　　雲：雲母、海：海綿状骨針、石：石英、長：長石
5 調　　整　　口：口縁部、頸：頸部、肩：肩部、胴：胴部、体：体部、底：底部、脚：脚部。「→」は調整の順序を表す。黒：黒色処理
6 口　　残　　口縁部残存率を x/36 で表した。

古墳時代の土器観察表（1）

報告	種別	器種	出土位置			法量（cm）			胎土	鉱物	色調		焼成	調整		口残	備考
No.			グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高			内面	外面		内面	外面	(x/36)	
2	土	高杯	50P	SB107-P5	1 層	—	—	(2.6)	やや密	長	N3/0 暗灰色	2.5Y8/2 灰白色	やや良	杯：ミガキ・黒　脚：磨耗	磨耗	—	
3	土	甕	43O2	SK1	1 層	(18.8)	—	(4.9)	やや粗	石・長	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	やや良	口：ナデ　頸：磨耗	口：ナデ　頸：磨耗	7	
4	土	甕	43Q	SK1	1 層	(23.0)	—	(7.5)	やや密	雲	10YR7/3 にぶい黄橙色	5YR7/4 にぶい橙色	良	磨耗	磨耗	5	
5	土	甕	43R	SK2	1 層	(21.0)	4.6	(26.0)	やや密	雲	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	口：ナデ　胴上：ヘラナデ 胴下～底：ハケ	口：ナデ　胴上：ハケ 胴下：ヘラナデ	25	
6	土	椀	54Q	SK116	2 層	(15.0)	—	(5.8)	密	雲・長	5Y7/4 にぶい橙色	5Y7/4 にぶい橙色	良	磨耗　口：ミガキ	磨耗　口：ミガキ	10	
7	土	椀	54Q	SK116	1・2 層	15.9	—	6.3	密	雲・石	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	良	口:ナデ　体～底：ヘラナデ	口：ナデ　体～底：ハケ	20	
8	土	椀	54Q	SK116	1・2 層	(17.0)	—	5.1	密	雲・海	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや良	磨耗	磨耗	10	
9	土	椀	54Q	SK116	1 層	(15.6)	—	(6.3)	やや粗	雲・長	N2/0 黒色	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良	ミガキ・黒	口:ナデ・黒　口端:ミガキ・黒 体：磨耗（上：ミガキ・黒）	1	
10	土	甕	54Q	SK116	2 層	(18.8)	—	(10.3)	やや密	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	口:ナデ　頸:横ヘラナデ　胴:ヘラナデ	口～頸：ナデ　頸～胴：ハケ	6	
11	土	甕	54Q	SK116	2 層	(20.8)	—	(10.9)	やや密	雲・石・長	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	やや不良	口：ナデ　頸：ヘラナデ	口：ナデ　胴：ハケ	25	
12	土	甕	54Q	SK116	2 層	—	4.3	(2.1)	やや密	雲・石・長	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	ハケ	ケズリ	—	
13	土	椀	42Q	SR1	3 層	(7.6)	—	(5.7)	密	石・長	10YR3/2 黒褐色	10YR2/1 黒色	良	ミガキ	ミガキ	3	
14	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(15.0)	—	(3.5)	密	雲	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや不良	摩耗	摩耗	4	
15	土	椀	53R	SR2a	2 層	(15.9)	4.0	6.1	密	雲・長	N3/0 暗灰色	10YR8/4 浅黄橙色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	12	
16	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(12.7)	—	(3.1)	密	雲・石	N3/0 暗灰色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	ミガキ・黒	口:ミガキ・黒　体：ヘラナデ	4	
17	土	椀	53R	SR2a	2 層	(15.6)	—	(3.5)	やや密	雲・海・長	N3/0 暗灰色	7.5YR8/4 浅黄橙色	やや良	ミガキ・黒	口：ナデ　体：ヘラナデ	3	
18	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(16.8)	—	(3.2)	密	雲・海	N3/0 暗灰色	N3/0 暗灰色	良	ミガキ・黒	ミガキ・黒	1	
19	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(16.4)	—	(3.8)	密	雲・石	N3/0 暗灰色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	ミガキ・黒	口～体：ミガキ 体：ヘラナデ	2	
20	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(12.2)	—	(4.5)	やや粗	雲	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	良	ミガキ	ミガキ	18	
21	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(14.0)	—	(3.7)	密	雲・長	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	やや不良	口：ナデ　体：ミガキ	摩耗	4	
22	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(14.6)	—	(3.5)	やや密	雲・石・長	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良	ミガキ	ミガキ	3	
23	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(14.4)	—	(3.6)	やや密	雲・海・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	ミガキ	ミガキ	10	
24	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(15.4)	—	(4.8)	やや密	雲・海・石・長	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良	ナデ	口：ナデ　胴：ミガキ	4	
25	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(17.0)	—	(2.4)	密	雲	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	摩耗	摩耗	2	

古墳時代の土器観察表（2）

報告	種別	器種	出土位置			法量（cm）			胎土	鉱物	色調		焼成	調整		口残	備考
No.			グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高			内面	外面		内面	外面	(x/36)	
26	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(17.8)	—	(4.2)	やや密	雲・海・石	7.5Y6/3 にぶい褐色	7.5Y6/3 にぶい褐色	やや良	ミガキ	口：ミガキ　体：ヘラナデ	1	
27	土	椀	52Q	SR2a	2 層	(13.2)	—	(2.9)	密	雲・海・石	N2/0 黒色	7.5YR7/3 にぶい橙色	良	摩耗・黒	摩耗・黒	5	
28	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(12.4)	—	(3.0)	やや密	雲・長	N3/0 暗灰色	7.5YR8/4 浅黄橙色	やや良	ミガキ・黒	摩耗	5	
29	土	椀	53R	SR2a	2 層	13.9	4.0	5.2	密	雲・石	N2/0 黒色	2.5Y7/3 浅黄色	良	口：横ミガキ 体～底：放射状　ミガキ・黒	横ミガキ・黒	1	
30	土	椀	53R	SR2a	2 層	18.1	3.8	7.2	密	雲	N4/0 灰色	10YR8/4 浅黄橙色	良	口：横ミガキ 体～底：放射状ミガキ	横ミガキ	8	
31	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(18.5)	—	(4.3)	密	雲・海・石	N3/0 暗灰色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	ミガキ・黒	口：ミガキ・黒 体：ヘラナデ	7	
32	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(13.0)	—	(3.0)	やや密	雲	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良	摩耗	摩耗	3	
33	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(12.2)	—	(3.5)	密	雲・石・長	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	良	口：ナデ　体：ヘラナデ	ナデ	1	
34	土	椀	53Q	SR2a	2 層	(15.0)	—	(3.5)	やや密	雲・海・長	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良	ナデ	ナデ	2	
35	土	椀	52R	SR2a	2 層	(15.0)	—	(4.0)	密	雲・長	N3/0 暗灰色	10YR8/2 灰白色	良	ミガキ	口：ミガキ　体：摩耗	4	
36	土	椀	53Q	SR2a	2 層	—	—	—	密	海・石	N2/0 黒色	2.5Y6/1 黄灰色	良	ナデ	ヘラケズリ	—	底部外面「×」
37	土	高杯	53R	SR2a	3 層	—	—	(4.0)	密	雲・海	N4/0 灰色	2.5Y7/3 浅黄色	良	杯：摩耗・黒 脚：ヘラナデ	脚：ヘラナデ	—	
38	土	高杯	53Q	SR2a	2 層	—	—	(7.0)	密	海・石	N3/0 暗灰色	2.5Y7/2 灰黄色	良	摩耗　杯：ミガキ・黒	摩耗	—	
39	土	壺	53R	SR2a	3 層	(17.2)	—	(3.7)	やや密	雲・長	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR6/3 にぶい褐色	良	ミガキ・赤	ミガキ	4	
40	土	壺	53R	SR2a	2 層	(9.8)	—	(4.2)	やや密	雲・石	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	良	ミガキ	ミガキ	5	
41	土	壺	53Q	SR2a	2 層	(9.0)	—	(8.2)	やや密	雲・長	2.5Y6/1 黄灰色	5YR7/6 橙色	やや良	摩耗	摩耗	1	
42	土	甑	53R	SR2a	2 層	(19.6)	—	(5.9)	やや密	雲・海・石	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	良	口：ナデ　体：ハケ	口：ナデ　体：ヘラナデ	6	
43	土	甑	53Q	SR2a	2 層	—	(4.0)	(11.4)	やや密	雲・海・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	ヘラナデ	体上：縦ヘラナデ 体下：ケズリ	—	
44	土	甕	53Q	SR2a	2 層	(16.4)	—	(4.1)	やや粗	雲・長	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良	口：ナデ　胴：ヘラナデ	口：ナデ　頸：ハケ	10	
45	土	甕	53R	SR2a	2 層	(18.0)	—	(6.0)	やや密	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	摩耗	摩耗	5	
46	土	甕	53Q	SR2a	2 層	(17.7)	—	(10.7)	密	雲・石・長	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	口～頸：ナデ 頸～肩：ヘラナデ 胴：ヘラナデ	口～肩：ナデ　胴：ハケ	6	
47	土	甕	53Q	SR2a	2 層	(21.0)	—	(3.7)	やや密	雲・長	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良	口：ナデ　頸：ハケ	口：ナデ頸：ハケ	5	
48	土	甕	53Q	SR2a	2 層	(24.0)	—	(4.1)	やや粗	雲・長	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	良	口：ナデ　頸：ヘラナデ	ナデ	5	
49	土	甕	53Q	SR2a	2 層	(24.4)	—	(6.4)	粗	雲・石・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや不良	口：ナデ　頸：ハケ 胴：ヘラナデ	口：ナデ　肩：ハケ 胴：摩耗	7	
50	土	甕	53R	SR2a	2 層	(14.0)	—	(6.1)	やや密	雲・長	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良	口：ナデ　胴：ヘラナデ	口：ナデ　頸～胴：ハケ	9	
51	土	甕	53R	SR2a	2 層	(18.4)	—	(6.6)	やや粗	雲・石・長	10YR6/3 にぶい黄橙色	N3/0 暗灰色	良	ハケ	口：ナデ　頸～胴：ハケ	4	
52	土	甕	53Q	SR2a	2 層	(19.0)	—	(5.8)	やや密	雲・石・長	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	口：ナデ 頸～肩：ヘラナデ	口：ナデ　頸～肩：ハケ	6	
53	土	甕	53Q	SR2a	2 層	(21.0)	—	(4.2)	やや粗	雲・石・長	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	良	ハケ→ナデ	口：ナデ　頸：ハケ	6	
54	土	甕	50M	SR2a	2 層	(16.4)	—	(10.1)	密	雲・海・石・長	N3/0 暗灰色	2.5Y6/2 黄灰色	良	口：ナデ 胴：ヘラナデ→ナデ	口：ナデ　胴：ハケ	4	スス付着
55	土	甕	53Q	SR2a	2 層	(19.0)	—	(3.9)	やや密	雲・長	10YR5/1 褐灰色	10YR6/2 灰黄褐色	良	口：ナデ 頸：ハケ・ヘラナデ	口：ナデ　頸：ハケ	3	

古墳時代の土器観察表（3）

報告	種別	器種	出土位置			法量（cm）			胎土	鉱物	色調		焼成	調整		口残	備考
No.			グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高			内面	外面		内面	外面	(x/36)	
56	土	甕	53R	SR2a	2層	(18.5)	—	(8.6)	やや粗	雲・石	5YR5/3 赤褐色	5YR5/3 赤褐色	良	口：ナデ　頸：ハケ 胴：ヘラナデ	口：ナデ　頸～胴：ハケ	8	
57	土	甕	53R	SR2a	2層	(20.0)	—	(4.7)	やや密	雲・石	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや不良	口：摩耗　頸：ヘラナデ	口：ナデ　頸：ハケ→ナデ	5	
58	土	甕	53R	SR2a	2層	(21.1)	—	(17.0)	密	雲・長	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	良	口～頸：ハケ 胴：ヘラナデ	口：ナデ　頸～胴上：ハケ 胴下：細ハケ	2	
59	土	甕	53R	SR2a	2層	(16.6)	—	(6.5)	密	雲・石・長	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良	口：ナデ　頸：ハケ	ナデ	9	
60	土	甕	50M	SR2a	2層	22.0	—	(15.8)	密	雲・石・長	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	良	口：ナデ　頸：ヘラナデ 胴上：ヘラナデ　胴下：ハケ	口：ハケ→ナデ　胴：ハケ	36	
61	土	甕	53QR	SR2a	2層	(15.1)	—	(9.4)	密	雲・石	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR5/2 灰黄褐色	良	ハケ→ナデ	口～頸：ナデ　胴：ハケ	27	
62	土	甕	53Q	SR2a	2層	(18.6)	—	(7.3)	やや密	雲・長	7.5YR6/2 にぶい灰褐色	7.5YR6/2 にぶい灰褐色	良	口：ナデ　頸～胴：ヘラナデ	口：ナデ　頸～胴：ハケ	5	
63	土	甕	53Q	SR2a	2層	(22.4)	—	(5.6)	やや粗	雲・長	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良	口：ナデ　頸～肩：ヘラナデ	口：ナデ　頸～肩：ハケ	9	
64	土	甕	53Q	SR2a	2層	(23.2)	—	(3.7)	やや密	雲・長	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	ナデ	ナデ	6	
65	土	甕	53R	SR2a	2層	(20.0)	—	(4.0)	やや密	雲・長	2.5YR6/6 橙色	2.5YR6/6 橙色	やや不良	口：ナデ　頸：ハケ	ナデ	4	
66	土	甕	53Q	SR2a	2層	(19.8)	—	(2.0)	密	雲・海	2.5Y7/3 浅黄色	N4/0 灰色	良	ナデ	ナデ	2	
67	土	甕	53R	SR2a	2層	—	5.5	(9.7)	密	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	胴：ヘラナデ　底：ハケ	ヘラナデ	—	
68	土	甕	53Q	SR2a	2層	—	4.6	(16.8)	密	雲・長	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良	胴：ヘラナデ　底：ハケ	ハケ	—	
69	土	甕	53Q	SR2a	2層	—	6.5	(14.0)	密	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	ヘラナデ	ハケ	—	
70	須	杯H蓋	53Q	SR2a	2層	(13.1)	—	4.8	密	—	7.5Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	不良	ロクロナデ	口～天下：ロクロナデ 天上：ヘラケズリ	15	
71	須	瓶	51O18・24、53P・Q	包含層・SR2a	Ⅲa層・2層	—	—	(5.9)	堅緻	—	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	良	ロクロナデ	ロクロナデ 体下：ヘラケズリ	—	
73	土	椀	52O12	SX119	1層	(16.5)	—	(2.4)	やや密	雲・海	N2/0 黒色	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや良	ミガキ・黒	摩耗	1	
74	土	壺？	52O12	SX119	1層	—	—	(6.3)	密	雲・海・石・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	やや良	摩耗	摩耗	—	
75	土	甑	52O12	SX119	2層	18.6	5.7	18.5	密	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	口：ヘラナデ　体：ハケ	口：ヘラナデ　体：ハケ	36	単孔
76	土	甕	52O12	SX119	2層	13.1	4.0	17.6	密	雲・海・石・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良	口：ハケ　頸～胴上：ヘラナデ　胴下～底：ハケ	口：ナデ　胴：ハケ	36	
77	土	甕	52O12	SX119	2層	(16.0)	—	(3.6)	やや密	雲・海・石	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良	口：ナデ　頸：ヘラナデ	ナデ	4	
78	土	甕	52O12	SX119	2層	(18.9)	3.5	(18.3)	やや粗	雲・石	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	良	口：ナデ　胴：ハケ	口：ナデ　胴：ハケ	20	
79	土	甕	52O12	SX119	1層	(20.1)	—	(4.6)	やや粗	雲・石	5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや不良	摩耗	摩耗	9	
80	土	甕	52O12	SX119	2層	(22.7)	—	(7.4)	密	雲・長	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	良	口：ナデ　頸：ヘラナデ	口：ナデ　頸～肩：ハケ	34	
81	土	鉢	52O12	SX119	2層	(19.2)	—	(7.2)	やや密	雲・長	5Y7/4 にぶい橙色	5Y7/4 にぶい橙色	やや良	摩耗	摩耗	3	
82	須	甕	52O	SX119	1層	—	—	—	密	—	5PB6/1 青灰色	5PB5/1 青灰色	やや良	同心円文	平行タタキ→ナデ	—	
83	土	高杯	50Q	P101	1層	—	—	(4.2)	密	雲・海・石	N2/0 黒色	10YR8/2 灰白色	良	杯：ミガキ・黒　脚：摩耗	脚：ヘラナデ（摩耗）	—	
84	土	椀	50Q	包含層	Ⅰ層	(14.0)	—	4.8	やや粗	海・石・長	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	やや良	摩耗	口～体：摩耗 底：ヘラケズリ	13	
85	土	椀	50R	包含層	Ⅰ層	(13.1)	—	(3.4)	やや粗	雲	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	やや良	摩耗	摩耗	2	
86	土	椀	43R	カクラン	—	(7.0)	—	(3.3)	密	雲・石・長	7.5YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい黄橙色	良	ミガキ	口：ナデ　体：ヘラナデ	5	

古墳時代の土器観察表（4）

報告	種別	器種	出土位置			法量（cm）			胎土	鉱物	色調		焼成	調整		口残	備考
No.			グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高			内面	外面		内面	外面	(x/36)	
87	土	椀	52R	包含層	Ⅰ層	(12.4)	—	(2.4)	やや密	雲・石	N2/0 黒色	N2/0 黒色	やや不良	摩耗・黒	摩耗・黒	3	
88	土	椀	52R	包含層	Ⅰ層	(17.0)	—	(3.5)	密	雲・石・長	2.5Y6/3 にぶい黄色	2.5Y6/3 にぶい黄色	良	口：ナデ　体：不明	口：ナデ　体：ヘラナデ	1	
89	土	椀	52R	包含層	Ⅰ層	(15.2)	—	(2.7)	密	雲・長	N2/0 黒色	2.5Y7/2 灰黄色	良	ミガキ・黒	口：ミガキ・黒 体：摩耗（ヘラナデ）	2	
90	土	椀	50R17	包含層	Ⅲa層	(19.2)	—	(3.7)	密	雲・海・石・長	N3/0 暗灰色	2.5Y8/2 灰白色	良	口：横ミガキ 体：縦ミガキ・黒	摩耗	3	
91	土	椀	51O	包含層	Ⅰ層	(17.0)	—	(4.4)	やや密	雲・石	N3/0 暗灰色	5YR7/6 橙色	やや良	ミガキ・黒	摩耗	3	
92	土	椀	50P	包含層	Ⅲa層	(12.8)	—	(3.9)	やや密	雲・海・石	5YR7/6 橙色	2.5YR6/6 橙色	やや良	摩耗	摩耗	4	
93	土	椀	54Q4	包含層	Ⅲa層	(14.2)	—	(3.0)	密	雲・石・長	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	良	ナデ	口：ナデ　体：ヘラナデ	1	
94	土	椀	52R	包含層	Ⅰ層	(13.4)	—	(4.1)	密	雲・石	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	良	ミガキ	口：ナデ　体：ヘラナデ	10	
95	土	椀	49Q19	包含層	Ⅲa層	(14.2)	—	(3.5)	密	雲・海	N2/0 黒色	2.5Y8/2 灰白色	良	ミガキ・黒	摩耗　口：一部　ミガキ・黒	2	
96	土	椀	50P	包含層	Ⅲa層	(16.8)	—	(3.3)	密	海・長	N3/0 暗灰色	2.5Y8/2 灰白色	良	ミガキ・黒	口：ミガキ・黒　体：摩耗	1	
97	土	高杯	51P	包含層	Ⅰ層	—	—	(3.3)	密	雲・海	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良	杯：ミガキ・黒　脚：摩耗	杯と脚の境：ナデ 脚：摩耗	—	
98	土	高杯	52R	包含層	Ⅰ層	—	—	(2.3)	密	雲・海・石	N3/0 暗灰色	2.5Y8/2 灰白色	良	摩耗（ミガキ・黒）	摩耗	—	
99	土	高杯	50Q19	包含層	Ⅲa層	—	—	(3.6)	密	雲・海・石	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	良	摩耗	摩耗	—	
100	土	高杯	50R11	包含層	Ⅲa層	—	—	(3.4)	密	海・石	5YR7/6 橙色	10YR8/3 浅黄橙色	やや不良	杯：ミガキ・黒　脚：摩耗	摩耗	—	
101	土	高杯	57O	包含層	Ⅰ層	—	—	(4.0)	やや粗	雲・石	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	やや不良	摩耗	摩耗	—	
102	土	高杯	51Q16	包含層	Ⅲa層	—	—	(4.5)	密	雲	5Y7/1 灰白色	5YR7/6 橙色	良	摩耗	摩耗	—	
103	土	高杯	48N19	包含層	Ⅲa層	—	—	(4.9)	密	雲・石・長	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	良	杯：摩耗　脚：ハケ→ナデ	接合部：ハケ　脚：ヘラナデ	—	
104	土	器台	51O	包含層	Ⅰ層	—	—	(3.0)	密	雲・石・長	2.5Y8/3 浅黄色	2.5Y8/3 浅黄色	良	摩耗　受と脚の境：ヘラナデ	受と脚の境：横ナデ 脚：摩耗	—	
105	土	甑	50Q	包含層	Ⅰ層	(31.0)	—	(4.7)	やや密	雲・石・長	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	やや良	口：ナデ　体：ハケ	口：横ナデ　体：ハケ	4	
106	土	甑	50Q	包含層	Ⅰ層	—	(3.2)	(3.9)	やや密	雲・石・長	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	やや良	ヘラナデ	ハケ	—	単孔
107	土	甑	50R8	包含層	Ⅲa層	—	—	(1.5)	密	石・長	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良	摩耗	摩耗	—	単孔
108	土	甑	52O12	包含層	Ⅰ層	(19.4)	—	—	粗	雲・石・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや不良	口～体：摩耗底：ヘラナデ	摩耗	15	多孔
109	土	壺	50R	包含層	Ⅰ層	—	—	(4.5)	やや粗	雲・石	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	やや不良	摩耗	摩耗	—	
110	土	壺	52Q	包含層	Ⅰ層	(19.2)	—	(5.1)	やや良	雲・石	2.5Y8/3 浅黄色	2.5Y8/3 浅黄色	やや良	摩耗	摩耗	1	
111	土	甕	50P、50Q4	包含層	Ⅰ・Ⅲa層	16.6	—	(13.7)	やや密	雲・長	2.5YR6/6 橙色	2.5YR6/6 橙色	やや不良	口：ナデ　胴：ヘラナデ	口：ナデ　胴：ハケ	36	
112	土	甕	55P	包含層	Ⅰ層	(14.3)	—	(3.1)	密	雲・石・長	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良	ナデ	口：ナデ　肩：摩耗	5	
113	土	甕	51Q	包含層	Ⅰ層	(13.8)	—	(2.1)	やや粗	雲	N4/0 灰色	5YR7/4 にぶい橙色	やや良	摩耗	摩耗	1	
114	土	甕	52O	包含層	Ⅲb1層	17.9	4.9	30.7	やや密	雲・海・石・長	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	良	口：摩耗 頸～底：ヘラナデ	口～胴：ハケ 胴下：ハケ	34	
115	土	甕	56R	包含層	Ⅰ層	(20.4)	—	(6.6)	密	雲・石・長	7.5Y7/3 にぶい橙色	7.5Y7/3 にぶい橙色	やや良	口：ナデ　頸：横ハケ	口端：横ナデ　口下：縦ナデ 頸～肩：横ナデ	2	
116	土	甕	55P	包含層	Ⅰ層	(24.3)	—	(2.6)	やや密	雲・石・長	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや良	摩耗	摩耗	7	

古墳時代の土器観察表（5）

報告 No.	種別	器種	出土位置 グリッド	遺構	層位	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土	鉱物	色調 内面	外面	焼成	調整 内面	外面	口残 (x/36)	備考
117	土	甕	51N	包含層	Ⅰ層	(27.8)	—	(4.3)	やや密	雲	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良	ナデ	口：ナデ　頸：ハケ	3	
118	土	甕	52R	包含層	Ⅰ層	(32.4)	—	(3.7)	密	雲・石	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	良	横ナデ	横ナデ	4	
119	土	甕	51Q	包含層	Ⅰ層	(15.6)	—	(4.6)	密	雲・石・長	10YR7/2 にぶい黄橙色	5YR8/4 淡橙色	良	口：ナデ　頸：ヘラナデ	ナデ	5	
120	土	甕	50Q4、50P10	包含層	Ⅲa層	11.8	5.3	20.0	やや粗	雲・海・石・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	口：ナデ　頸：指圧痕・ハケ胴上：ヘラナデ　胴下～底：ハケ	口：ナデ　胴：ハケ 底：ケズリ	36	
121	土	手づくね土器	50P	包含層	Ⅰ層	(3.0)	3.4	3.0	粗	雲・長	2.5YR7/3 浅黄色	2.5YR7/3 浅黄色	やや不良	指圧痕	指圧痕	7	
122	土	手づくね土器	53N10	包含層	Ⅰ層	(3.0)	3.0	2.4	やや粗	雲	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	良	指圧痕	指圧痕	7	
123	須	杯G蓋	53P20	包含層	Ⅲb1層	(9.3)	—	(1.8)	堅緻	—	5PB7/1 明青灰色	5PB6/1 青灰色	良	ロクロナデ	天：ヘラケズリ 口：ロクロナデ	6	
124	須	杯H身	52N、53M 等	包含層	Ⅰ層	—	受：(12.3)	(3.3)	堅緻	—	5PG6/1 青灰色	5PG6/1 青灰色	良	ロクロナデ	受～体上：ロクロナデ　体下：ヘラケズリ　底：ヘラケズリ	—	
125	須	杯H身	49・50Q、50O・P、51O	包含層	Ⅰ・Ⅲa層	(12.2)	受：(14.0)	5.2	堅緻	—	5B5/1 青灰色	5B5/1 青灰色	良	ロクロナデ	口～体上：ロクロナデ 体下：ヘラケズリ	4	
126	須	杯H身	50Q・R	包含層	Ⅰ層	—	受：(13.8)	(4.4)	堅緻	—	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	良	ロクロナデ	口～体上：ロクロナデ 体下：ヘラケズリ	—	
127	須	無蓋高杯	50Q・R、51・52 P 、51R1	包含層	Ⅰ・Ⅲa層	(14.6)	(8.2)	杯：4.6 脚：6.9	堅緻	—	5PB6/1 青灰色	5PB6/1 青灰色～5PB4/1 暗青灰色	良	ロクロナデ	杯口：ロクロナデ　体中：波状文 体下：ヘラケズリ　脚：ロクロナデ	1	
128	須	瓶	50P3、52O、53N、53N15O、55Q	包含層	Ⅰ・Ⅲa層	—	—	(9.3)	堅緻	—	10BG6/1 青灰色	10BG6/1 青灰色	良	ロクロナデ　底：指圧痕	頸～肩：波状文　肩：凹線（2） 体下：ヘラケズリ　底：不定ナデ	—	
129	須	瓶	52N・O、53M、54L・M	包含層	Ⅰ・Ⅲa層	(11.6)	—	(13.2)	堅緻	—	5PB6/1 青灰色	5PB6/1 青灰色	良	ロクロナデ	口～頸：波状文　肩：擬波状文 体中：ヘラケズリ	1	
130	須	瓶	53M	包含層	Ⅰ層	—	—	—	密	—	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	不良	ロクロナデ	頸：波状文	—	
131	須	瓶	51N	包含層	Ⅰ層	—	—	—	堅緻	—	N7/0 灰白色	N7/0 灰色	やや良	ロクロナデ	頸：波状文	—	
132	須	瓶	54M	包含層	Ⅰ層	(10.2)	—	(6.2)	堅緻	—	5PB6/1 青灰色	5PB6/1 青灰色	良	ロクロナデ	ロクロナデ	7	
133	須	瓶	53M	包含層	Ⅰ層	—	—	—	堅緻	—	N6/0 灰色	N7/0 灰白色	良	ロクロナデ・指圧痕	カキメ	—	
134	須	甕	49Q18、49・50R	包含層	Ⅰ・Ⅲa層	—	—	—	堅緻	—	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	良	同心円文	平行タタキ→ハケ	—	
135	須	甕	52M・52N7、53N13	包含層	Ⅰ層	(22.4)	—	(24.3)	堅緻	—	N6/0 灰色	N6/0 灰色	良	口～頸：ロクロナデ 胴：同心円文	口～頸：ロクロナデ 胴：平行タタキ	4	
136	須	甕	51N	包含層	Ⅲa層	—	—	—	堅緻	—	5RP6/1 紫灰色	5PB6/1 青灰色	良	同心円文→ハケ	格子目タタキ	—	

弥生時代の土器観察表（1）

報告 No.	器種	出土位置 グリッド	遺構	層位	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土	鉱物	色調		焼成	調整 内面	外面	口残 (x/36)	備考
138	壺	42O	SI1	1層	(16.3)	—	(5.0)	やや密	雲・長	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	やや不良	口：ハケ　頸：摩耗	ナデ	9	
139	不明	42O	SI1	1層	—	—	(3.0)	やや密	雲・長	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや不良	摩耗	摩耗	—	
140	壺	43O	SI3	2層	—	—	(2.6)	やや粗	雲・長	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	やや不良	摩耗	摩耗	—	
141	甕	56Q	SI9 炉	1層	(18.0)	—	(2.6)	密	雲	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良	ナデ	ナデ	7	
142	不明	56Q	SI10 周溝	1層	(18.0)	—	(3.7)	やや粗	雲・長	10YR7/1 灰白色	N4/0 灰色	良	摩耗	口：ナデ頸：ハケ	2	
143	不明	56Q22	SI8	2層	(16.8)	—	(3.0)	やや粗	雲・石・長	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	良	ナデ	ヘラナデ	3	
144	甕	55Q	SI8	2層	(19.0)	—	(4.0)	やや密	雲・海・石	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	良	摩耗	口：ナデ頸：ハケ	3	

弥生時代の土器観察表（2）

報告 No.	器種	出土位置 グリッド	遺構	層位	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土	鉱物	色調		焼成	調整 内面	外面	口残 (x/36)	備考
145	甕	55Q	SI8-1 区	1 層	—	—	(2.6)	密	雲・長	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	良	ナデ	口：縄文　頸：沈線	—	
146	不明	55R3	SI8	1 層	—	—	—	やや密	雲	10YR4/1 褐灰色	10YR6/2 灰黄褐色	良	ナデ	沈線文	—	
147	甕	55Q	SI8	2 層	—	(8.0)	(2.8)	粗	雲・石・長	N3/0 暗灰色	10YR8/3 浅黄橙色	やや良	ナデ	ケズリ	—	
148	甕	55Q15	1 号周溝遺構周溝	1 層	(20.0)	—	(3.6)	粗	雲	7.5Y7/1 灰白色～N4/0 灰色	7.5Y7/1 灰白色～N4/0 灰色	良	摩耗	口：ナデ頸：ハケ	3	
149	甕	55Q23	1 号周溝遺構周溝	12 層	—	—	(2.3)	やや密	雲	10YR6/2 灰黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	良	ナデ	沈線文・刺突文	—	
150	甕	53Q23	2 号周溝遺構周構	13 層	—	6.0	(3.5)	やや密	雲	N3/0 暗灰色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	ヘラナデ	ハケ	—	
151	甕	55Q・55Q20	2 号周溝遺構 1 号土坑	1 層	(24.4)	—	(3.0)	密	雲	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR4/1 褐灰色	良	ナデ	口：ナデ頸：ハケ	20	
152	壺	55Q13	3 号周溝遺構 1 号土坑	1 層	—	(6.5)	(3.8)	やや粗	雲	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	摩耗	胴下：ハケ	—	
153	甕	44N	SK4	1 層	—	(7.0)	(8.9)	やや粗	雲・長	2.5Y4/1 黄灰色	2.5Y4/1 黄灰色	やや不良	胴：ハケ　底：指圧痕	ハケ	—	
154	甕	53R	SK126	1 層	(26.4)	—	(3.0)	やや粗	雲・石	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR5/2 灰褐色	良	ハケ	ヘラナデ	2	
155	不明	53R	SK126	2 層	—	9.6	(4.0)	やや粗	雲・石・長	2.5Y8/1 灰白色～N3/0 暗灰色	2.5Y8/1 灰白色～N3/0 暗灰色	良	ヘラナデ	ハケ	—	
156	壺	55Q16	SK134	1 層	(5.3)	4.4	7.2	密	雲・長	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良	ナデ	口～胴上：ナデ 胴下：ヘラケズリ	18	
157	甕	53R	SD122	1 層	(18.2)	(8.0)	—	やや密	雲	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色～N4/0 灰色	やや良	摩耗	口：縄文　頸～肩：沈線 胴：縄文	4	
158	不明	54Q	SD122	2 層	—	—	(3.0)	粗	雲	10YR5/1 褐灰色	10YR5/1 褐灰色	やや不良	摩耗	沈線文	—	
159	鉢	56・57P	SD125	5 層	(22.0)	—	(6.5)	やや密	雲・長	10YR4/1 褐灰色～10YR7/3 黄橙色	10YR4/1 褐灰色	やや良	ハケ・指圧痕	口：ナデ頸～胴：ハケ	7	
160	甕	57Q13	SD125	3 層	(20.2)	—	(2.5)	やや粗	雲・長	2.5Y3/1 黒褐色	2.5Y3/1 黒褐色	良	口：ナデ　頸：ハケ	ナデ	2	
161	不明	57Q13	SD125	5 層	—	—	(3.5)	やや密	雲	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	良	ハケ	ハケ	—	
162	不明	57P	SD125	5 層	—	5.2	(3.9)	やや粗	雲・石	10YR6/2 灰黄褐色	5YR6/3 にぶい橙色	良	ハケ・指圧痕	ハケ	—	底部穿孔
163	不明	56O	SD129	1 層	—	—	(2.1)	やや粗	雲	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	ナデ	縄文	—	
164	蓋	53Q	SR2a	4 層	(4.8)	—	(3.4)	密	雲・海	10YR6/2 灰黄褐色	N3/0 暗灰色	良	ハケメ口縁：沈線文	沈線文	5	
165	鉢	52Q	SR2a	4 層	(18.8)	—	(7.6)	密	長	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	良	ヘラナデ	縄文・沈線文	4	
166	甕	52R	SR2a	4 層	(11.4)	—	(4.6)	密	雲・長	2.5Y4/1 黄灰色～2.5Y2/1 黒色	2.5Y4/1 黄灰色～2.5Y2/1 黒色	良	口縁：羽状文ハケメ→ナデ	口縁：ハケメ→指圧痕 肩～胴：凹線・波状文	4	
167	壺	53R	SR2a	4 層	(7.6)	—	(1.1)	密	雲・海・長	2.5Y5/1 黄灰色	2.5Y5/1 黄灰色	良	羽状文	ハケメ	25	
168	壺	52R	SR2a	4 層	—	—	(6.0)	やや粗	雲・石・長	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良	ハケ	直線文・連続短線文	—	
169	壺	53P	SR2a	4 層	(12.3)	—	(3.7)	やや粗	雲	10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	良	横ハケ	口端：キザミ　口：縦ハケ	4	
170	甕	52P	SR2a	4 層	(25.3)	—	(19.5)	密	雲・海	2.5Y2/1 黒色	2.5Y2/1 黒色	良	口縁～頸：ミガキ胴：ナデ	ハケメ→ミガキ	6	
171	甕	53P	SR2a		(8.8)	—	(3.1)	密	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	口唇：キザミ摩耗不明	口唇：キザミ摩耗不明	5	
172	甕	52Q	SR2a	4 層	(22.0)	—	(1.9)	やや密	雲・海	2.5Y3/1 黒褐色	2.5Y3/1 黒褐色	良	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	2	
173	甕	53R	SR2a	4 層	(22.3)	—	(1.6)	密	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良	摩耗	ナデ	5	
174	甕	52R	SR2a	4 層	(23.4)	—	(3.4)	粗	雲・石・長	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	良	ヘラナデ	口：ナデ　頸：ハケ	2	

弥生時代の土器観察表（3）

報告	器種	出土位置			法量（cm）			胎土	鉱物	色調		焼成	調整		口残	備考
No.		グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高						内面	外面	(x/36)	
175	壺	52・53P	SR2a	4 層	—	—	(26.8)	やや粗	雲・長	2.5Y5/2 暗灰黄色	2.5Y5/2 暗灰黄色	良	頸～胴上：ナデ　胴下：ハケ	頸：ハケ・指圧痕 胴：ハケ→ヘラナデ	—	
176	甕	53P	SR2a	4 層	(17.0)	—	(6.4)	やや粗	雲・海・石	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	良	口：ナデ　頸：ヘラナデ 胴：ハケ	縦ハケ　胴：指圧痕	3	
177	甕	52R	SR2a	4 層	(20.0)	—	(5.4)	やや粗	雲	10YR1.7/1 黒色	10YR1.7/1 黒色	良	口～頸：ナデ　胴：横ハケ	ナデ	4	
178	甕	53Q	SR2a	3 層	(19.8)	—	(2.7)	やや粗	雲・石・長	2.5Y8/3 淡黄色	2.5Y8/3 淡黄色	良	ナデ	口：ナデ　頸：ハケ→ナデ	3	
179	壺	52R	SR2a	4 層	(16.0)	—	(2.8)	やや密	雲	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	良	ナデ	ナデ	6	
180	甕	52P	SR2a	4 層	(20.4)	6.3	24.4	密	雲・海	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	良	工具によるナデ	口縁：刻み　頸～胴：ハケメ 頸：波線文・波状文 底近く：工具によるケズリ	16	
181	甕	50N	SR2a	5 層	(19.4)	6.2	26.6	やや密	雲・長	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良	口端：キザミ　口～頸：横ナデ 胴：ヘラナデ	口：ナデ　頸：縦ハケ 胴：ナナメハケ　底：縦ハケ	9	底部穿孔
182	甕	53R	SR2a	4 層	—	5.2	(13.8)	密	雲・海	2.5Y5/1 黄灰色～ N2/0 黒色	2.5Y5/1 黄灰色～ N2/0 黒色	良	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	—	
183	壺	53P	SR2a	4 層	—	—	(1.4)	密	雲	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良	ナデ	口端：キザミ	—	
184	壺	53R	SR2a	4 層	—	—	—	密	雲・長	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	良	ナデ	口唇：キザミ	—	
185	壺	53Q	SR2a	3 層	—	—	(1.4)	やや粗	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色～ 2.5YR6/6 橙色	2.5Y5/2 暗灰黄色	良	指圧文	ナデ	—	
186	甕	53P	SR2a	4 層	—	—	(3.5)	密	雲	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	良	ハケメ同一工具のキザミ	口唇：キザミ	—	
187	壺	53P	SR2a	4 層	—	—	(5.0)	密	海・長	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	良	ナデ	ナデ口端：キザミ	—	
188	不明	52R	SR2a	4 層	—	—	(6.5)	やや粗	雲・石	10YR4/1 褐灰色	10YR4/1 褐灰色	やや良	摩耗	ハケ	—	
189	壺	52R	SR2a	4 層	—	—	(4.7)	粗	雲・長	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	やや良	工具によるケズリ	条痕（貝殻？）→ヘラミガキ	—	
190	壺	53Q	SR2a	3 層	—	11.0	(4.0)	粗	雲・石・長	N3/0 暗灰色	10YR8/3 浅黄橙色	良	台：ハケ	摩耗	—	
191	壺	53Q	SR2a	3 層	—	6.4	(4.2)	やや粗	雲・長	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや不良	ハケ	摩耗	—	
192	甕	52R	SR2a	4 層	—	7.6	—	粗	雲・海・石・長	2.5Y6/2 灰黄色	10YR6/3 にぶい黄橙色	やや不良	指圧痕	ハケ・指圧痕	—	
193	甕	53Q	SR2a	4 層	—	(6.0)	(3.3)	やや粗	雲・長	2.5Y5/1 黄灰色	2.5Y6/2 灰黄色	良	ケズリ	ケズリ	—	
194	壺	53Q	SR2a	4 層	—	(5.2)	(3.1)	やや密	雲・海	N2/0 黒色	N2/0 黒色	良	ハケ	ハケ	—	底部穿孔
195	甕	53R	SR2a	4 層	—	(4.8)	(3.5)	粗	雲・長	2.5Y5/2 暗灰黄色	2.5Y5/2 暗灰黄色	良	ナデ	ハケ	—	
196	甕	53Q	SR2a	4 層	—	(5.8)	(4.2)	やや粗	雲・海・石・長	2.5Y3/1 黒褐色～ 2.5Y2/1 黒色	2.5Y3/1 黒褐色～ 2.5Y2/1 黒色	良	ハケ→ナデ	ハケ	—	
197	甕	52R	SR2a	4 層	—	(6.6)	(4.5)	密	雲・海・石	2.5Y5/2 暗灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	良	ヘラナデ→ナデ	胴：縄文　胴下～底：ナデ	—	
198	円盤状土製品	52Q	SR2a	4 層	縦：5.8	横：5.0	厚：0.5	やや粗	雲	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y5/2 暗灰黄色	良	ハケ	ナデ	—	円形・孔あり
199	壺	57Q	SR4	5 層	(16.0)	—	(2.3)	やや密	雲	10YR6/2 灰黄褐色	10YR4/1 褐灰色	良	ハケ	ハケ	3	
200	甕	57Q	SR4	2 層	(22.0)	—	(3.3)	粗	石	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや良	摩耗	摩耗	2	
201	甕	57Q	SR4	5 層	—	—	(1.6)	密	雲・石	N4/0 灰色	N4/0 灰色	良	縄文沈線文ナデ	縄文沈線文	—	
202	甕	57Q	SR4	5 層	—	—	(1.1)	やや密	雲	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	ハケ	ハケ沈線（3 条）	—	
203	甕	57Q	SR4	5 層	—	—	(4.3)	やや密	雲	10YR5/2 灰黄褐色	N2/0 黒色	良	ヘラナデ	縄文沈線文	—	
204	不明	54Q	SX117	1 層	—	—	(1.3)	やや密	雲・石	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	やや良	摩耗	摩耗	—	

弥生時代の土器観察表（4）

報告 No.	器種	出土位置 グリッド	遺構	層位	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土	鉱物	色調		焼成	調整 内面	外面	口残 (x/36)	備考
205	甕	54Q	SX117	1 層	(19.0)	—	(5.4)	やや密	雲	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR4/2 灰黄褐色	良	口：ナデ　頸：ヘラナデ	口：ナデ頸：ハケ	3	
206	不明	54R	54R-P2	1 層	—	—	—	やや密	雲・石	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良	ハケ	縄文凹線（2 条）	—	
207	甕	54Q10	包含層	H 1 層	(20.0)	—	(3.5)	やや粗	雲・長	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	良	口：ナデ　頸：ハケ	口：ナデ　頸：ハケ	4	
208	不明	54Q10	包含層	H 1 層	—	—	—	やや粗	雲	2.5Y6/2 灰黄色	10YR4/1 褐灰色	やや不	摩耗	沈線文	—	
209	甕	54Q10	包含層	H 1 層	—	(5.8)	(3.0)	粗	雲・石・長	7.5YR8/2 灰白色	7.5YR8/2 灰白色	やや不	摩耗	ハケ	—	
210	壺	54P	包含層	H 1 層	—	(6.8)	(2.6)	やや粗	雲・石	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや良	摩耗	摩耗	—	
211	不明	55Q25	1 号周溝遺構直上	H 2 層	—	—	(1.2)	密	石	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	ナデ	ナデ	—	
212	不明	55Q	1 号周溝遺構直上	H 2 層	—	—	(2.2)	密	雲	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	やや良	ハケ	ナデ	—	
213	甕	55Q25	1 号周溝遺構直上	H 2 層	—	—	(1.2)	やや密	雲・海	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良	ナデ	摩耗	—	
214	不明	55Q	1 号周溝遺構直上	H 2 層	—	—	(2.8)	やや密	雲・長	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良	口：ナデ　頸：ハケ	口：ナデ頸：ハケ	—	
215	壺	55Q25	1 号周溝遺構直上	H 2 層	(17.4)	—	(1.9)	やや密	雲・石	2.5Y4/1 黄灰色	2.5Y4/1 黄灰色	良	ナデ	ナデ→ハケ	1	
216	甕	55Q23	1 号周溝遺構直上	H 2 層	(22.2)	—	(5.3)	密	雲	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y5/2 暗灰黄色	良	板ナデ	口：縄文 胴：沈線文・スリケシ	3	
217	甕	55Q24	1 号周溝遺構直上	H 2 層	—	—	(5.6)	やや粗	雲・海・石	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR5/2 灰黄褐色	良	ナデ	沈線文（平行線文・菱形文） 縄文	—	
218	不明	55Q	1 号周溝遺構直上	H 2 層	—	—	(3.2)	やや密	雲・海	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	ナデ	縄文・沈線文	—	
219	不明	55Q	1 号周溝遺構直上	H 2 層	—	—	(3.8)	やや密	雲	N4/0 灰色	N3/0 暗灰色	やや良	ヘラナデ	沈線文（平行線文・波状文）	—	
220	壺	55Q8	包含層	H 2 層	(6.0)	—	(2.9)	やや粗	雲・海	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR6/3 にぶい褐色	良	ナデ	口：ナデ　頸：ハケ	4	
221	甕	55Q9	包含層	H 2 層	—	—	(1.4)	密	雲	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	良	ナデ	ナデ	—	
222	鉢	56Q14	包含層	H 2 層	—	—	(5.0)	やや密	雲	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	やや良	ヘラナデ	口端・体：ナデ　口：縄文	—	
223	鉢	55Q24	2 号周溝遺構直上	H 3 層	(17.8)	—	(6.6)	密	雲	N2/0 黒色	N2/0 黒色	良	ナデ	沈線文・縄文・スリケシ	4	
224	壺	55Q17	2 号周溝遺構直上	H 3 層	(17.0)	—	(2.3)	やや密	雲	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	良	ナデ	ナデ	3	
225	壺	54P5、55Q14	2 号周溝遺構直上	H 3 層	(16.5)	—	(8.2)	やや粗	雲	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良	ハケ	口：キザミ　頸：ハケ 肩：平行線文・ハケ	4	
226	壺	55Q	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	—	(5.3)	やや密	雲・長	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	やや良	ハケ	摩耗	—	
227	不明	56Q21	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	—	(2.9)	やや密	雲・海	N3/0 暗灰色	N3/0 暗灰色	良	ハケ	ハケ	—	
228	不明	55Q20	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	—	(1.4)	やや密	雲	10YR4/1 褐灰色	10YR4/1 褐灰色	良	ハケ	ハケ	—	
229	不明	55Q14	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	—	—	やや粗	雲・石	2.5Y8/3 浅黄色	2.5Y8/3 浅黄色	やや良	底：ヘラナデ 台：ヘラナデ・指圧痕	ハケ	—	
230	鉢	55Q	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	(9.2)	(10.2)	粗	雲・石・長	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良	胴：摩耗　台：指圧痕	胴：ハケ　台：摩耗	—	
231	不明	55Q25	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	—	(5.8)	やや粗	雲	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	やや良	ヘラナデ	縄文・沈線文 （平行線文・波状文）	—	
232	不明	55Q17	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	—	—	やや密	雲	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	良	摩耗	沈線	—	
233	不明	55Q	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	—	(2.9)	粗	雲	10YR2/1 黒色	10YR5/2 灰黄褐色	やや不良	ヘラナデ	縄文・沈線文	—	
234	不明	55R24	2 号周溝遺構直上	H 3 層	—	—	—	やや密	雲	7.5YR5/2 灰褐色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	摩耗	ミガキ・9 条の沈線	—	

弥生時代の土器観察表（5）

報告 No.	器種	出土位置 グリッド	遺構	層位	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土	鉱物	色調		焼成	調整 内面	外面	口残 (x/36)	備考
235	不明	55Q13	2号周溝遺構直上	H3層	—	—	—	密	雲	10YR6/1 褐灰色	10YR7/1 灰白色	やや良	ナデ	6条の沈線	—	
236	甕	55Q15	2号周溝遺構直上	H3層	—	4.8	(3.3)	やや密	雲・石	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	良	ヘラナデ	ハケ	—	
237	甕	55R3	2号周溝遺構直上	H3層	—	5.2	(4.0)	やや密	雲・長	N3/0 暗灰色	2.5YR6/6 橙色～10YR8/4 浅黄橙色	良	摩耗	摩耗	—	
238	甕	55Q12・13	包含層	H3層	(24.0)	—	(3.2)	密	雲	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	やや良	ハケ	ハケ	7	
239	甕	55Q7	4号周溝遺構直上	H3層	—	—	(9.7)	やや密	雲・石	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	やや良	ナデ	頸：ハケ 胴：（波状文・沈線文）	—	
240	鉢	55Q12	包含層	H3層	—	(8.4)	(6.1)	粗	雲・海・石・長	N4/0 灰色	7.5YR7/6 橙色	やや不良	摩耗	胴下：ハケ・摩耗	—	
241	甕	55Q12	包含層	H3層	—	(6.2)	(9.5)	やや密	雲・石	7.5YR6/2 灰褐色～10YR7/3 にぶい黄橙色	7.5YR6/2 灰褐色～10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良	ハケ	ハケ	—	
242	甕	55Q11	包含層	Ⅲ b2b 層	(23.0)	—	(9.4)	やや粗	雲・海	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR4/1 褐灰色	良	口：ナデ　胴：ハケ	口：ナデ胴：ハケ	5	
243	鉢	56R8	包含層	Ⅲ b2b 層	(18.5)	—	(6.2)	やや密	雲	7.5YR7/6 橙色	10YR5/2 灰黄褐色	良	ヘラナデ	縄文・沈線文	4	
244	鉢	54Q1	包含層	Ⅲ b2b 層	—	—	(4.3)	やや粗	雲	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良	摩耗	沈線文	—	
245	甕	54P25	包含層	Ⅲ b2b 層	(22.0)	—	(2.7)	やや粗	雲	10YR7/2 にぶい黄橙色	7.5YR6/2 灰褐色	やや良	摩耗	口：ナデ　頸：ハケ	2	
246	甕	56O23	包含層	Ⅲ b2b 層	—	—	(2.8)	やや粗	雲・長	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	やや不良	摩耗	ナデ	—	
247	甕	56Q3	包含層	Ⅰ層	(24.0)	—	(4.3)	やや密	雲・長	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	良	摩耗	口：ナデ　頸：ハケ	3	
248	壺	55Q5	カクラン	—	(19.2)	—	(3.3)	やや密	雲・石	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	やや良	摩耗	摩耗	4	
249	甕	55Q18	カクラン	—	—	—	(2.6)	粗	雲	10YR6/2 灰黄褐色	N1.5/ 黒色	やや不良	ナデ	擬凹線ミガキ	—	
250	不明	54P3	—	Ⅲ b3 層	—	—	—	やや粗	雲・石	5YR7/4 にぶい橙色	5YR5/2 灰褐色	良	摩耗	ナデ	—	
251	壺	43N	—	Ⅳ b 層	—	4.1	(14.0)	密	雲	2.5Y7/4 浅黄色～2.5Y4/2 暗灰黄色	2.5Y7/4 浅黄色～2.5Y4/2 暗灰黄色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	—	漆
252	不明	49N1	—	Ⅳ a 層	—	—	(3.7)	粗	雲	2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y7/2 灰黄色	良	ナデ	沈線文	—	
253	不明	56Q11	—	Ⅲ b3 層	—	—	—	粗	雲	10YR5/1 褐灰色	10YR5/1 褐灰色	良	摩耗	摩耗	—	
254	不明	56Q	—	Ⅰ層	—	—	(2.9)	やや粗	雲・海	10YR4/1 褐灰色	10YR4/1 褐灰色	やや良	ナデ	沈線文（平行線文・波状文）	—	
255	不明	56Q	カクラン	—	—	—	(4.0)	密	雲・石	10YR6/2 灰黄褐色	10YR3/2 黒褐色	良	ヘラナデ	ミガキ・凹線文	—	
256	壺	43N	—	Ⅳ b 層	—	(6.7)	(5.6)	やや粗	雲	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	やや不良	摩耗	胴：摩耗　台：指圧痕	—	
257	甕	43O	—	Ⅰ層	—	(6.6)	(4.1)	やや粗	雲	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	良	摩耗	ハケ	—	
258	甕	56Q11	—	Ⅰ層	—	(7.4)	(6.8)	やや粗	雲・長	N4/0 灰色	2.5Y7/2 灰黄色	良	胴：ハケ　底：指圧痕	摩耗	—	
259	甕	56Q11	—	Ⅲ b3 層	—	5.0	(3.0)	やや密	雲・海・石	10YR7/3 にぶい黄橙色～10YR2/1 黒色	10YR7/3 にぶい黄橙色～10YR2/1 黒色	良	ヘラナデ	縄文	—	
260	甕	55Q9	カクラン	—	—	(7.0)	(3.9)	やや粗	海・石	5YR6/6 橙色	—	良	摩耗・指圧痕	摩耗	—	

古墳時代　石製品観察表

報告番号	器種	出土地点			法量				石材	備考
		グリッド	遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
1	砥石	54R	SI6 カマド	1 層	11.1	3.5	3.5	227	凝灰岩	有溝砥石
72	砥石	53R	SR2a	2 層	9.5	3.6	2	96	凝灰岩	穿孔有
137	紡錘車	51Q	−	Ⅰ層	3.9	(3.6)	1.6	30	滑石	一部欠損

遺構内出土石器観察表

報告番号	器種	出土地点			法量				石材	備考
		グリッド	遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
261	石鏃	43O	SI3	2 層	3.0	1.5	0.4	1	頁岩	凸基有茎鏃
262	石鏃	43O	SI3	2 層	2.6	1.6	0.4	1	頁岩	凹基有茎鏃
263	石鏃未製品	43O	SI3	4 層	4.0	2.35	1.0	9	頁岩	
264	楔形石器	43O	SI3	2 層	3.6	2.9	0.6	8	頁岩	
265	剥片	43O-7	SI3	2 層	3.6	4.1	0.9	11	チャート	
266	剥片	43O	SI3	2 層	2.9	5.6	0.4	12	チャート	
267	剥片	43O	SI3	2 層	4.9	3.2	0.8	14	チャート	
268	剥片	43O	SI3	2 層	4.45	5.65	1.15	26	チャート	
269	剥片	43O	SI3	2 層	5.45	3.95	0.9	17	チャート	
270	石鏃	56R	SI12 周溝	1 層	(3.4)	2.2	0.6	3	流紋岩	凹基有茎鏃　先端部・茎部欠損
271	石鏃	55Q	2 号周溝遺構 1 号土坑	1 層	3.9	1.8	0.55	3	流紋岩	平基有茎鏃
272	石鏃	55Q	2 号周溝遺構 1 号土坑	1 層	2.2	(1.6)	0.25	1	頁岩	凹基有茎鏃　左側かえし欠損
273	石鏃	55Q13	2 号周溝遺構周溝	2 層	(3.05)	1.2	0.35	1	頁岩	凹基有茎鏃　茎部欠損
274	石鏃	44N	SK4	1 層	2.9	1.5	0.4	2	頁岩	凹基有茎鏃
275	石鏃	53R	SK126	2 層	(2.4)	1.35	0.45	1	チャート	凹基有茎鏃　先端部・茎部欠損
276	石鏃	53R	SK126	2 層	2.4	1.0	0.3	1	頁岩	凸基有茎鏃
277	石錐	53R	SK126	2 層	2.2	0.7	0.5	1	頁岩	
278	剥片	53R	SK126	2 層	6.3	5.9	3.9	116	頁岩	a・b・c・d 接合資料
278-a	剥片	53R	SK126	2 層	4.5	4.7	1.6	25	頁岩	
278-b	剥片	53R	SK126	2 層	6.15	3.85	1.9	50	頁岩	
278-c	剥片	53R	SK126	2 層	2.0	3.6	0.55	5	頁岩	
278-d	剥片	53R	SK126	2 層	4.15	3.7	1.8	36	頁岩	
279	磨石	53R	SK126	2 層	5.7	8.7	2.4	120	砂岩	
280	石鏃	54Q2	SD122	1 層	1.8	1.2	0.5	1	頁岩	凹基有茎鏃
281	スクレイパー	52P	SR2a	4 層	3.0	3.95	0.7	7	頁岩	
282	両極剥片	52P	SR2a	4 層	3.6	1.6	1.3	8	頁岩	両極剥離痕有り
283	敲石	52R	SR2a	4 層	11.2	9.2	4.05	475	砂岩	
284	大型石包丁	53Q	SR2a	4 層	(23.8)	14	1.6	793	粘板岩	
285	石鏃	50N	SX111	1 層	(3.4)	1.8	0.45	2	頁岩	平基有茎鏃　先端部欠損
286	スクレイパー	50N	SX111	撹乱	4.75	1.45	0.7	5	頁岩	
287	剥片	52O	SX111	1 層	3.4	2.3	0.5	5	鉄石英	
288	石鏃	42O	SX136	2 層	4.1	2.3	1.0	6	頁岩	凹基有茎鏃

包含層出土石器観察表

報告番号	器種	出土地点		法量				石材	備考
		グリッド	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
289	石鏃	51Q2	H1 層	3.4	1.7	0.6	3	頁岩	凹基有茎鏃
290	石鏃	50O18	H1 層	(3.2)	1.7	0.6	2	頁岩	凹基有茎鏃　茎部欠損
291	石鏃	51P24	H1 層	(2.0)	1.1	6.5	1	頁岩	平基有茎鏃　先端部欠損
292	石鏃	43R23	H1 層	2.3	1.5	0.3	1	頁岩	凸基有茎鏃　茎部欠損
293	石錐	50N6	H1 層	3.1	0.6	0.5	1	頁岩	
294	管玉工程剥片	55Q	H1 層	3.1	1.9	1.9	8	緑色凝灰岩	
295	扁平片刃石斧	54O	H1 層	9.3	6	1.7	189	安山岩	刃部一部欠損
296	石鏃	55Q20	H2 層	(3.0)	1.65	0.4	1	頁岩	凹基有茎鏃　右側かえし・茎部欠損　1 号周溝遺構直上
297	石錐	55Q	H2 層	4.0	1.5	0.9	6	頁岩	1 号周溝遺構直上
298	石包丁	55Q	H2 層	(3.3)	(2.5)	0.45	6	凝灰岩	穿孔有り、302 と同一個体　1 号周溝遺構直上
299	砥石	55Q	H2 層	7.3	4.6	0.9	49	凝灰岩	1 号周溝遺構直上
300	石鏃	55Q19	H3 層	3.5	1.85	0.5	1	緑色凝灰岩	凹基有茎鏃　2 号周溝遺構直上
301	石鏃	55Q23	H3 層	(2.7)	1.3	0.5	2	頁岩	凸基有茎鏃　茎部欠損　2 号周溝遺構直上
302	石包丁	55R3	H3 層	(6.35)	(7.1)	0.4	27	凝灰岩	穿孔有り　298 と同一個体　2 号周溝遺構直上
303	管玉	55Q25	H3 層	1.5	0.3	0.3	0.5	鉄石英	2 号周溝遺構直上
304	礫石器	55R・Q	H3 層	14.5	5.2	2.5	256	閃緑岩	2 号周溝遺構直上
305	敲石	55Q14	H3 層	(10.6)	(7.0)	4.4	322	花崗岩	2 号周溝遺構直上
306	石鏃	56Q16	H3 層	(3.8)	1.2	0.4	2	流紋岩	凸基有茎鏃　茎部欠損　3 号周溝遺構直上
307	石核	55Q12	H3 層	3.5	2.5	2.15	25	鉄石英	3 号周溝遺構直上
308	スクレイパー	55Q	H3 層	(10.3)	7.4	1.9	245	砂岩	3 号周溝遺構直上
309	磨石	55Q8	H3 層	10.6	6.7	6.3	521	安山岩	3 号周溝遺構直上
310	石鏃	55Q13	H3 層	3.75	1.45	0.5	1	頁岩	凹基有茎鏃　4 号周溝遺構直上
311	石鏃	56Q17	Ⅲ b2b 層	(3.2)	1.4	0.6	2	頁岩	平基有茎鏃　先端部欠損
312	大型直縁刃石器	54Q15	Ⅲ b2b 層	(12.35)	7.3	1.3	153	粘板岩	表面剥落顕著

遺構外出土石器観察表

報告番号	器種	出土地点		法量				石材	備考
		グリッド	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
313	石鏃	55R1	Ⅲ b3 層	(2.65)	1.5	0.6	1	頁岩	凹基有茎鏃　先端部・茎部欠損
314	石鏃	55R1	Ⅲ b3 層	2.8	1.5	0.5	1	流紋岩	凹基有茎鏃
315	石鏃	55P	Ⅳ a 層	(3.0)	1.5	0.4	1	頁岩	凹基有茎鏃　先端部欠損
316	石鏃	56R20	Ⅲ b3 層	2.1	1.4	0.5	1	頁岩	凹基有茎鏃
317	石鏃	560	Ⅰ層	3.9	1.5	0.4	2	頁岩	平基有茎鏃
318	石鏃	54R5	Ⅲ b3 層	(2.1)	1.5	0.5	1	頁岩	平基有茎鏃　茎部欠損
319	石鏃	45O	Ⅳ a 層	(3.1)	1	0.3	1	頁岩	凸基有茎鏃　茎部欠損
320	石鏃	55P	Ⅰ層	3.4	2.5	0.5	2	凝灰岩	円基鏃
321	石匙	43R	Ⅰ層	5	3.4	0.9	12	頁岩	縦型石匙
322	剥片	51M	Ⅰ層	3.5	2.2	0.9	8	頁岩	両極剥離痕有り
323	大型直縁刃石器	54M21	Ⅳ層	(10.9)	(11.5)	(3.95)	552	頁岩	刃部研磨痕有り
324	石包丁	53R8	撹乱	(17.2)	(6.1)	0.6	62	流紋岩	
325	環石	55O25	Ⅰ層	(3.8)	(8.2)	2.8	160	蛇紋岩	研磨痕・敲打痕有り
326	砥石	47N	Ⅰ層	9.2	3.2	1.7	81	粘板岩	
327	砥石	41N	Ⅰ層	8.5	3.2	2.2	97	凝灰岩	
328	砥石	56P	Ⅰ層	9.5	4.3	2.6	152	凝灰岩	
329	敲石	51P	Ⅰ層	(11.05)	4.9	3.1	215	凝灰岩	両側面抉り有り
330	打製石斧	56Q	Ⅰ層	13.9	5.9	4.5	260	流紋岩	磨耗痕有り

建築材他観察表

報告番号	器種	出土地点			法量 (cm)			遺存状況	木取り	樹種	備考
		グリッド	遺構	層位	長さ	幅・直径	厚さ				
331	柱根	51P	SB107-P1	Ⅲ b1 層	(53.6)	(14.5)	—	上端欠損	丸材	—	平底　腐植顕著
332	柱根	50P	SB107-P3	Ⅲ b1 層	(12.1)	(9.8)	—	上端欠損	丸材	—	尖底か　腐植顕著
333	柱根	51P	SB107-P4	Ⅲ b1 層	(20.5)	(11.2)	—	上端欠損	丸材	—	平底　腐植顕著
334	柱根	51P	SB107-P5	Ⅲ b1 層	(61.2)	(14.0)	—	上端欠損	丸材	ヤマグワ	平底
335	柱根	51P	SB107-P6	Ⅲ b1 層	(34.5)	(17.5)	—	上端欠損	丸材	—	平底　腐植顕著
336	柱根か	50Q	P109	Ⅲ b1 層	(44.9)	(11.0)	—	両端部欠損	丸材？	—	腐植顕著
337	柱根か	50Q	P110	Ⅲ b1 層	(12.9)	(10.3)	—	上端欠損	芯外し	—	平底　腐植顕著
338	柱根	50Q	SX104	Ⅲ b1 層	(40.4)	(14.6)	—	両端部欠損	丸材	—	尖底か　腐植顕著
339	柱根か	42O	SI1-P3	Ⅲ b3 層	(25.9)	(4.7)	—	上端欠損	芯外し	—	尖底　腐植顕著　SI1 － P3 より変更
340	加工材	52P	SR2a	4 層	(12.3)	10.0	2.8	不明	板目	コナラ属	建築部材の一部か　№180 土器内より出土
341	建築部材	53Q	SR2a	4 層	(58.3)	(8.9)	2.5	不明	柾目	—	342 と類似
342	建築部材	53Q	SR2a	4 層	(77.9)	(6.3)	(3.5)	不明	柾目	トネリコ属	341 と類似
343	杭	53Q	SR2a	4 層	(40.2)	(6.0)	—	上端欠損	芯外し	—	腐植顕著
344	杭	53Q	SR2a	4 層	(18.1)	(5.1)	—	上端欠損	芯外し	—	樹皮一部残存
345	杭	53Q	SR2a	4 層	(45.7)	(4.1)	—	上端欠損	芯外し	—	樹皮一部残存
346	杭	53Q	SR2a	4 層	(44.4)	5.1	—	上端欠損	丸材	—	加工痕顕著　樹皮一部残る
347	櫂状木製品	55Q	攪乱	Ⅰ層	(42.0)	5.8	1.5	上端欠損	柾目	—	

その他の時代の土器観察表

報告番号	種別	器種	時期	出土地点			法量 (cm)			色調		焼成	調整		備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	外面	内面		外面	内面	
348	縄文土器	鉢	縄文時代晩期	53 P	SR2a	4 層	—	—	—	10YR6/2	10YR2/1	良好	ミガキ	口唇 : 刻み目による小波状 口縁 : 多条沈線→市と妻絵、補修孔有 胴部 :LR 縄文による斜縄文、結節条文	大洞ＢＣ～Ｃ２
349	珠洲焼	鉢	珠洲Ⅱ期	51 O	—	Ⅰ層	30.0	—	—	N4/0	N4/0	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	
350	珠洲焼	鉢	珠洲Ⅴ期	49 Q	—	Ⅰ層	—	—	—	5PB5/1	5PB5/1	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面波状文（2 本）
351	珠洲焼	擂鉢	珠洲Ⅲ期	52 Q	—	Ⅰ層	—	—	—	5PB5/1	5PB7/1	良好	ロクロナデ	ロクロナデ、卸目	卸目単位（幅 3.5cm）14 本
352	珠洲焼	甕	珠洲Ⅱ期	50 N 25	—	Ⅲ a 層	36.6	—	—	5B5/1	5B5/1	良好	ロクロナデ、平行タタキ痕	ロクロナデ、指頭痕	
353	珠洲焼	甕	—	50 R	—	Ⅰ層	—	—	—	5B7/1	5B5/1	良好	平行タタキ痕	指頭痕	

銭貨観察表

報告番号	種別	器種	出土地点			法量					初鋳年	備考
			グリッド	遺構	層位	外径 (㎜)	内径 (㎜)	穿幅 (㎜)	厚さ (㎜)	重量 (g)		
354	銭貨	天保通宝	56 Q 5	-	Ⅰ層	48.9	45.2	5.5	1.8	22.2	1835	弘化４年以降鋳造
355	銭貨	淳化元宝	47 P 18	-	Ⅲ a 層	25.0	18.0	6.0	0.6	3.6	990	草書
356	銭貨	永楽通宝	45 Q	-	Ⅰ層	24.9	20.9	5.5	0.7	3.9	1403	
357	銭貨	皇宗通宝	45 Q	-	Ⅰ層	24.6	19.1	7.0	0.8	3.5	1039	真書
358	銭貨	寛永通宝	52 P	-	Ⅰ層	25.0	20.1	6.0	0.9	3.4	1629	古寛永

図　　版

凡　例

1　焼土は のスクリーントーンで示した。

2　炭化物範囲は のスクリーントーンで示した。

3　柱痕は のスクリーントーンで示した。

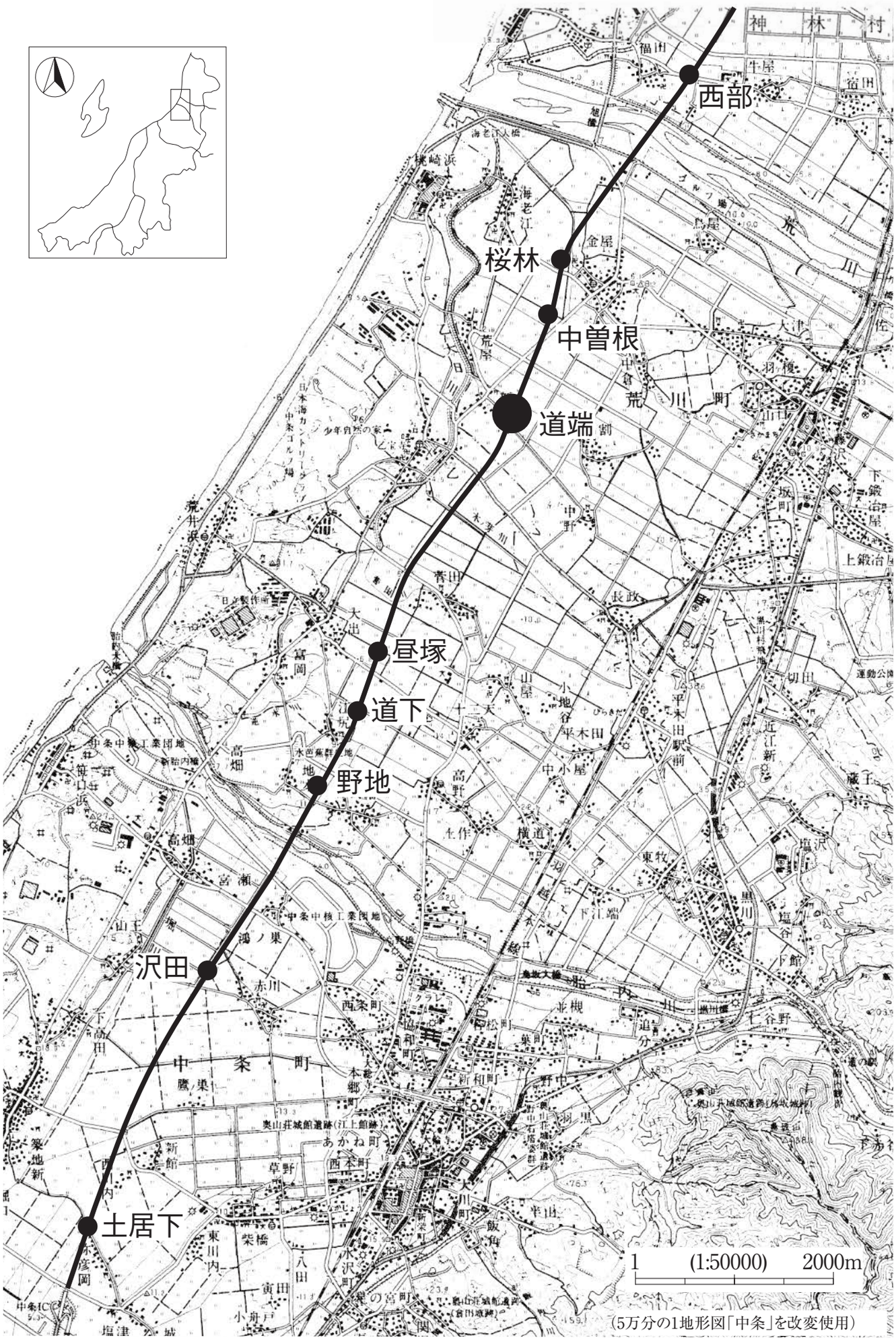
4　土師器の赤彩範囲は のスクリーントーンで示した。

5　土師器の黒色処理範囲は のスクリーントーンで示した。

6　石器の磨面は のスクリーントーンで示した。

7　石器の敲打面は のスクリーントーンで示した。

遺跡の位置と周辺の地形

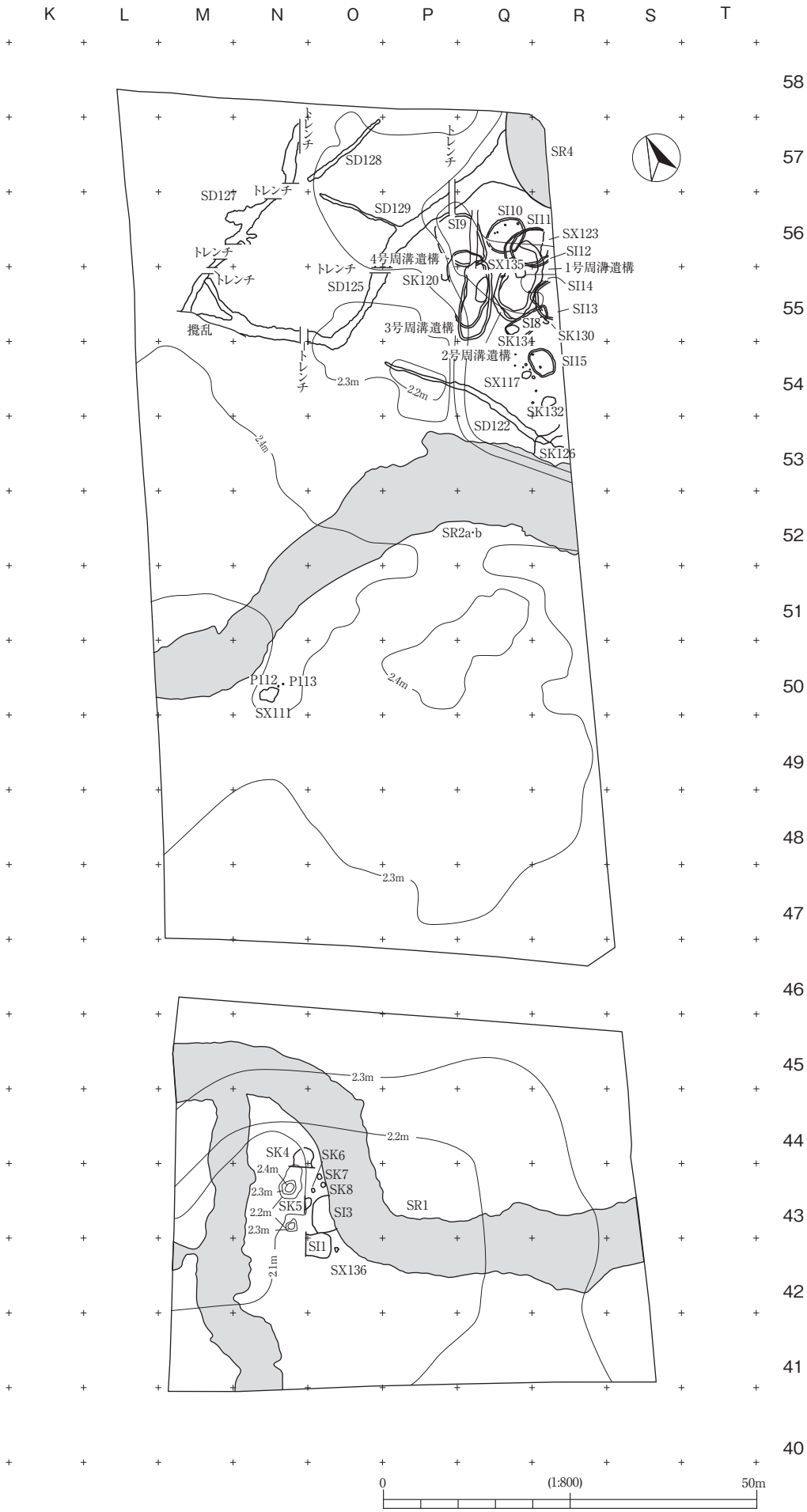


（5万分の1地形図「中条」を改変使用）

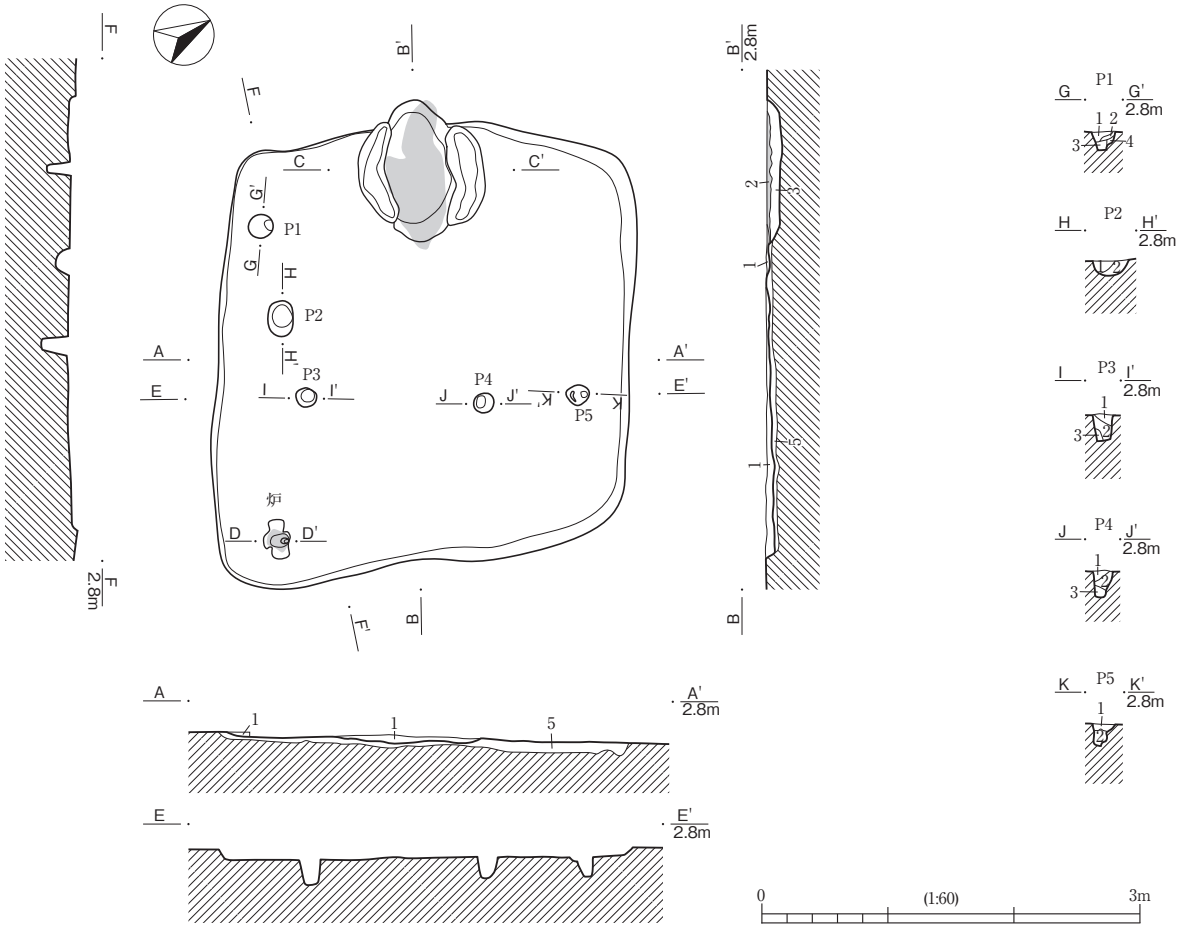
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
0
(1:800)
50m

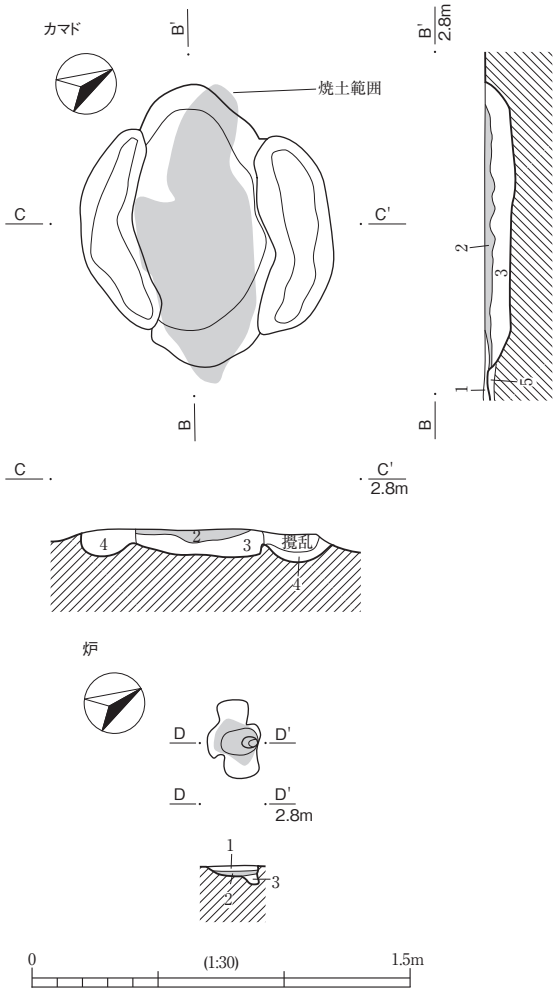
古墳時代全体図

K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
SR4
2.6m
2.6m
SX121
SK116
SI6
2.4m
2.3m
SX118
2.5m
SX119
SR2a·b
P106
SB107
P110
P109
P108
P101
SX104
P103
SK102
2.4m
2.3m
2.2m
2.4m
SK2
SK3
SR1
SK1
2.3m
2.3m
2.2m
0
(1:800)
50m


K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
トレンチ
SD128
SR4
SD127
SD129
SI10
SI11
SI9
SX123
SI12
4号周溝遺構
SX135
1号周溝遺構
SK120
SD125
SI14
SI13
SI8
3号周溝遺構
SK130
SK134
2号周溝遺構
SI15
撹乱
2.3m
2.2m
SX117
SK132
SD122
2.4m
SK126
SR2a･b
P112
P113
SX111
SK4
SK6
SK7
SK8
SK5
SI3
SR1
SI1
SX136
2.1m
0
(1:800)
50m

SI6





SI6
1. (2.5Y7/1)灰白色砂質シルト　径1mmの炭化物を微量含み、小砂利を少量含む。床面層
2. (2.5YR3/1)暗赤灰色シルト　径10mmの(2.5YR6/6)橙色焼土ブロックを少量含む。火床面
3. (5YR7/1)明褐灰色シルト　径1～5mmの炭化物を少量含む。掘方。
4. (5YR7/1)明褐灰色シルト　径10mmの(10YR6/1)褐灰色シルトブロックを少量含み、径1mmの炭化物を微量含む。
5. (2.5Y7/1)灰白色砂質シルト　径1mm以下の炭化物を極微量含む。

炉
1. (2.5Y7/1)灰白色砂質シルト　径1mmの炭化物を微量含み、小砂利を少量含む。
2. (2.5YR5/2)灰赤色シルト
3. (10YR5/1)褐灰色シルト　径10～20mmの灰白色土ブロックを少量含む。

P1
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
2. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土
3. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
4. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含み、粗砂を多量含む。

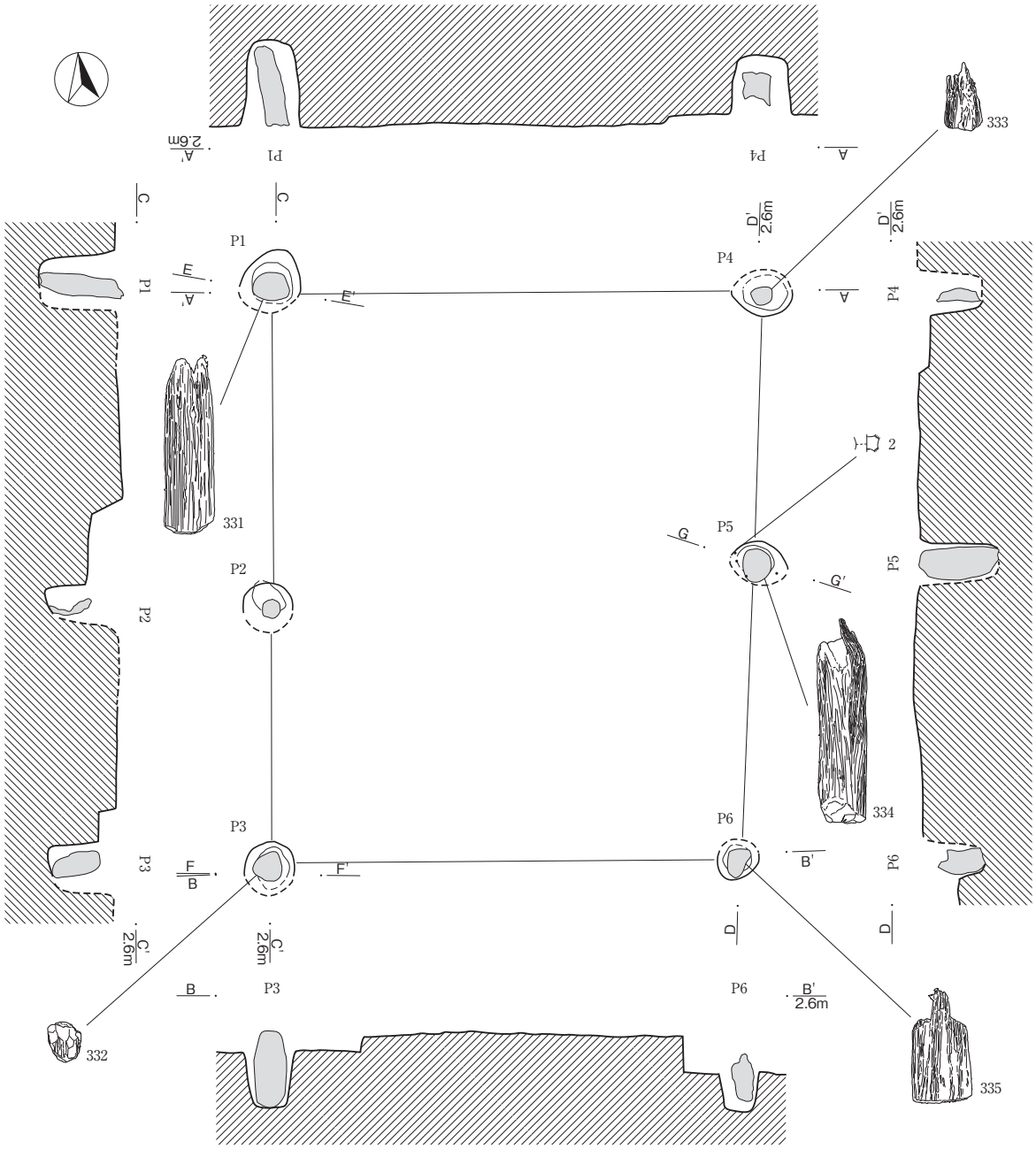
P2
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含み、径10mmの炭化物を少量含む。
2. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含み、粗砂を多量含む。

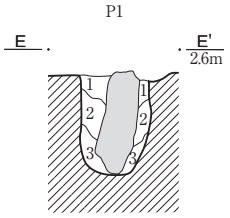
P3
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含み、粗砂を少量含む。
2. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
3. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。

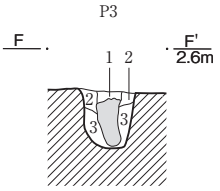
P4
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含み、粗砂を少量含む。
2. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
3. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。

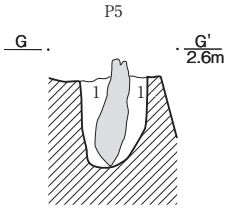
P5
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
2. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。

SB107









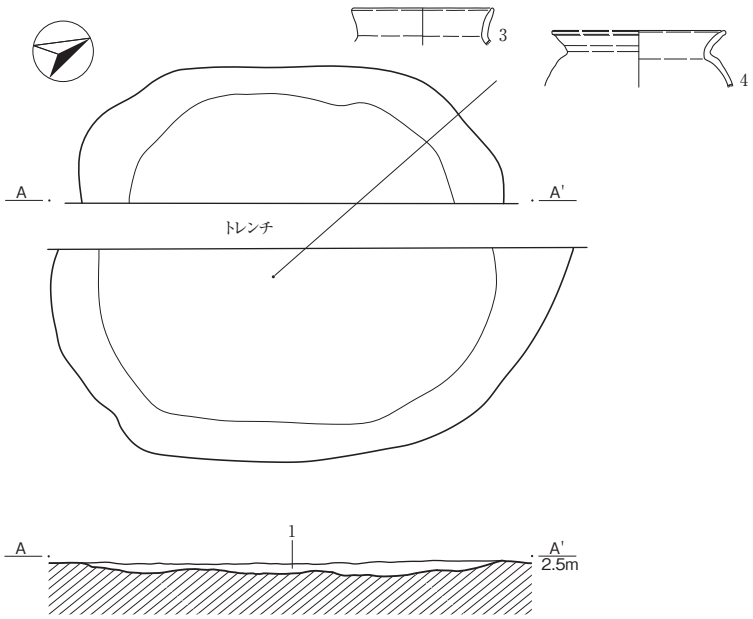
P1
1. (10Y6/1)灰色粘質シルト
　径1mm以下の炭化物を極微量含む。
2. (10Y7/1)灰白色粘質シルト
　径1mm以下の炭化物を含み、灰色粘土を微量含む。
3. (10Y5/1)灰色粘質シルト
　径1mm以下の灰色粘土を微量含む。

P3
1. (10Y4/1)灰白色粘質シルト
　径5mm以下の炭化物含み、灰白色粘土を少量含む。
2. (10Y6/1)灰色粘質シルト
　径1mm以下の炭化物を微量含む。
3. (10Y5/1)灰色粘質シルト
　径5mm以下の灰白色粘土を微量含む。

P5
1. (10Y5/1)灰色粘質シルト
　径2mm以下の灰白色粘土を微量含む。

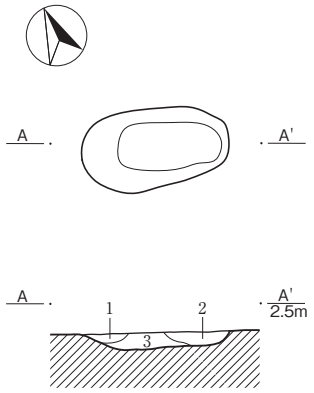
0 (1:40) 2m

SK1



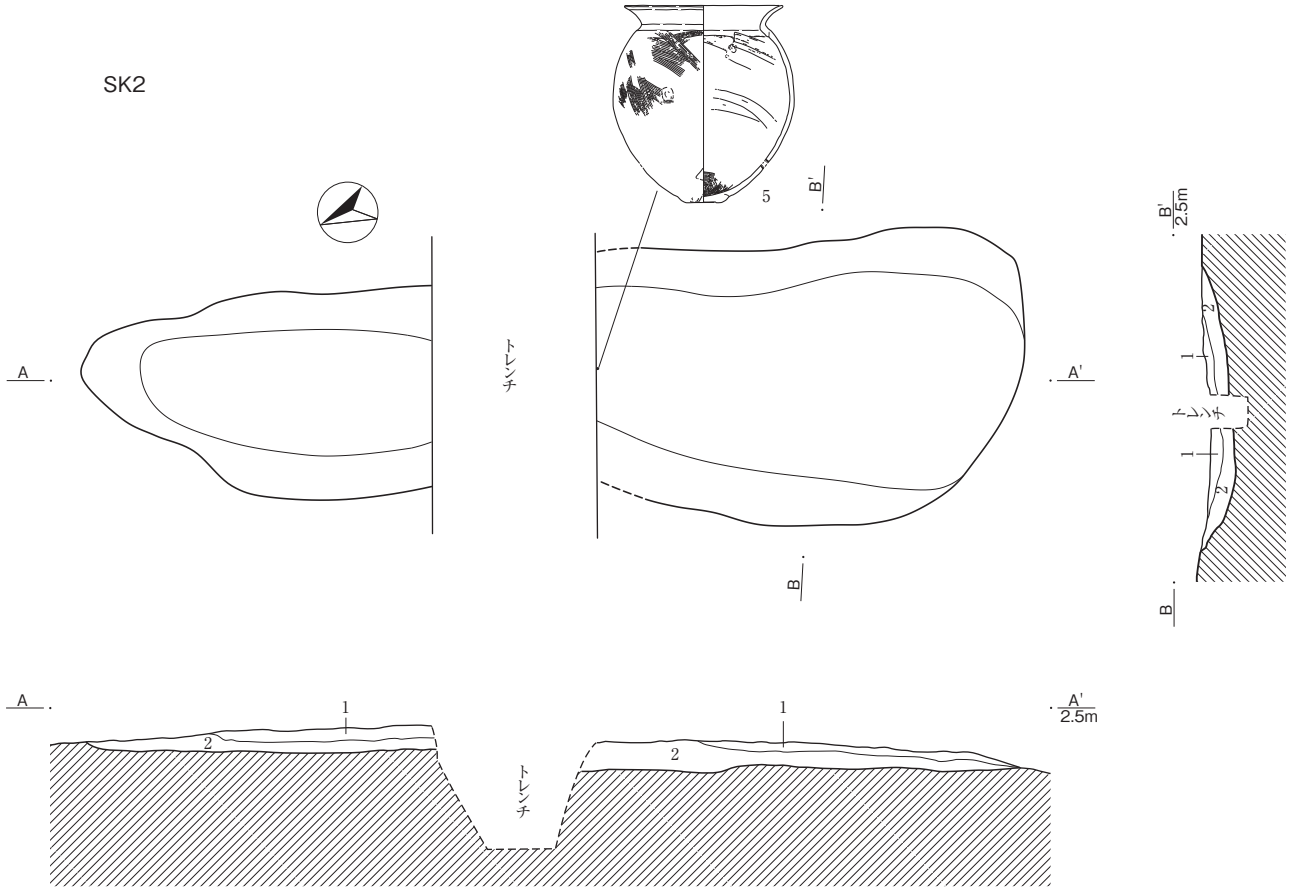
SK1
1. (10YR7/1)灰白色シルト　鉄分を斑状に少量含み、金雲母を多量含む。

SK3



SK3
1. (10YR6/2)灰黄色粘質シルト
2. (10YR5/2)灰黄褐色粘質シルト　腐植植物を少量含む。
3. (2.5Y7/1)灰白色シルト

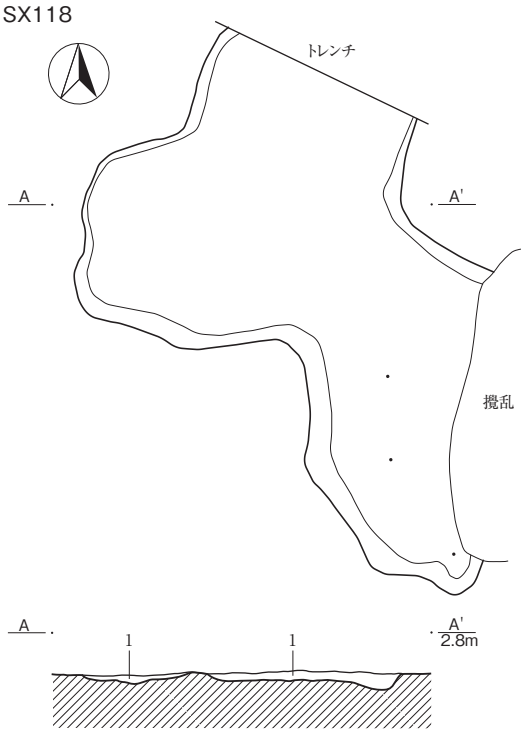
SK2



SK2
1. (2.5Y5/2)暗灰黄色シルト
2. (5Y7/1)灰白色粘質シルト

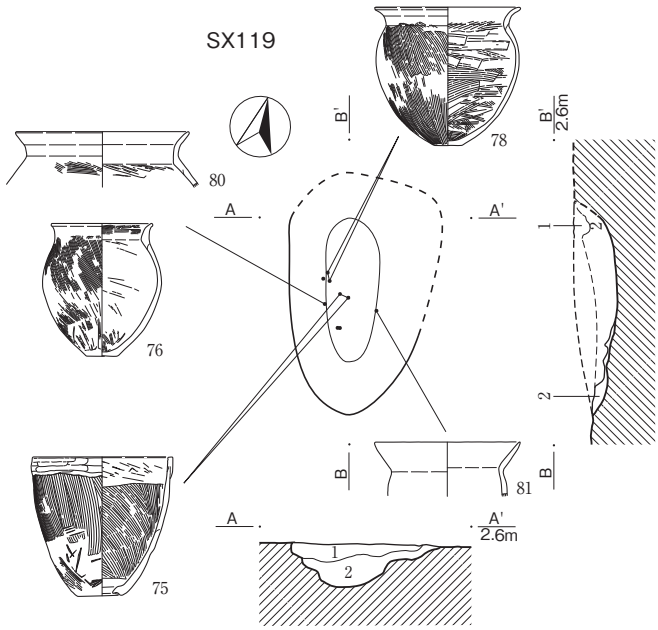
0　(1:40)　2m

SX118



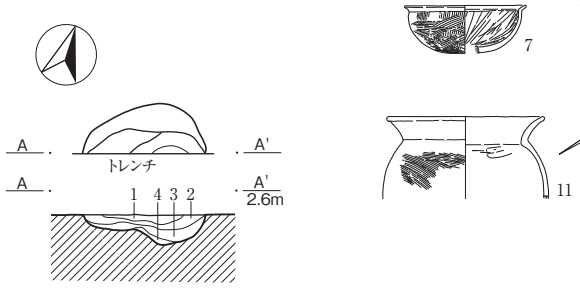
SX118
1. (7.5YR4/1)褐灰色シルト　径数mm～10mmの炭化物を中量含む。
　　層下部に炭化物を層状に部分的に多量含む。

SX119



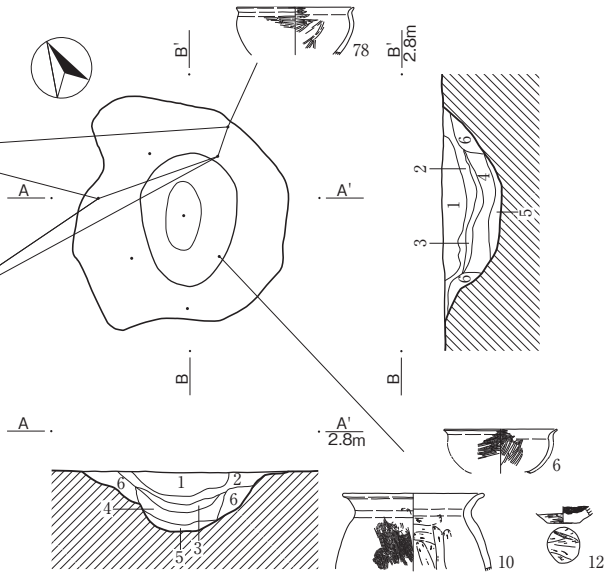
SX119
1. (2.5Y5/1)黄灰色シルト　　径1mmの炭化物を微量含む。
2. (2.5Y4/1)黄灰色粘質シルト　径2～5mmの炭化物を少量含む。
　　一部植物の根によって撹乱を受ける。

SK102



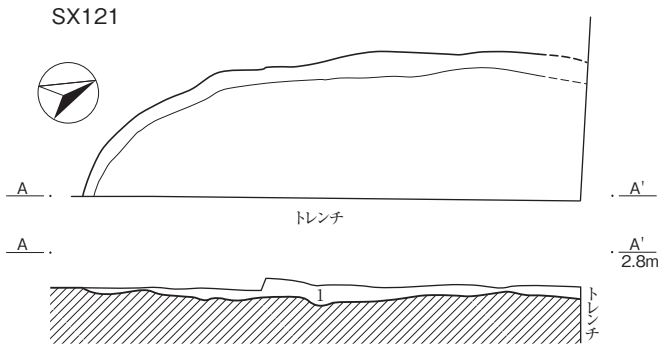
SK102
1. (2.5Y7/1)灰白色砂質シルト　径1～2㎜の鉄分粒を少量含む。
2. (2.5Y6/1)黄灰色シルト　　径3mm以下の炭化物を少量含み、
　　径1～2mmの鉄分粒を少量含み、灰を少量含む。
3. (2.5YR6/1)赤灰色シルト　　径1～2mmの鉄分粒を少量含む。
　　焼土層もしくは腐植土層?
4. (2.5Y6/1)黄灰色粘質シルト　径5mm以下の鉄分粒を微量含む。

SK116



SK116
1. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土　　径3～5mmの炭化物を極少量含む。
2. (2.5Y5/1)黄灰色粘質土　　径2～10mmの炭化物を極多量含み、土器片を多量含む。
3. (10YR5/2)灰黄褐色粘質土　径2～10mmの炭化物を極多量含む。
4. (2.5Y3/1)黒褐色粘質土
5. (2.5Y3/1)黒褐色粘質土　　木片を少量含む。
6.Ⅲb層と(5Y4/1)灰色粘質土の混土

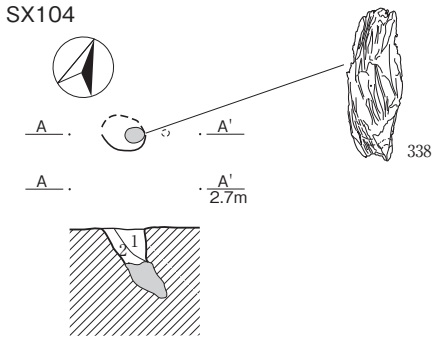
SX121



SX121
1. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径1～10mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。

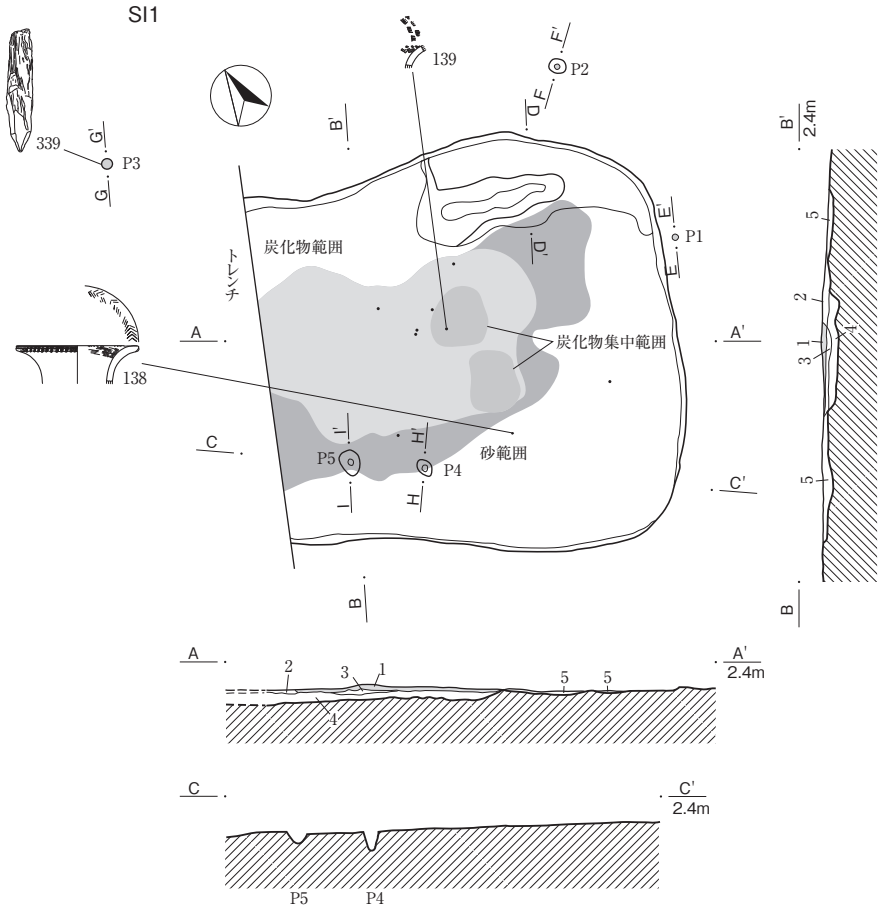
0　(1:60)　3m

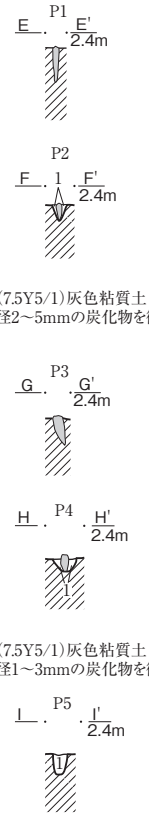
SX104



SX104
1. (2.5Y6/1)黄灰色砂質シルト
　　径3～5㎜の炭化物を少量含み、酸化鉄を微量含む。
2. (2.5Y5/1)黄灰色粘質シルト
　　径1～3mmの炭化物を少量含み、酸化鉄を少量含む。

0　(1:40)　2m



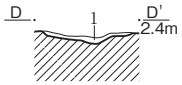


P2
1. (7.5Y5/1)灰色粘質土
　径2～5mmの炭化物を微量含む。

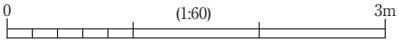
P4
1. (7.5Y5/1)灰色粘質土
　径1～3mmの炭化物を微量含む。

P5
1. (7.5Y6/1)灰色粘質土
　径1㎜以下の(10YR4/4)褐色砂を多量含む。

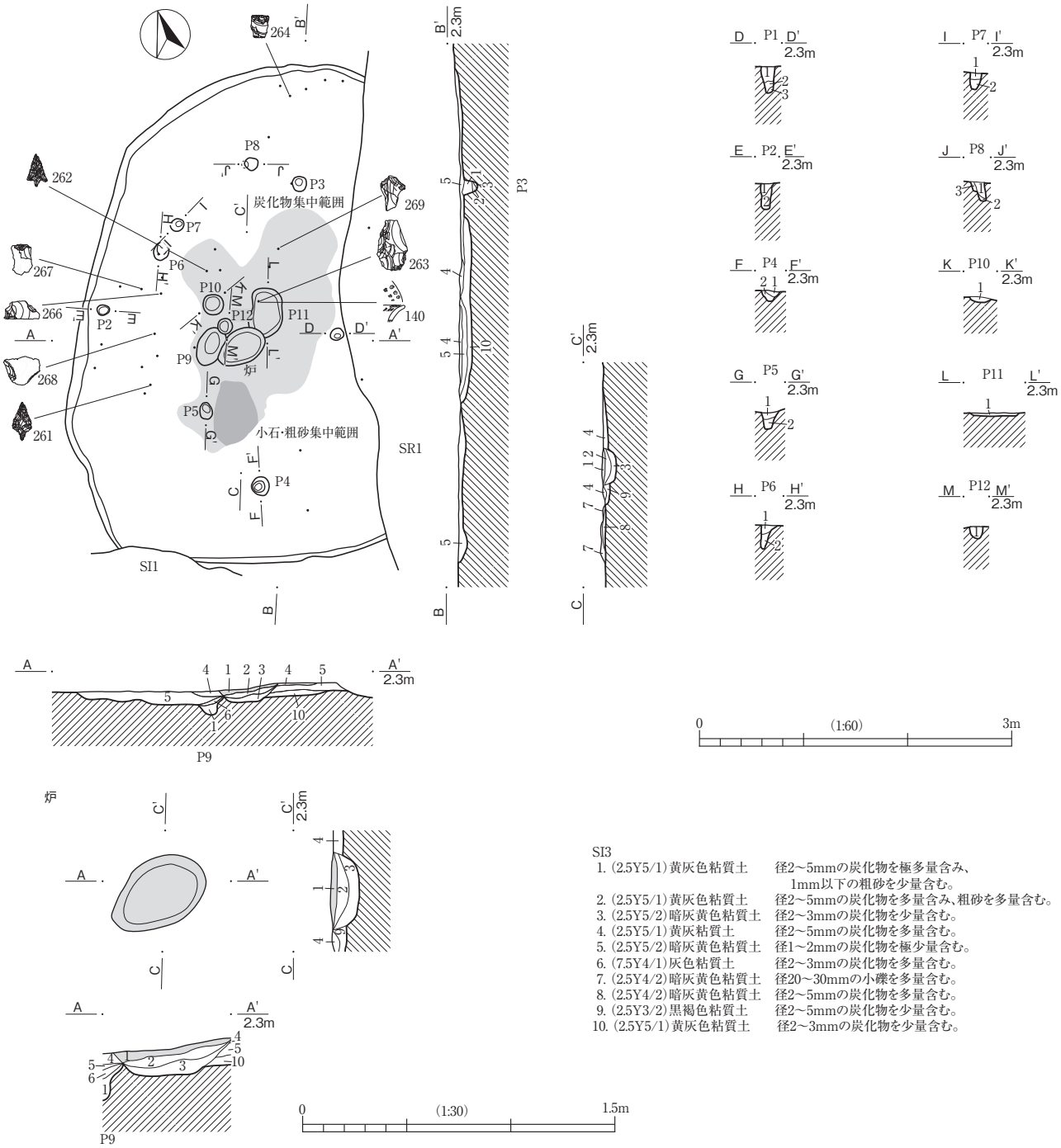
SI1
1. (5Y5/2)灰オリーブ粘質土
　(10YR5/4)にぶい黄褐色粗砂を多量含み、径5㎜の炭化物を多量含む。
2. (5Y5/2)灰オリーブ粘質土
　(10YR5/4)にぶい黄褐色粗砂を多量含み、径2～5㎜の炭化物を少量含む。
3. (5Y5/2)灰オリーブ粘質土
　(10YR5/4)にぶい黄褐色粗砂を少量含み、径5㎜の炭化物を少量含む。
4. (5Y5/2)灰オリーブ粘質土
　(10YR5/4)にぶい黄褐色粗砂を極少量含み、径1～2㎜の炭化物を少量含む。
5. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土
　(10YR5/4)にぶい黄褐色粗砂を多量含み、径2～5㎜の炭化物を極少量含む



貼床
1. (7.5Y5/1)灰色粘質土
　径1～50mmの(7.5Y6/1)灰色粘質土ブロックを多量含み、
　径2～5mmの炭化物を少量含む。



SI3



SI3
1. (2.5Y5/1)黄灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を極多量含み、1mm以下の粗砂を少量含む。
2. (2.5Y5/1)黄灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
3. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。
4. (2.5Y5/1)黄灰粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含む。
5. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を極少量含む。
6. (7.5Y4/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。
7. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径20～30mmの小礫を多量含む。
8. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含む。
9. (2.5Y3/2)黒褐色粘質土　径2～5mmの炭化物を少量含む。
10. (2.5Y5/1)黄灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。

P1
1. (5Y5/4)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。
2. (7.5Y4/1)灰色粘質土　径2～3mmの砂粒を多量含み、径2～5mmの炭化物を少量含む。
3. (7.5Y4/1)灰色粘質土

P2
1. (5Y5/1)灰色粘質土　径5～10mmの炭化物を多量含む。
2. (5Y5/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。

P3
1. (5Y4/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。
2. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含み、鉄分を多く含む。
3. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含む。

P4
1. (5Y4/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。
2. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を極少量含む。

P5
1. (5Y4/2)灰オリーブ粘質土　径3～5mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
2. (5Y4/2)灰オリーブ粘質土　径1～3mmの炭化物を少量含む。

P6
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。
2. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含み、径10mmの炭化物を少量含む。

P7
1. (2.5Y4/2)黄灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
2. (2.5Y4/2)黄灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。

P8
1. (5Y4/1)灰色粘質土　径5～10mmの炭化物を多量含む。
2. (5Y4/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。
3. (5Y4/2)灰オリーブ粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。

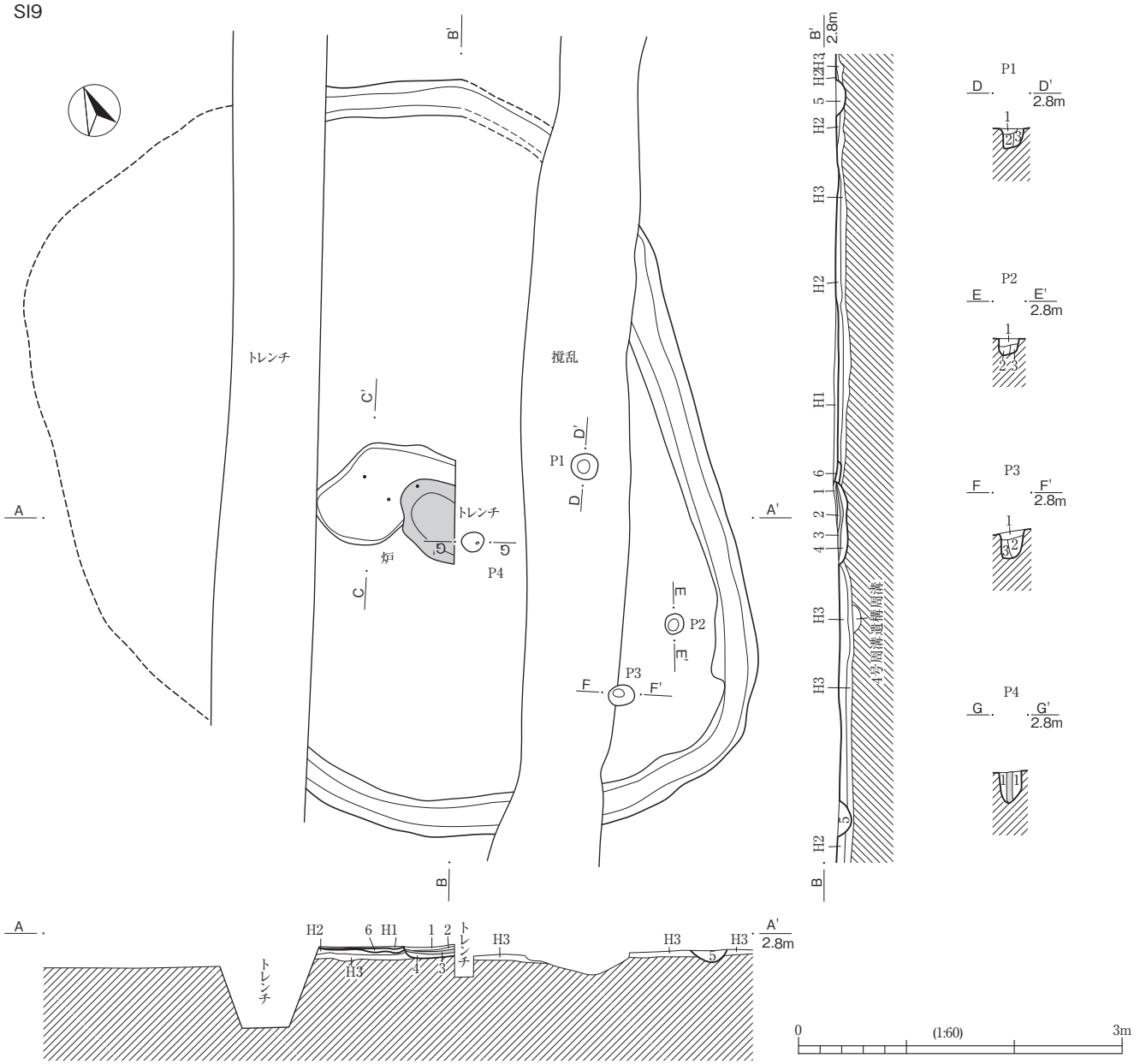
P9
1. (7.5Y4/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。

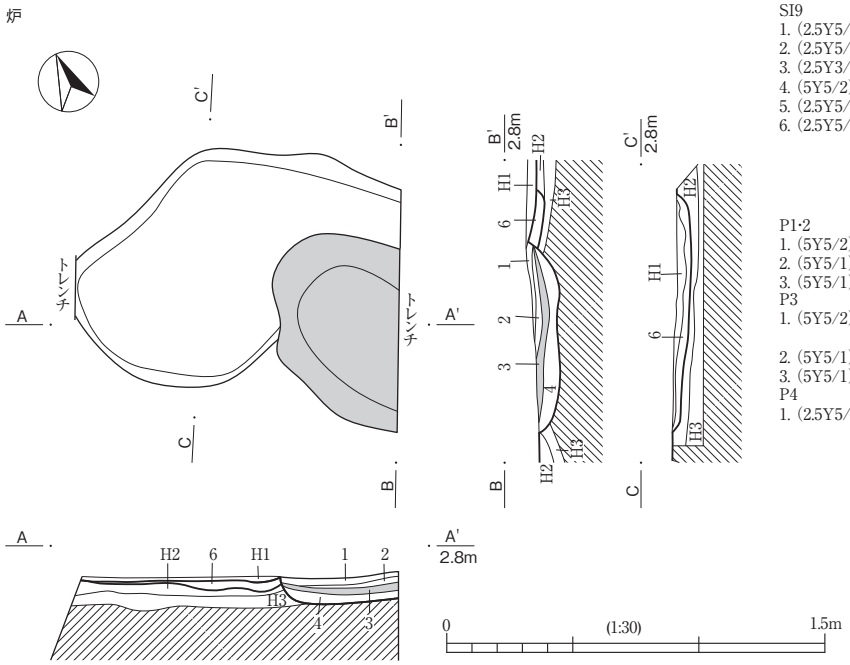
P10
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径2～5mmの炭化物を少量含む。

P11
1. (5Y4/1)灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を中量含む。

P12
1. (5Y4/1)灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を少量含む。

SI9



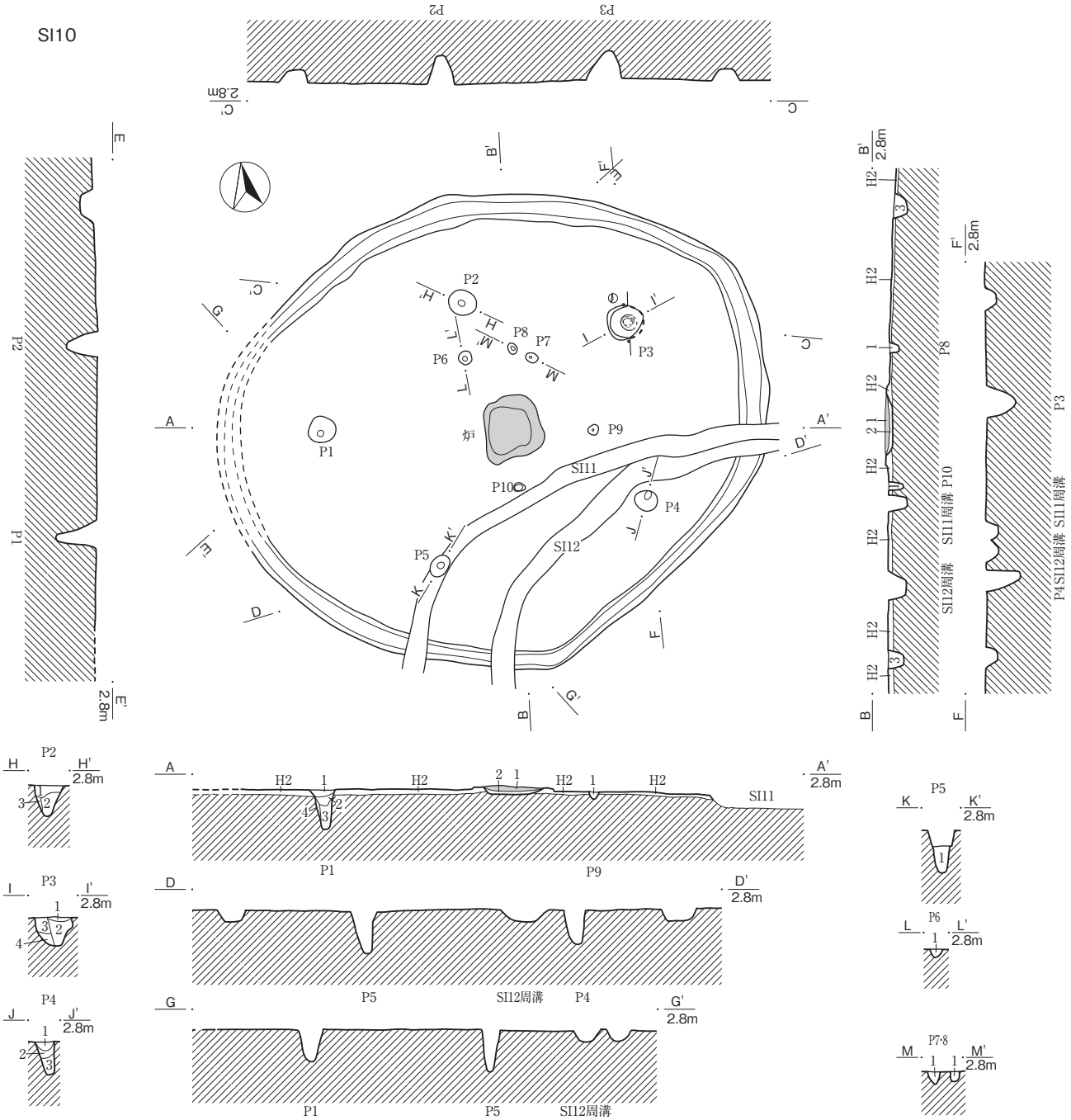


SI9
1. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含む。
2. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　(10YR5/6)黄褐色焼土粒を多量含む。
3. (2.5Y3/2)黒褐色土　炉被熱面層
4. (5Y5/2)灰オリーブ色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
5. (2.5Y5/3)黄褐色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含む。
6. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含む。

P1･2
1. (5Y5/2)灰オリーブ色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含む。
2. (5Y5/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。
3. (5Y5/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。

P3
1. (5Y5/2)灰オリーブ色粘質土　粗砂を多量含み、径2～5mmの炭化物を多量含む。
2. (5Y5/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。
3. (5Y5/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。

P4
1. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含む。



SI10
1. (2.5Y3/2)黒褐色土　炉被熱面層
2. (5Y4/2)灰オリーブ色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
3. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含み、細砂を含む。

P1
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
2. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
3. (5Y4/1)灰色粘質土　径3～5mmの炭化物を多量含む。
4. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。

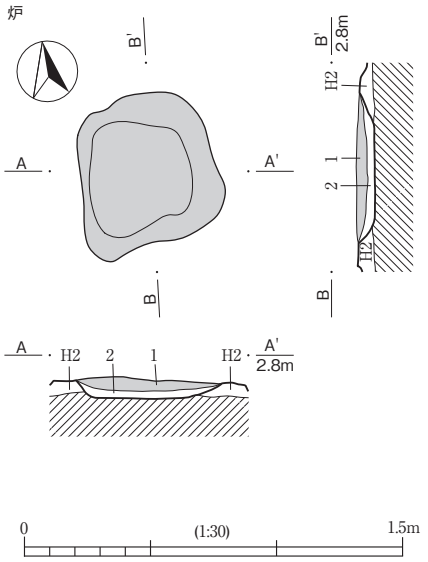
P2
1. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。
2. (2.5Y5/1)黄灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含み、径5～10mmの炭化物を少量含む。
3. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。

P3
1. (5Y4/1)灰色粘質土　径3～5mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
2. (5Y5/1)灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含む。
3. (5Y5/2)灰オリーブ粘質土　径3～6mmの炭化物を多量含む。
4. (5Y5/2)灰オリーブ粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。

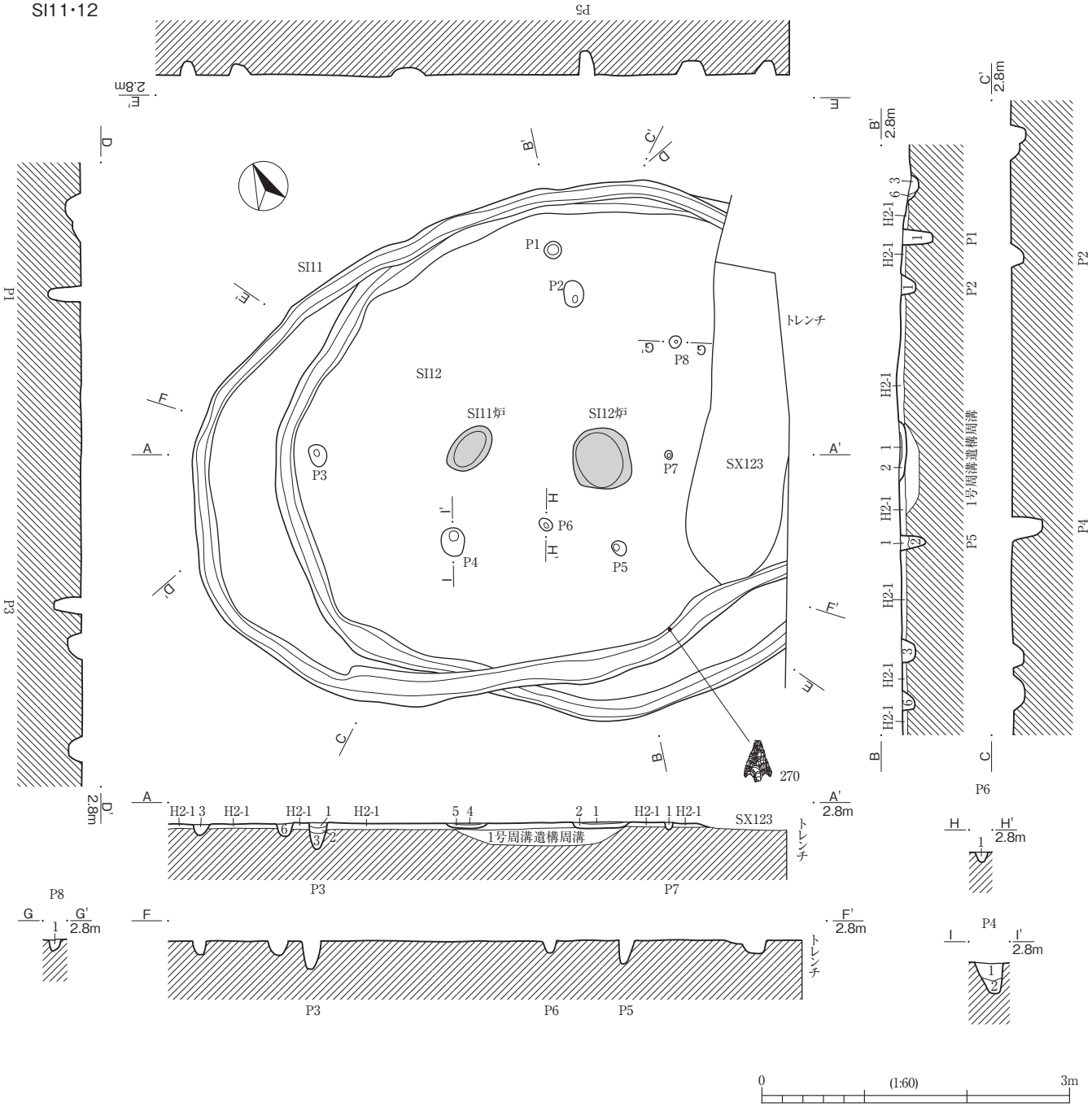
P4
1. (5Y4/2)灰オリーブ色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
2. (5Y5/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。
3. (5Y5/2)灰オリーブ色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。

P5
1. (5Y4/2)灰オリーブ色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含む。

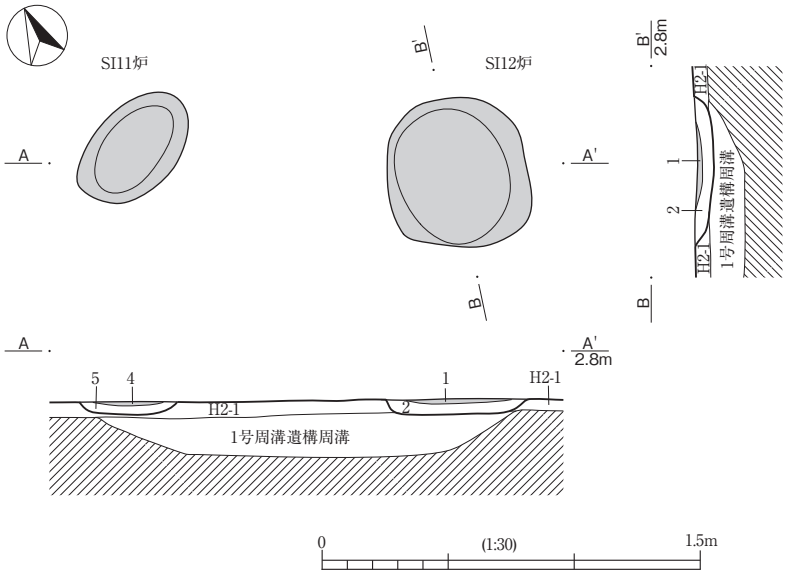
P6･7･8･9･10
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径3～5mmの炭化物を多量含む。



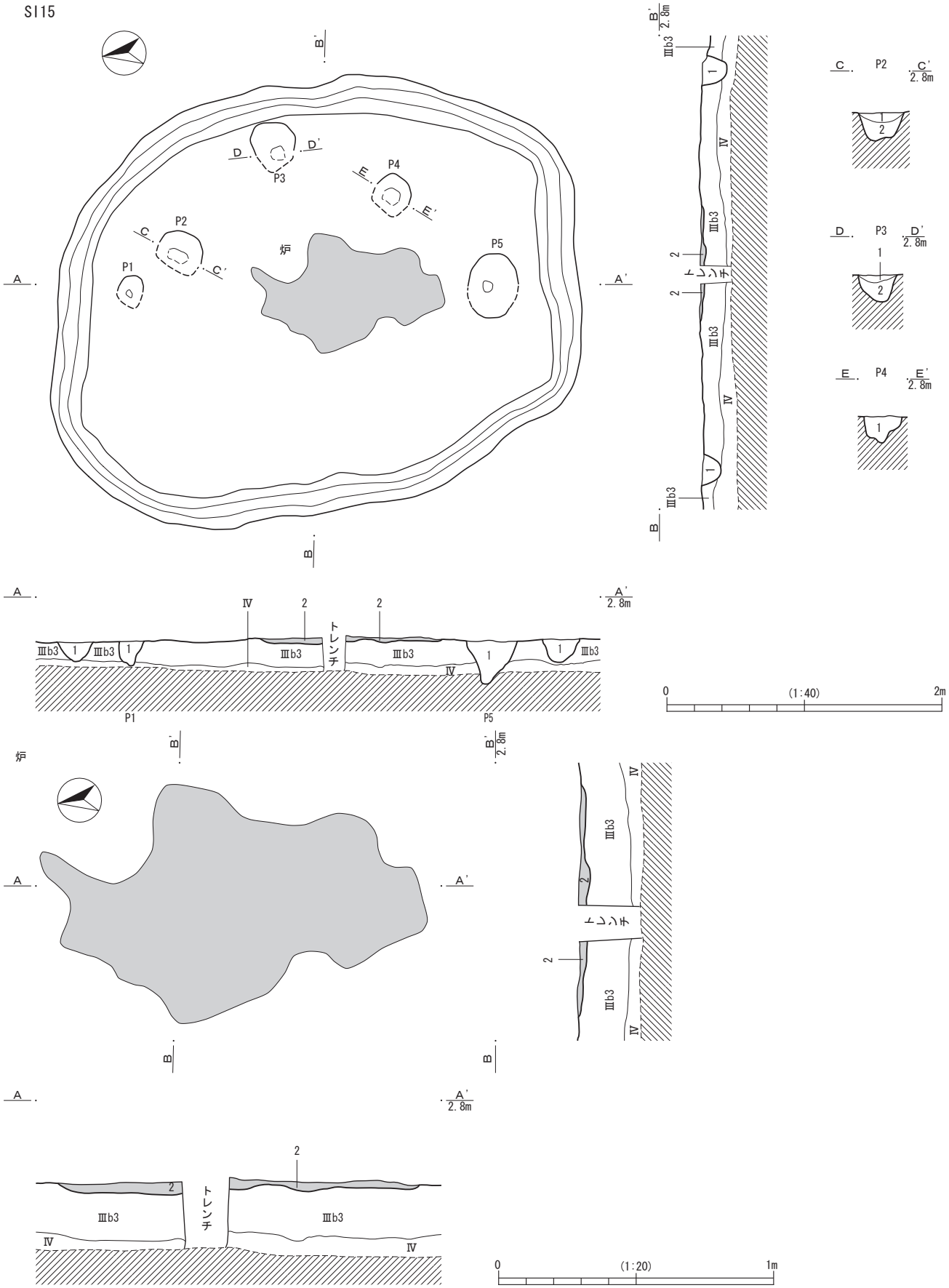
SI11･12



SI11･12炉



SI11･12
1. (2.5Y3/2)黒褐色土　SI12炉被熱面層
2. (5Y5/2)灰オリーブ色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
SI12炉掘り方
3. (5Y4/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。 SI11周溝
4. (2.5Y3/2)黒褐色土　SI11炉被熱面層
5. (5Y5/2)灰オリーブ色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
SI11炉掘り方
6. (7.5Y4/1)灰色粘質土　径2～3mmの炭化物を少量含む。 SI12周溝
P1･2
1. (5Y5/2)灰オリーブ粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
P3
1. (5Y5/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
2. (5Y4/1)灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を少量含む。
3. (5Y4/1)灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
P4
1. (5Y5/2)灰オリーブ粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。
2. (2.5GY5/1)オリーブ灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
P5
1. (2.5Y5/1)黄灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
2. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土　径2～5mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
P6･7･8
1. (2.5Y5/1)黄灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。

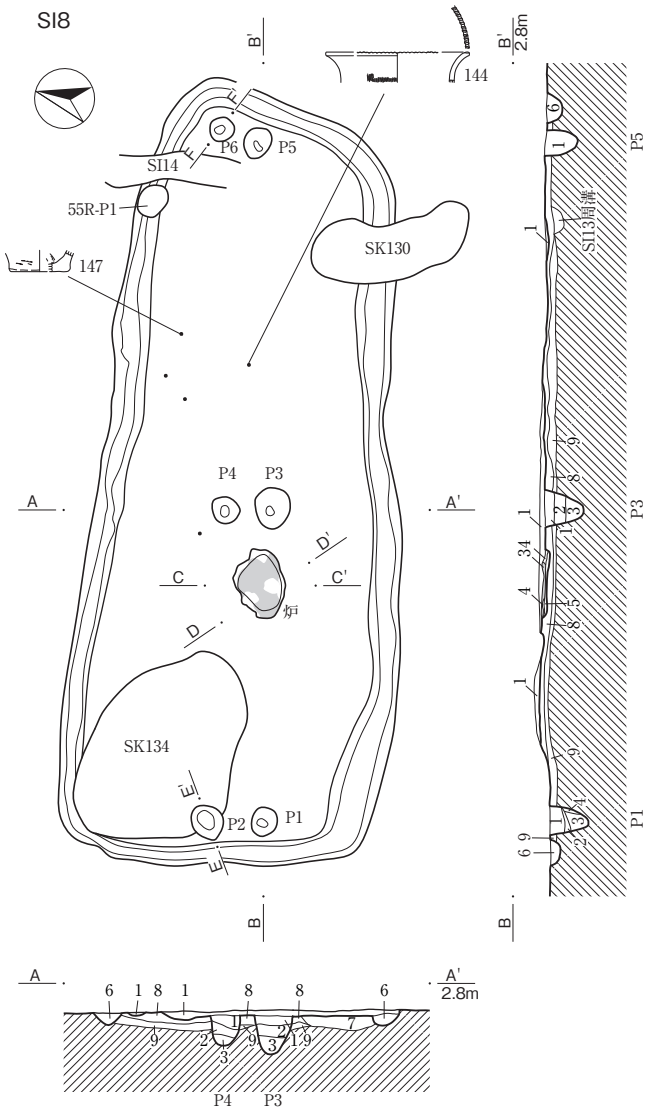


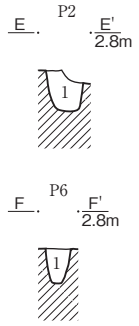
SI15
1. (7.5YR5/4) にぶい褐色シルト　やや砂質を帯びる。
2. (2.5Y4/1) 黄灰色粘質シルト　径1mm未満の細かい砂粒を多量含み、径1mmの炭化物を多量含み、焼土粒を少量含む。

P1
1. (2.5YR5/1) 黄灰色粘質シルト　径1mm未満の細かい砂粒を多量含み、径1～3mmの炭化物を少量含む。

P2.P3.P4
1. (2.5Y5/1) 黄灰色粘質シルト　径1mm未満の細かい砂粒を多量含み、径1～3mm大の炭化物を少量含む。
2. (2.5Y8/2) 灰白色シルト　鉄分を斑状に多量含む。

P5
1. (2.5YR5/1) 黄灰色シルト　数mm～10mmの炭化物を多量含む。





SI8
1. (5YR4/1) 黄灰色砂質シルト　径1～5mmの炭化物を多量含み、(5Y8/1) 灰白色シルトブロックを少量含む。
2. (5YR7/6) 橙色シルト　径1mm以下の炭化物を多量含む。
3. (5YR7/6) 橙色シルト　焼土層。
4. (5YR7/2) 明褐色シルト　径1mm以下の炭化物を少量含む。
5. (5YR3/3) 暗赤褐色シルト　厚み2～3mmの炭化物を板状に多量含む。
6. (7.5YR7/1) 明白色シルト　径1～2mmの炭化物を少量含む。
7. (10YR7/1) 灰白色砂質シルト　径2～5mmの炭化物を少量含む。
8. (5YR7/1) 褐灰色シルト　径1～3mmの炭化物を少量含む。
9. (7.5YR7/1) 明灰色シルト　径1mmの炭化物を微量含む。

P1
1. (2.5Y6/1) 黄灰色粘土　径1mm以下の炭化物を微量含む。
2. (2.5Y4/1) 黄灰色粘土
3. (2.5Y3/1) 黒褐色粘質シルト　柱材痕と思われる炭化物塊が残る。
4. (2.5Y3/2) 黒褐色粘質シルト

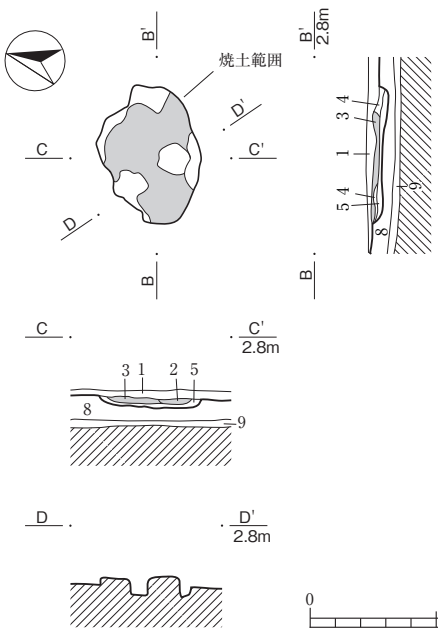
P2
1. (2.5Y6/1) 黄灰色粘土　径1mmの炭化物を微量含む。

P3.4
1. (2.5Y6/1) 黄灰色砂質シルト　径1～5mmの炭化物を少量含む。
2. (2.5Y7/1) 灰白色シルト　径1mmの炭化物を微量含む。
3. (5Y8/1) 灰白色シルト　径3mm以下の炭化物を微量含む。

P5・6
1. (2.5Y6/1) 黄灰色粘土　径1mmの炭化物を少量含む。

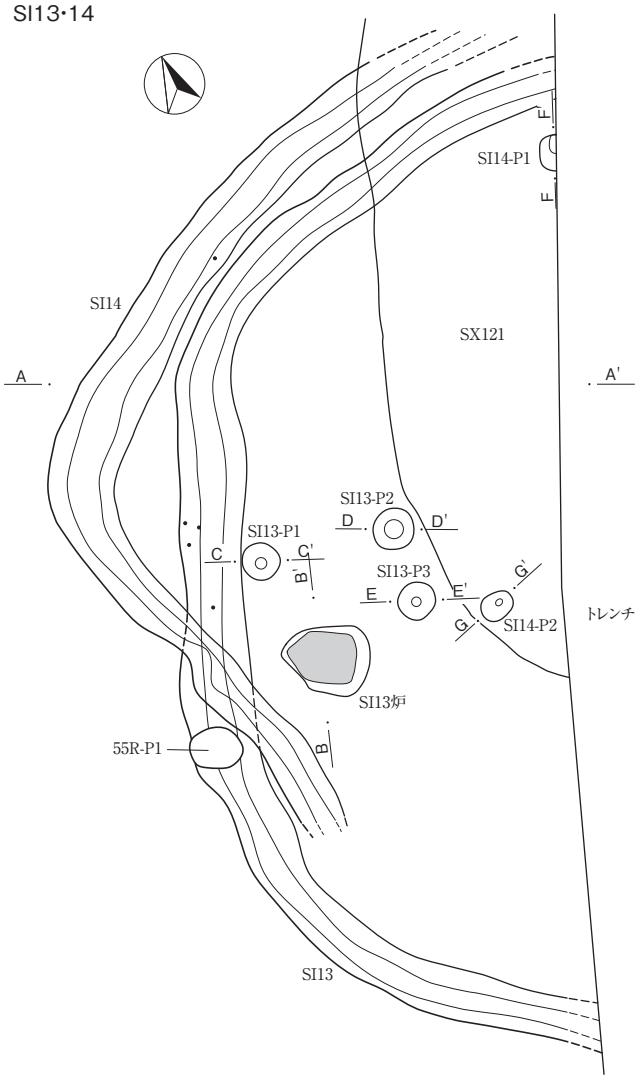
0　(1:60)　3m

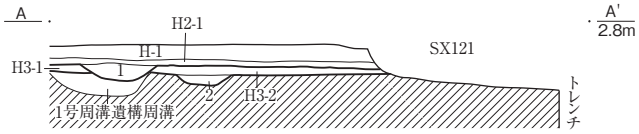
炉

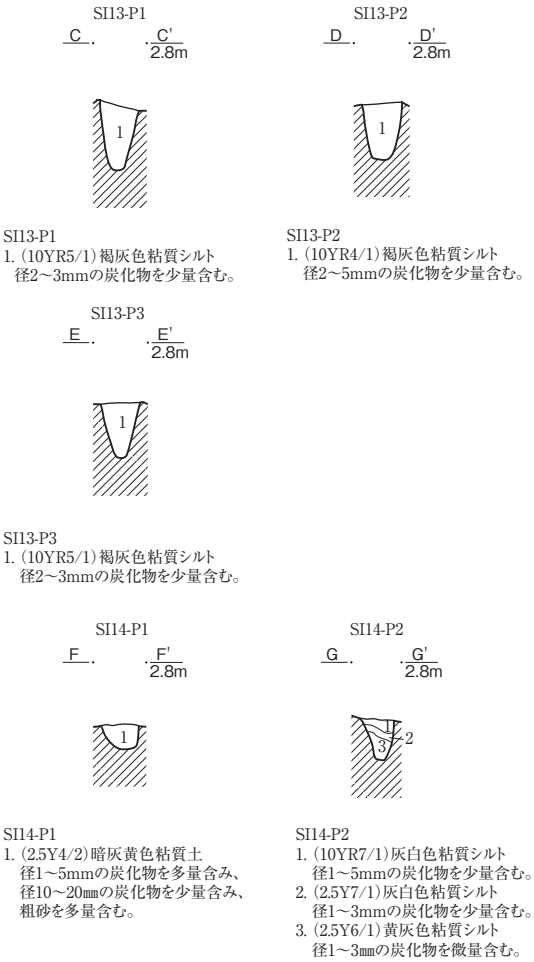


0　(1:30)　1.5m

SI13･14







SI13-P1
1. (10YR5/1)褐灰色粘質シルト
　径2～3mmの炭化物を少量含む。

SI13-P2
1. (10YR4/1)褐灰色粘質シルト
　径2～5mmの炭化物を少量含む。

SI13-P3
1. (10YR5/1)褐灰色粘質シルト
　径2～3mmの炭化物を少量含む。

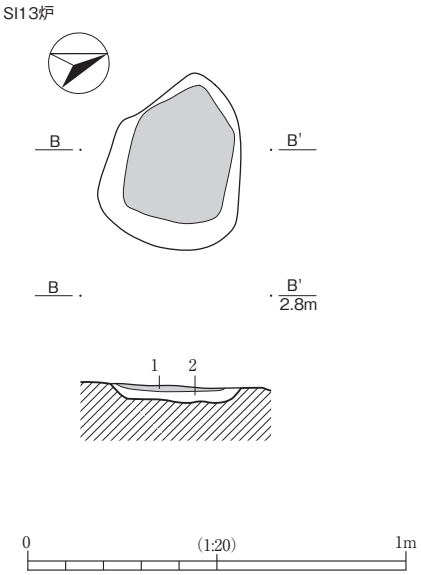
SI14-P1
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土
　径1～5mmの炭化物を多量含み、
　径10～20㎜の炭化物を少量含み、
　粗砂を多量含む。

SI14-P2
1. (10YR7/1)灰白色粘質シルト
　径1～5mmの炭化物を少量含む。
2. (2.5Y7/1)灰白色粘質シルト
　径1～3mmの炭化物を少量含む。
3. (2.5Y6/1)黄灰色粘質シルト
　径1～3㎜の炭化物を微量含む。

SI13･14
1. (5YR7/1)明褐色シルト　径3～10mmの炭化物を少量含み、
　径1mm以下の炭化物を多量含む。SI14の周溝
2. (10GY8/1)明緑灰シルト　径1mm以下の炭化物を少量含む。SI13の周溝

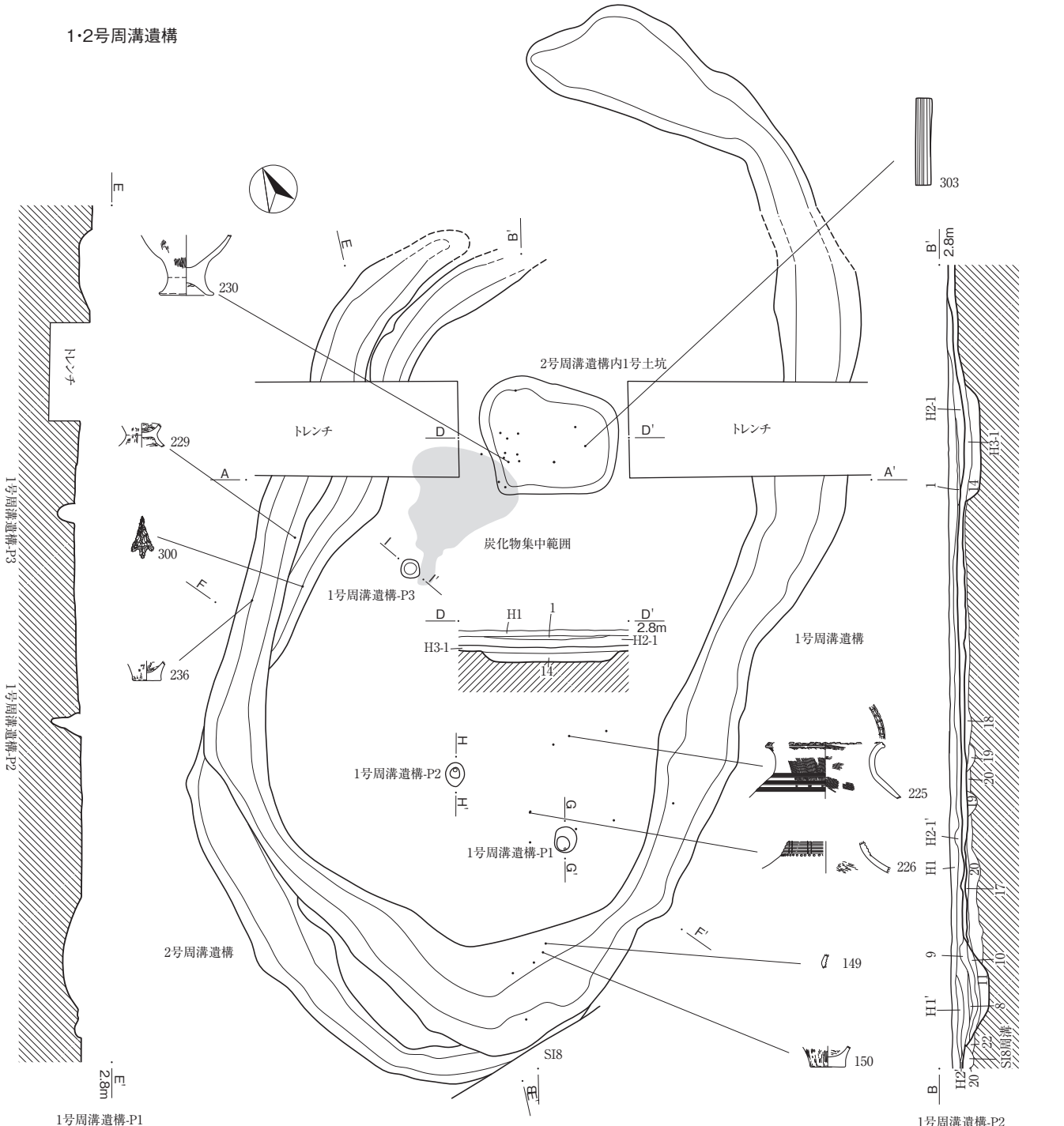
0　(1:40)　2m

SI13炉



SI13炉
1. (2.5YR4/2)灰赤色焼土層
2. (5Y6/2)灰オリーブ色粘質シルト　径5mm以下の炭化物を少量含む。

1·2号周溝遺構



1号周溝遺構-P1
1. (5YR7/1) 明褐灰色粘質シルト
径1mmの炭化物を少量含む。
2. (7.5YR5/1) 褐灰色粘質シルト
径5mmの炭化物を少量含む。
3. (7.5YR6/1) 褐灰色粘質シルト
径1～2mmの炭化物を少量含む。

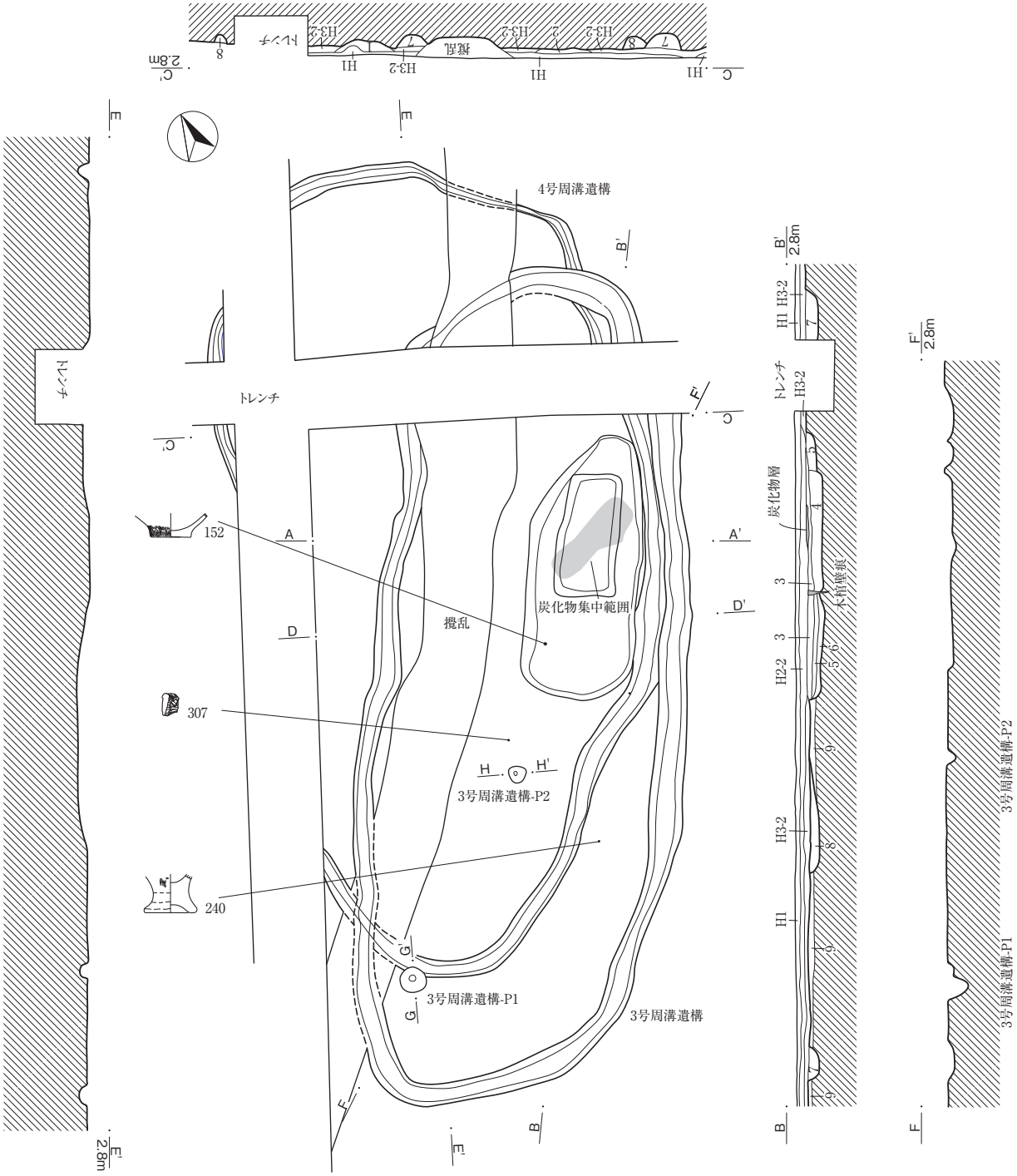
1号周溝遺構-P2
1. (5Y6/2) 灰オリーブ色粘質シルト
2. (5Y6/3) オリーブ黄色シルト

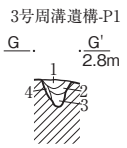
1号周溝遺構-P3
1. (7.5YR7/2) 明褐灰色粘質シルト
径1mmの炭化物を微量含む。
2. (10GY6/1) 緑灰色粘質シルト
径1～5mmの炭化物を少量含む。
3. (7.5YR6/2) 灰色褐粘質シルト

1·2号周溝遺構
1. (2.5Y7/4) 浅黄色砂質シルト
2. (2.5Y4/1) 赤灰色シルト
3. (2.5Y4/1) 赤灰色粘質シルト
4. (2.5Y7/2) 灰黄色粘質シルト
5. (5Y7/1) 灰白色シルト
6. (7.5Y7/1) 灰白色シルト
7. (7.5Y8/1) 灰白色シルト
8. (7.5YR6/1) 褐灰色粘質シルト
厚さ5～10mmの(7.5Y7/1) 灰白色が層の上部に板状に少量含む。
9. (2.5Y7/1) 灰白色粘質シルト　炭化物を極多量含む。
10. (7.5YR7/1) 明褐灰色粘質シルト　径5～10mmの炭化物を少量含む。
11. (7.5YR7/1) 明褐灰色粘質シルト　径5mm以下の炭化物を少量含む。
12. (10YR6/1) 褐灰色粘質シルト　径1～3mmの炭化物を微量含む。
13. (5GY8/1) 灰白色粘質シルト　径1～2mmの炭化物を微量含む。
14. (7.5YR4/1) 褐灰色粘質シルト　径2～10mmの炭化物を少量含む。
15. (7.5YR7/2) 明褐色シルト　径1mm以下の炭化物を少量含む。
16. (7.5YR7/2) 明褐色シルト　径1mm以下の炭化物を微量含む。
17. (7.5YR7/2) 明褐色シルト　径5～10mmの灰白色土ブロックを少量含み、厚さ2mmの炭化物を板状に微量含む。
18. (7.5YR7/1) 明褐灰色粘質シルト　径1mmの炭化物を極微量含む。
19. (7.5YR7/2) 明褐灰色粘質シルト　厚み2～5mmの炭化物を板状に中量含む。
20. (7.5YR7/2) 明褐灰色粘質シルト　径2mmの炭化物を微量含む。
径2mmの炭化物を板状に微量含む。
径2mmの炭化物を板状に微量含む。
径1mmの炭化物を極微量含む。
径1mmの炭化物を微量含む。
径3～5mmの炭化物を微量含む。
径1mmの炭化物を中量含む。

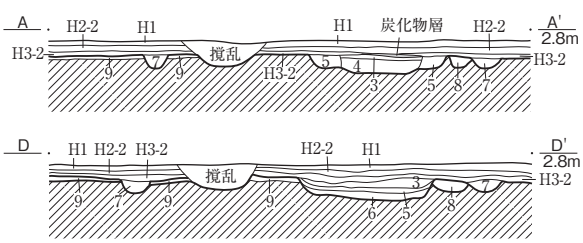
0　(1:60)　3m

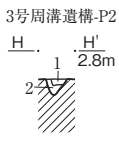
3·4号周溝遺構





3号周溝遺構-P1
1. (10YR7/1)灰白色粘質土
　径1mm の炭化物を微量含む。
2. (2.5Y7/1)灰白色粘質土
　径1～2mmの炭化物を中量含む。
3. (2.5Y6/1)黄白色粘質土
　径1mmの炭化物を微量含む。
4. (10YR7/1)灰白色粘質土
　径1mmの炭化物を微量含む。





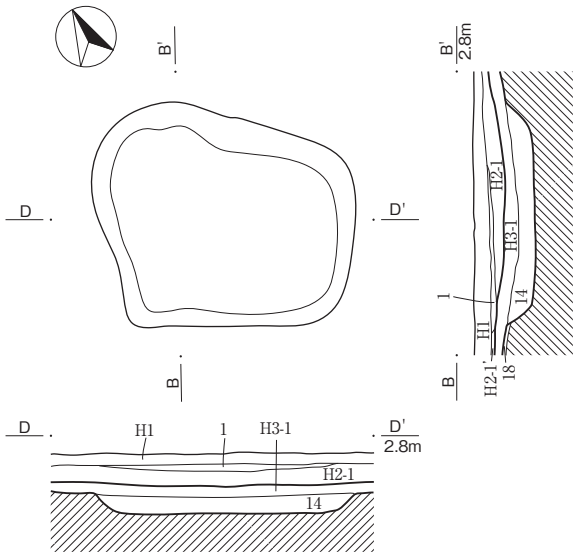
3号周溝遺構-P2
1. (10YR4/1)褐灰色粘質シルト
　径2～3mmの炭化物を少量含む。
2. (7.5Y7/2)明褐色粘質シルト
　径1mmの炭化物を微量含む。

3·4号周溝遺構

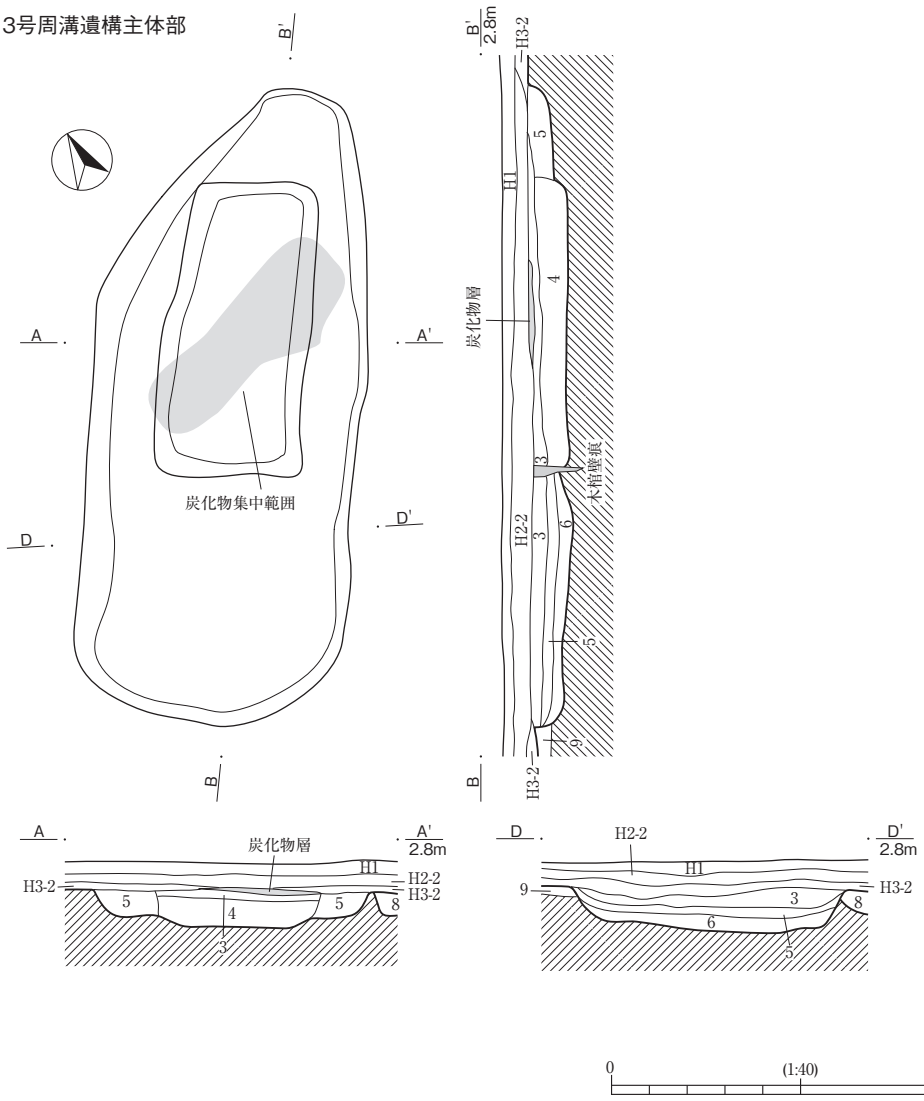
1. (7.5YR7/1)明褐色粘質シルト	径2～5mmの炭化物を少量含み、径2～3mmの小砂利を多量含む。
2. (5YR7/1)明褐色粘質シルト	径3mmの炭化物を微量含む。
3. (7.5YR8/1)灰白色粘質シルト	径1～2mmの炭化物を含み、層上部に厚さ5mmの炭化物を板状に含む。
4. (5YR7/1)明褐色粘質シルト	径2mm以下の炭化物を少量含む。
5. (7.5YR8/1)灰白色シルト	径1mmの炭化物を極微量含む。
6. (10YR7/2)にぶい黄褐色粘質シルト	径1mm以下の炭化物を微量含む。
7. (2.5YR7/1)灰白色粘質土	3号周溝遺構周溝。
8. (5PB6/1)青灰色粘質土	径1～5mmの炭化物を少量含む。4号周溝遺構周溝。
9. (7.5YR7/1)明褐色粘質シルト	径1mmの炭化物を微量含む。

0　(1:80)　4m

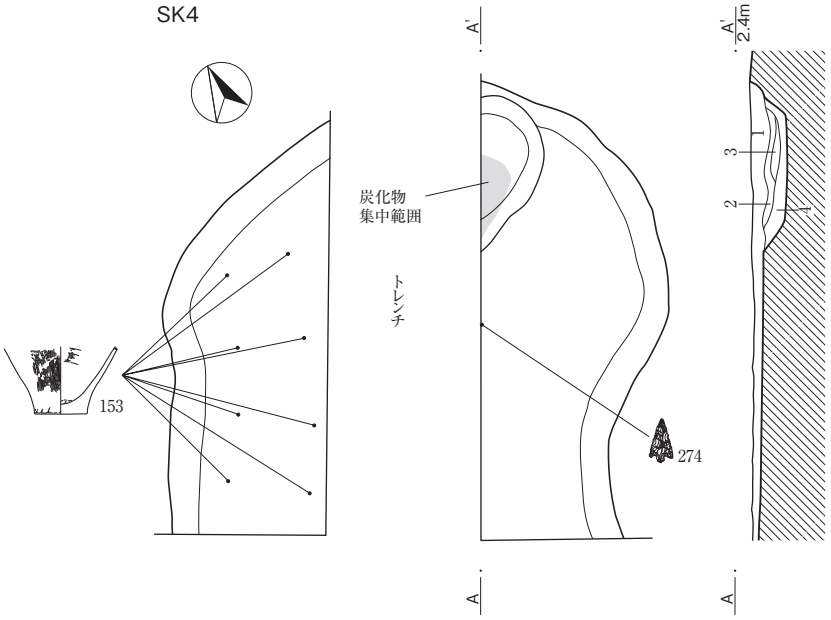
2号周溝遺構内1号土坑



3号周溝遺構主体部

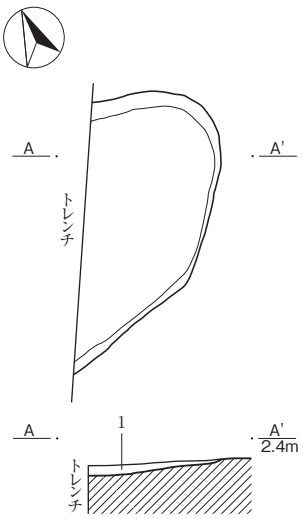


SK4



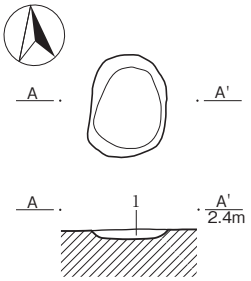
SK4
1. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土　径10～20mm炭化物を少量含む。
2. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径5～10mmの炭化物を多量含み、径20～30mmの小礫を少量含む。
3. (2.5Y3/2)黒褐色粘質土　径5～10mmの炭化物を少量含み、径3～5mmの(2.5Y4/4)オリーブ褐色焼土を多量含む。
4. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土　径1～2mmの炭化物を極少量含む。

SK5



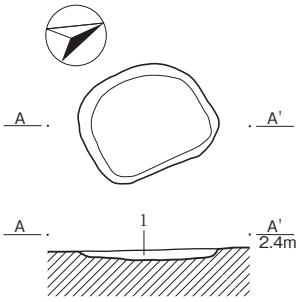
SK5
1. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土　径10～20㎜の炭化物を少量含む。

SK6



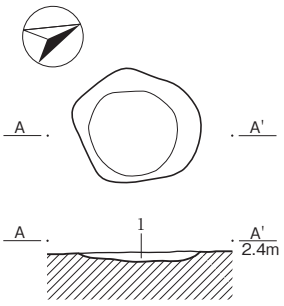
SK6
1. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土
径10～20㎜の炭化物を少量含む。

SK7

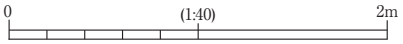


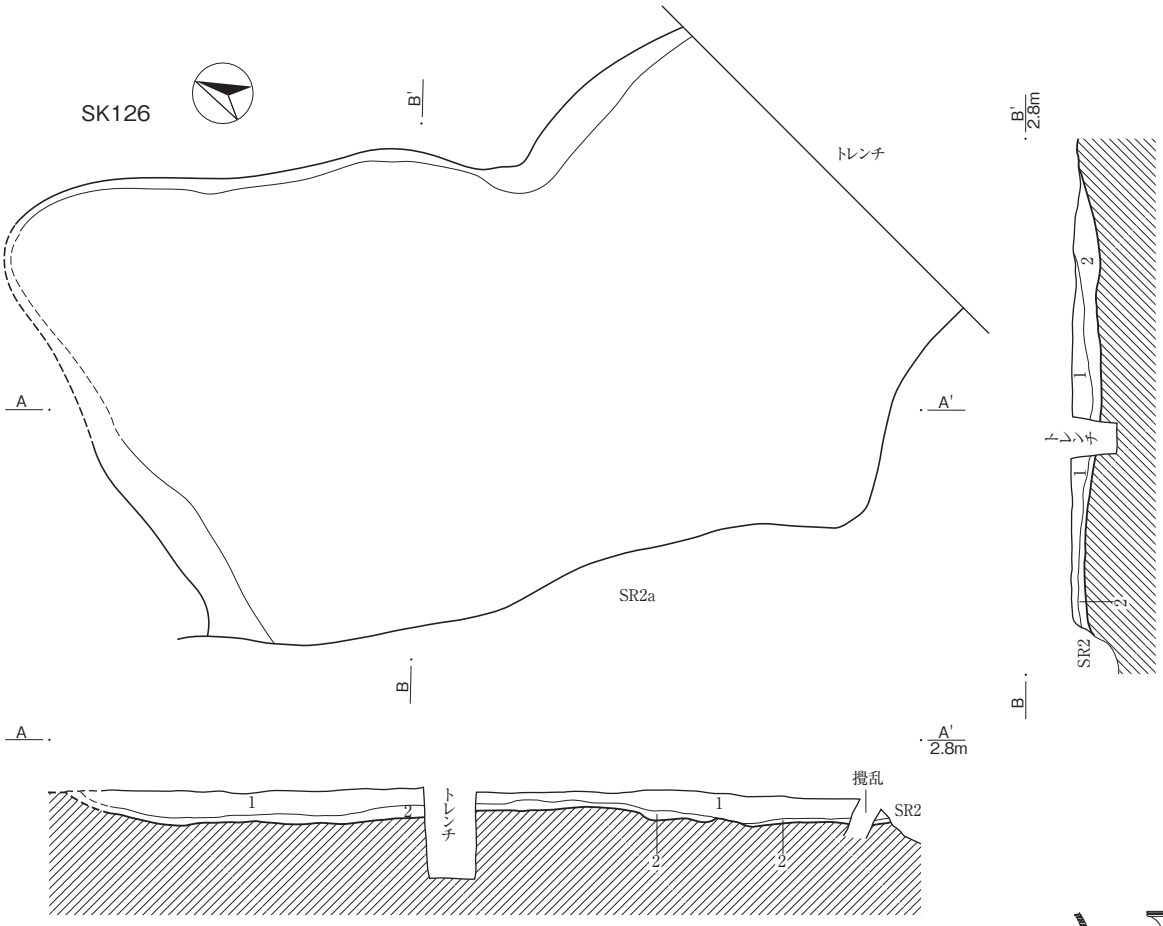
SK7
1. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土
径10～20㎜の炭化物を少量含む。

SK8

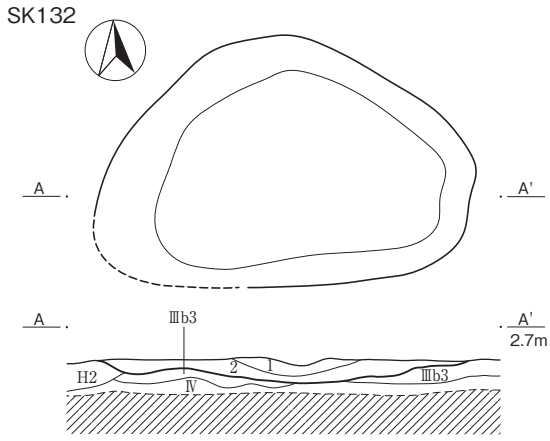


SK8
1. (2.5Y4/1)黄灰色粘質土
径10～20㎜の炭化物を少量含む。

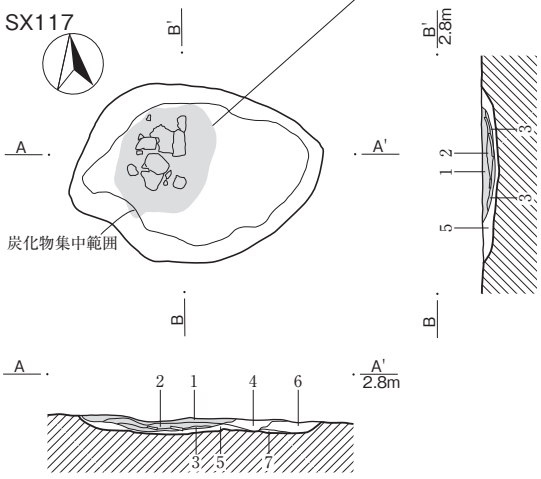




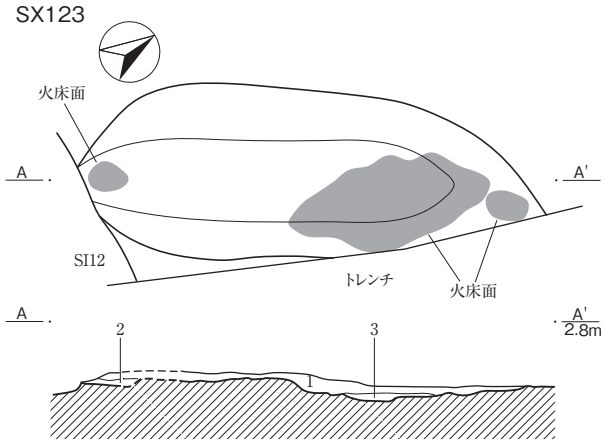
SK126
1. (2.5Y7/3)浅黄色シルト　鉄分を斑文状に多量含む。
2. (2.5Y5/1)黄灰色シルト　木炭を多量含み、遺物を含む。特に剥片が多く出土した。



SK132
1. (2.5Y7/2)灰黄色砂質シルト　極僅かに遺物を含む。
2. (2.5Y5/1)黄灰色シルト　径2mmの炭化物を中量含み、
　径10mmの炭化物を微量含む。



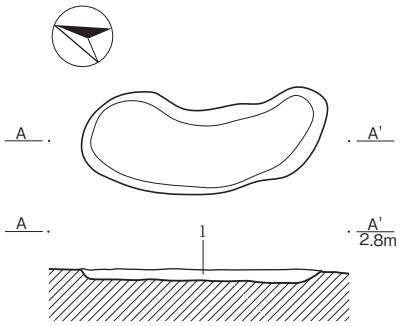
SX117
1. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を多量含み、
　径2～5mmの炭化物を少量含む。
2. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径2～3mmの炭化物を多量含む。
3. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径10mm以上の炭化物が粒状及び面的に広がる。
4. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1～3mmの炭化物を少量含み、粗砂を少量含む。
5. (2.5Y4/2)暗灰黄色粘質土　径1mmの炭化物を多量含み、
　径3～5mmの炭化物を少量含む。
6. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径1～2mmの炭化物を少量含む。
7. (2.5Y5/2)暗灰黄色粘質土　径3～5mmの炭化物を少量含む。



SX123
1. (5Y7/2)灰白色砂質シルト　径2～3mmの炭化物を多量含み、
　焼土ブロックを中量含む。
2. (10YR3/2)黒褐色粘質シルト
3. (10YR3/2)黒褐色粘質シルト　2層と同じか?

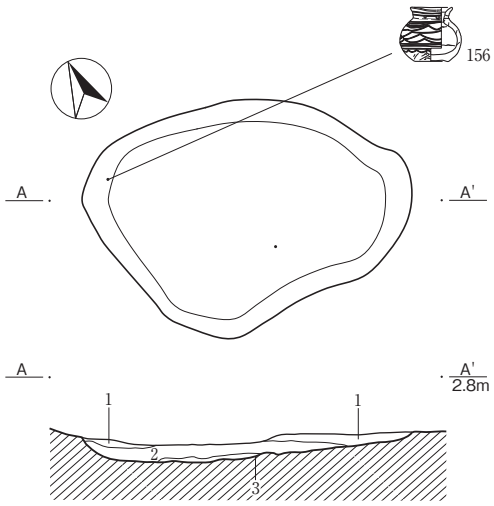
0　(1:40)　2m

SK130



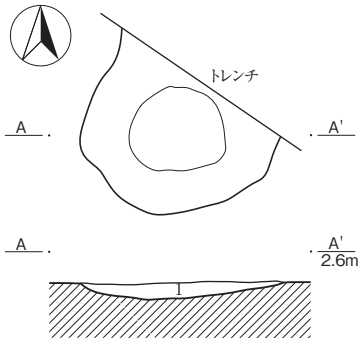
SK130
1. (10YR5/1)褐色灰色シルト　径2～10mmの炭化物を少量含み、
(2.5Y8/1)灰白色シルトブロックを少量含む。

SK134



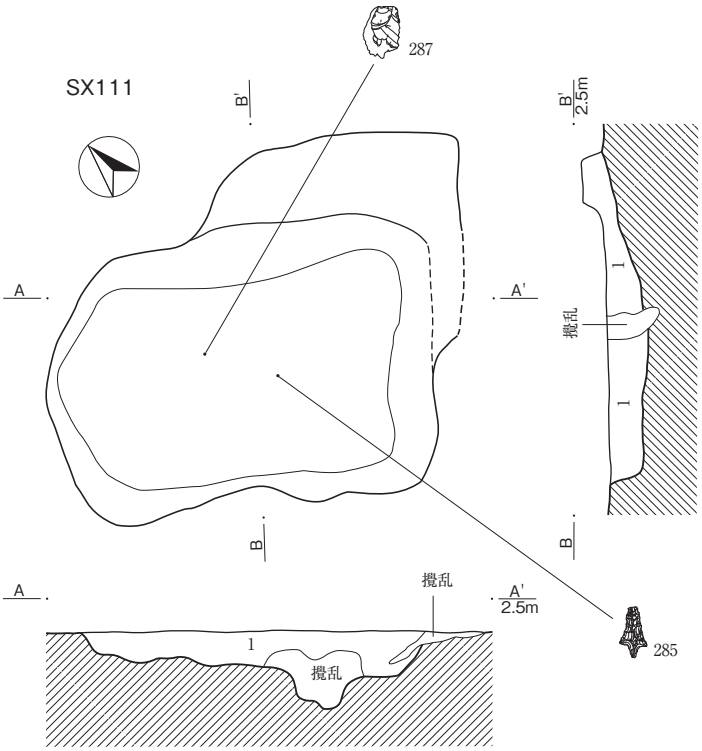
SK134
1. (N3/0)暗灰色砂質シルト　径1～2mmの炭化物を多量含む。
2. (N3/0)暗灰色シルト　径2～10mmの炭化物を多量含む。
3. (7.5Y7/2)灰白色シルト　径1～2mmの炭化物を少量含む。

SK120



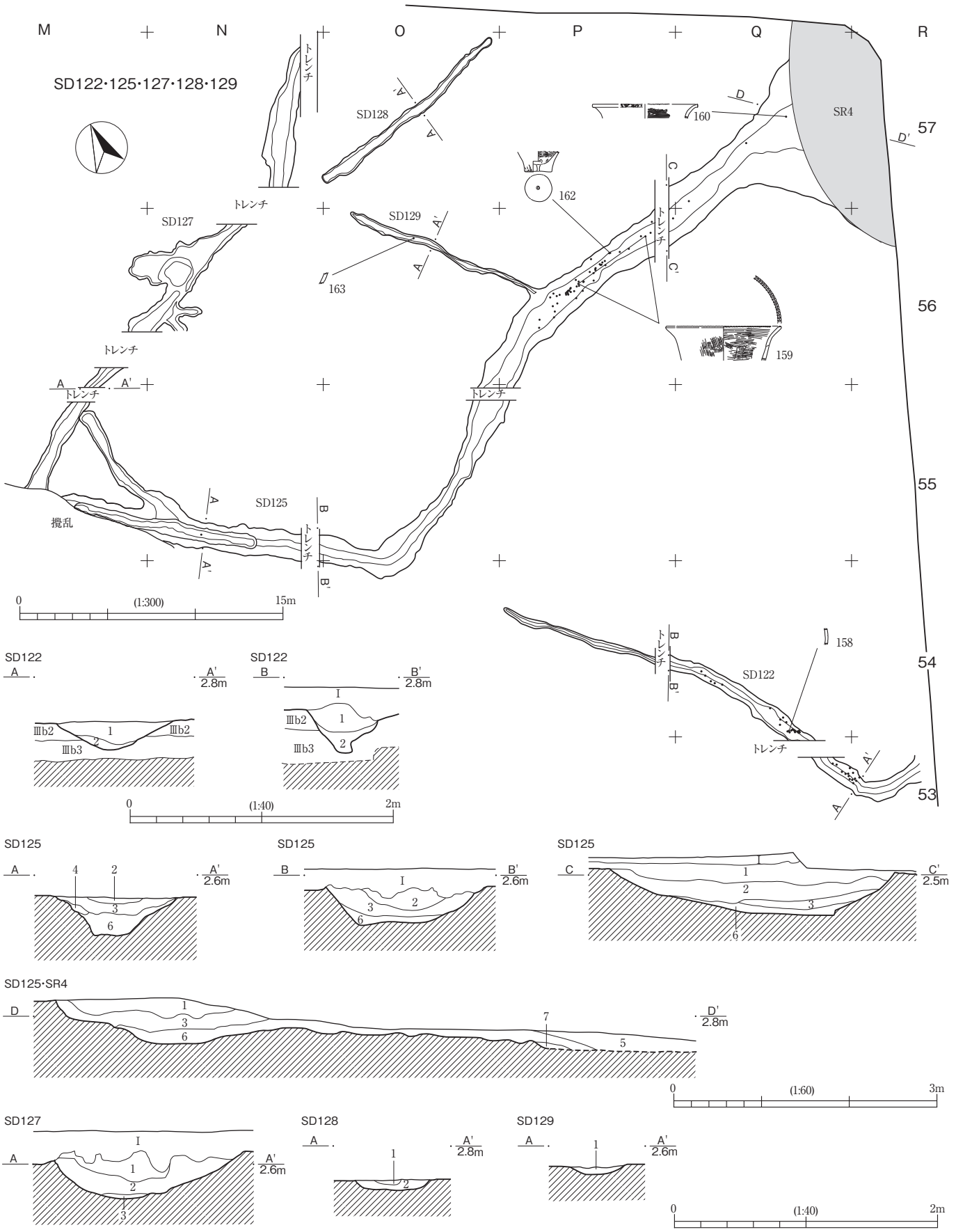
SK120
1. (10YR5/1)褐灰色砂質シルト　径1mmの炭化物を微量含む。

SX111



SX111
1. (7.5Y6/1)灰白色粘質シルト　径1～2mmの炭化物を少量含む。

0　(1:40)　2m



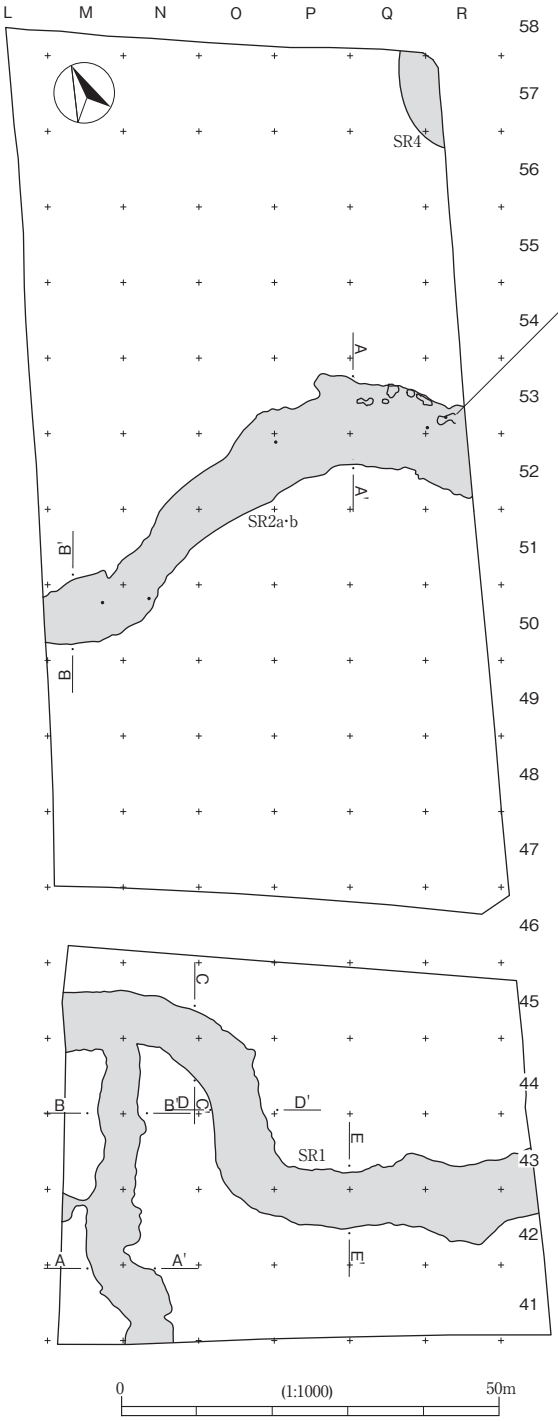
SD122
1. (5Y5/2)灰オリーブ色シルト　　径1～2mmの炭化物を少量含む。
2. (5Y3/2)オリーブ黒色粘質シルト　炭化物を層状に含む。

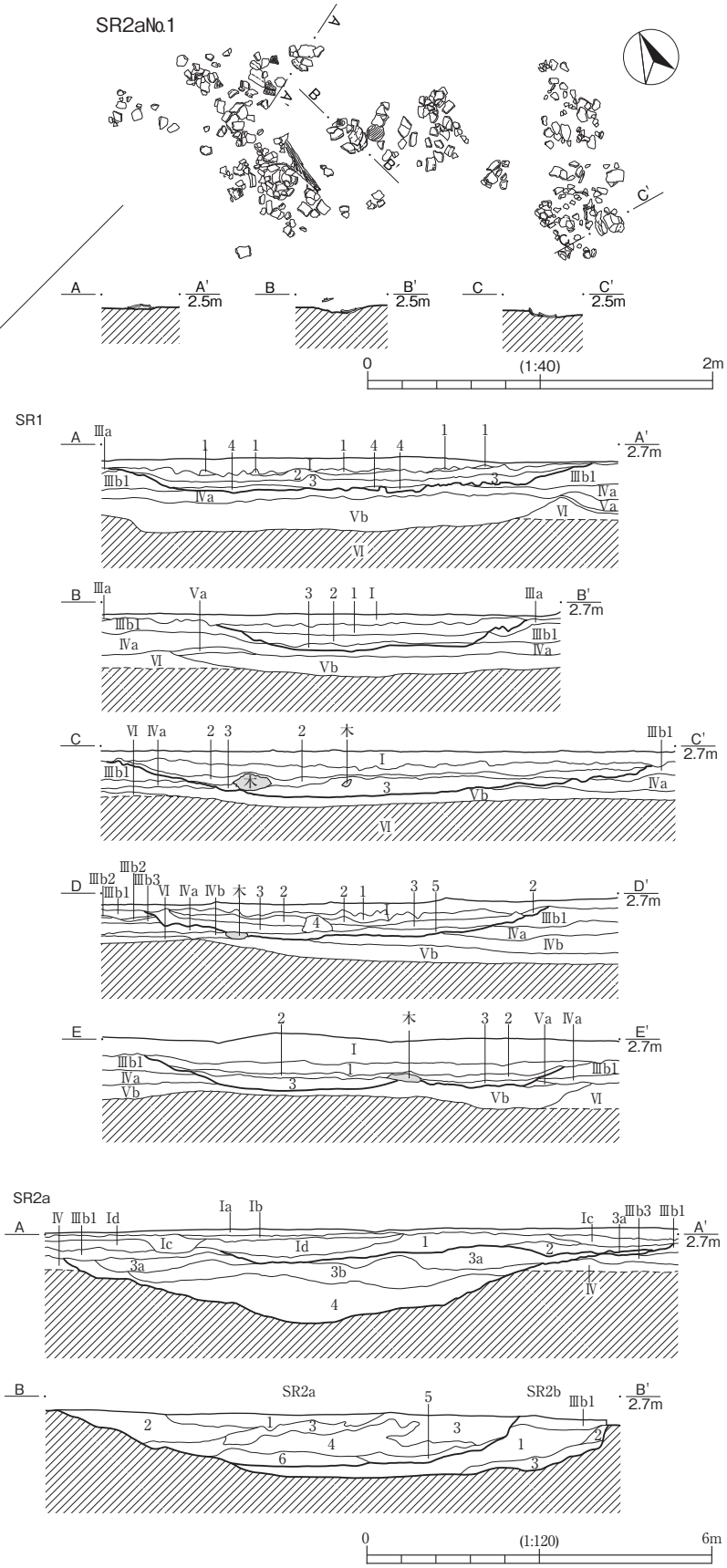
SD125
1. (2.5Y7/1)灰白色砂質シルト　　径1mm以下の炭化物を微量含む。
2. (7.5Y5/1)灰色粘質シルト　　径1～5mm炭化物を多量含む。
3. (7.5Y5/1)灰色粘質シルト　　径1mm以下の炭化物を微量含み、
(10YR6/6)明黄褐色砂を中量含む。
4. (75Y5/1)灰色粘質シルトと(7.5Y5/1)灰色砂質シルトの混層。
(10YR7/3)にぶい黄橙色砂を少量含む。
5. (2.5Y6/1)黄灰色砂
6. (10YR5/1)褐灰色粘質シルト　　径1～3mmの炭化物を中量含み、
径1～50mmの(7.5Y5/1)灰色粘質土ブロックを中量含む。
7. (10YR8/8)黄灰色砂と腐植土層との互層　径2～3mmの石英を含む。SR4覆土。

SD127
1. (10YR8/1)灰白色砂質土
2. (10Y8/1)灰白色シルト　　径1～3mmの炭化物を微量含む。
3. (10YR8/8)黄橙色砂と(10Y8/8)灰白色砂の混層。

SD128
1. (10YR6/1)褐灰色砂質シルト
2. (10YR6/1)褐灰色砂質シルト1層より砂質である。
径1mm以下の(10YR8/8)黄灰色砂を多量含む。

SD129
1. (10YR6/1)褐灰色シルト　　径1mm以下の(10YR8/8)黄灰色砂を多量含む。





SR1A-A'
1. (7.5Y4/1) 褐灰白シルト　腐植木質細片を微量含む。
2. (2.5Y5/1) 黄灰色シルト　腐植木片を少量含む。
3. (2.5YR3/1)黒褐色腐植土　腐植木質細片を極多量含み、太い流木?を少量含む。
4. (2.5YR3/1)黒褐色腐植土　3層よりやや大きな木質細片を含み、径1㎜以下の砂を中量含む。

SR1B-B'
1. (7.5GY4/1)　暗緑灰粘質シルト
2. (7.5YR3/1)黒褐色腐植土　大きな流木?を含む。
3. (10YR2/2)黒褐色腐植土　腐植木質細片を極多量含む。

SR1C-C'
1. (2.5Y5/1)黄灰色シルト　腐植木質細片を少量含む。
2. (10YR3/2)黒褐色粘質シルト　腐植流木、木質細片を層状に含む。
3. (10YR8/4)浅黄橙色粗粒砂　径1㎜程度の砂層。

SR1D-D'
1. (2.5Y5/1)黄灰色粘質シルト
2. (7.5GY4/1)暗緑灰色粘質シルト
3. (10YR2/2)黒褐色腐植土　木質細片を極多量含み、流木?を少量含む。
4. (10YR8/6)黄橙色粘質シルトブロック　Ⅲb1層のブロック。
5. (10YR8/6)黄橙色粗粒砂　径1㎜程度の砂層を含み、金雲母を中量含む。

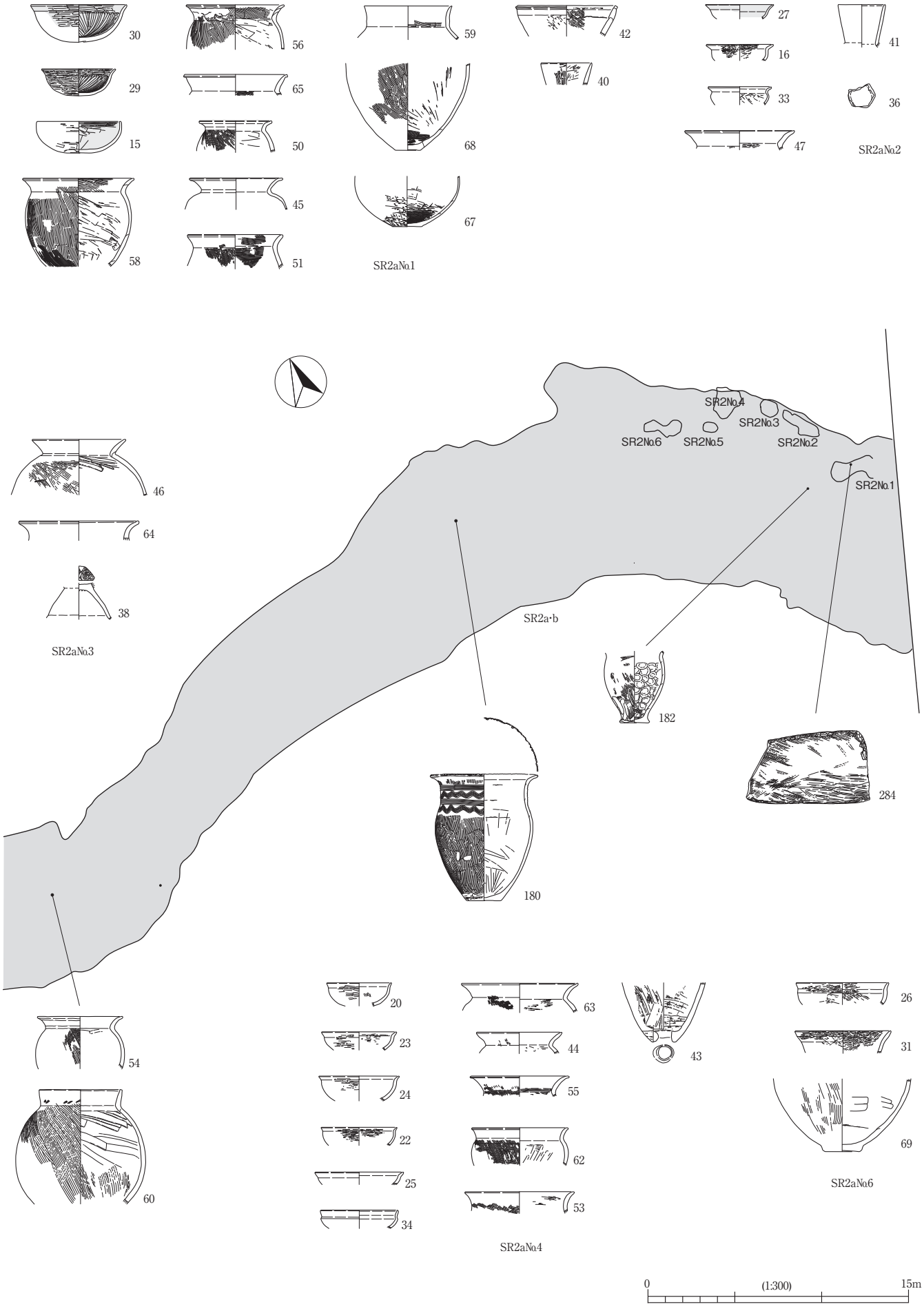
SR1E-E'
1. (2.5Y5/1)黄灰色粘質シルト　腐植植物を少量含む。
2. (10YR2/2)黒褐色腐植土　木質細片を極多量を含み、流木?を少量含む。
3. (10YR8/6)黄橙色粗粒砂　径1㎜程度の砂層を含み、金雲母を多量含む

SR2aA-A'
1. (10YR4/1)褐灰色粘質シルト
2. (10YR3/2)黒褐色粘質シルト　径5～10mmの木炭粒を多量含み、古墳後期遺物を多量含む。
3a. (2.5Y8/6)黄色粗粒砂　所々に(2.5Y7/2)灰黄色粘質シルトが層状に入り、この中に遺物を含む。
3b. (2.5Y7/2)灰黄色中粒砂　腐植木質細片堆積層を互層状に含む。
4. (N6/0)　灰色中粒砂　腐植木片堆積層を互層状に含み、弥生中期遺物を少量含む。

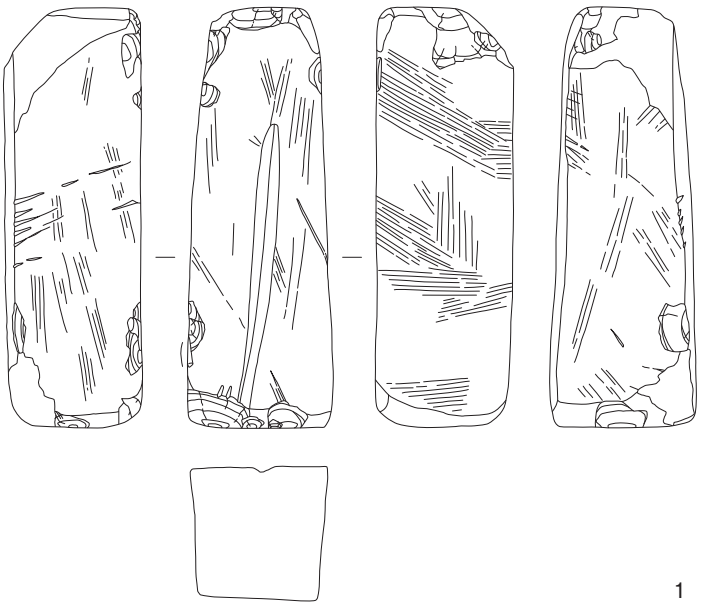
SR2aB-B'
1. (10Y5/1)灰色粘質シルト　径1㎜以下の炭化物を微量含み、金雲母を中量含む。
2. (10Y6/1)灰色砂と(10YR4/1)褐色砂の混砂層。
3. (2.5Y5/4)黄褐色砂と(10Y5/1)灰色粘質シルトの混砂層。
4. (2.5Y7/3)浅黄色砂　(10Y6/1)灰色砂が筋状に混入。
5. (10Y4/1)灰色砂　自然木を多量含む。
6. (10Y6/1)灰色砂　自然木を多量含む。

SR2b
1. (10Y5/1)灰色砂と(10YR4/1)褐灰色粘質シルトの混層。
2. (10Y5/1)灰色砂質シルト
3. (10Y5/1)灰色砂と(10YR4/1)褐灰色粘質シルトの混層。

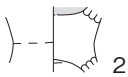
SR2遺物接合図


30
56
59
42
27
41
29
65
16
15
50
68
40
33
36
47
SR2a№2
58
45
67
51
SR2a№1
SR2No.4
SR2No.3
SR2No.6
SR2No.5
SR2No.2
SR2No.1
46
64
38
SR2a№3
SR2a·b
182
284
180
20
63
26
23
44
43
31
54
24
55
22
62
69
60
25
53
34
SR2a№6
SR2a№4
0
(1:300)
15m

SI6(1)

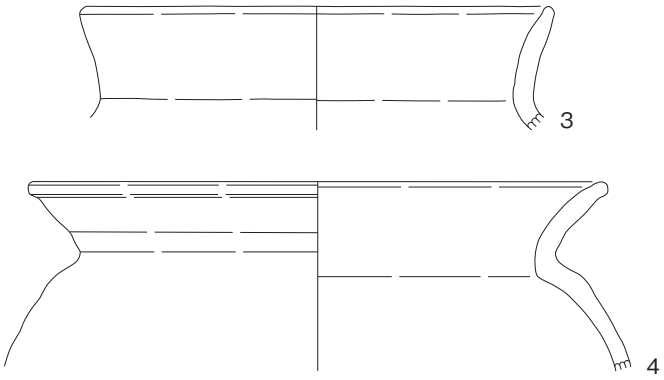


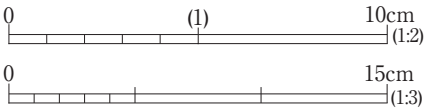
SB107-P3(2)



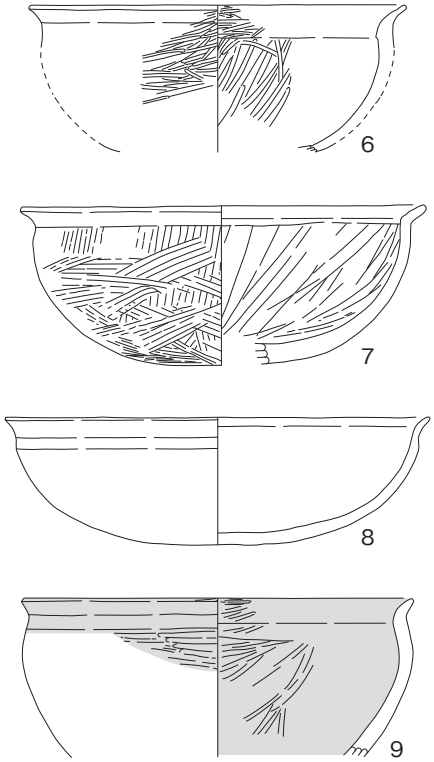
SK2(5)

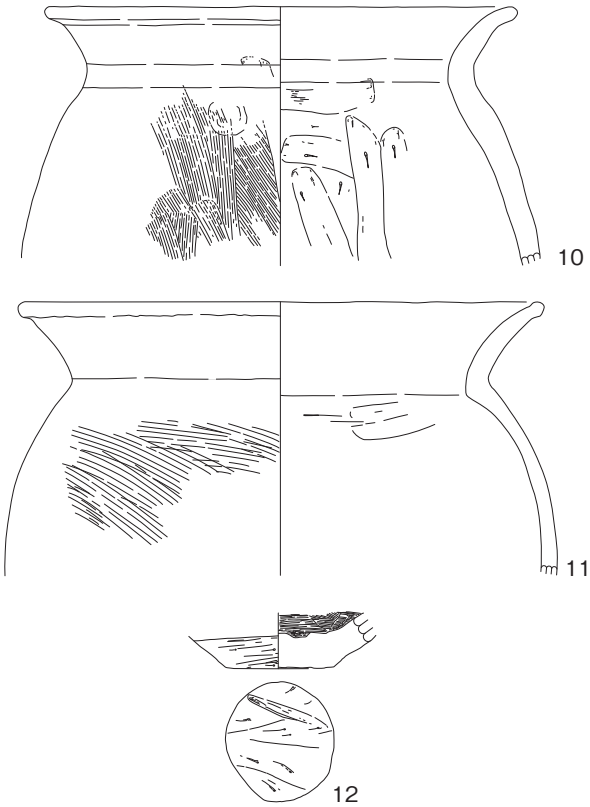
SK1(3･4)





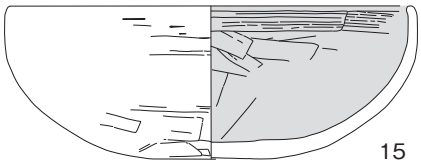
SK116(6～12)

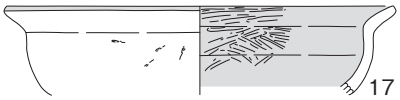


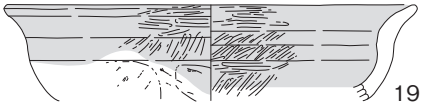


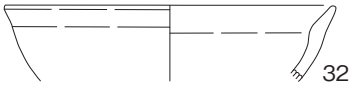
SR1(13)

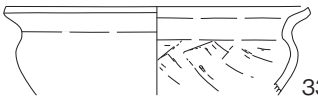
SR2(14～39)

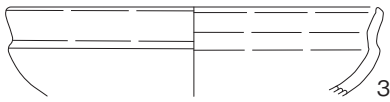


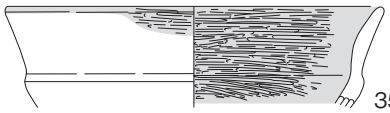


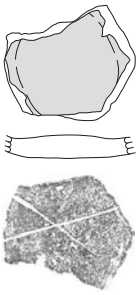


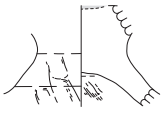


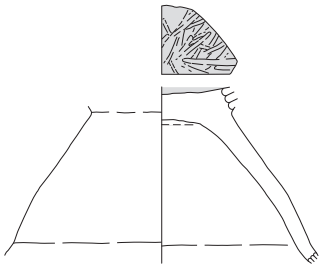


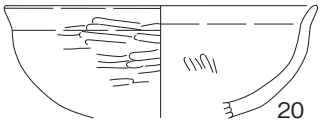


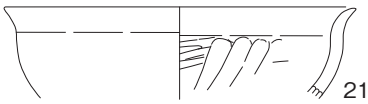


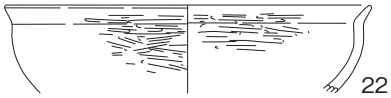


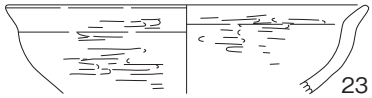


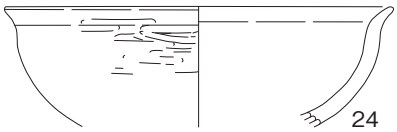


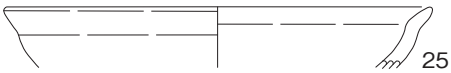


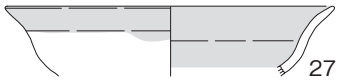


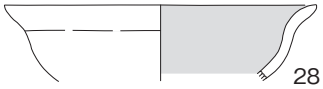


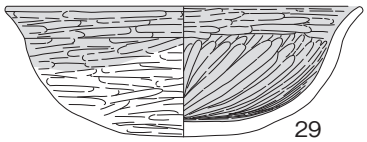


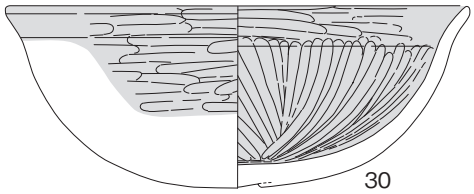


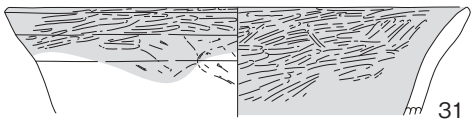


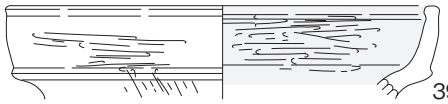




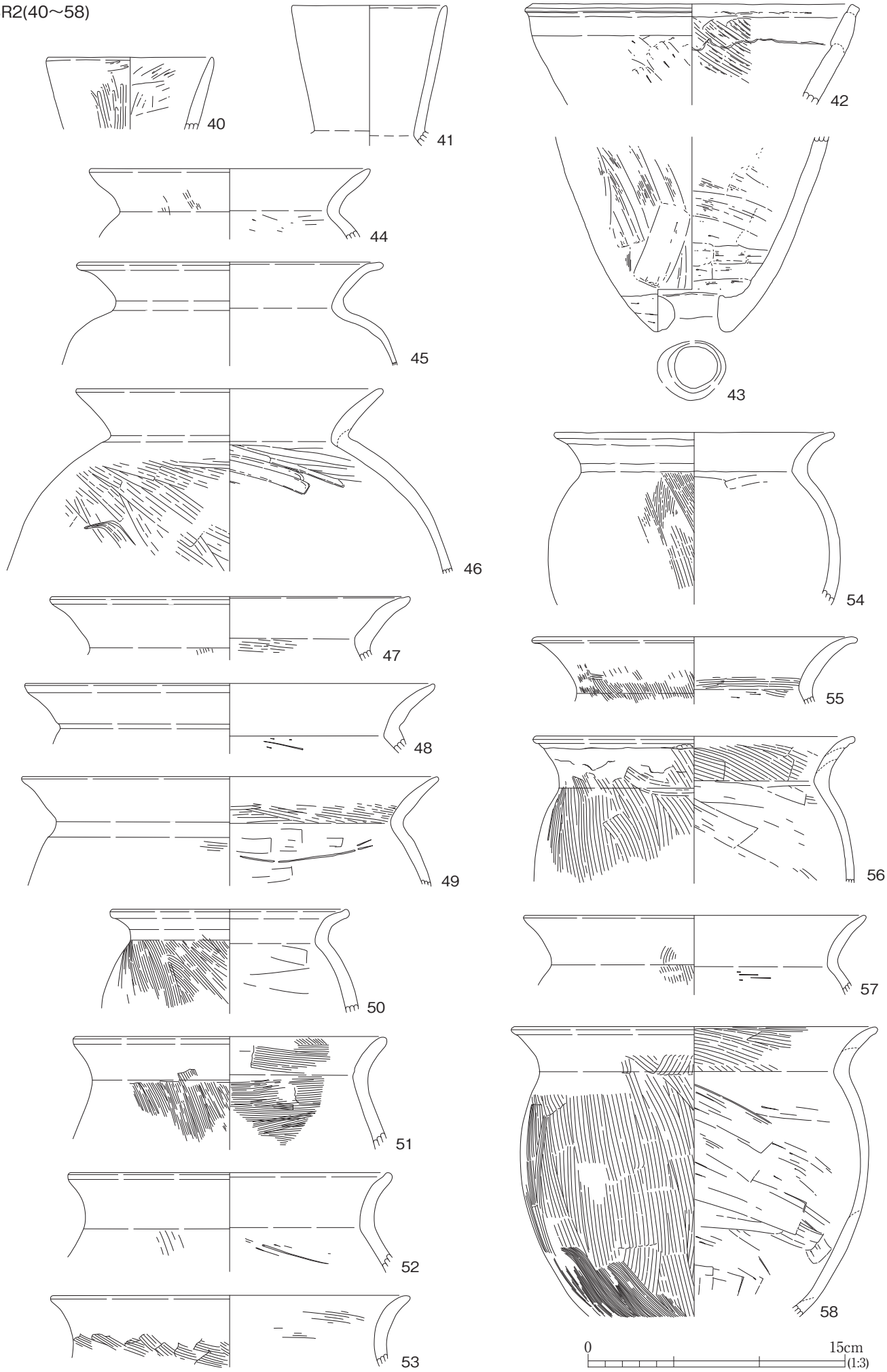




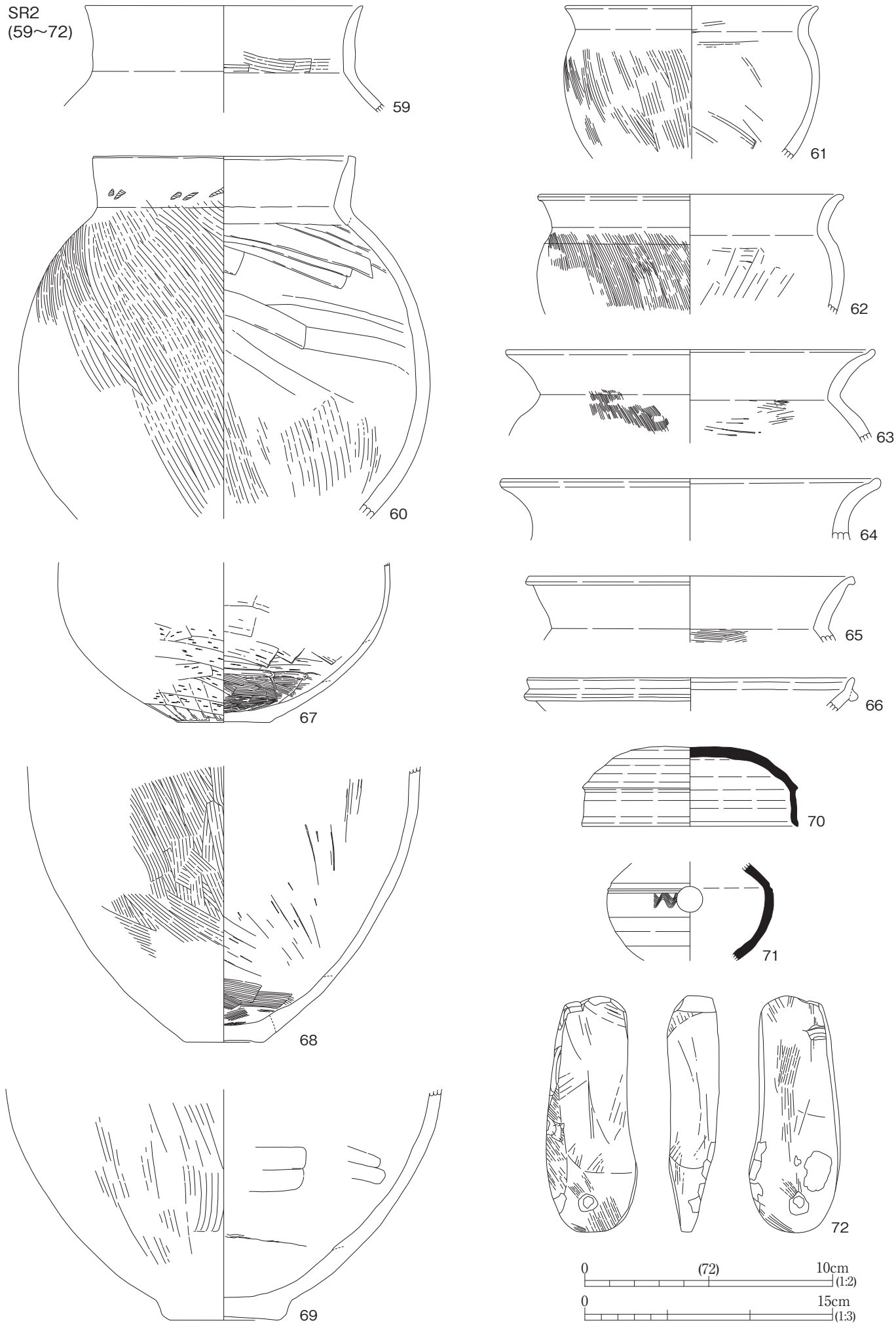




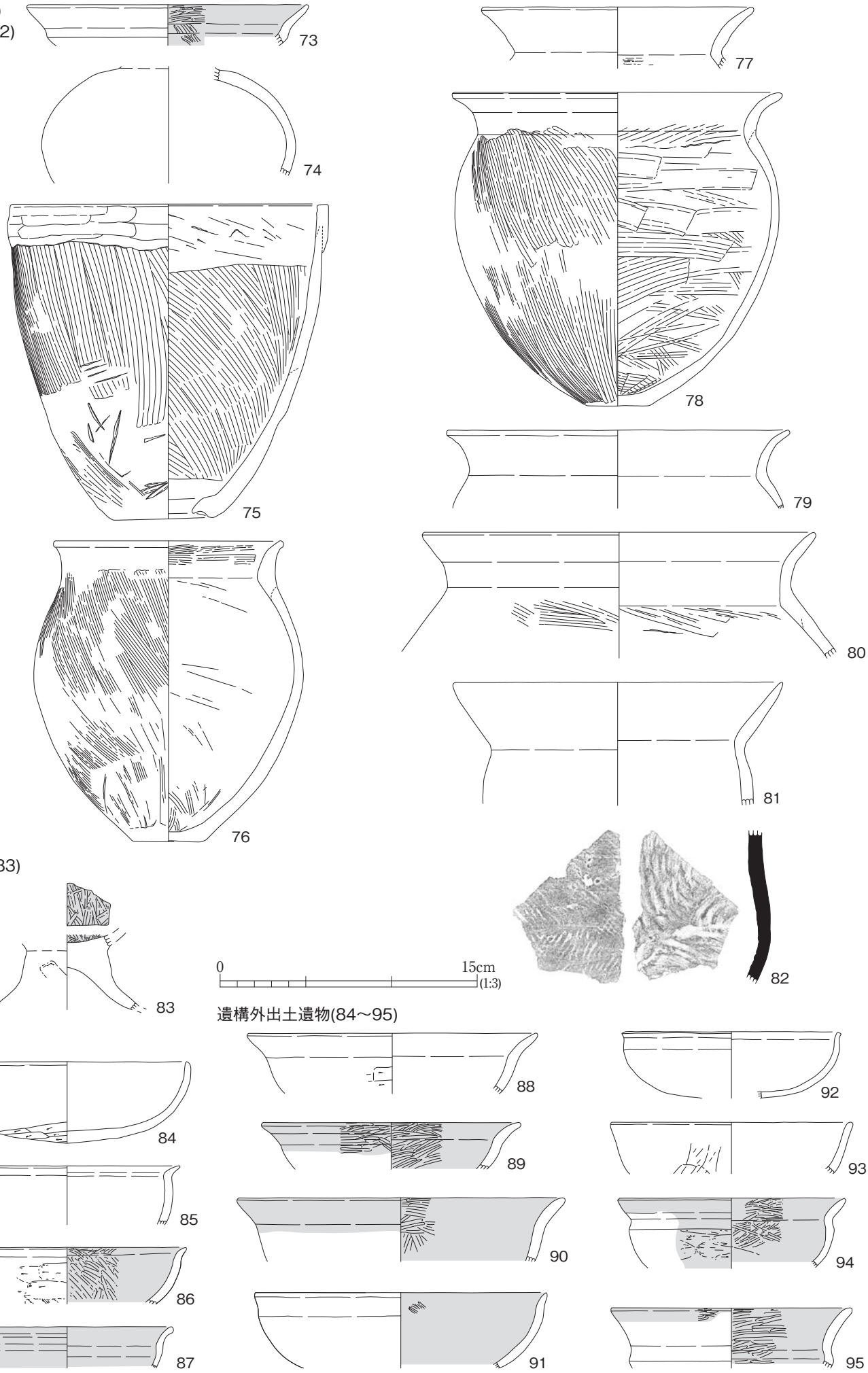
SR2(40～58)



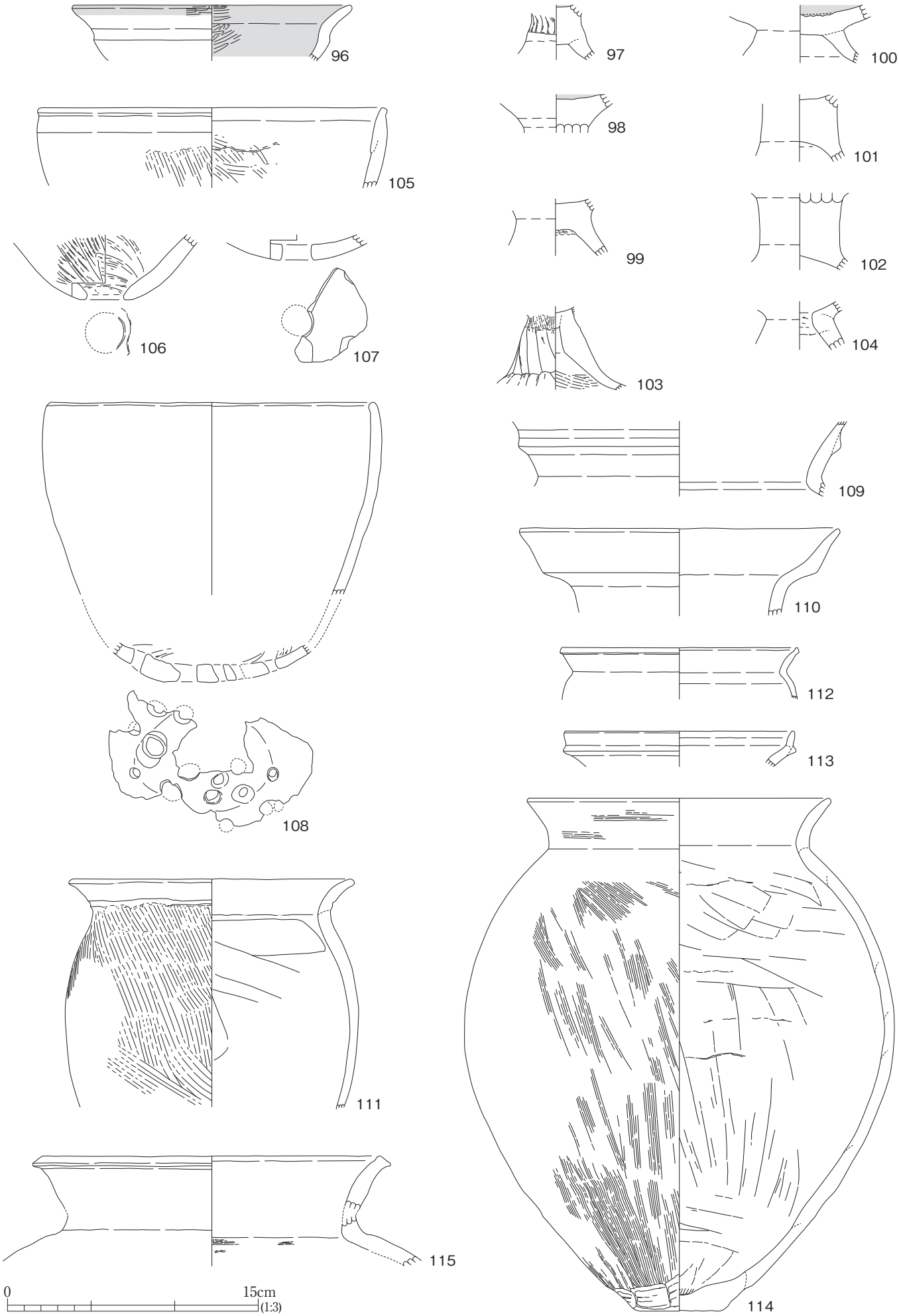
SR2
(59～72)



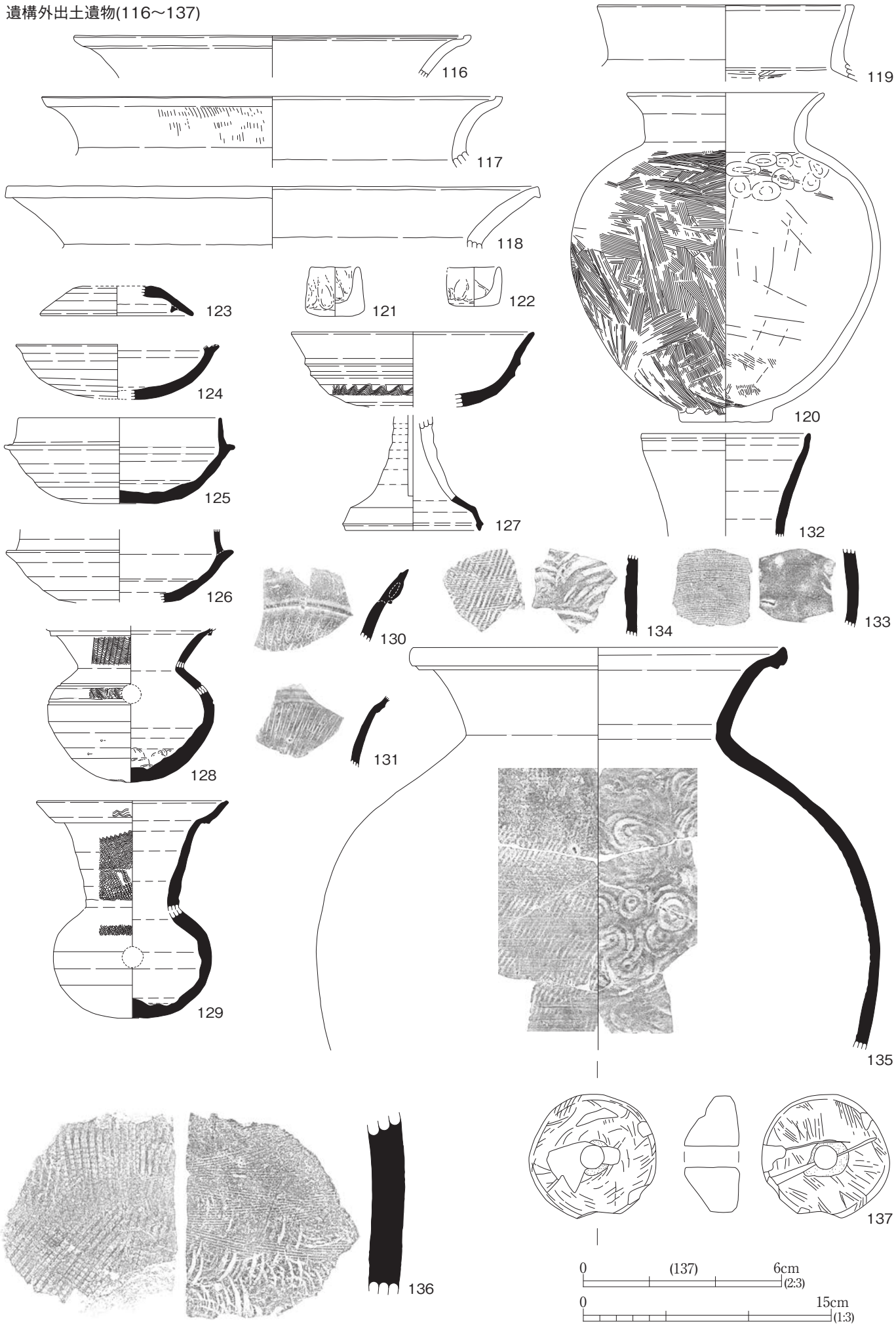
SX119
(73～82)


73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
P101(83)
83
0
15cm
(1:3)
遺構外出土遺物(84～95)
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95

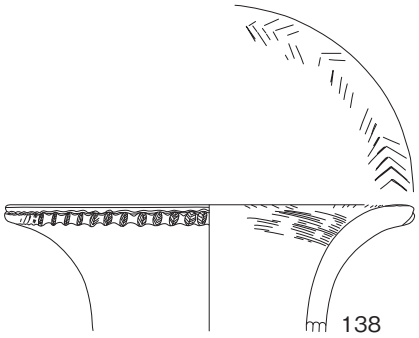
遺構外出土遺物(96～115)



遺構外出土遺物(116～137)

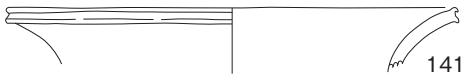


SI1(138･139)

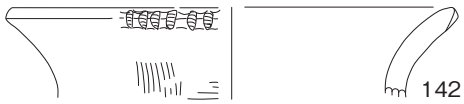


SI3(140)

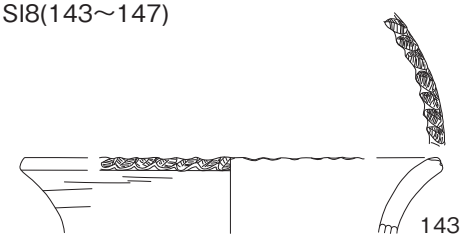
SI9　炉(141)

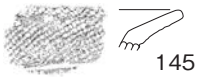


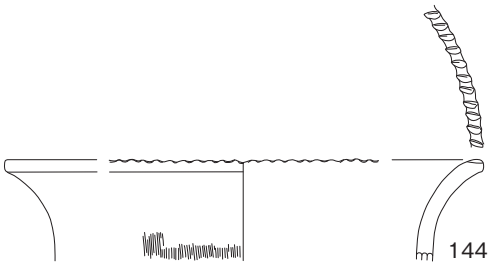
SI10　周溝(142)



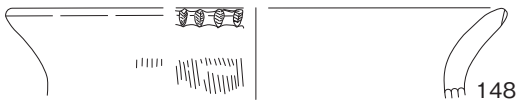
SI8(143～147)



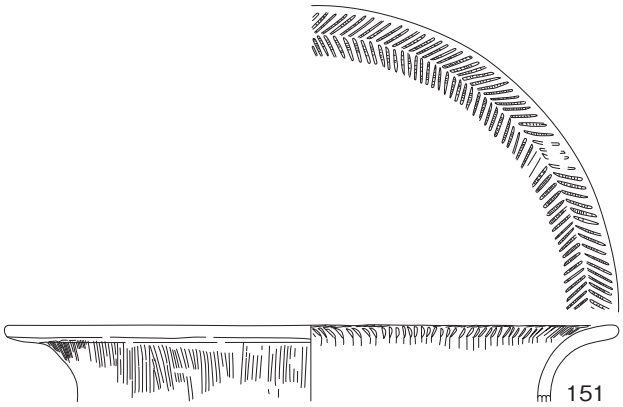




1号周溝遺構　周溝(148･149)

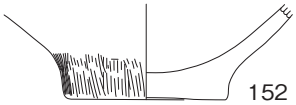


H2　2号周溝遺構　1号土坑(151)

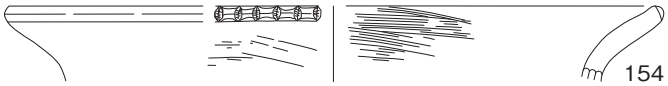


2号周溝遺構　周溝(150)

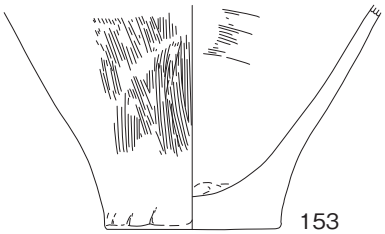
3号周溝遺構　1号土坑(152)



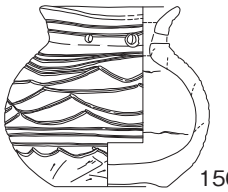
SK126(154･155)

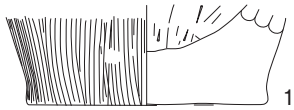


SK4(153)



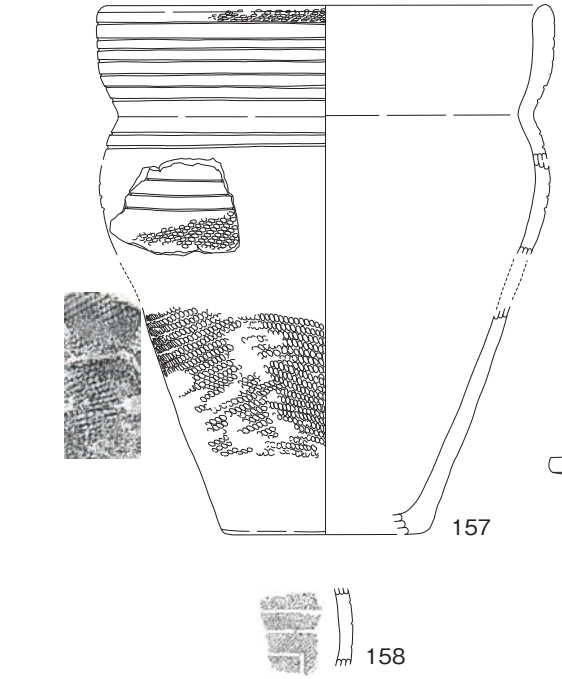
SK134(156)



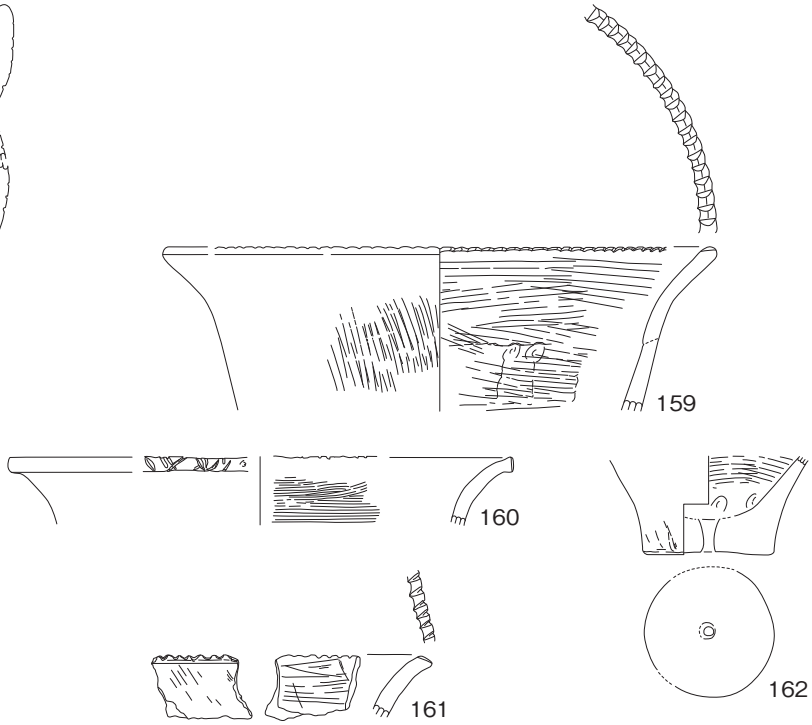


0　15cm
(1:3)

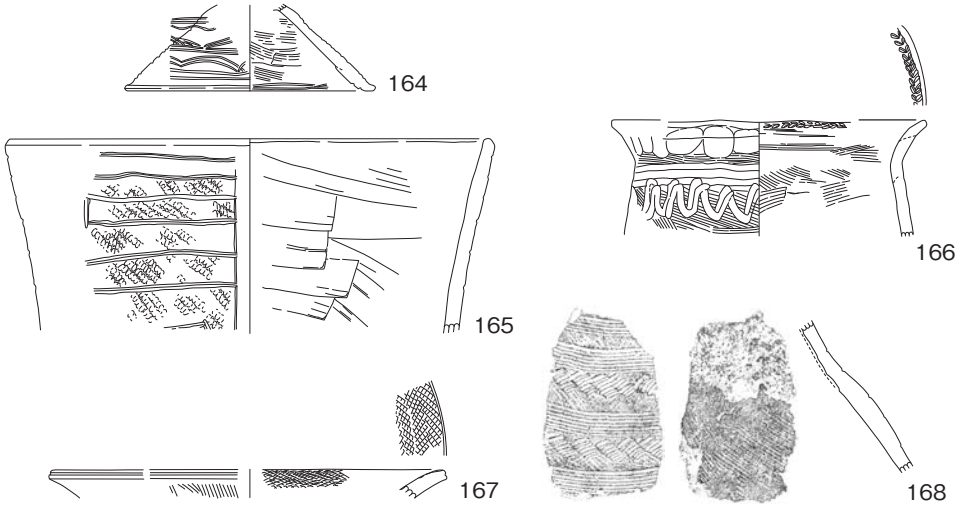
SD122(157･158)



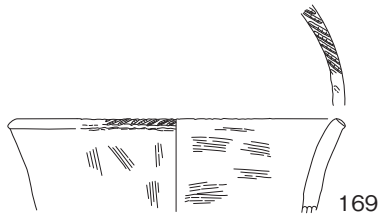
SD125(159～162)

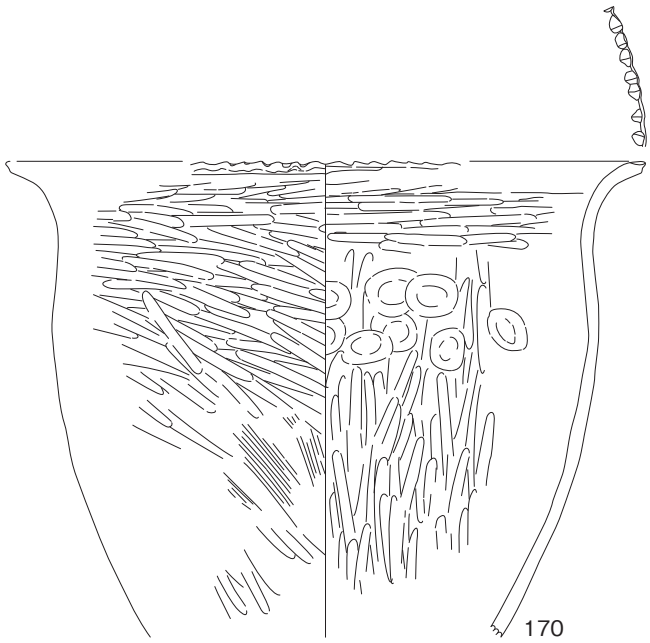


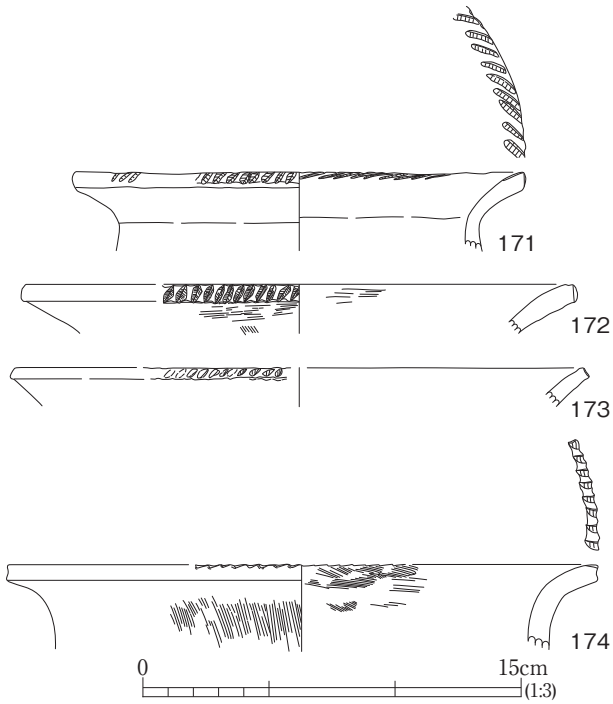
SR2(164～174)



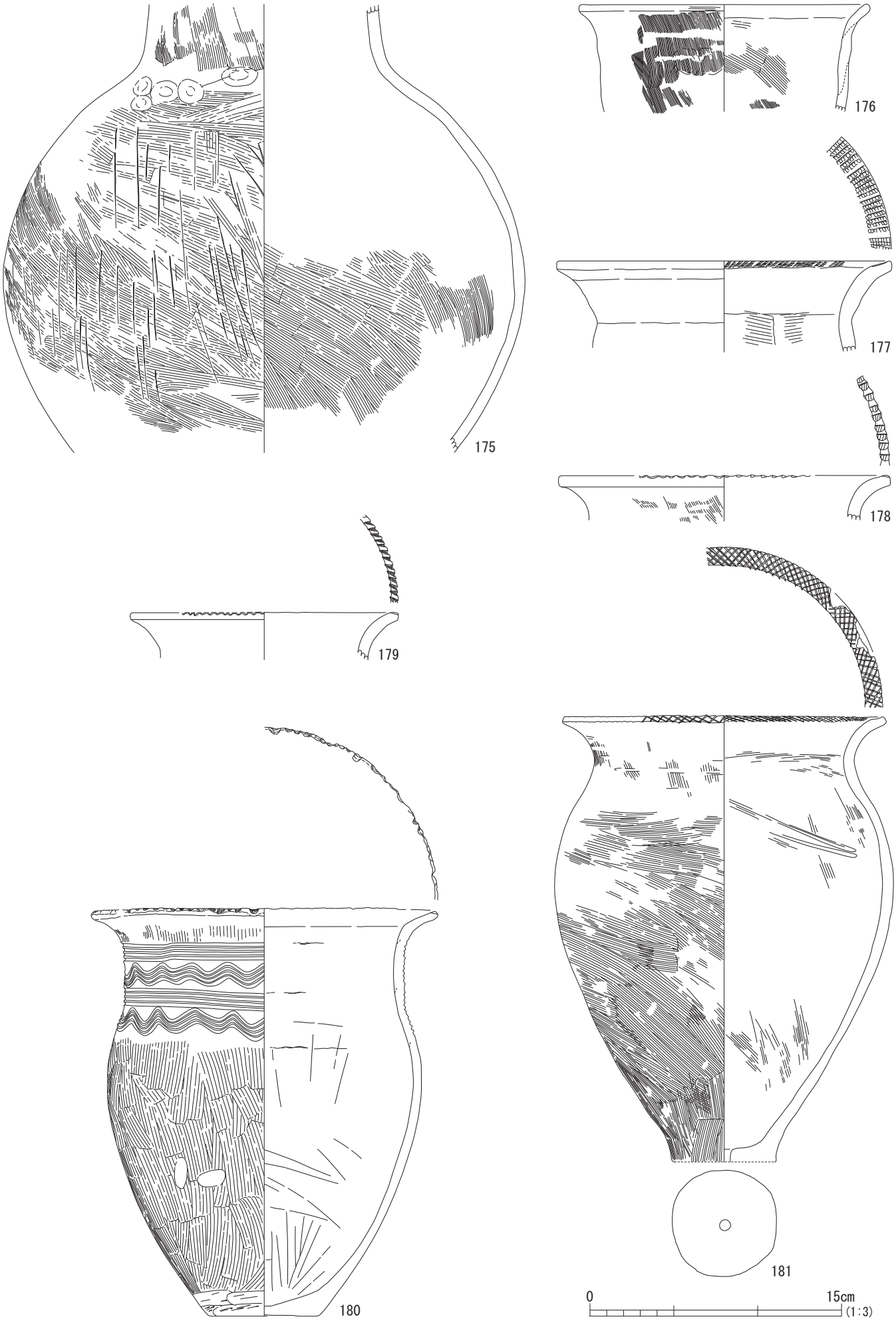
SD129(163)



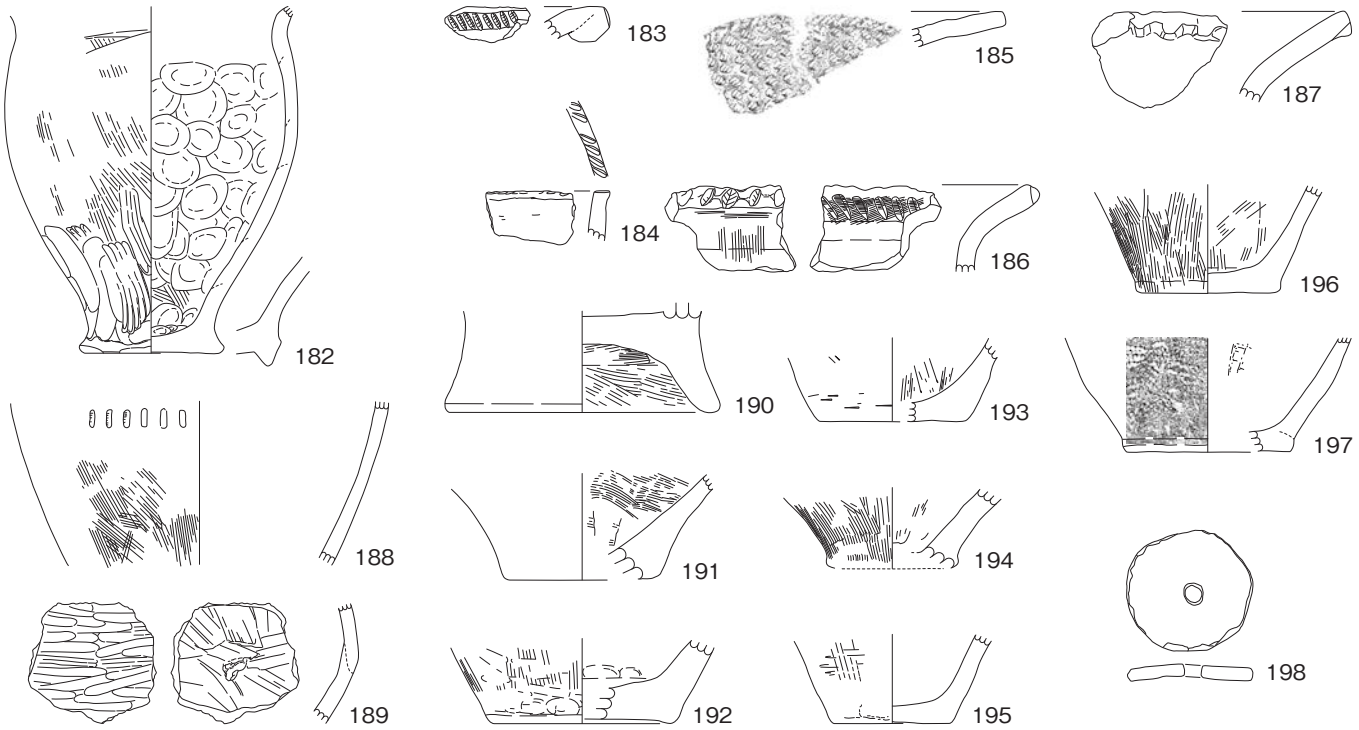




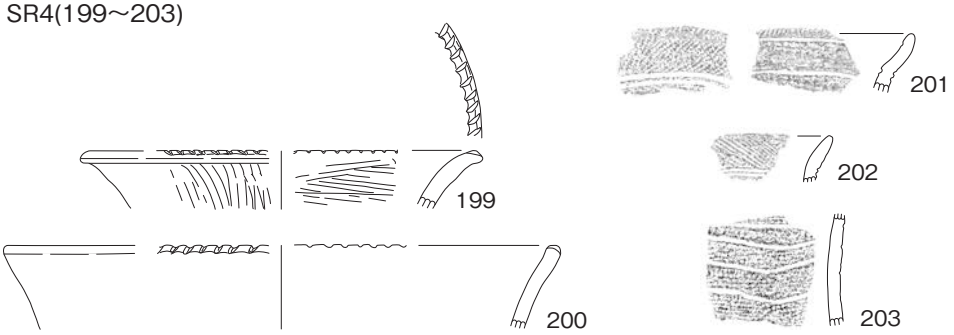
SR2(175～181)



SR2(182～198)

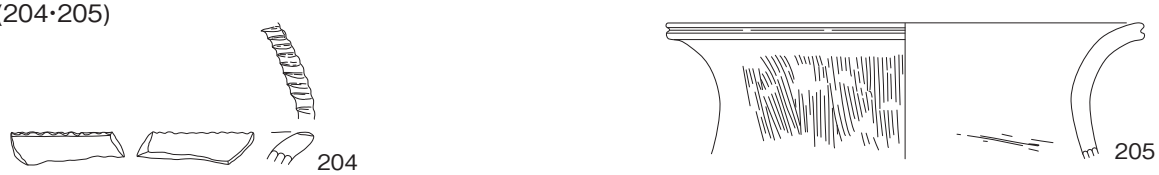


SR4(199～203)

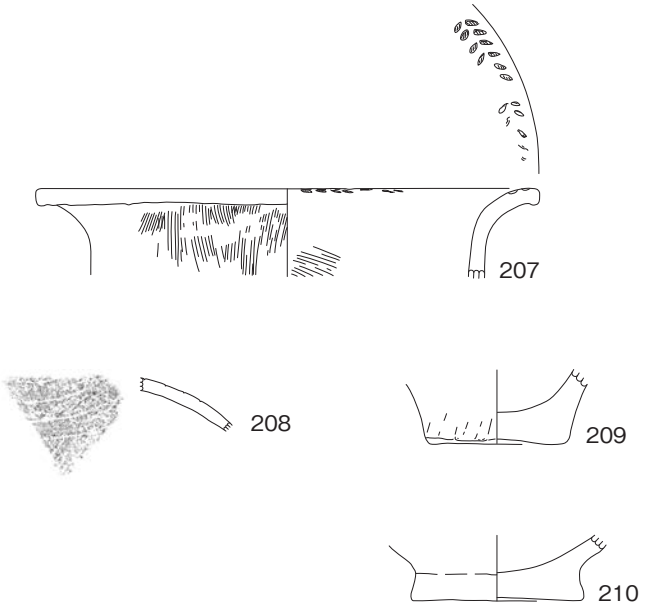


54R-P2(206)

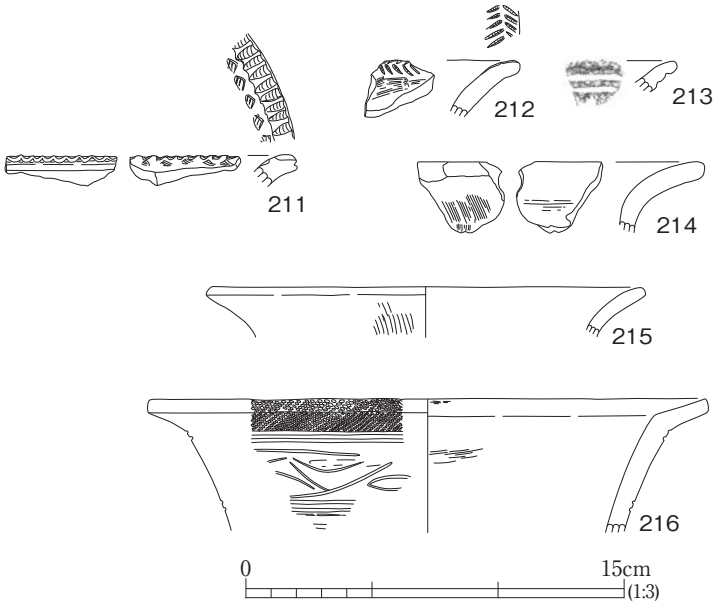
SX117　炉(204･205)



H1層(207～210)

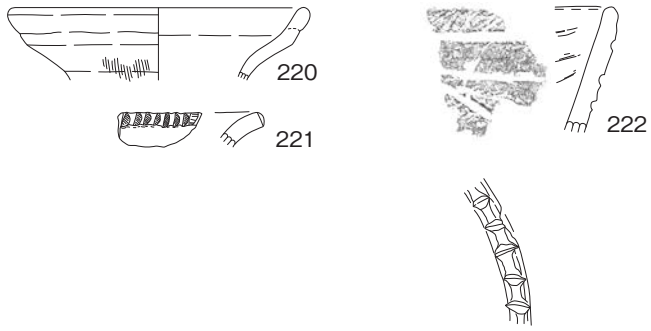


H2層　1号周溝遺構直上(211～216)

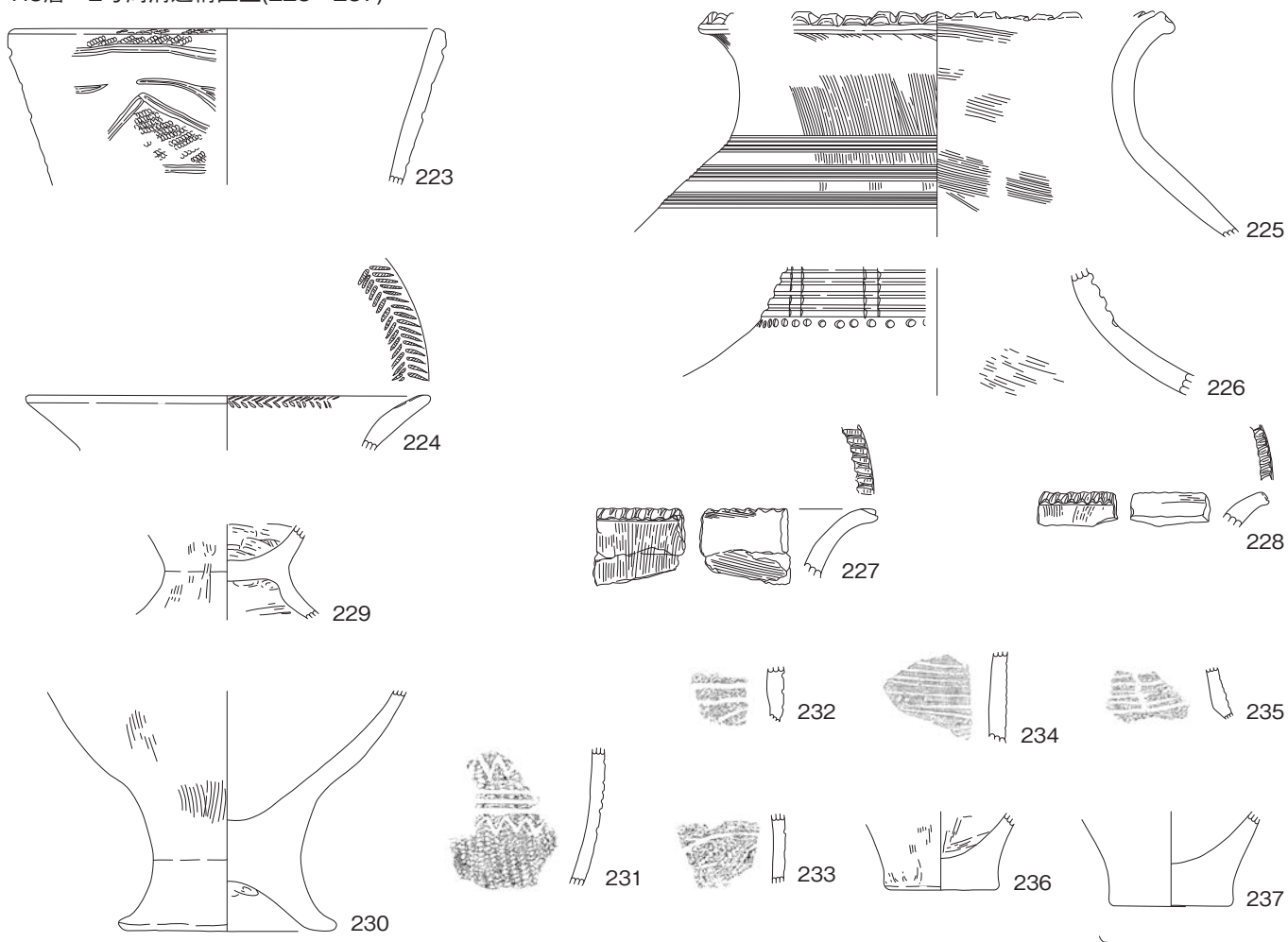


H2層　1号周溝遺構直上(217～219)

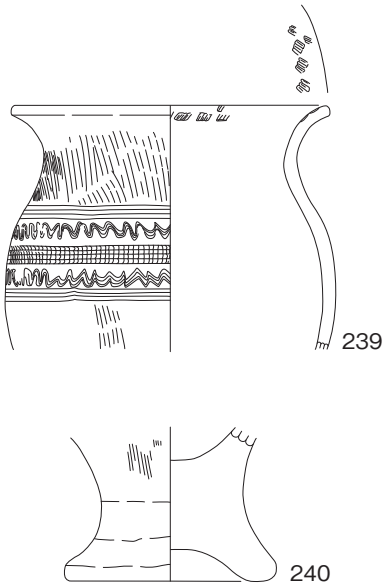
H2層(220～222)



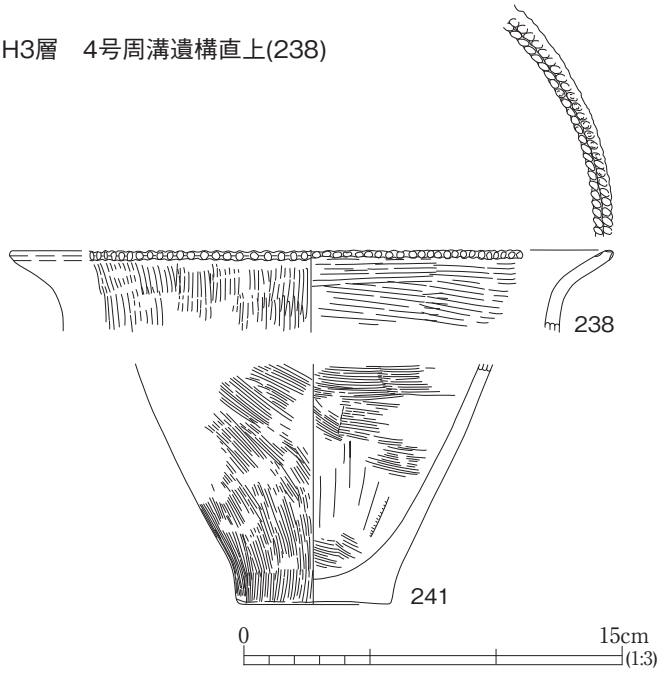
H3層　2号周溝遺構直上(223～237)



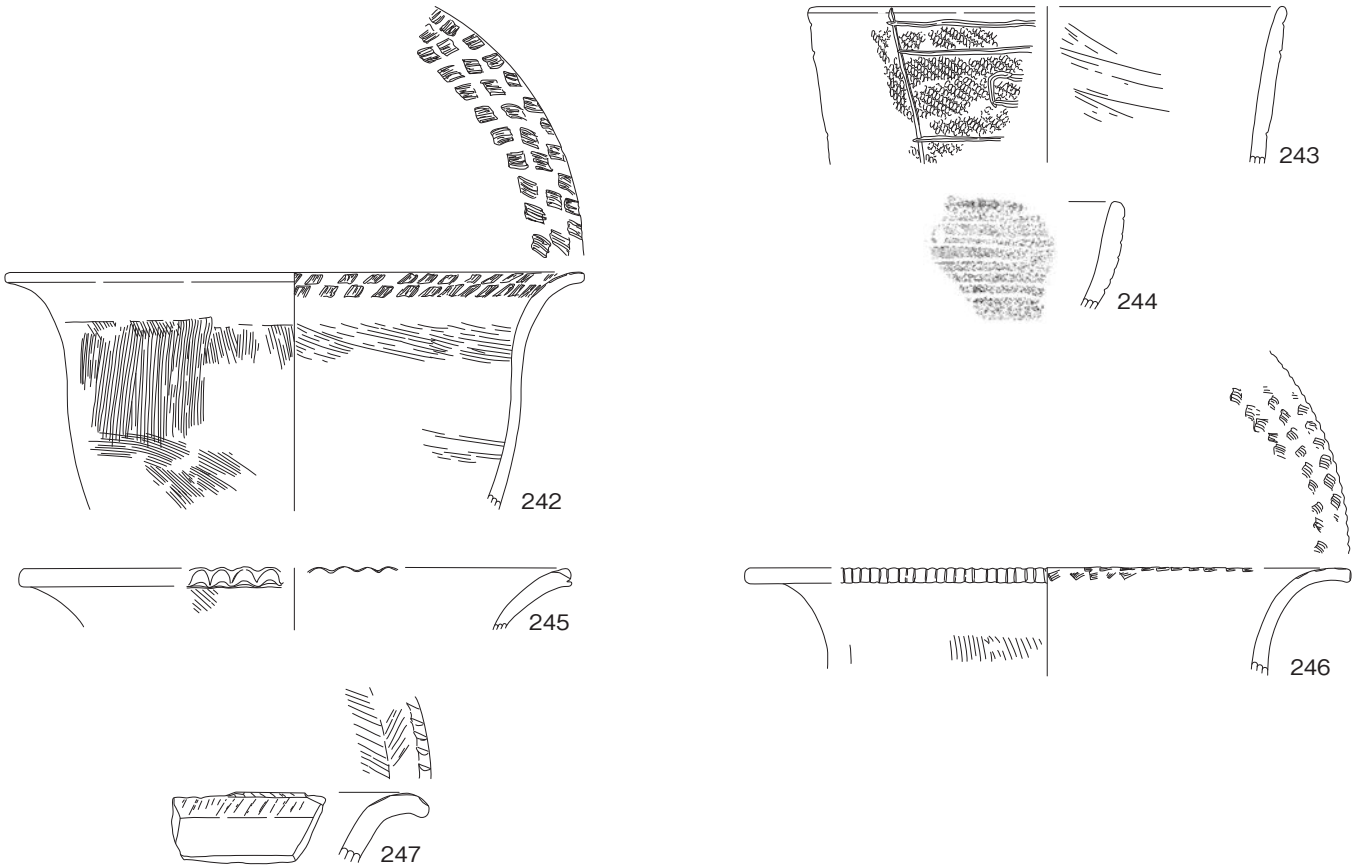
H3層(239～241)



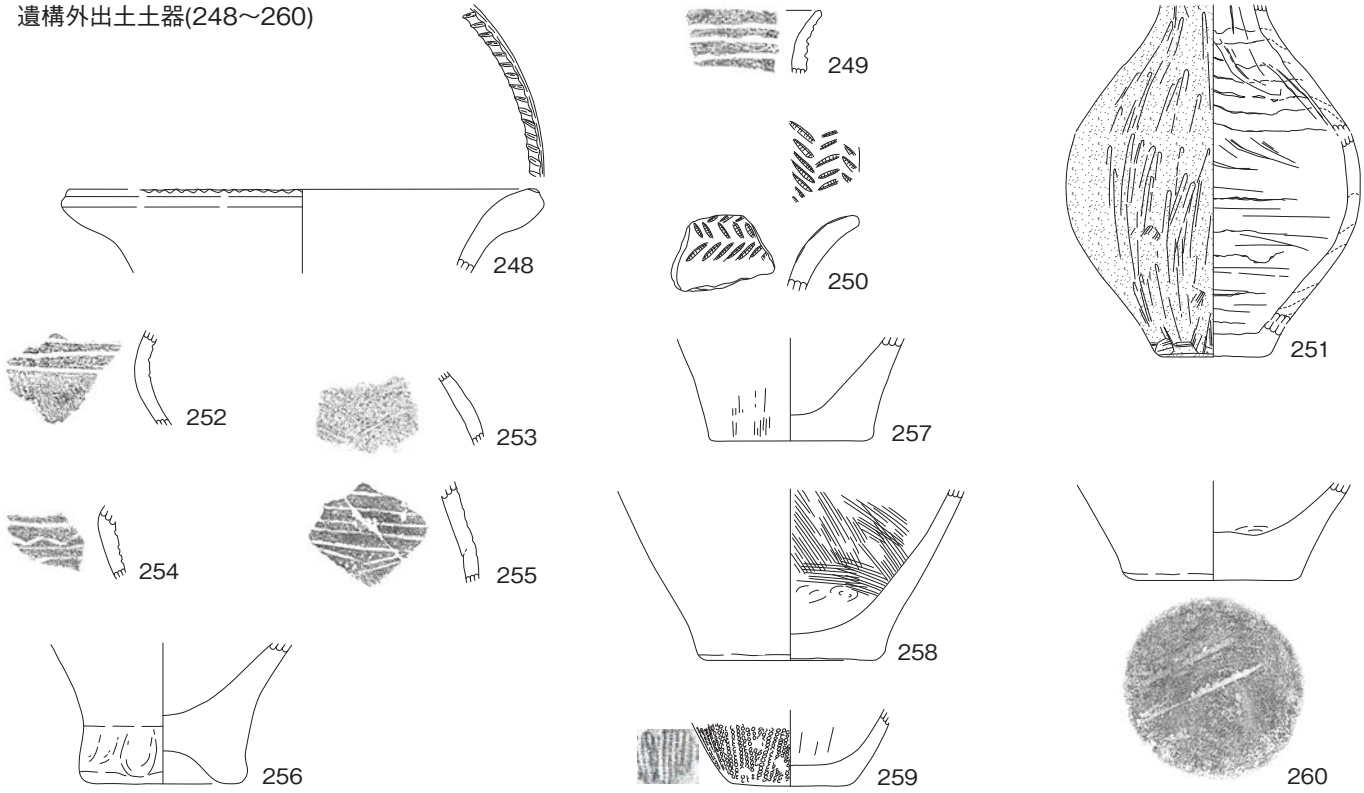
H3層　4号周溝遺構直上(238)



Ⅲb2b層(242～247)

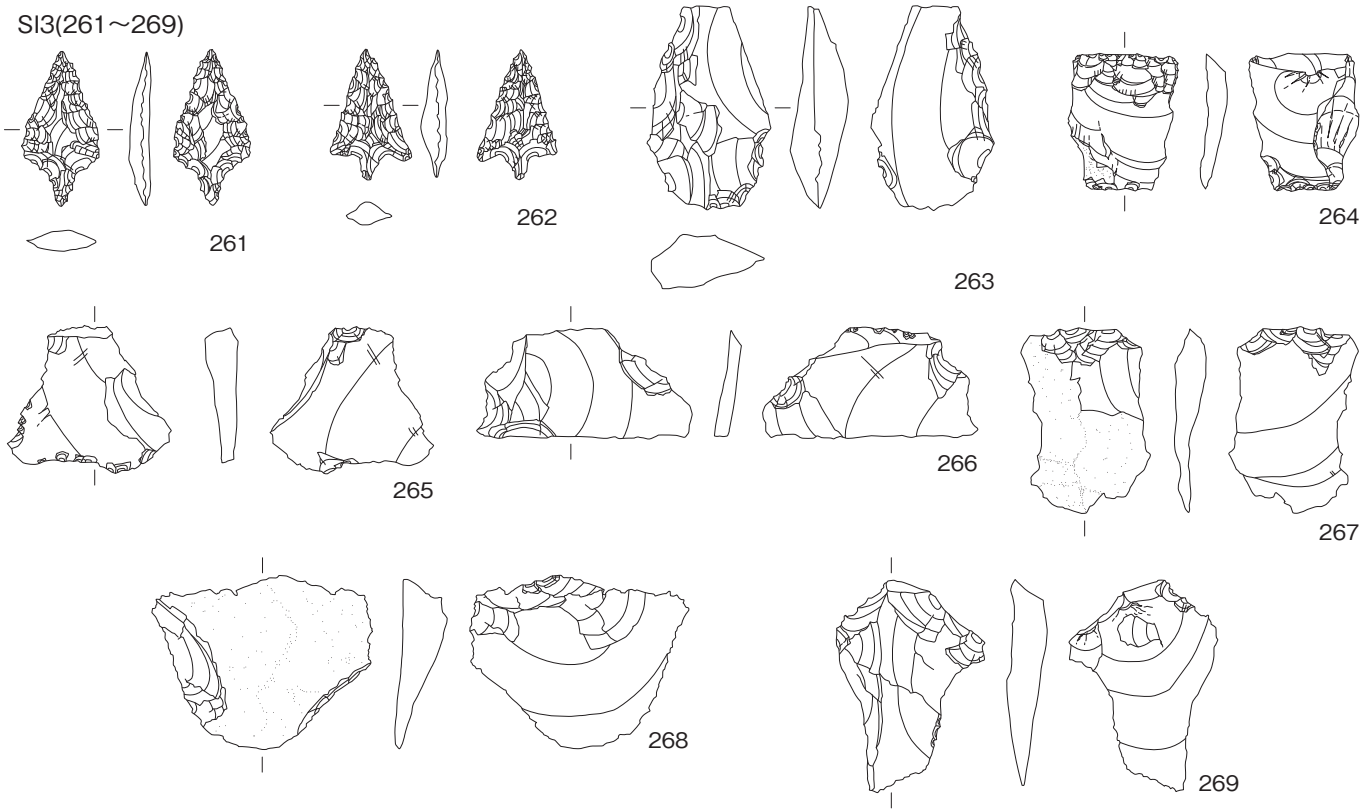


遺構外出土土器(248～260)

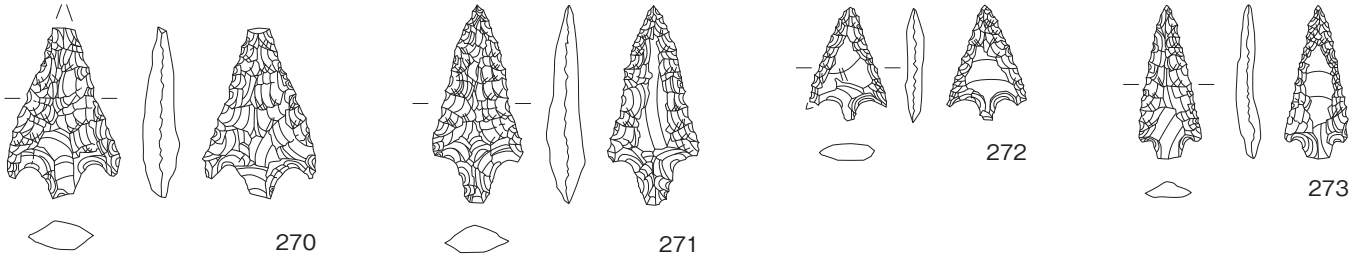


0　15cm
(1:3)

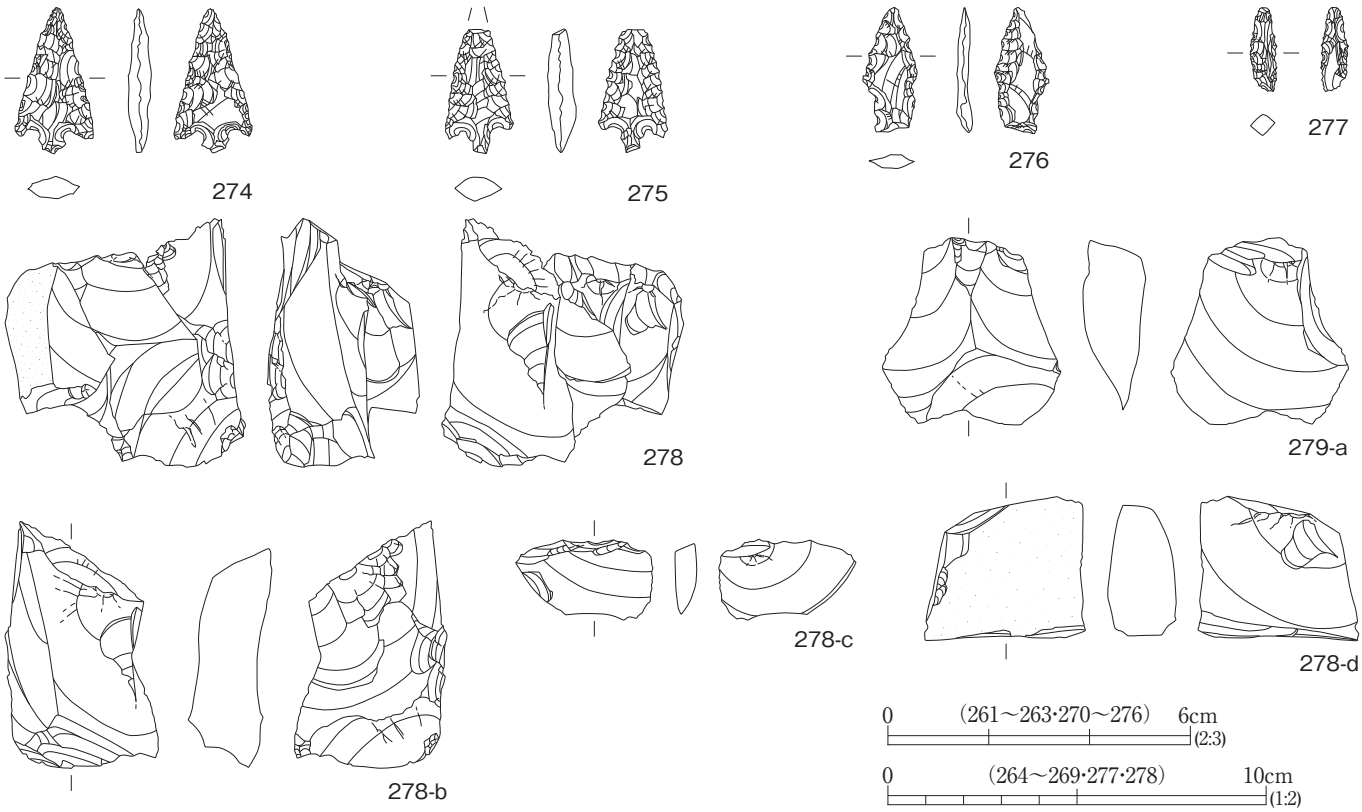
SI3(261～269)



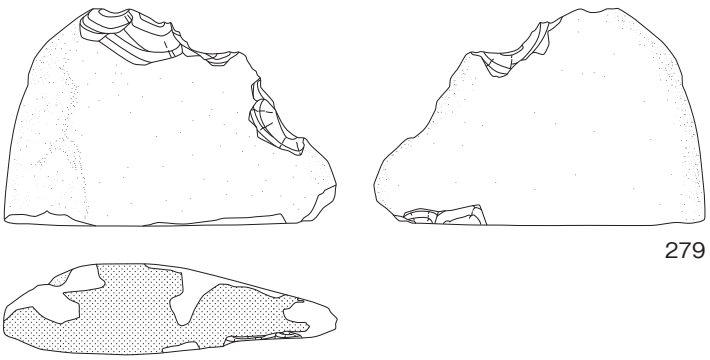
SI12周溝(270)　　2号周溝遺構　1号土坑(271･272)　　2号周溝遺構　周溝(273)



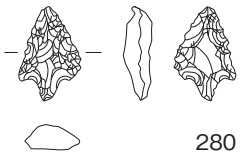
SK4(274)　　SK126(275～278)



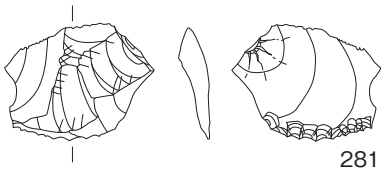
SK126(279)

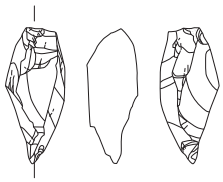


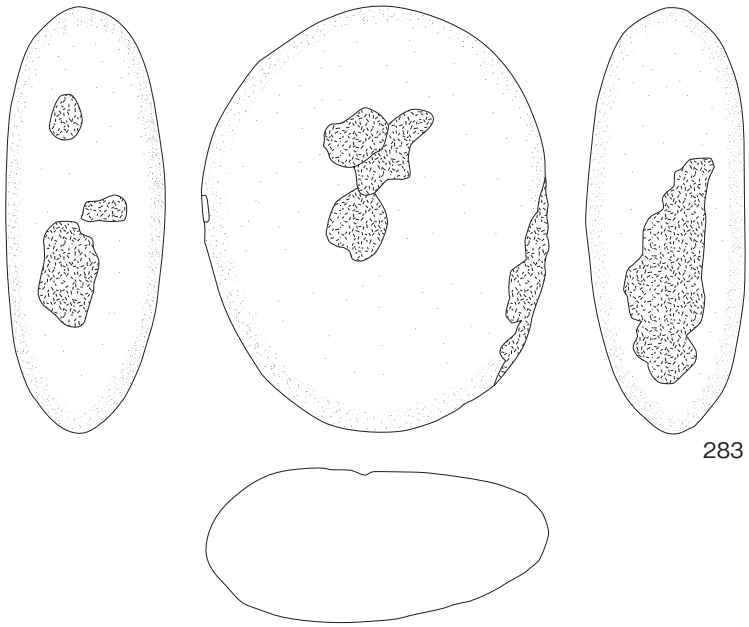
SD122(280)

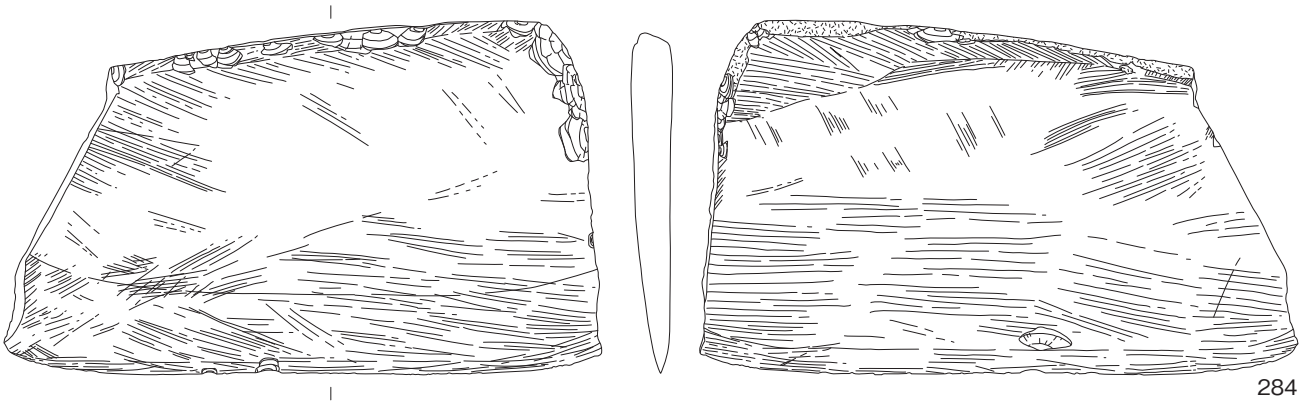


SR2(281～284)

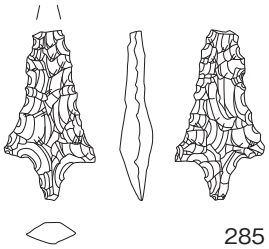


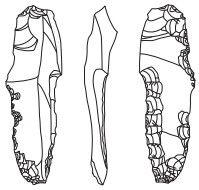


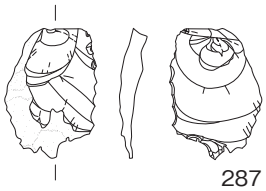




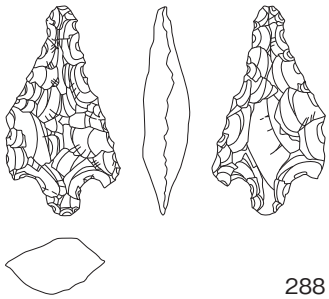
SX111(285～287)







SX136(288)

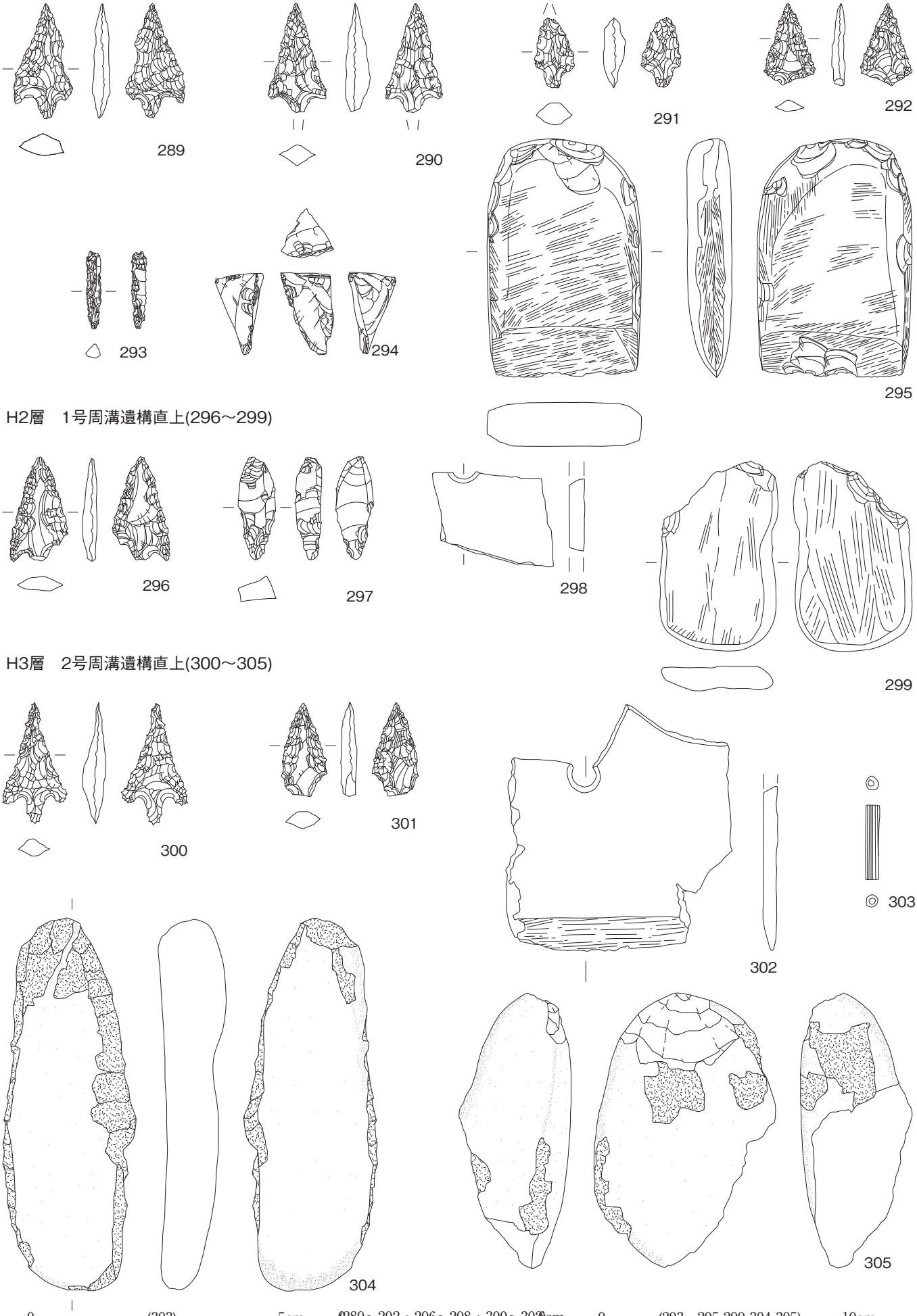


0　(280･285･288)　6cm (2:3)

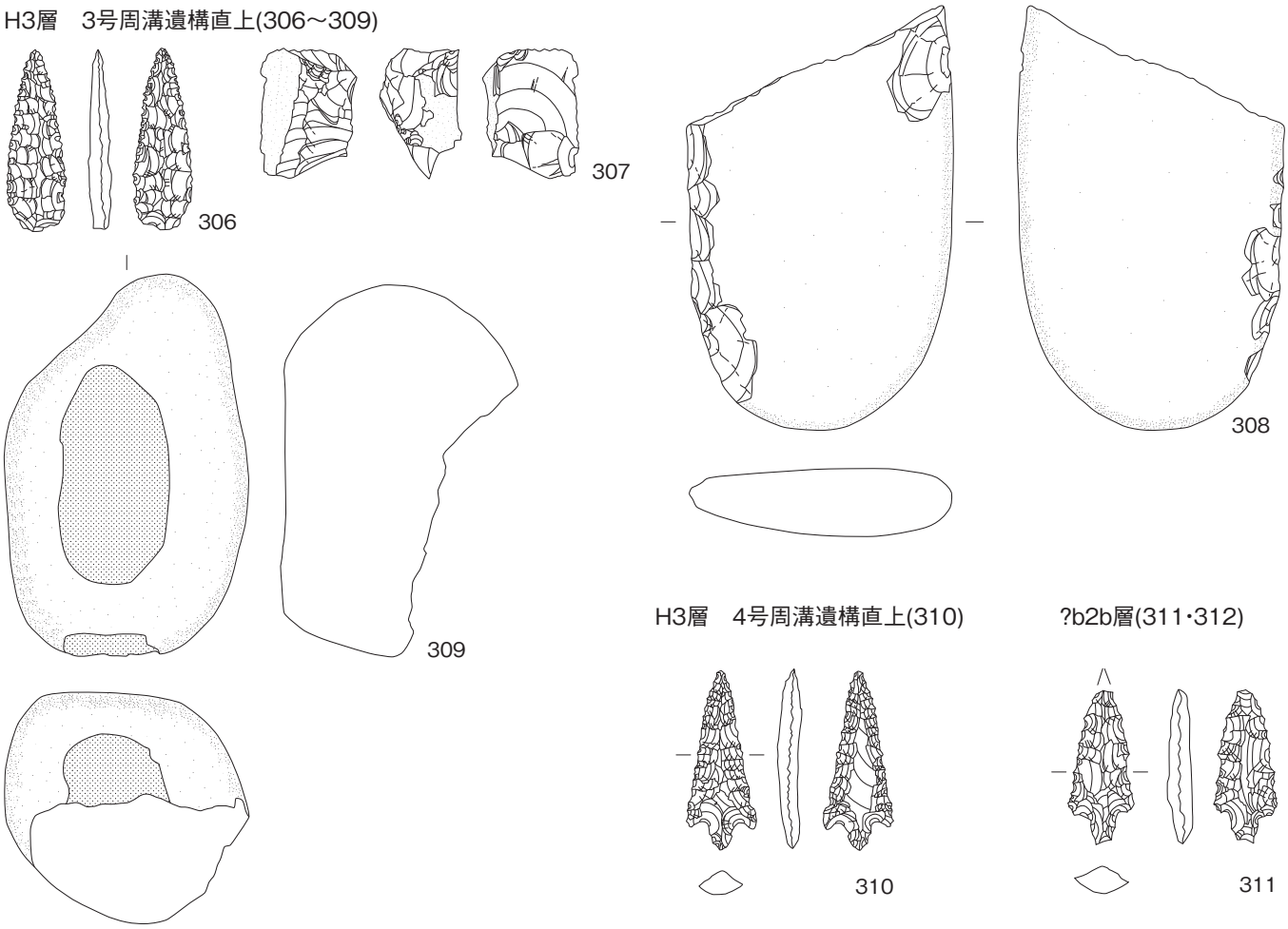
0　(279･281～283･286･287)　10cm (1:2)

0　(284)　15cm (1:3)

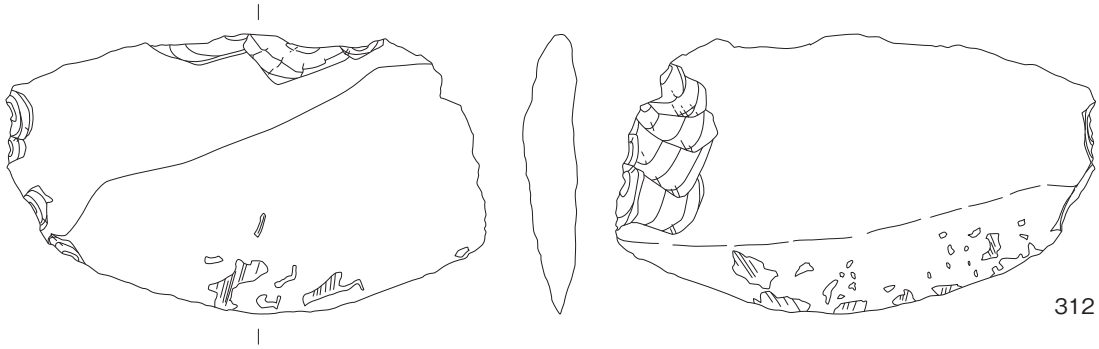
H1層(289～295)


289
290
291
292
293
294
295
H2層　1号周溝遺構直上(296～299)
296
297
298
299
H3層　2号周溝遺構直上(300～305)
300
301
302
303
304
305
0 (303) 5cm (1:1)
0 (289～292・296～298・300～302) 5cm (2:3)
0 (293～295・299・304・305) 10cm (1:2)

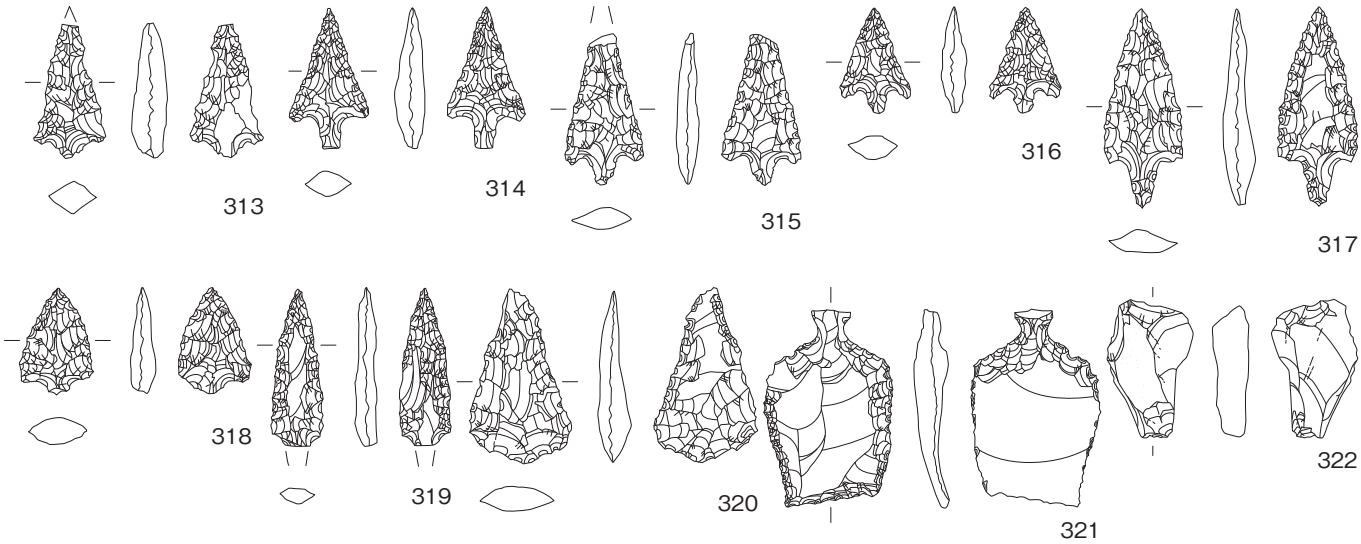
H3層　3号周溝遺構直上(306～309)



H3層　4号周溝遺構直上(310)　　?b2b層(311･312)

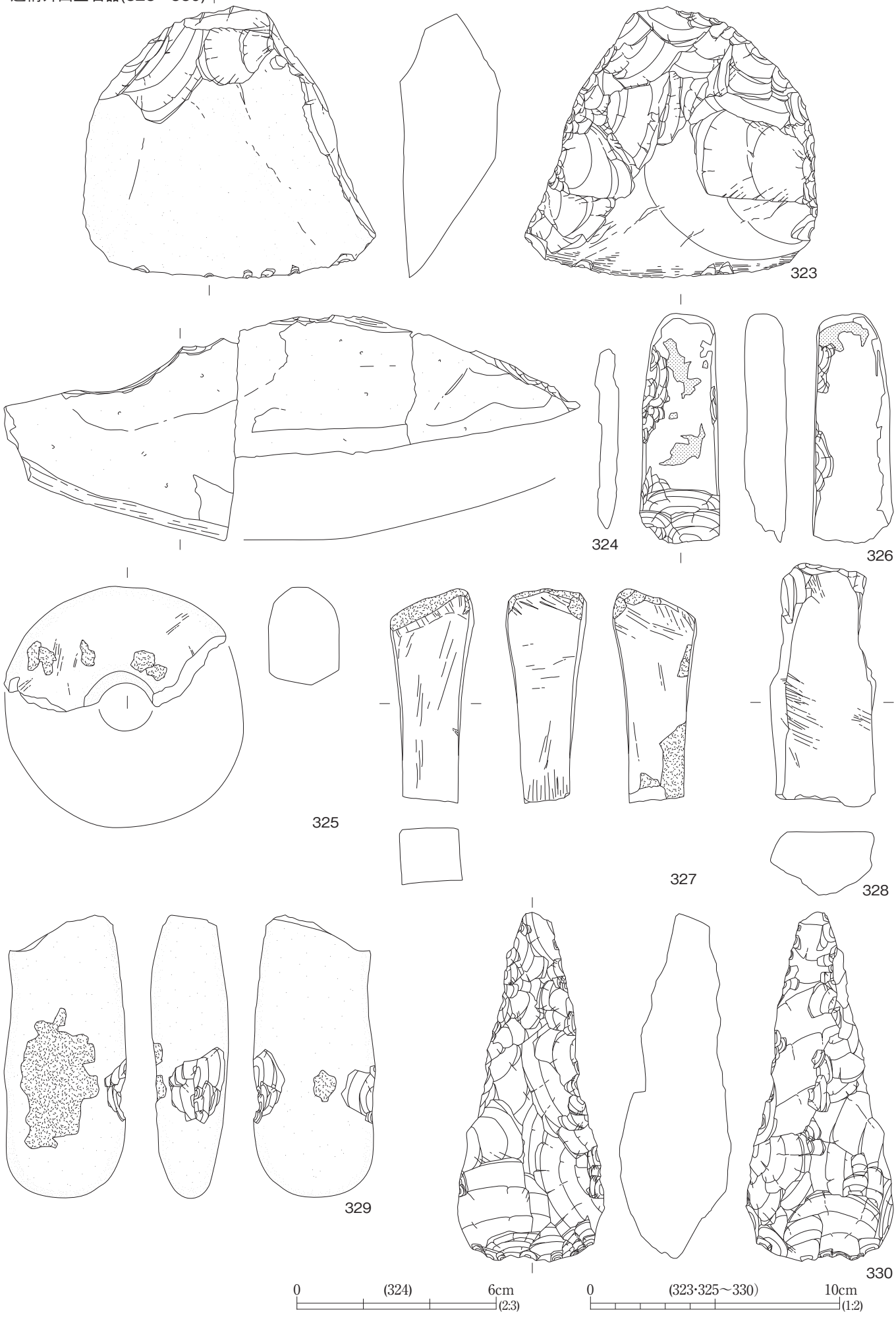


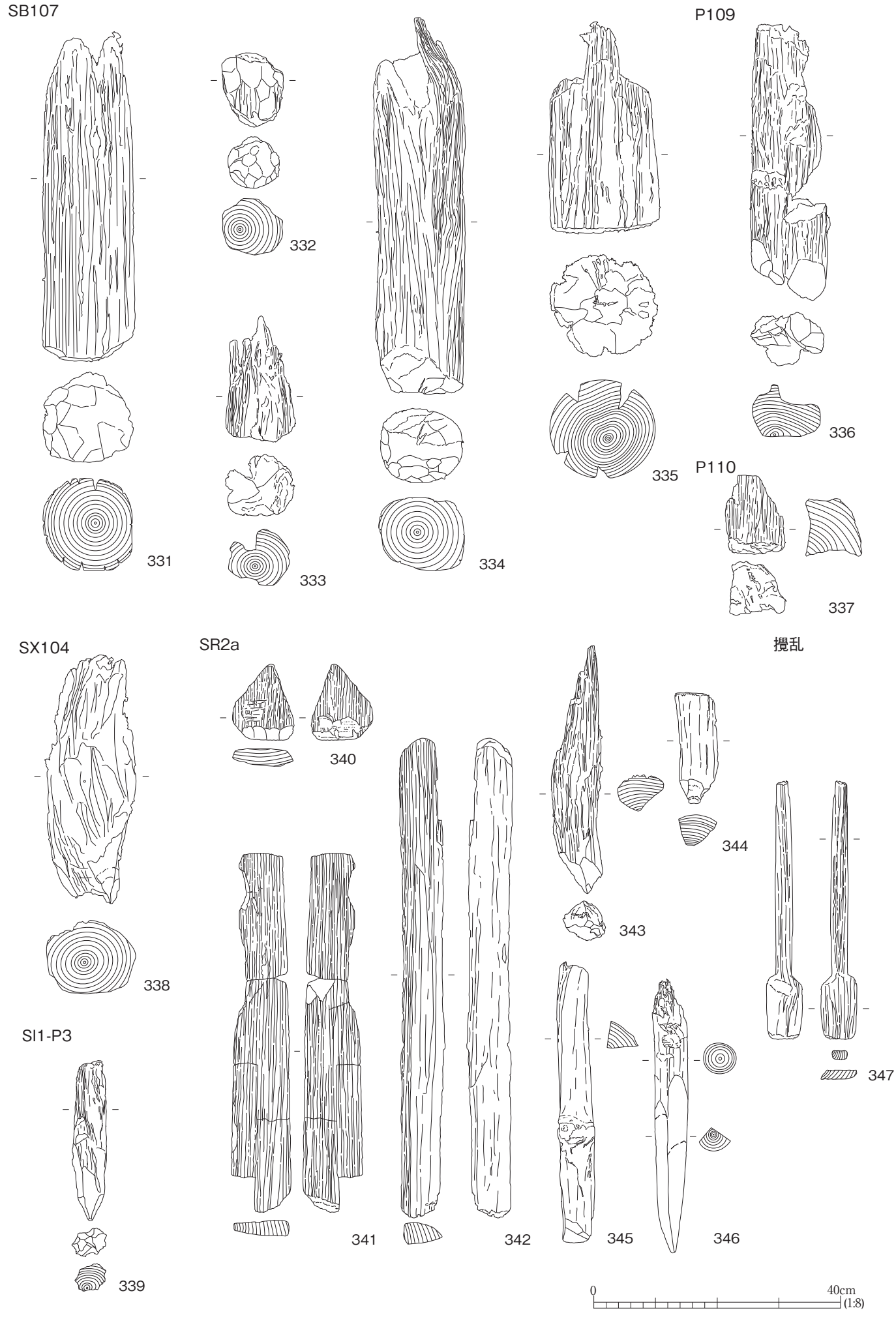
遺構外出土石器(313～322)



0　(306･310･311･313～320)　6cm (2:3)　　0　(307～309･312･321･322)　10cm (1:2)

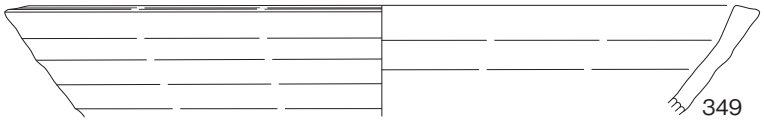
遺構外出土石器(323～330)

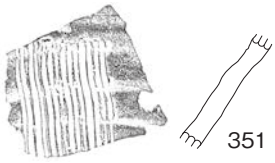


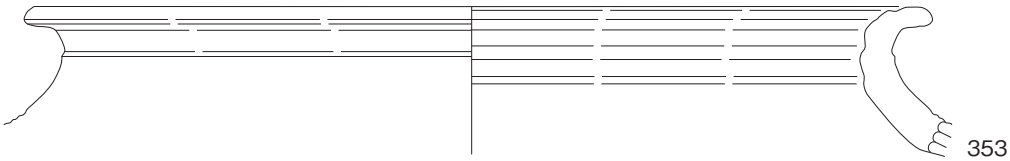

SB107
331
332
333
334
335
P109
336
P110
337
SX104
338
SI1-P3
339
SR2a
340
341
342
343
344
345
346
攪乱
347
0
40cm
(1:8)

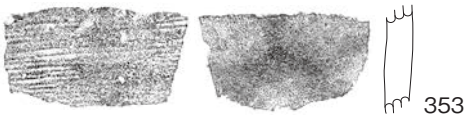
SR2a(348)

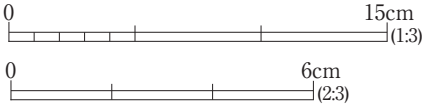
遺構外出土遺物(349～358)

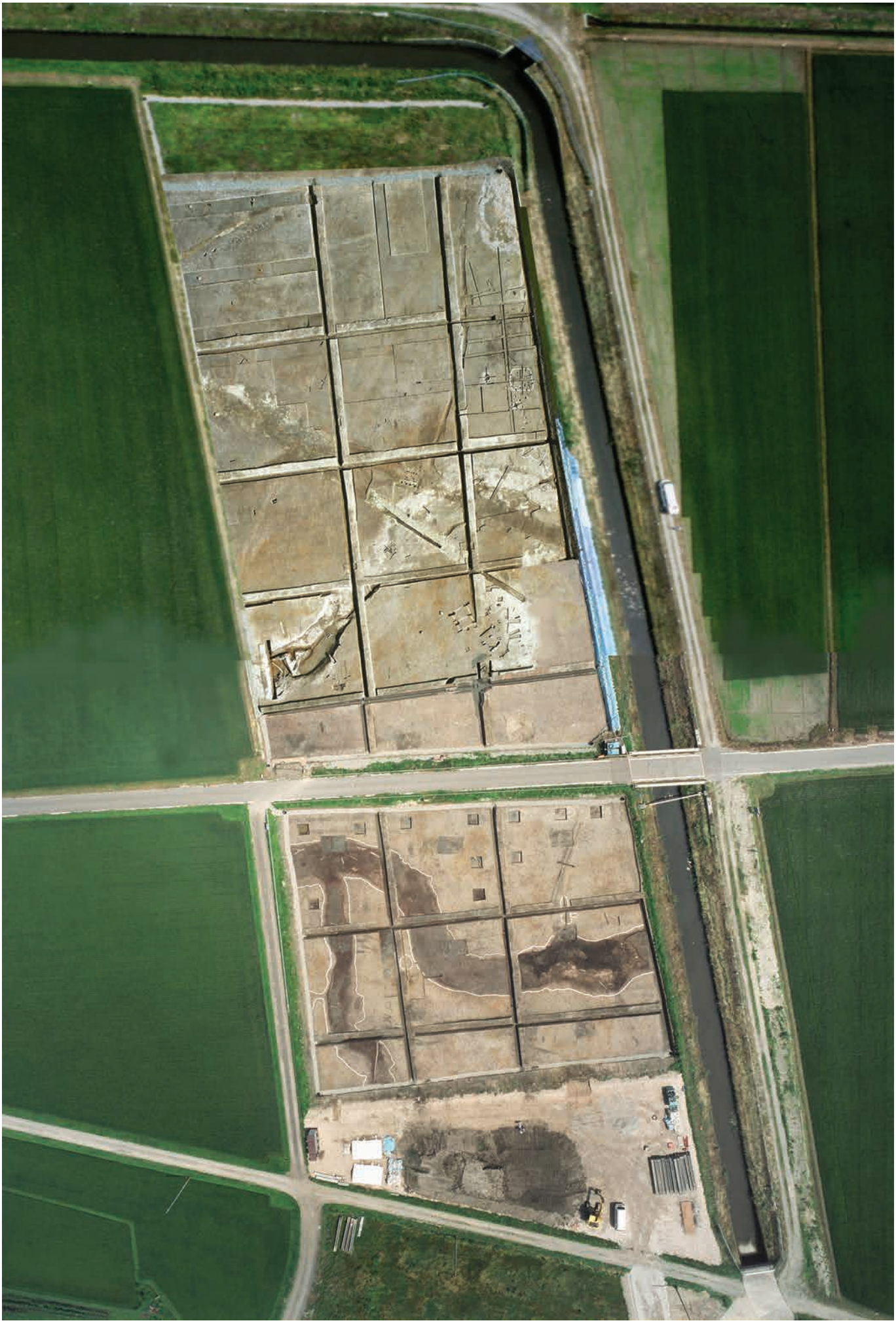












古墳時代遺構全景（北が上）

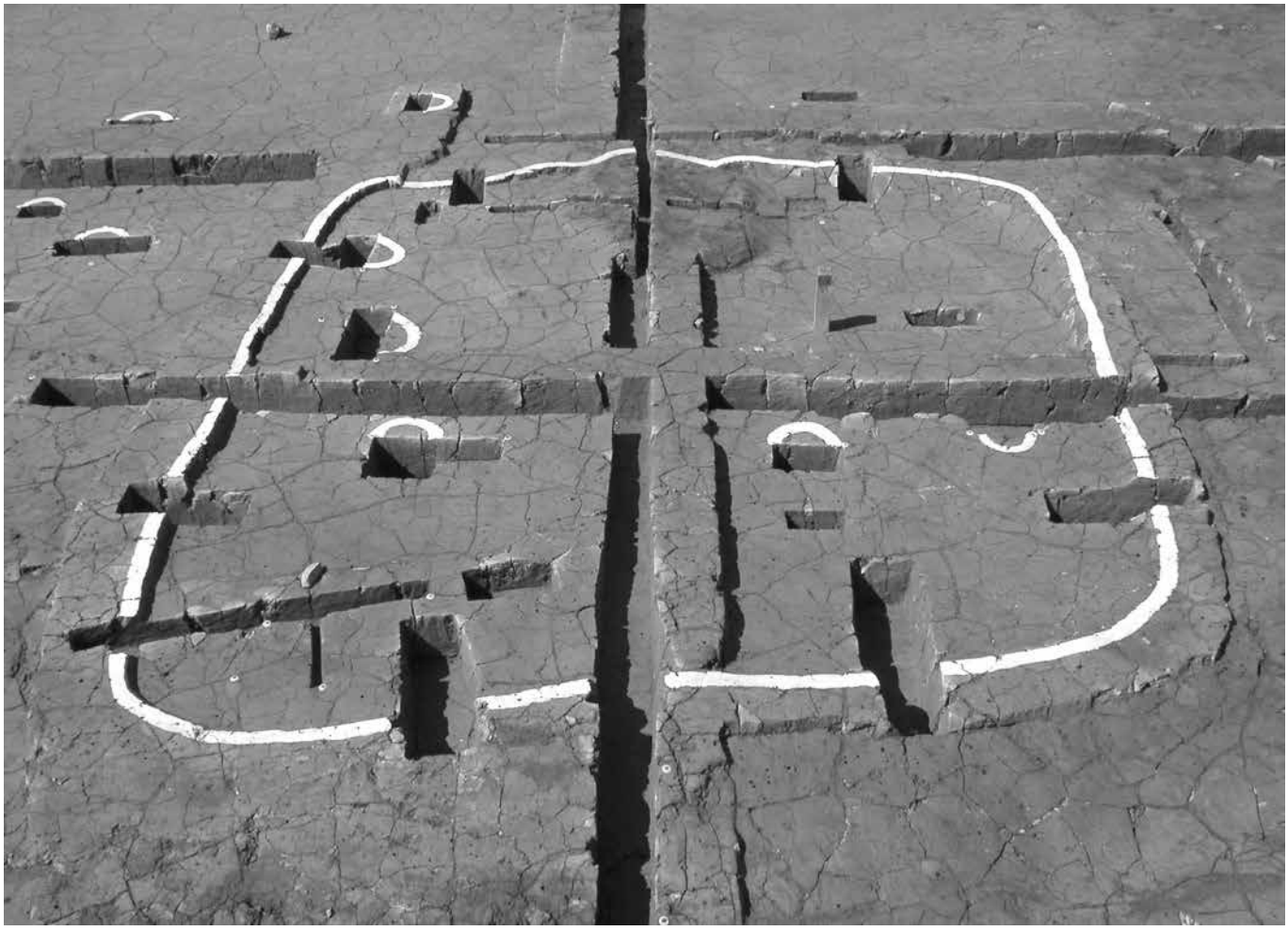
北区弥生時代遺構群全景（北が上）

１～４号周溝遺構　完掘（北から）

SI10～ 12　検出状況（北から）

古墳時代土師器・須恵器集合写真

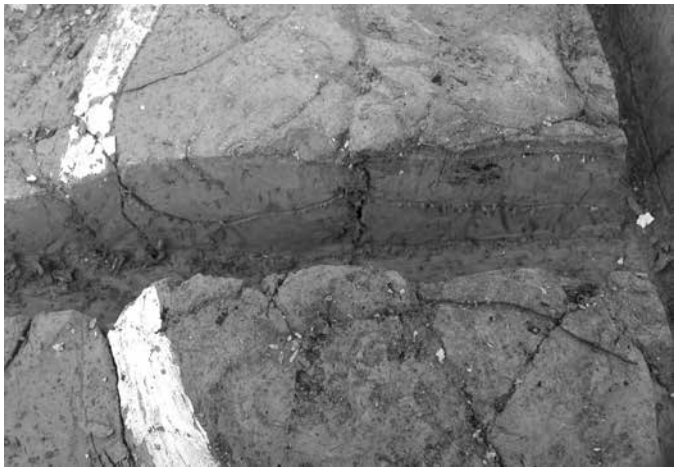
弥生時代土器集合写真



SI６　完掘（東から）

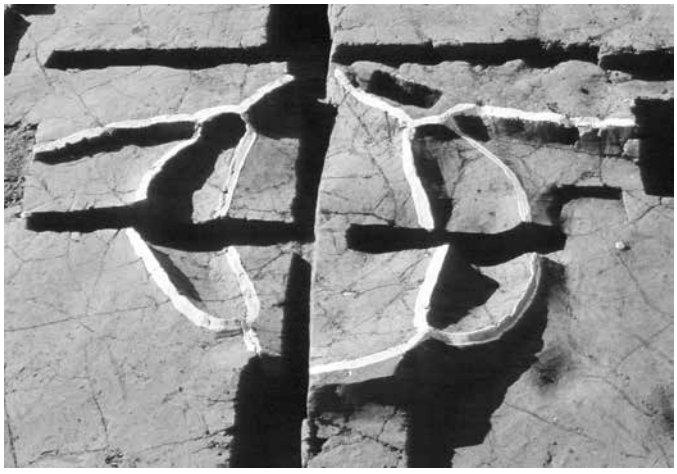
SI６　炉跡東西セクション（南から）

SI６　カマド袖断割り（東から）



SI６　カマド袖断割りアップ南側（東から）

SI６　カマド袖断割りアップ北側（東から）



SI６　カマド掘方袖完掘（東から）

SI６　南北セクション（南東から）

SI６　東西セクション西半部（南から）

SI６　東西セクション東半部（南から）

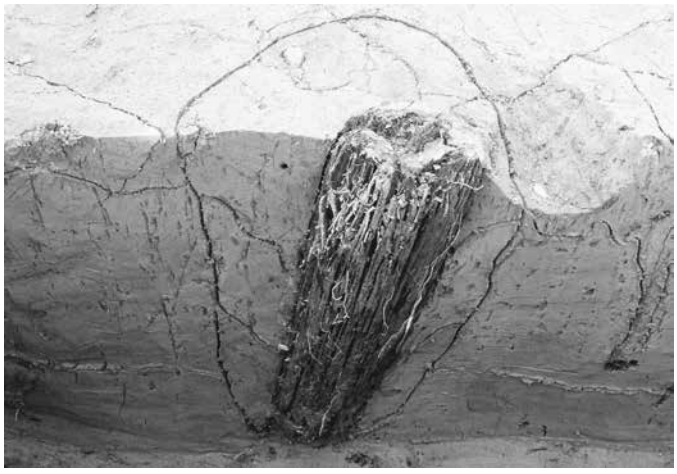
SI６　P１セクション（南から）

SI６　P２セクション（南から）

SI６　P３セクション（東から）

SI６　P４セクション（東から）

SB107　柱根検出状況（南から）

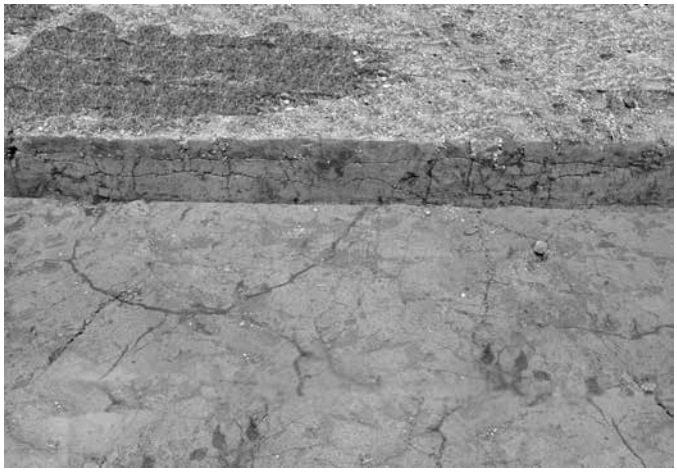


SB107　Ｐ１セクション（南から）

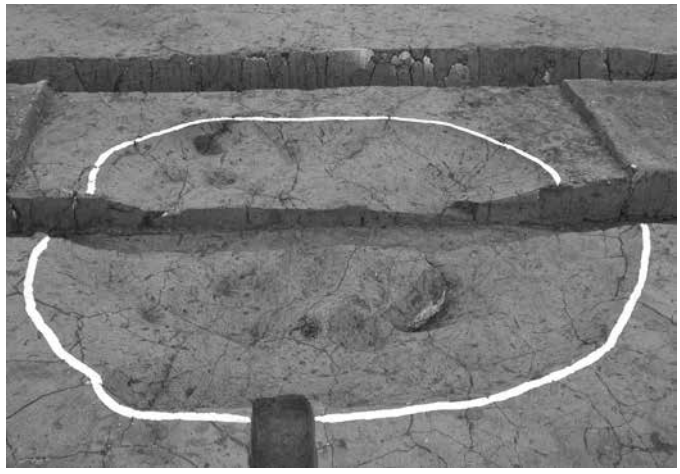
SB107　Ｐ３セクション（南から）

SB107　Ｐ５セクション（南から）

SB107　Ｐ６セクション（北から）



SK１　セクション（東から）

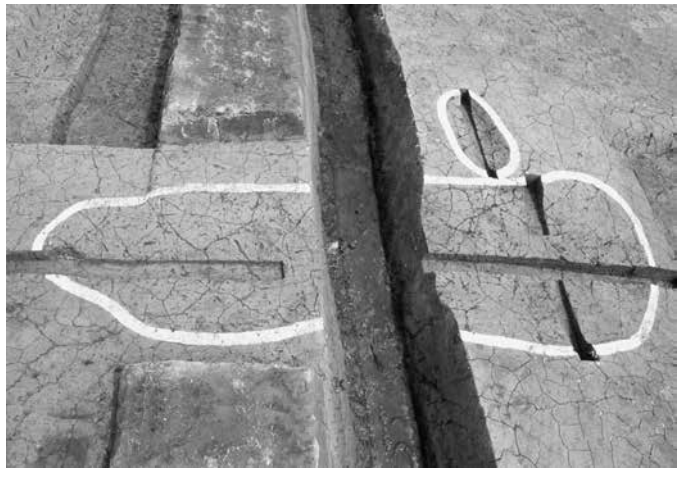


SK１　完掘（東から）

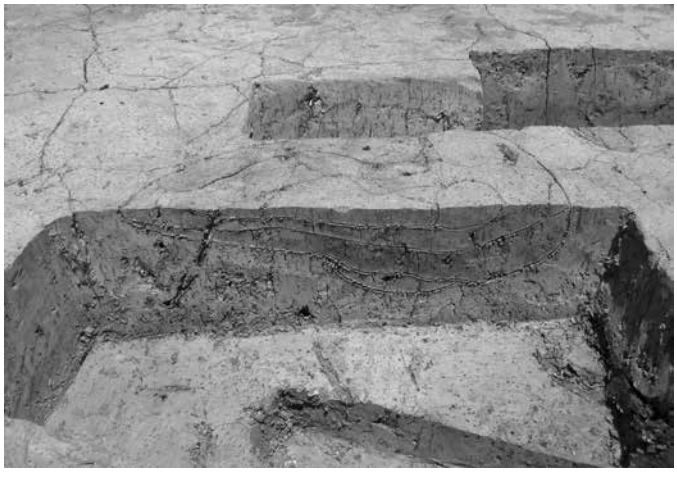
SK２　東西セクション（南から）

SK２　遺物出土状況（東から）

SK３　セクション（南から）



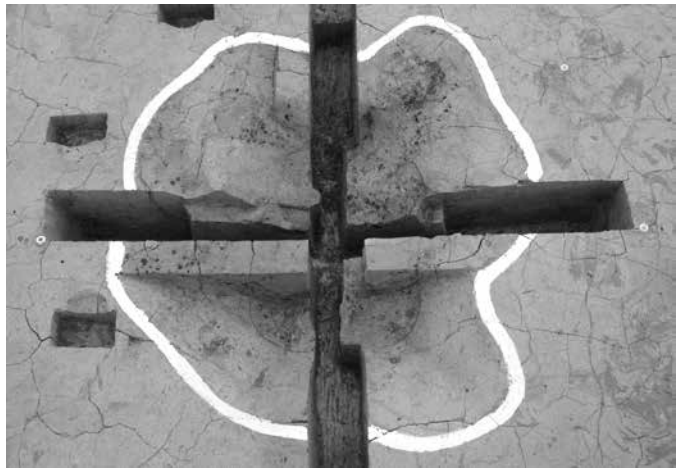
SK２・３　完掘（北西から）



SK102　セクション（南から）

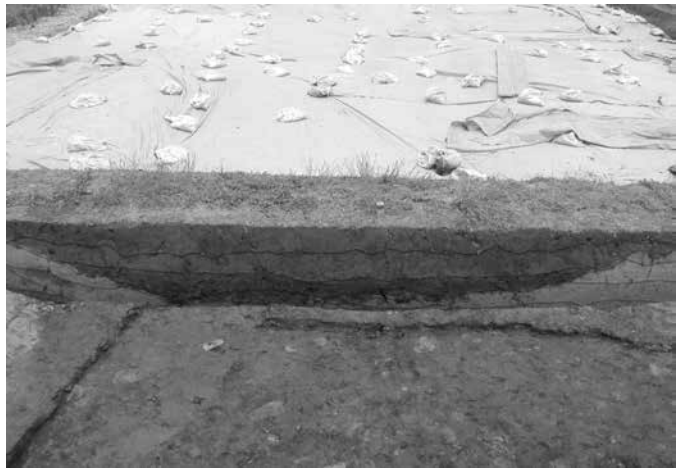
SK102　完掘（南から）

SK116　南北セクション（西から）



SK116　炭化物層検出状況（北から）

SR１　セクションA（南から）

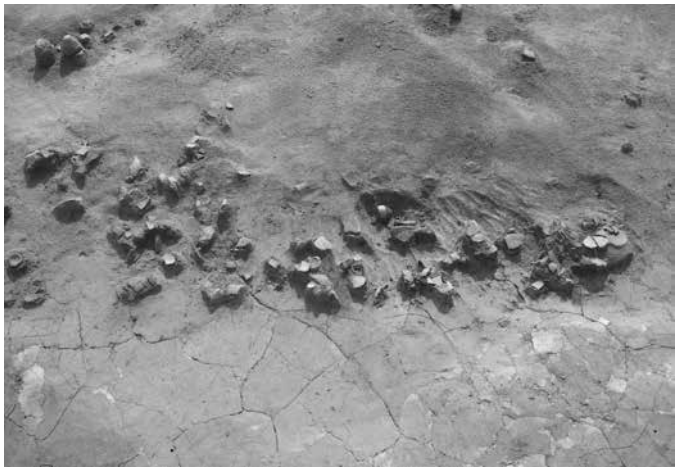


SR２a　セクションB（南から）

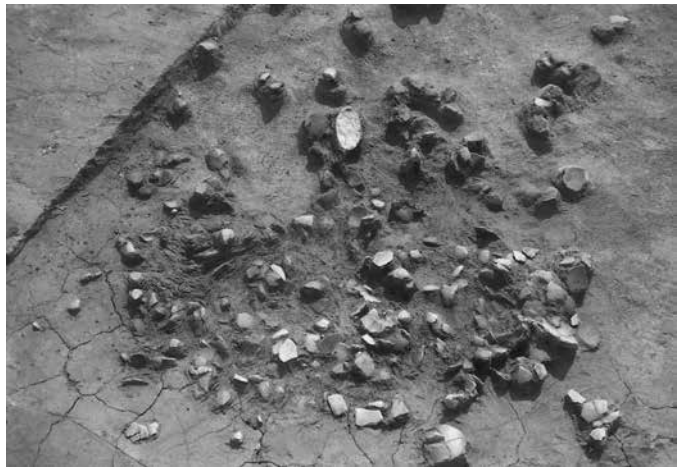
SR２a　古墳時代遺物出土状況（西から）

SR２a　遺物出土状況（北から）

SR２a　遺物出土状況No.1地点（北から）

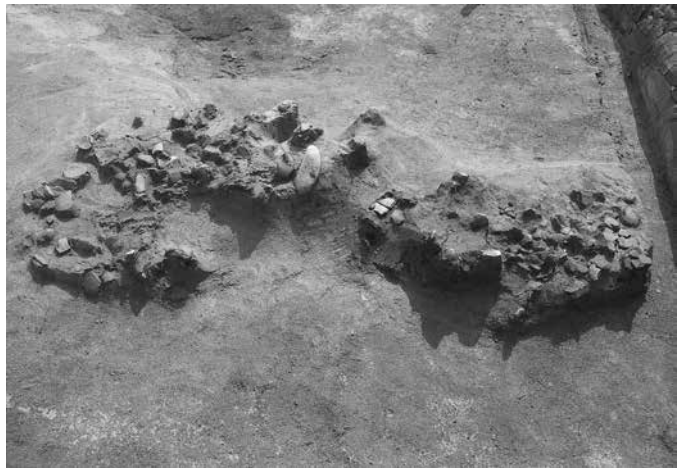


SR２a　遺物出土状況No.2地点（北から）

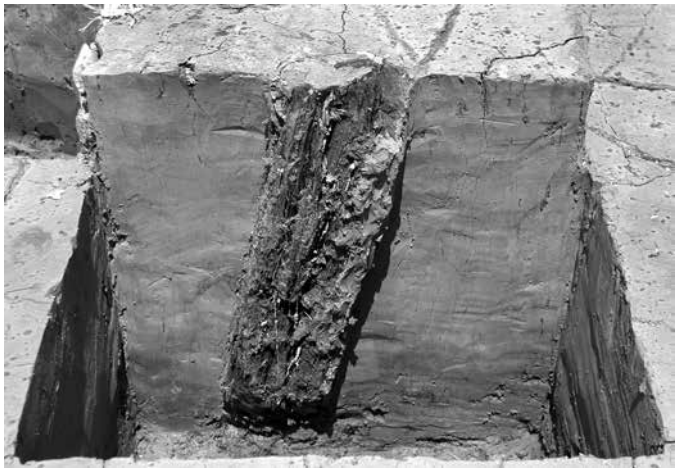


SR２a　遺物出土状況No.4地点東半（北から）

SR２a　遺物出土状況No.4地点西半（北から）

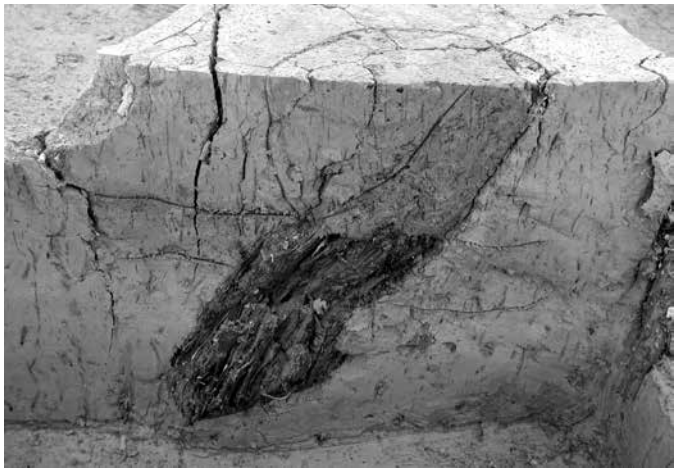


SR２a　遺物出土状況No.6地点（北から）



P109　セクション（南から）

P110　セクション（南から）



SX104　セクション（北から）

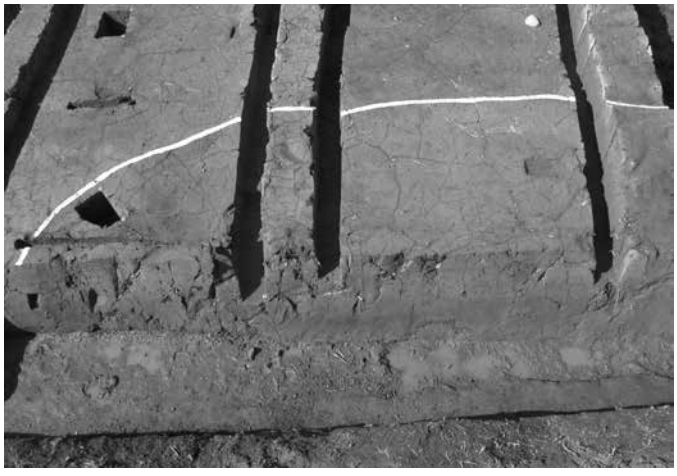
SX119　遺物出土状況（南から）

SX119　遺物出土状況（東から）

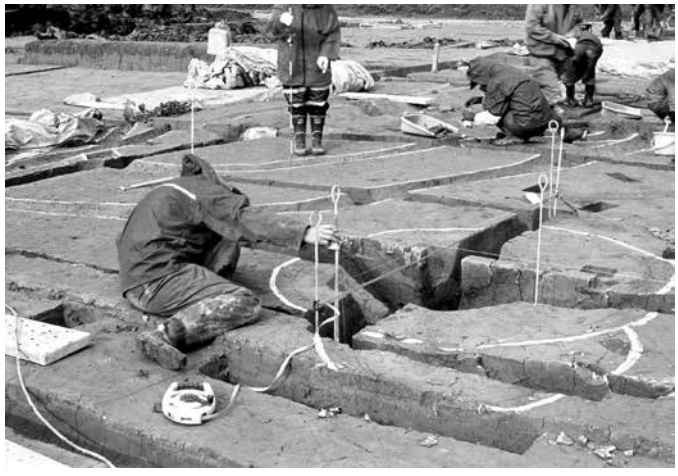
SX119　底面甕出土状況（南東から）

SX121　遺物出土状況（東から）

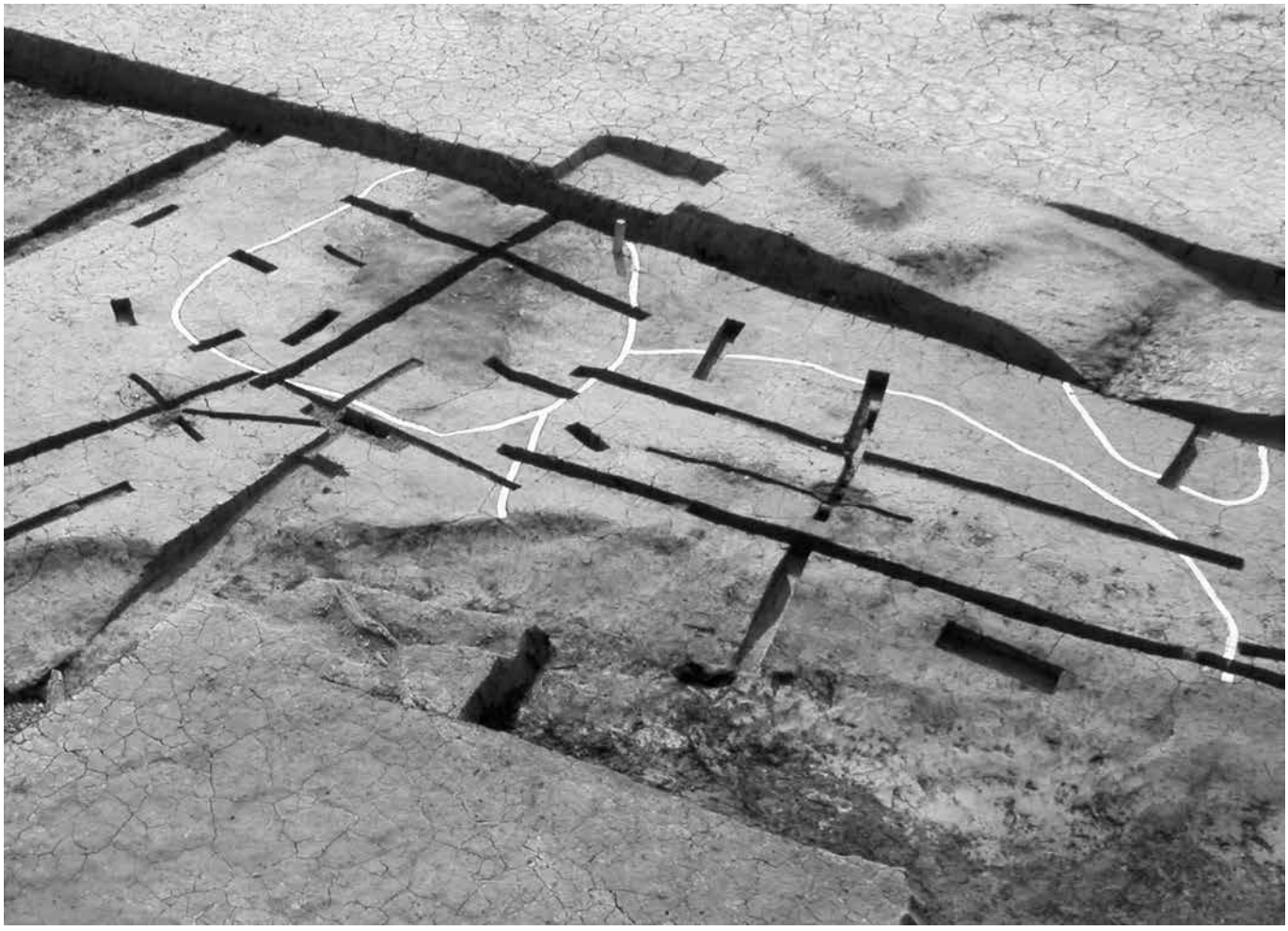
SX121　セクション（南から）



SX121　完掘（東から）

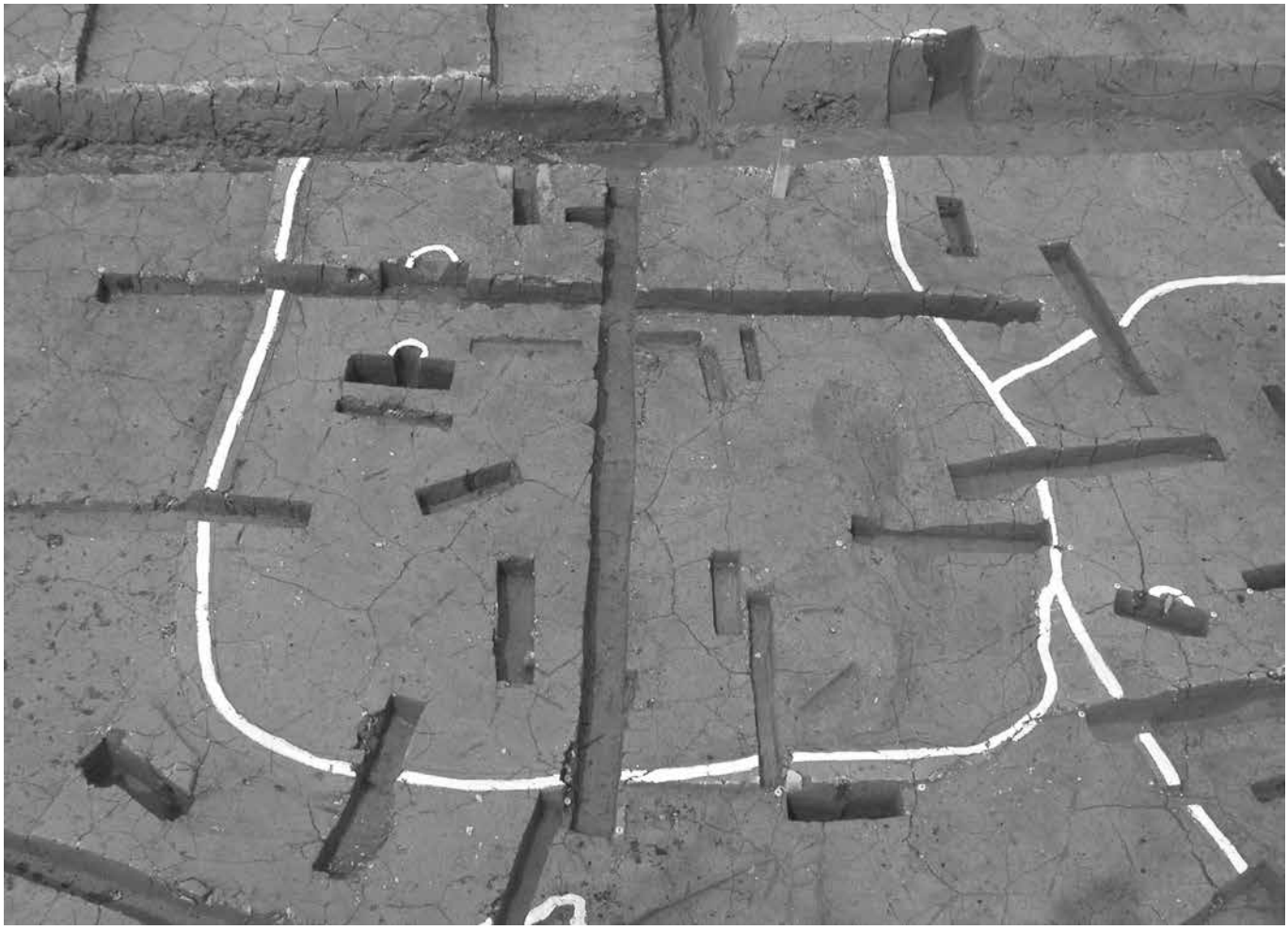


遺構断面実測作業

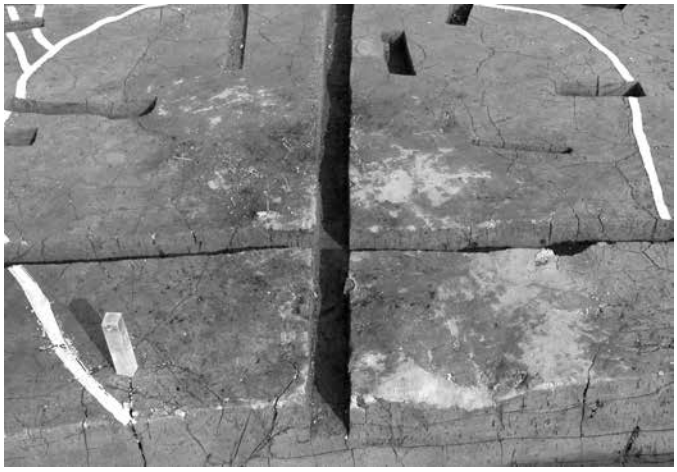


SI１・３　検出状況（北東から）

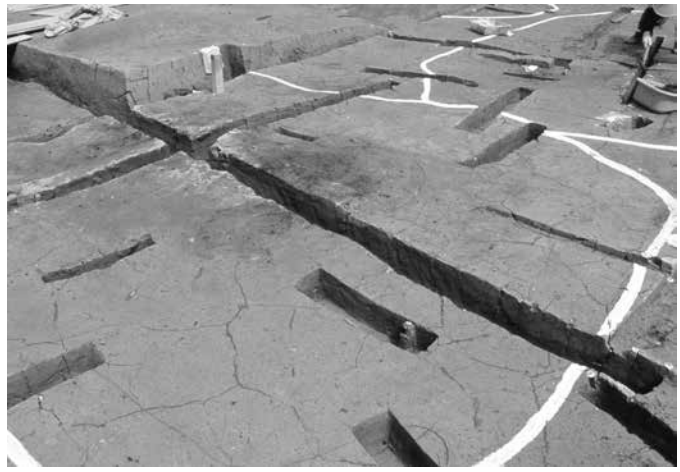
SI１・３　完掘（北東から）



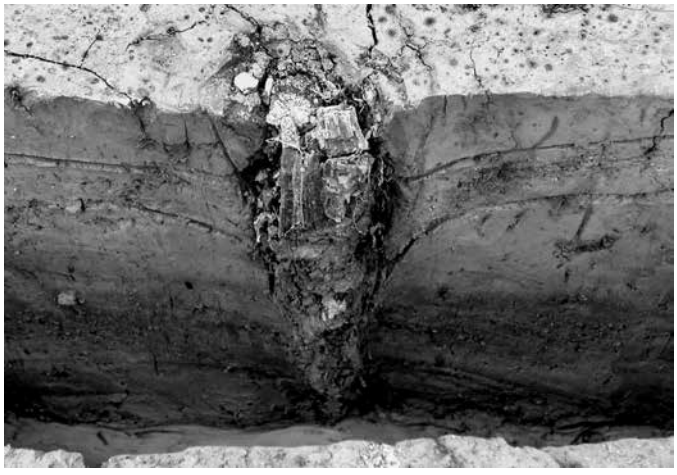
SI１　完掘（東から）



SI１　炉跡検出状況（西から）

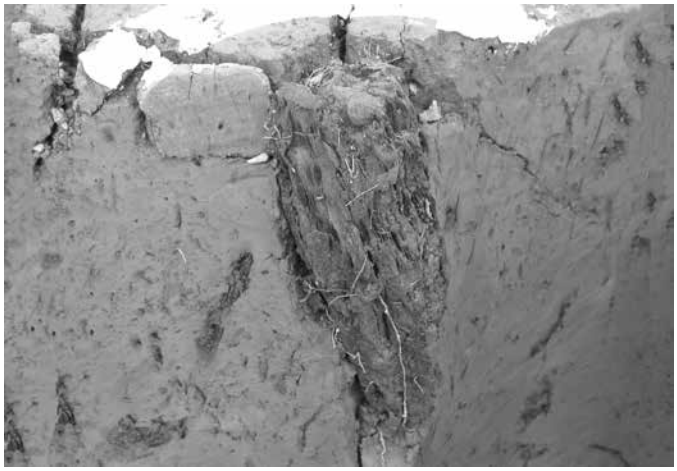


SI１　東西セクション（南東から）



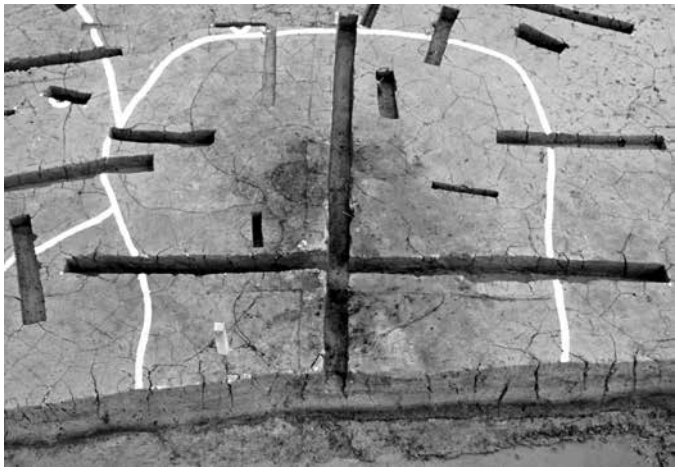
SI１　P１セクション（東から）

SI１　P２セクション（東から）

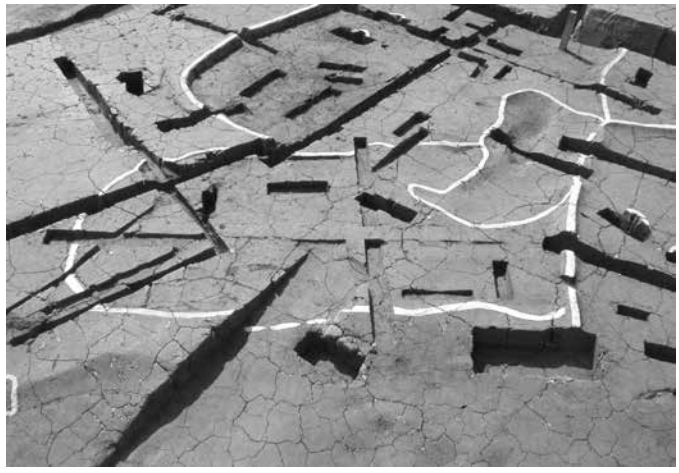


SI１　P３セクション（東から）

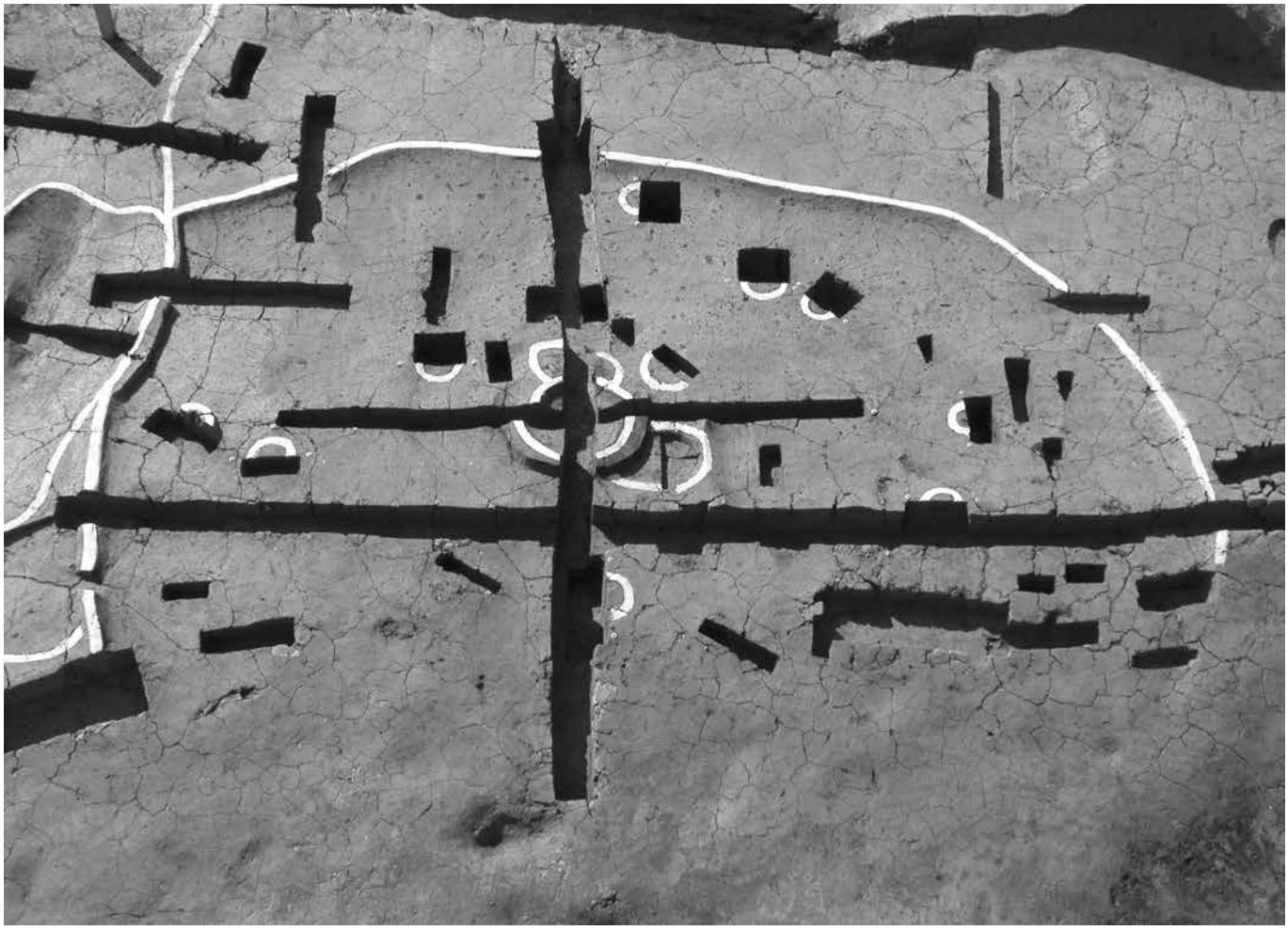
SI１　P４セクション（東から）



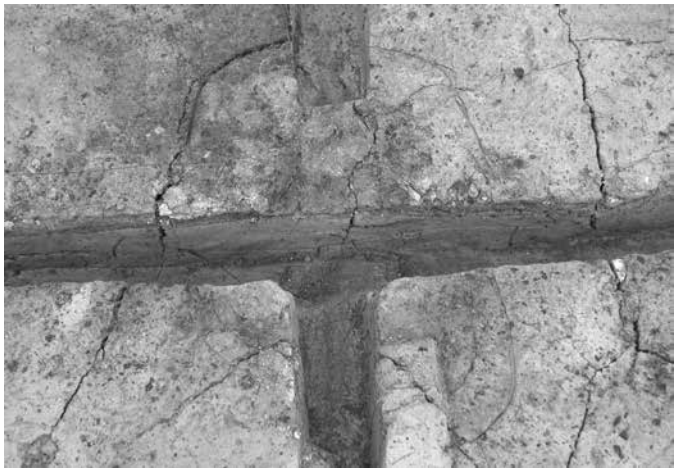
SI１　遺物出土状況（西から）



SI１　近辺炭化物集中部完掘（南西から）



SI３　完掘（東から）



SI３　炉跡検出状況アップ（西から）

SI３　炉跡南北セクション（西から）

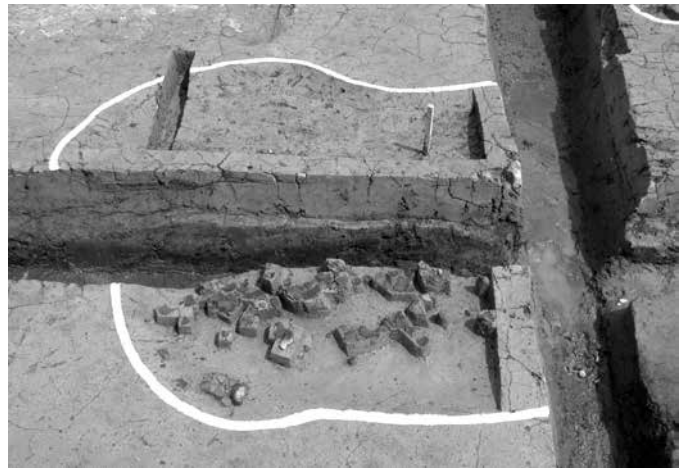
SI３　P１セクション（南から）

SI３　P２セクション（北から）

SI３　P５セクション（西から）

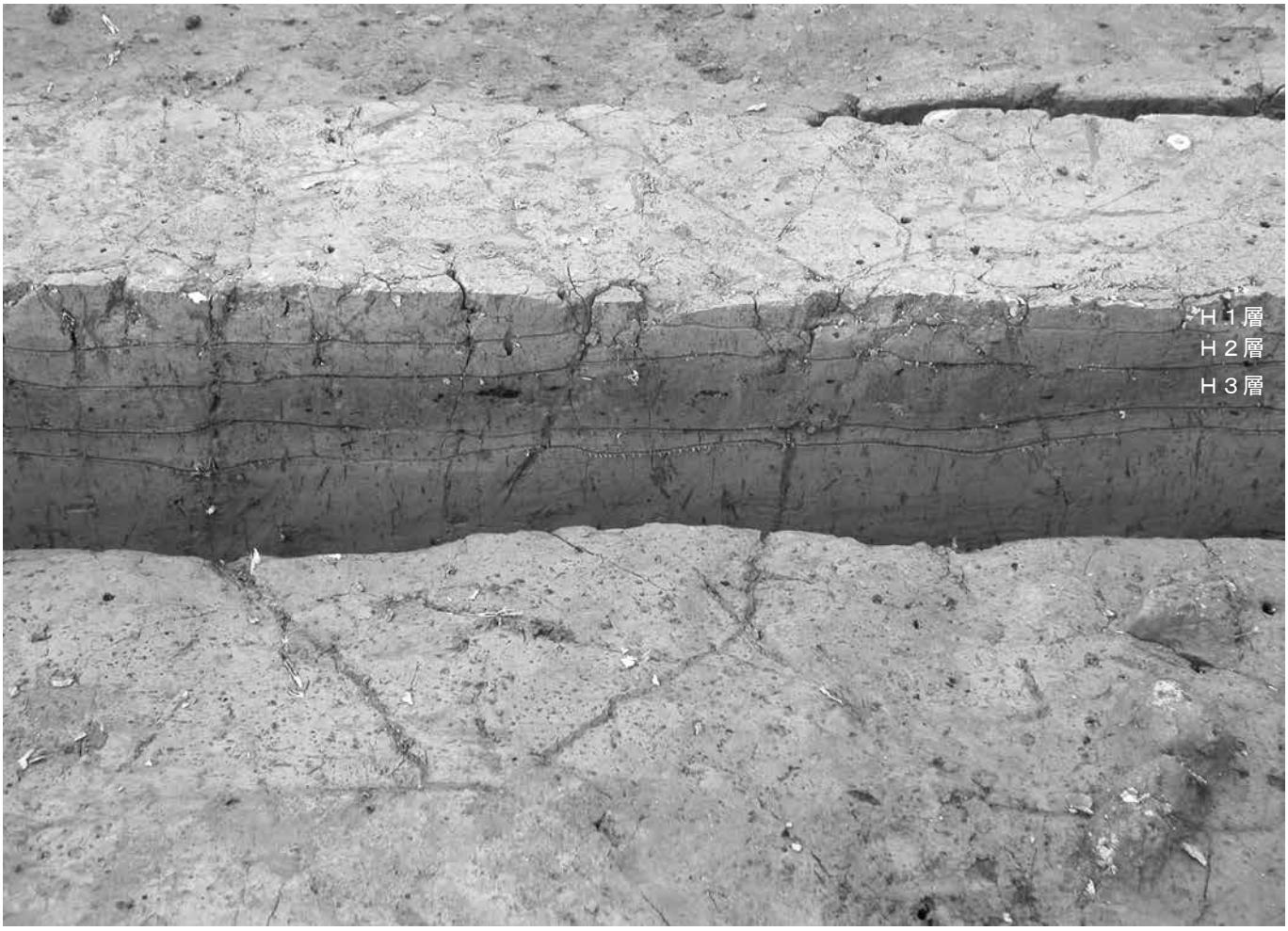
SI３　P８セクション（北から）

SK４　炭化物層セクション（西から）



SK４　遺物出土状況（西から）

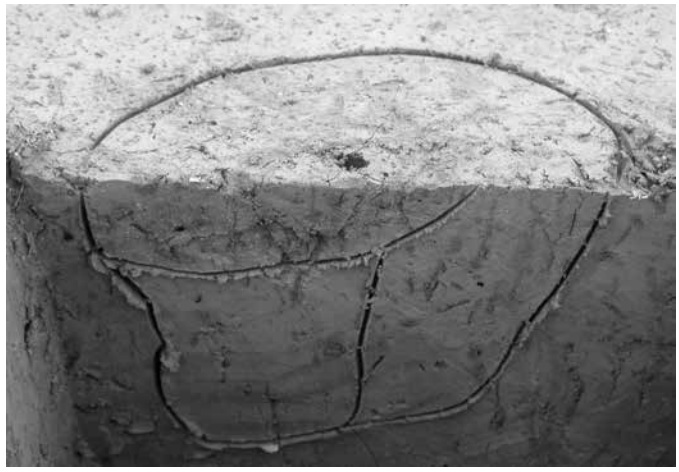
北区弥生時代遺構群　全景（北東から）



弥生時代包含層（東から）

SI９　完掘（西から）

SI９　P１セクション（東から）



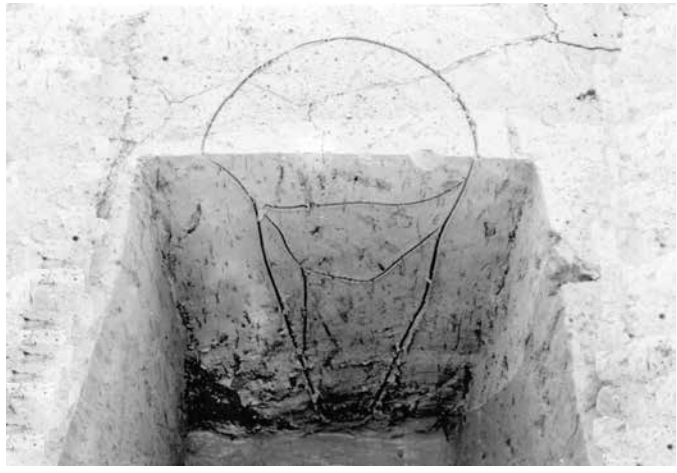
SI９　P３セクション（南から）

SI９　P４セクション（北から）

SI９　南北セクション（西から）

SI10～12　完掘（北から）

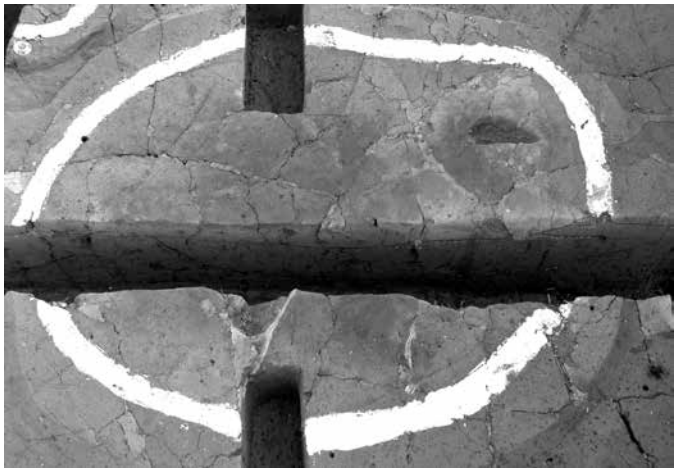
SI10　炉跡セクション（西から）



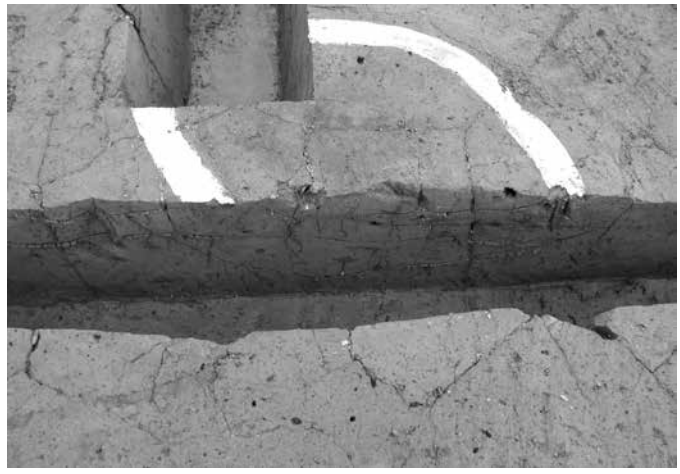
SI10　P１セクション（西から）

SI10　P４根石検出状況（東から）

SI10　P10セクション（南から）

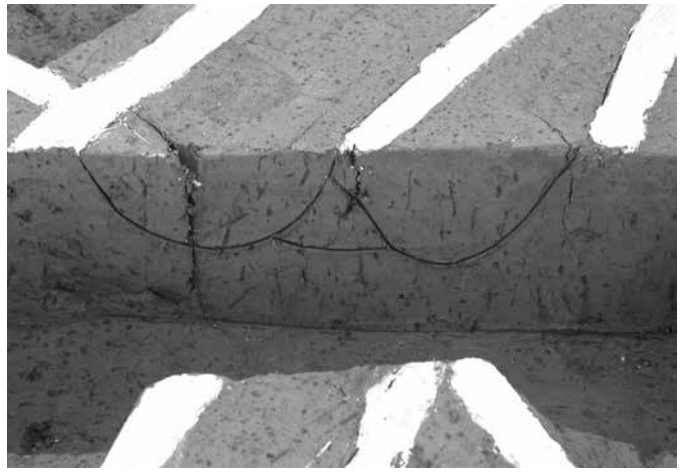


SI11　炉跡検出状況（西から）



SI12　炉跡検出状況（西から）

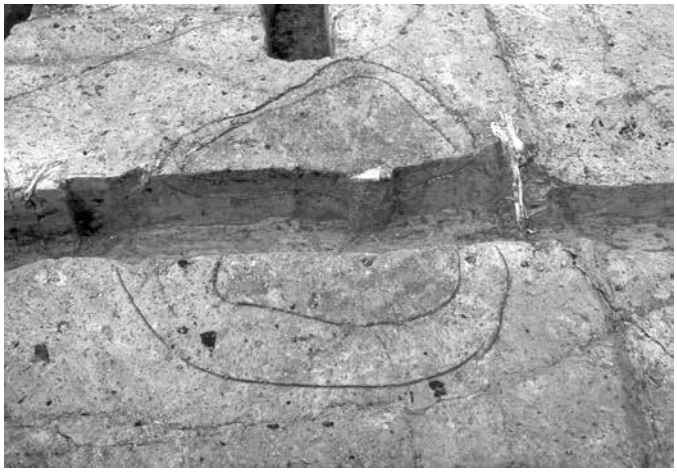
SI11・12　東側周溝部セクション（東から）



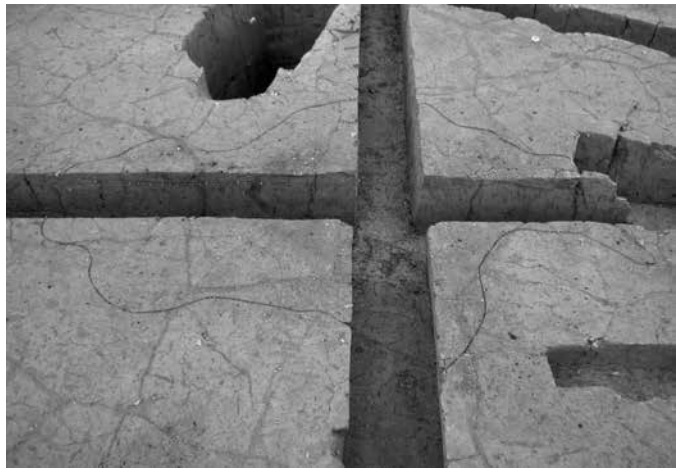
SI10～12　周溝部セクション（東から）

SI13・14　完掘（北が右）

SI15　完掘（東から）



SI13　炉跡断割り（東から）



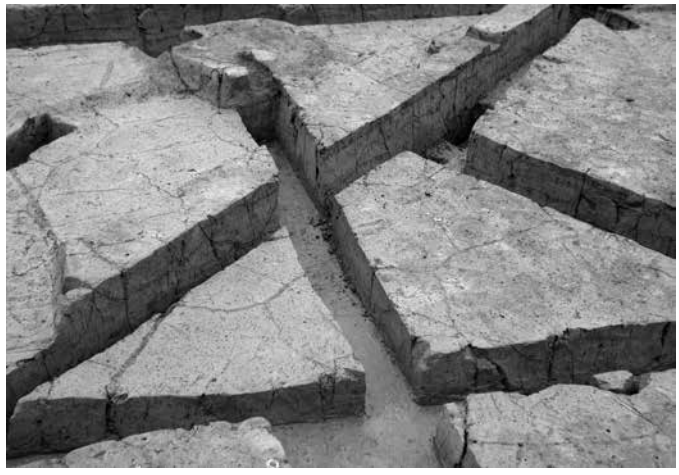
SI15　炉跡検出状況（東から）

SI15　P１セクション（西から）

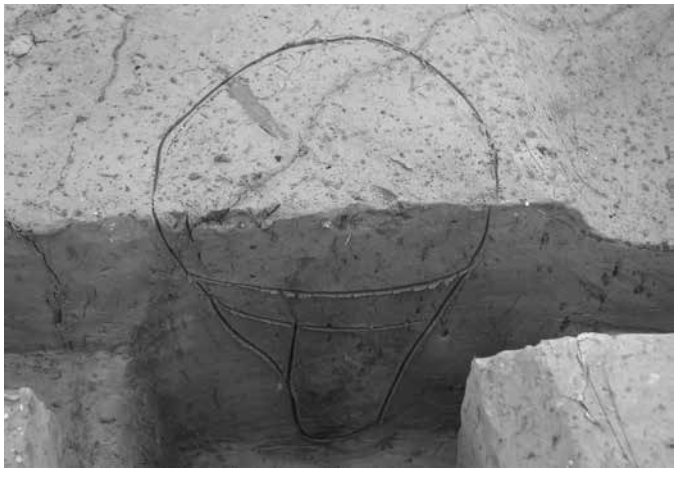
SI15　南側周溝部セクション（西から）

SI８　完掘（東から）

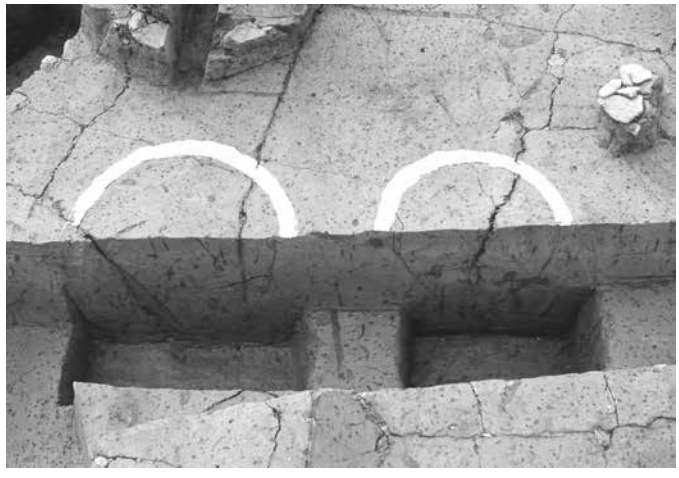
SI８　炉跡セクション（南から）



SI８　南北セクション（東から）

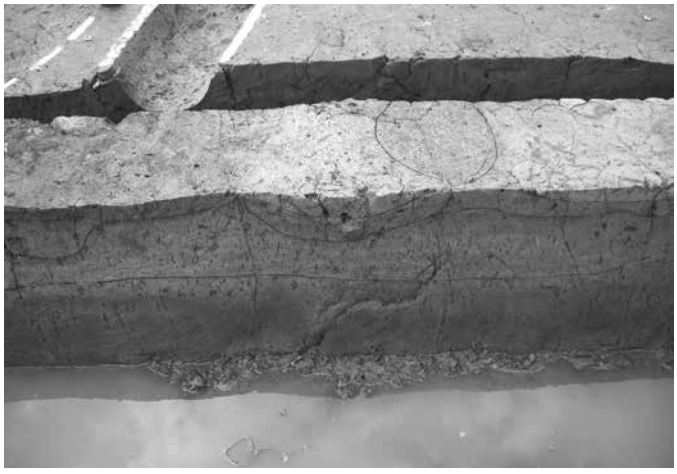


SI８　P２セクション（北から）



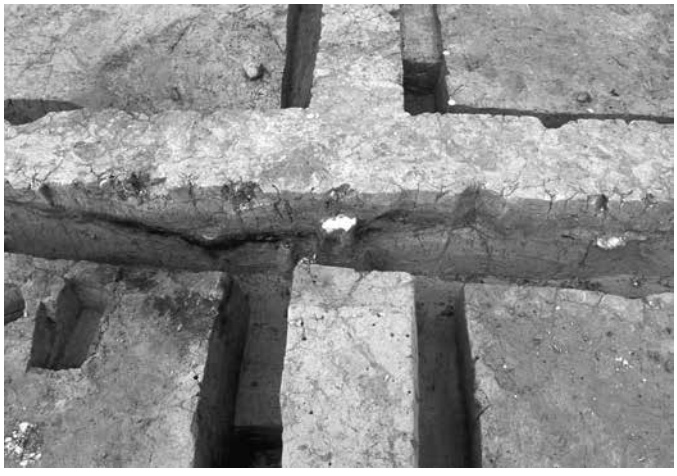
SI８　P３・４セクション（東から）

１・２号周溝遺構　完掘（北から）



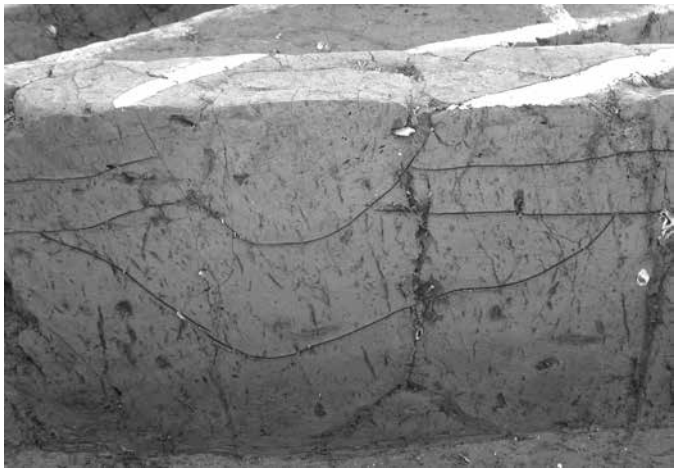
１号（右）・２号（左）周溝遺構　周溝部セクション（北から）

１号（右）・２号（左）周溝遺構　周溝部セクション（北から）



１号周溝遺構　南側周溝部セクション（東から）

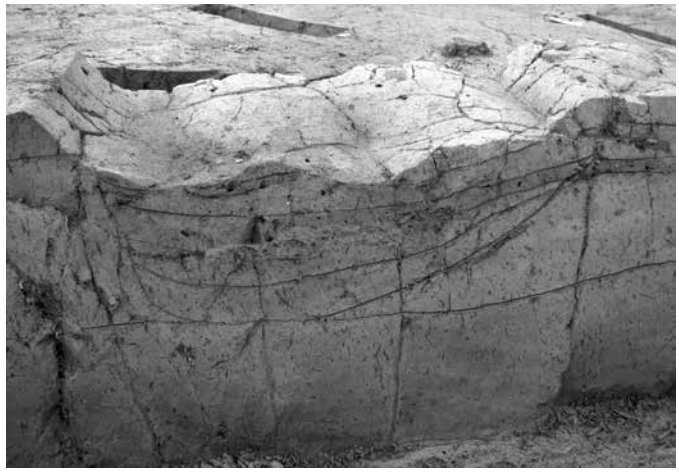
１号周溝遺構　南北セクション（東から）



１号周溝遺構・SI12　周溝部セクション（北から）

１号周溝遺構・SI13・14　周溝切合い状況（北から）

１号周溝遺構　周溝ブリッジ検出状況（北から）

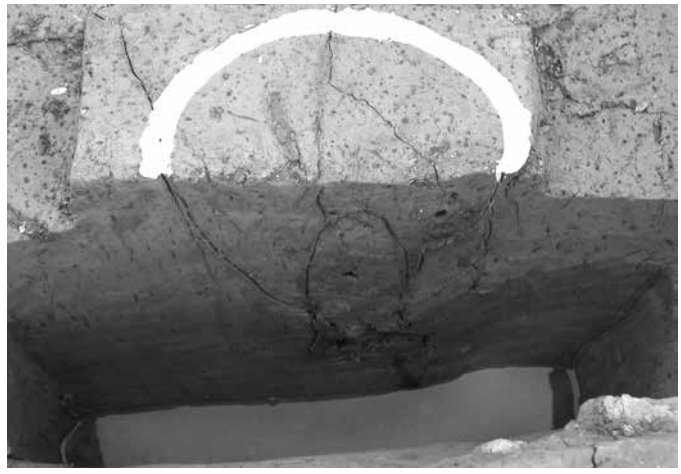


１号周溝遺構　周溝部セクション（北から）

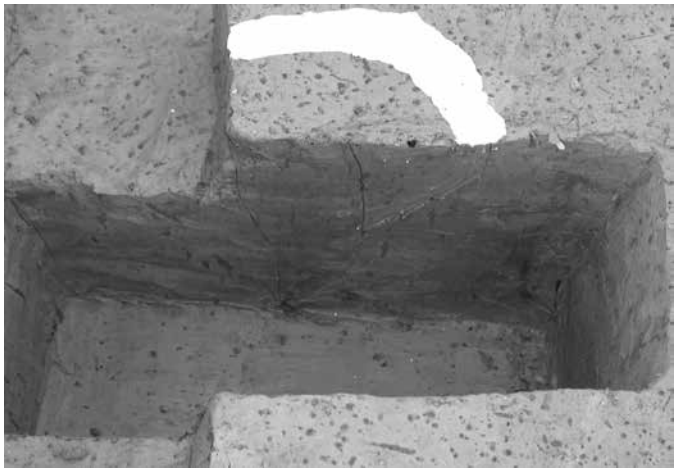
１号周溝遺構　東西セクション（北西から）

１号周溝遺構　台付鉢出土状況（北から）

１号周溝遺構　遺物出土状況（西から）

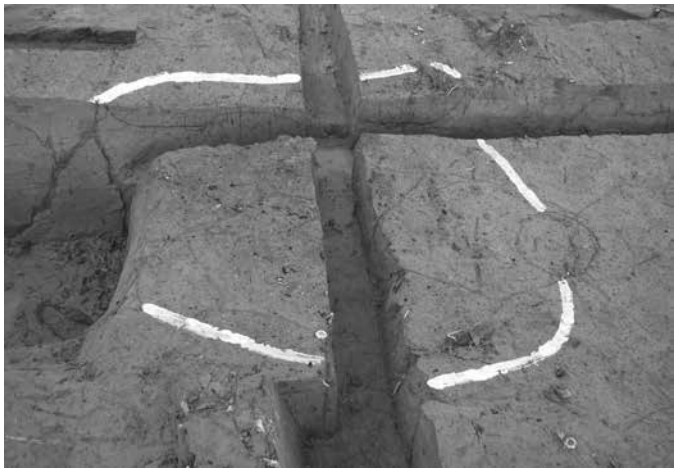


１号周溝遺構　Ｐ１セクション（西から）

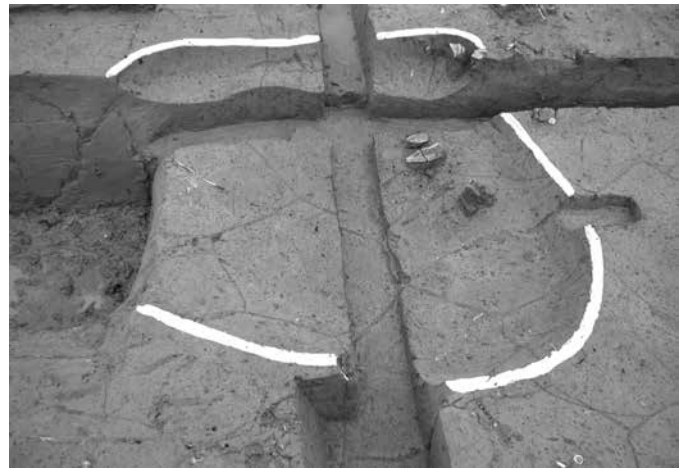


１号周溝遺構　Ｐ２セクション（東から）

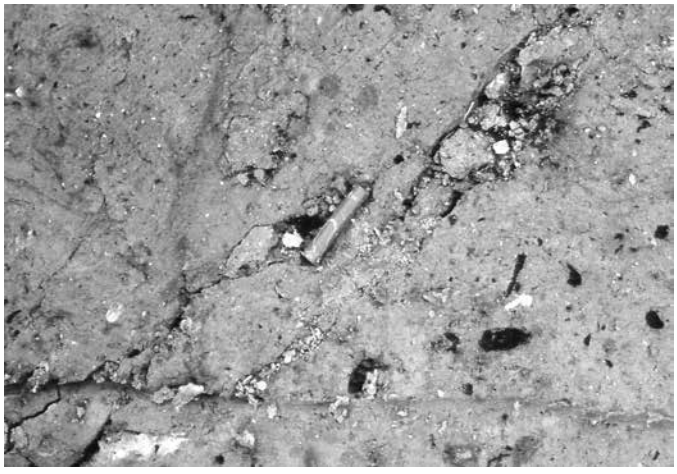
２号周溝遺構　１号土坑セクション（西から）



２号周溝遺構　１号土坑検出状況（北から）



２号周溝遺構　１号土坑完掘（北から）



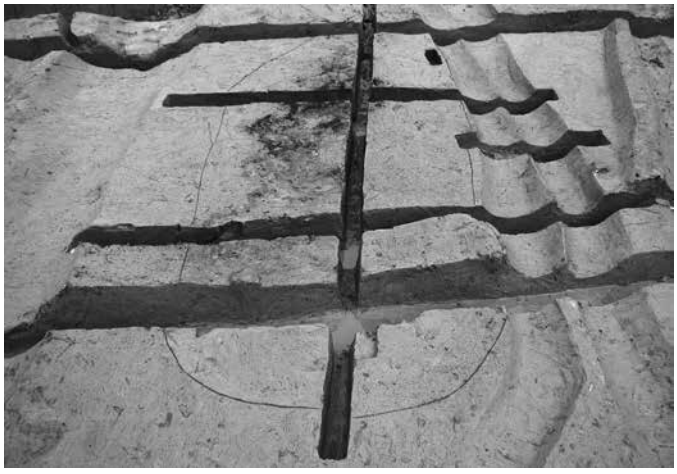
２号周溝遺構　管玉出土状況（東から）

２号周溝遺構　中央部遺物出土状況（北から）

２号周溝遺構　南東部遺物出土状況（東から）

１号周溝遺構周辺調査光景

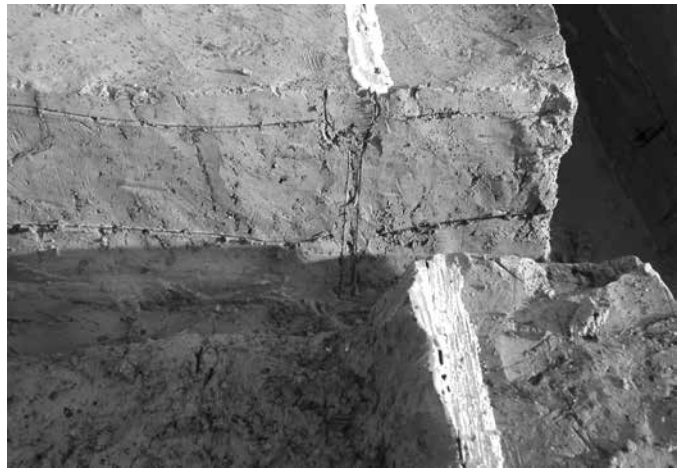
３・４号周溝遺構　完掘（北から）



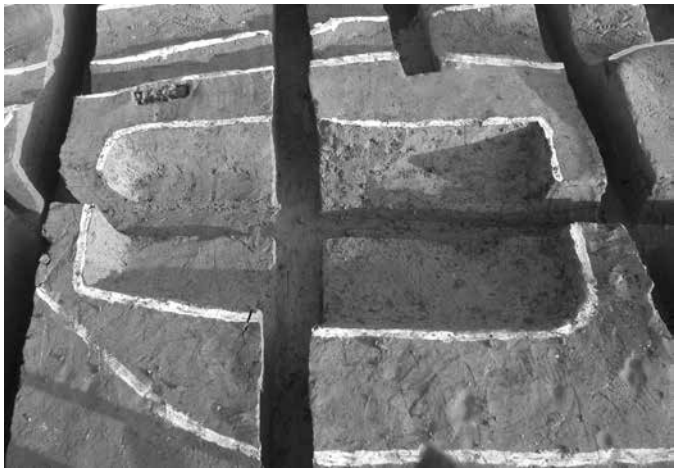
３号周溝遺構　１号土坑検出状況（南から）

３号周溝遺構　１号土坑主体部検出状況（北から）

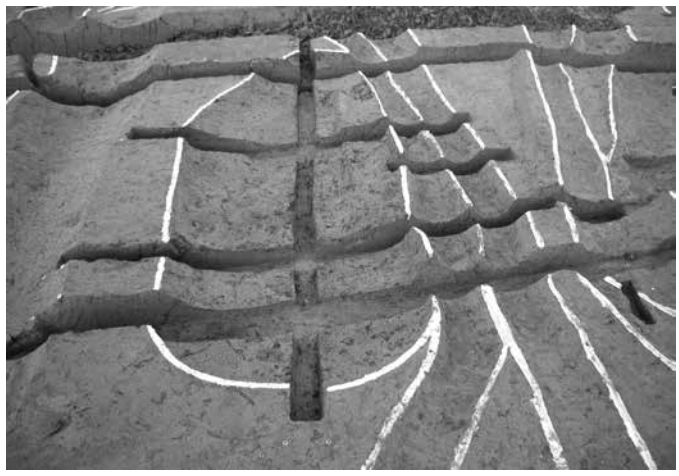
３号周溝遺構　１号土坑東側木棺部セクション（西から）



３号周溝遺構　１号土坑東側木棺壁セクションアップ（西から）

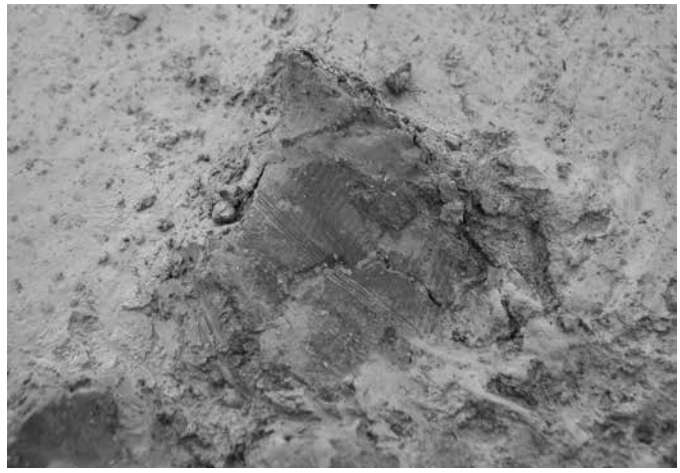


３号周溝遺構　１号土坑主体部完掘（西から）



３号周溝遺構　１号土坑完掘（南から）

３号周溝遺構　遺物出土状況１（東から）



３号周溝遺構　遺物出土状況２（東から）

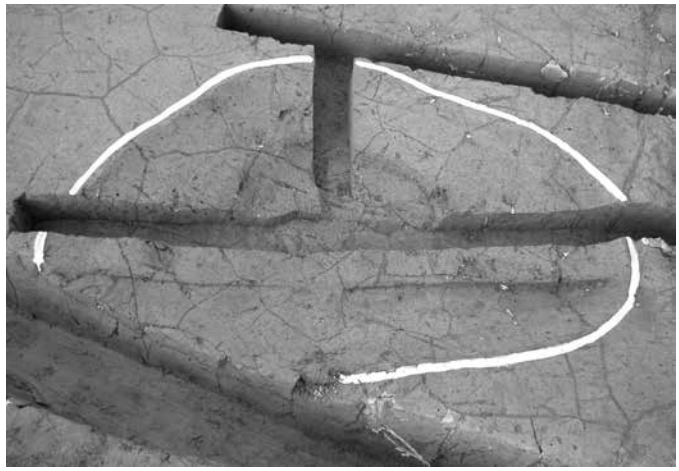
３号周溝遺構　遺物出土状況３（東から）

３号周溝遺構　遺物出土状況４（東から）

SK126　遺物出土状況（南から）

SK126　南北セクション（東から）

SK132　遺物出土状況（北から）

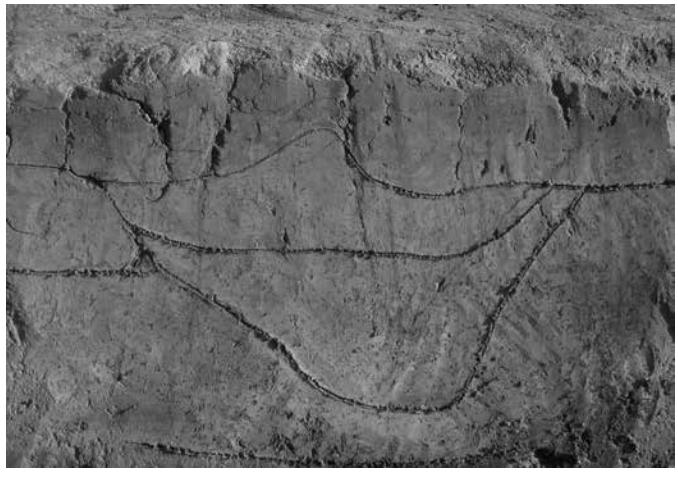


SK132　完掘（南から）

SK134　短頸壺出土状況（西から）

SK134　短頸壺内部アップ（北西から）

SD122　遺物出土状況（南から）



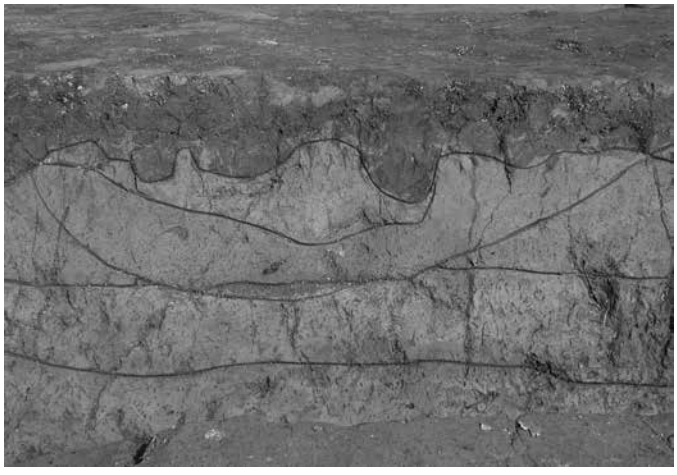
SD122　セクション（西から）

SD125　セクション（西から）

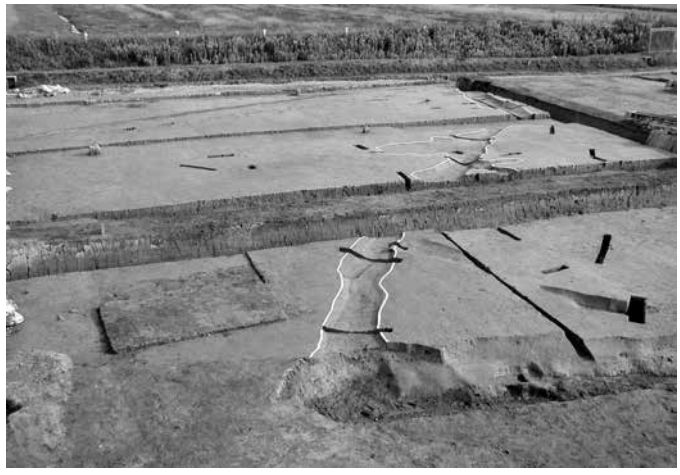
遺構精査光景

SD125　完掘（北東から）

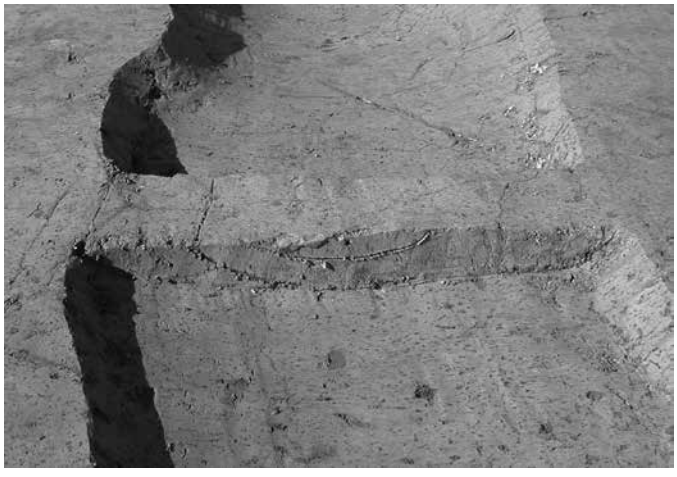
SD125　遺物出土状況（北西から）



SD127　セクション完掘（南から）



SD127　完掘（南西から）



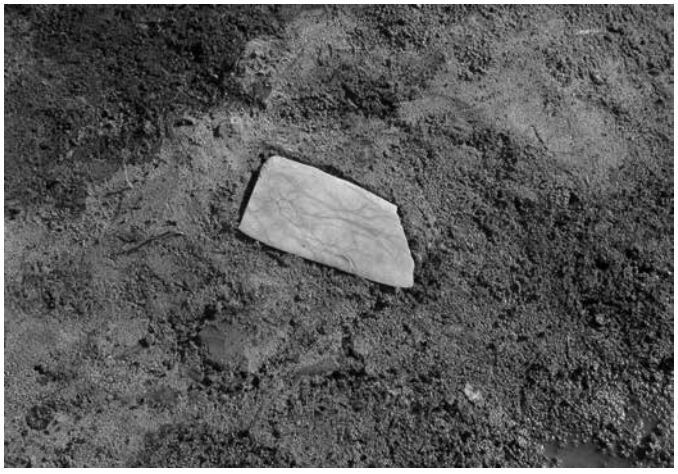
SD128　セクション（東から）

SD128　完掘（南東から）

SD129　セクション（南東から）

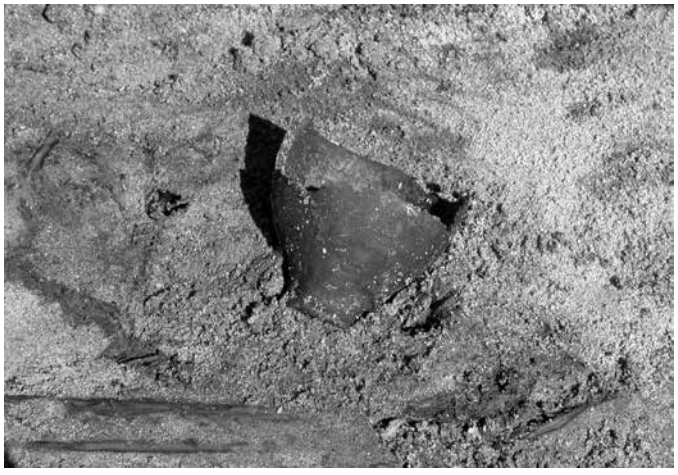
SD129　完掘（南東から）

SR２a　セクションＡ（東から）

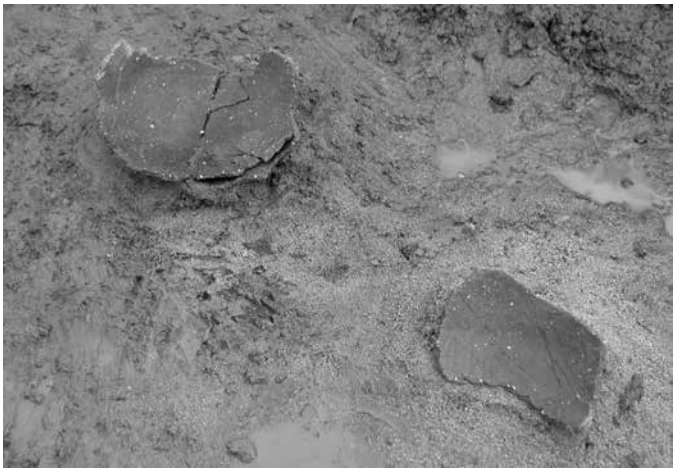


SR２a　大型石包丁出土状況（南西から）

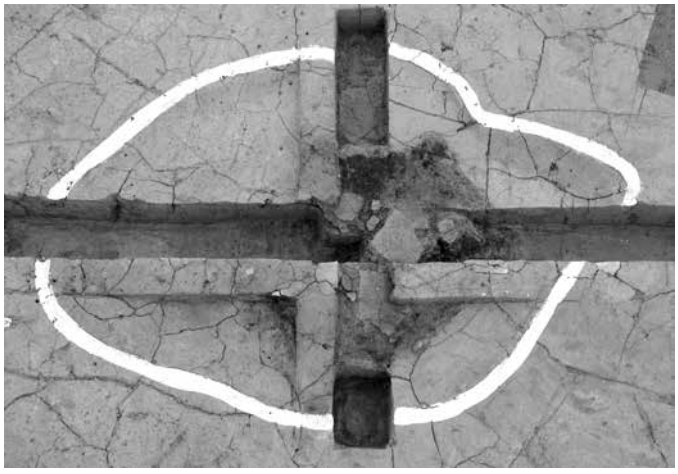
SR２a　弥生時代甕出土状況（北東から）



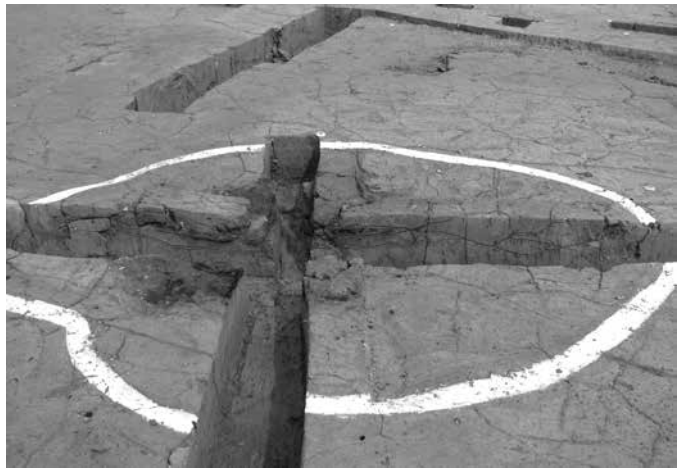
SR２a　弥生時代甕出土状況（南から）



SR２a　弥生時代壺出土状況（北西から）

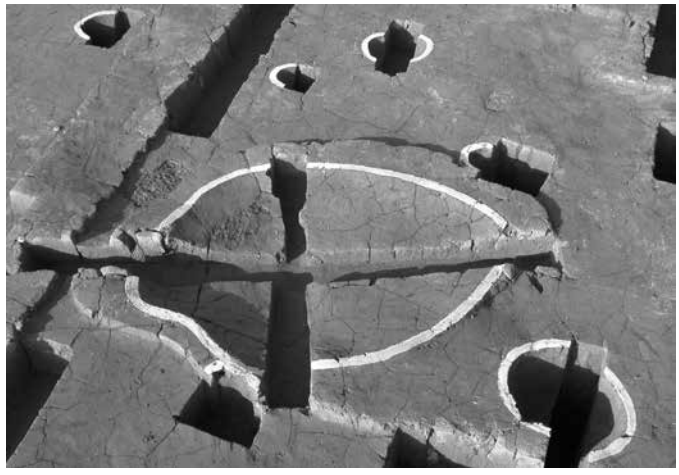


SX117　甕出土状況（北から）



SX117　東西セクション（南から）

SX117　南北セクション（西から）



SX117・周辺ピット群　完掘（南東から）

SX123　南北セクション（東から）

SX123　屋外炉検出状況（東から）

１号周溝状遺構下面　炭化物集中部検出状況（北から）

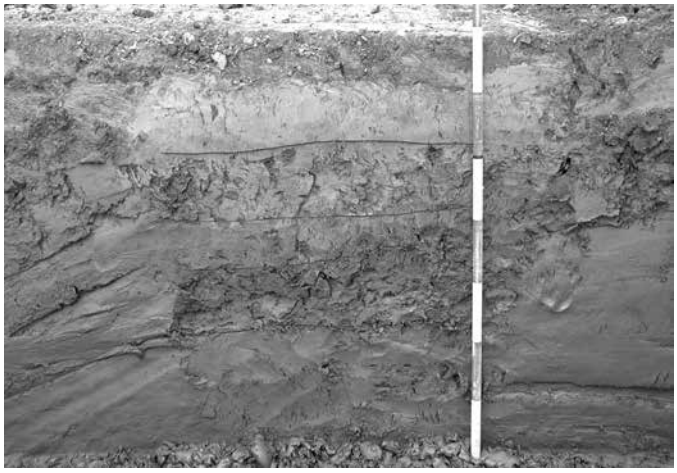
１号周溝状遺構下面　炭化物集中部検出状況セクション（北から）

54Ｌ21グリッド　遺物出土状況（南から）

56Ｑグリッド　遺物出土状況（北から）

50Ｏ25グリッド　環石出土状況（北から）

54Ｑグリッド　大型直縁刃石器出土状況（南から）



下層トレンチ47Ｒ　セクション（東から）

Ｎ列下層トレンチ　完掘（南から）

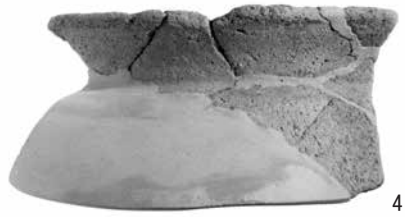
北区　現況（東から）

北区　現況（南から）

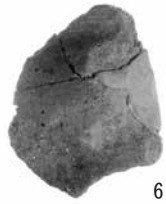
SI６（1）

SB107-P５（2）

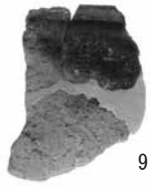
SK１（3・4）



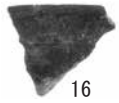
SK116（6～12）

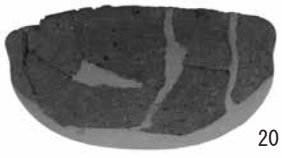


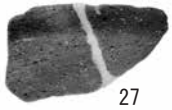
SK２（5）

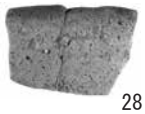


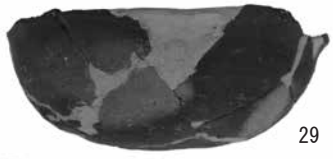
SR１（13）　SR２a（14～39）

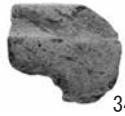


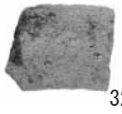


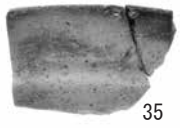




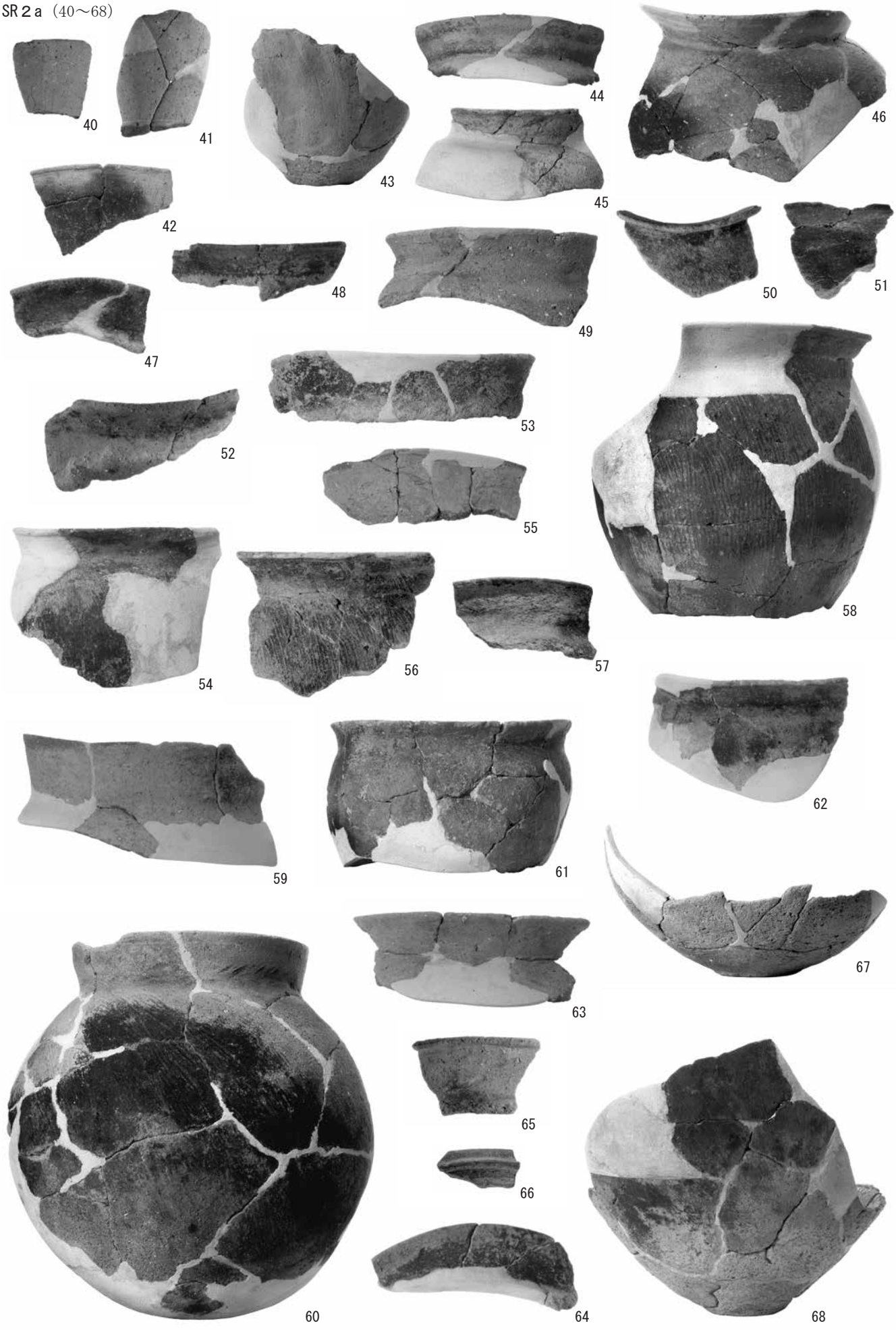








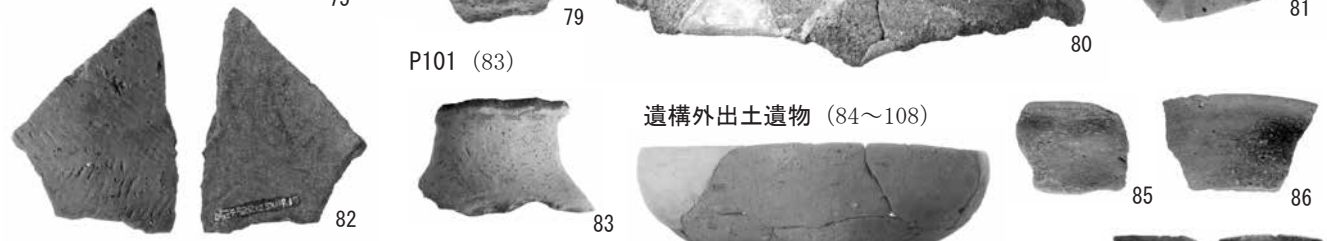
SR２a（40～68）


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68

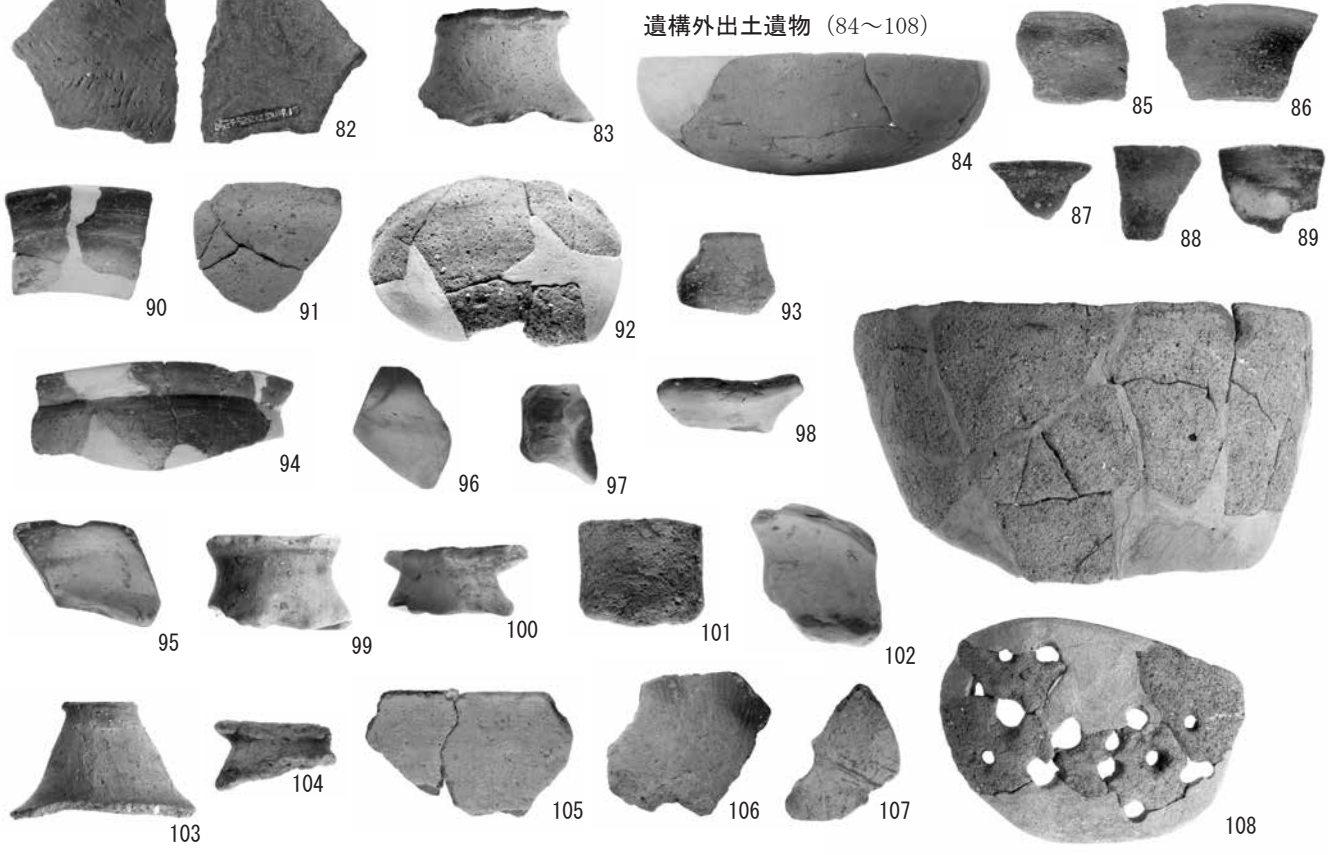
SR２a（69～72）

SX119（73～82）

P101（83）

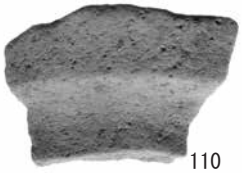


遺構外出土遺物（84～108）

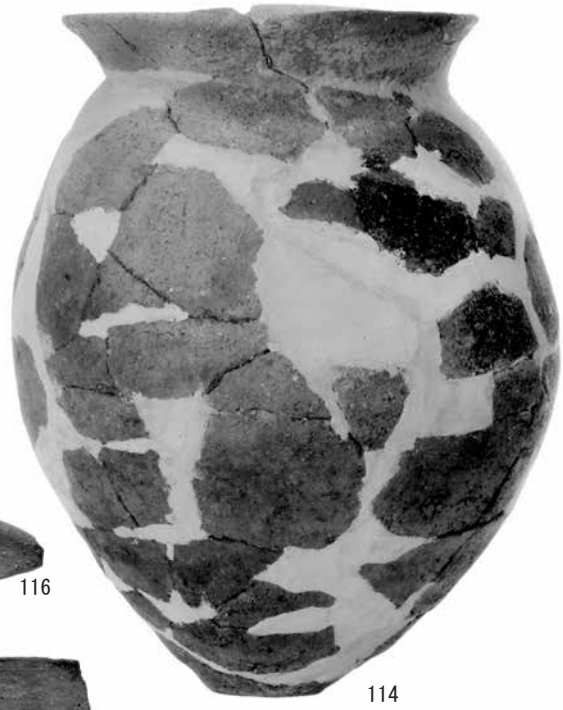


遺構外出土遺物（109～137）

109


110

111

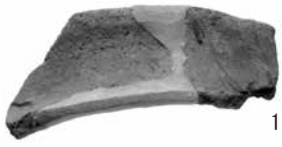

114

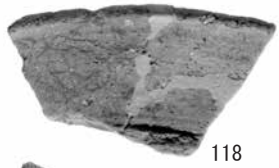
112

113

115

116


117


118

119

121

122

123

126

120

124

125

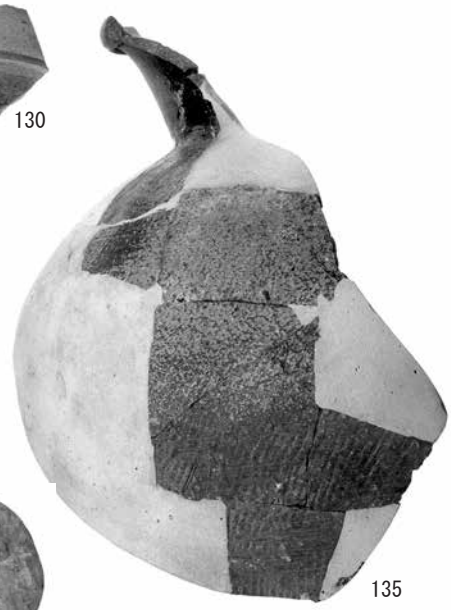
127

128

129

130

131


135

132

136

134

133

137

SI１（138・139）

138

139

SI３（140）

140

SI９ 炉（141）

141

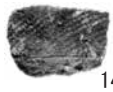
SI10 周溝（142）

142

SI８（143～147）

143

144


145

146

147

１号周溝遺構 周溝（148・149）

148

149

２号周溝遺構 周溝（150）

150

２号周溝遺構 １号土坑（151）

151

３号周溝遺構 １号土坑（152）

152

SK４（153）

153

SK126（154・155）

154

155

SK134（156）

156

SD122（157・158）

158

157

SD129（163）

163

SD125（159～162）

159

160

161

162

SR２a（164～179）

164

165

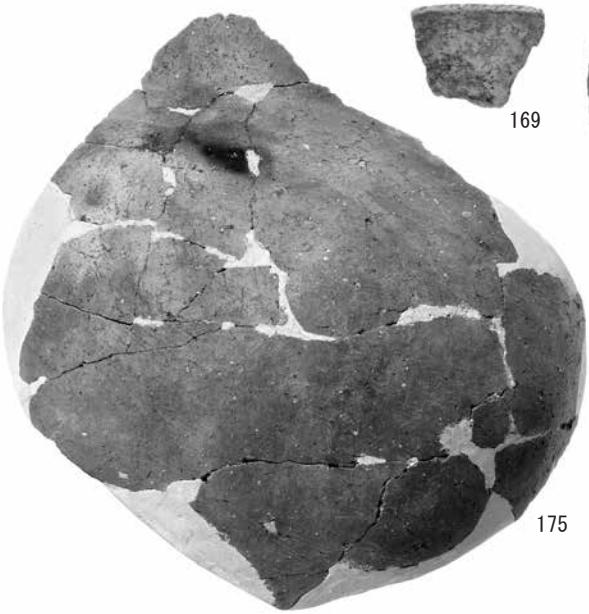
166

167

170

169

168


175

171

174

172

173

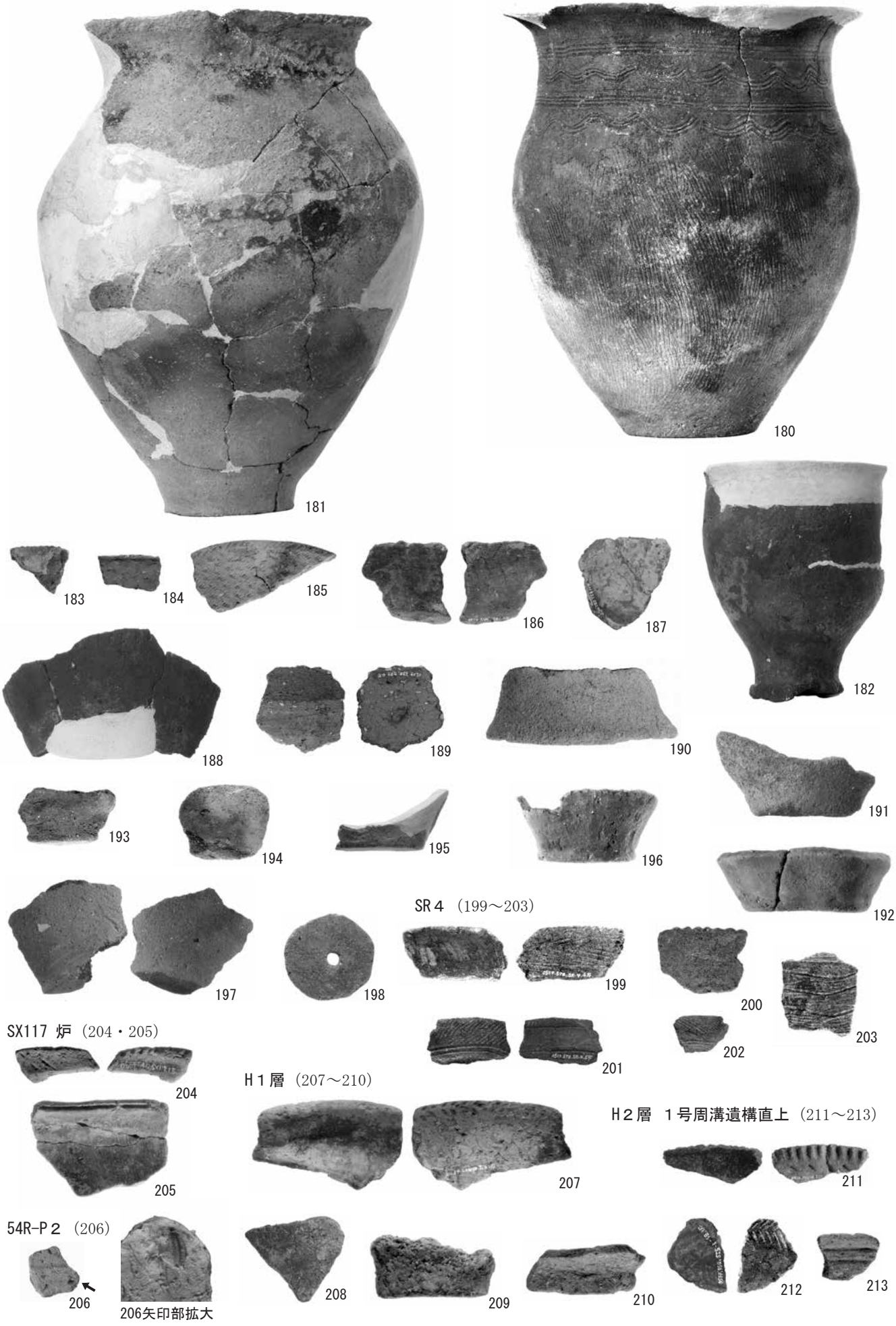
176

177

178

179

SR２a（180～198）



SR４（199～203）

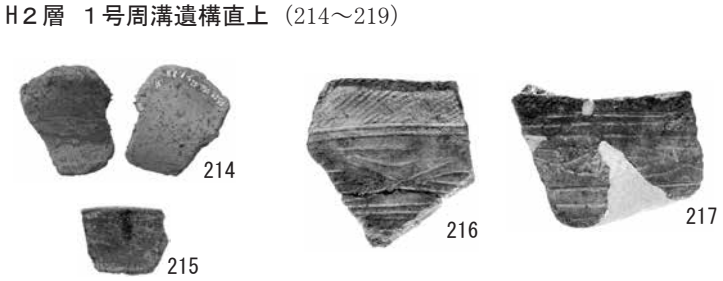
SX117 炉（204・205）

H１層（207～210）

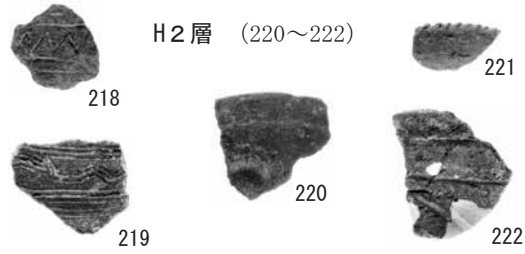
H２層　１号周溝遺構直上（211～213）

54R-P２（206）

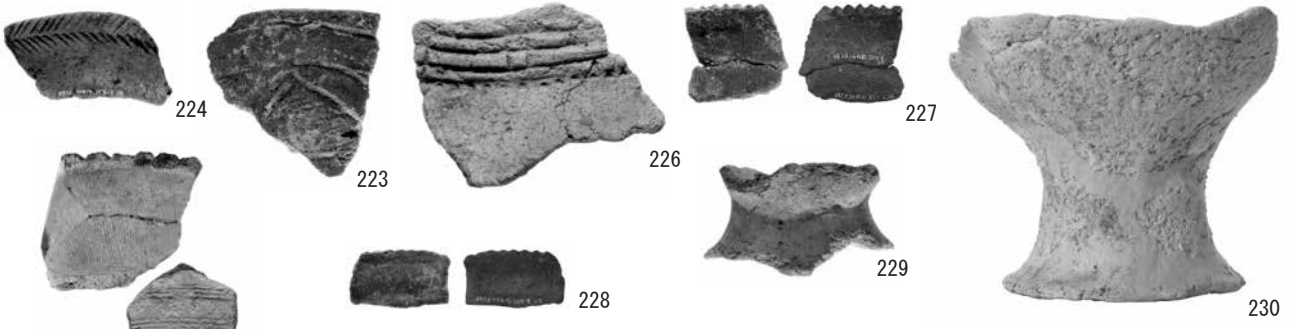
H２層　１号周溝遺構直上（214～219）



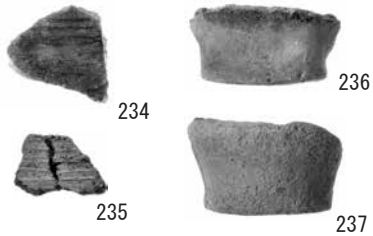
H２層　（220～222）



H２層　２号周溝遺構直上（223～233）

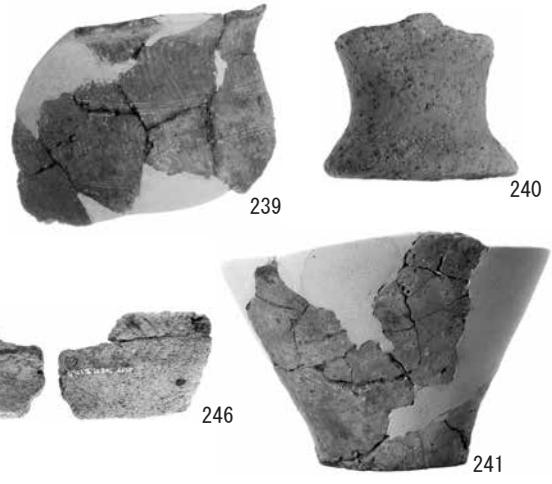


H３層　２号周溝遺構直上（234～237）

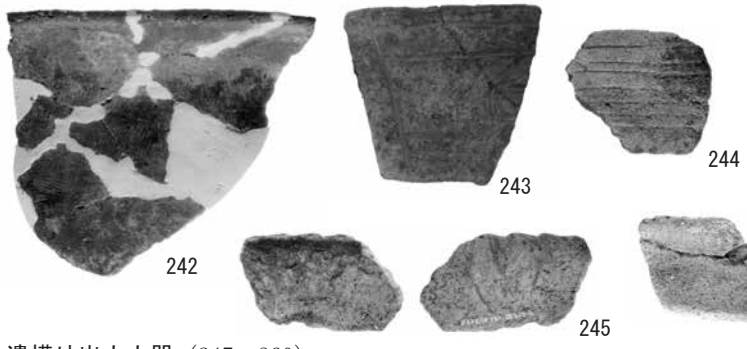


H３層　４号周溝遺構直上（238）

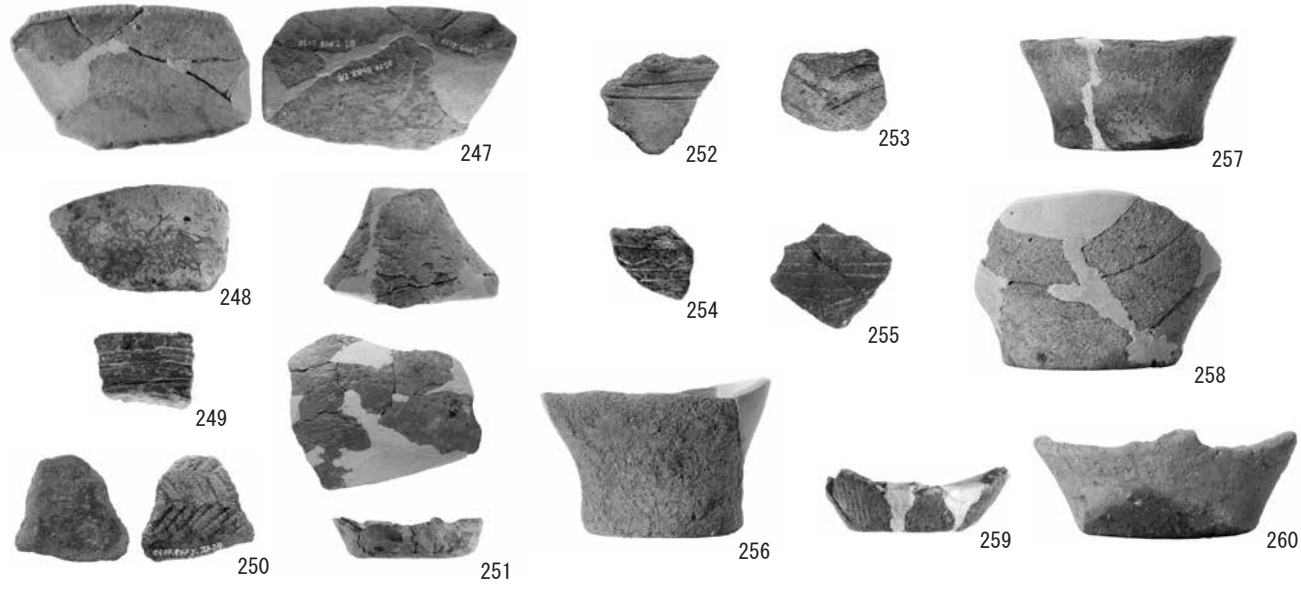
H３層　４号周溝遺構直上（239～241）



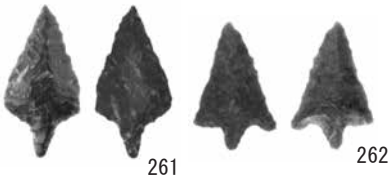
Ⅲb2b層（242～246）



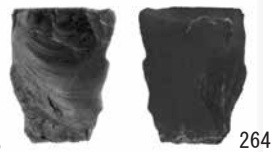
遺構外出土土器（247～260）



SI３（261～269）


261　262

263

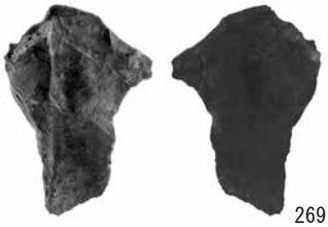

264

265

266

267

268


269

SI12 周溝（270）

270

２号周溝遺構　１号土坑（271～272）

271

272

２号周溝遺構　周溝（273）

273

SK４（274）

274

SK126（275～279）

275

276

278

SD122（280）

280

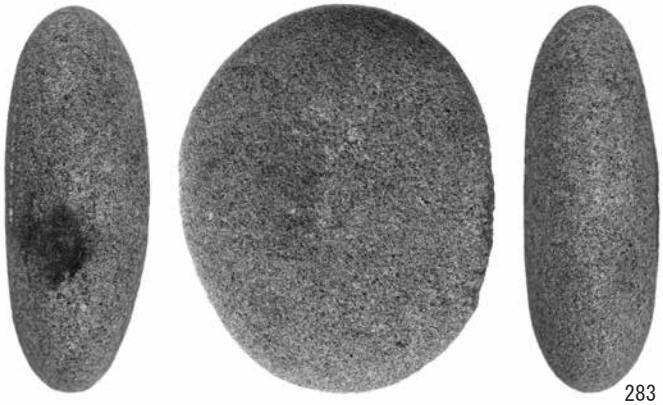
SR２a（281～284）

281

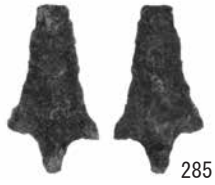
282

277

279

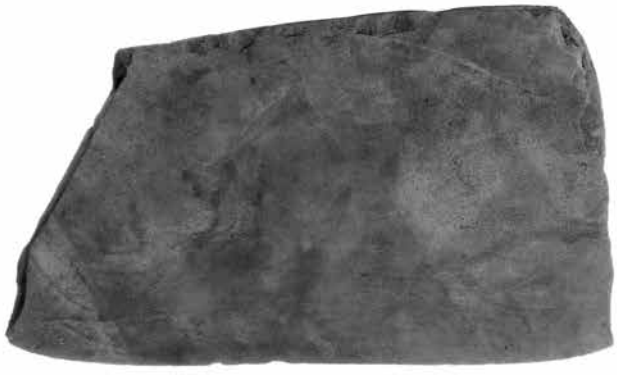

283

SX111（285～287）


285

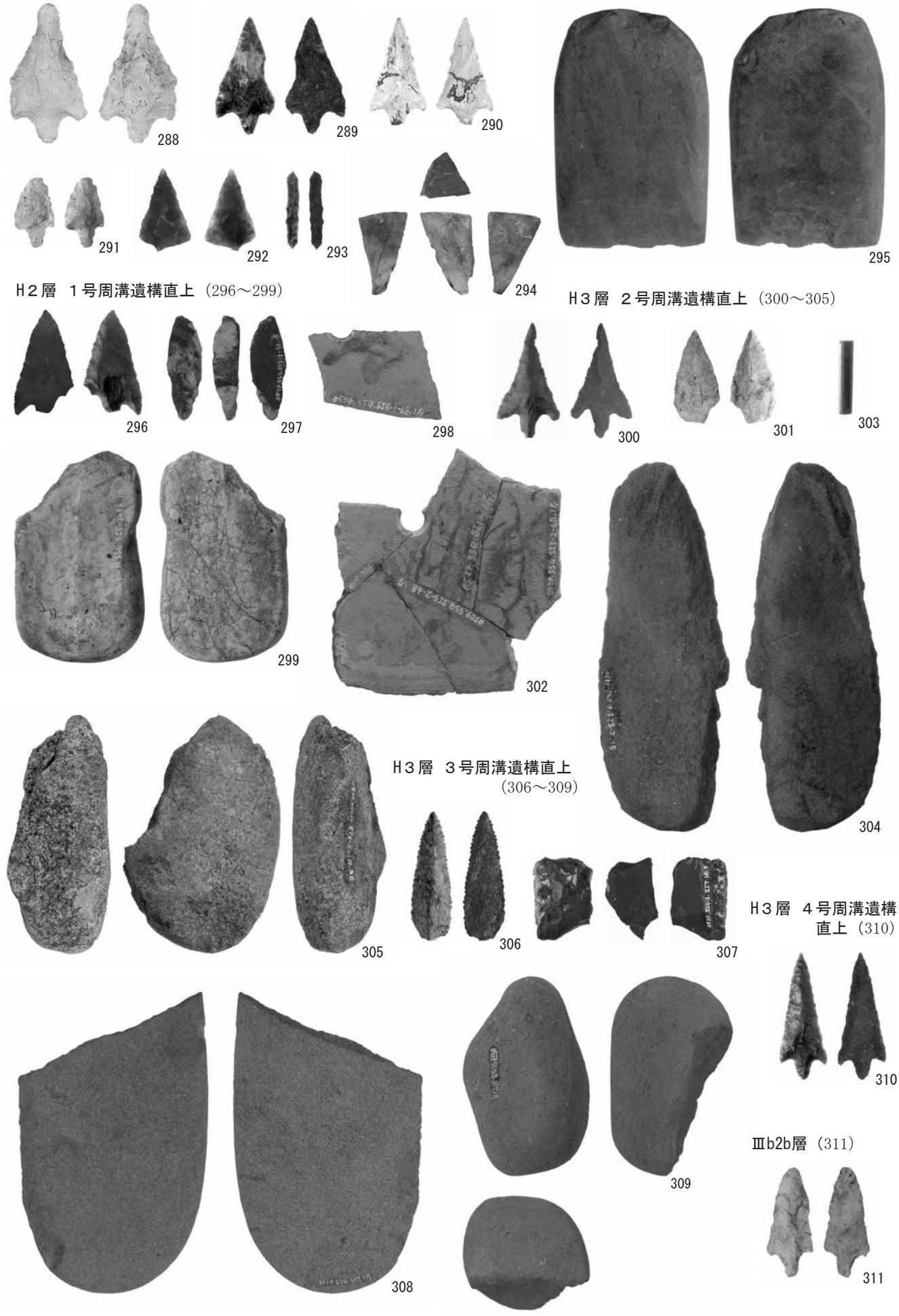
286

287



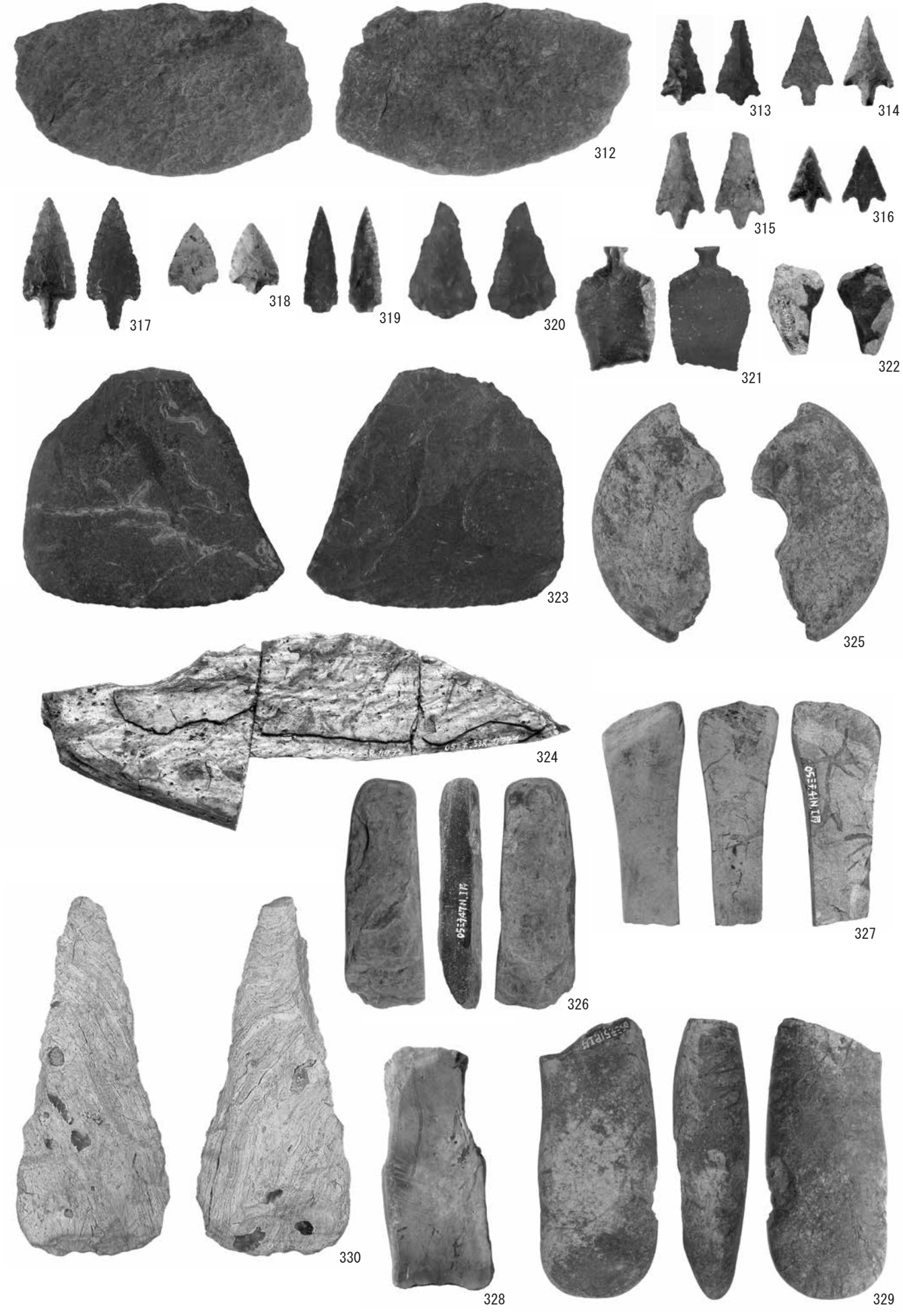
284

SX136（288）　H１層（289～295）



Ⅲb2b層（312）

遺構外出土石器（313～330）



SB107（331～335）

331

332

333

334

335

P109（336）

336

P110（337）

337

SX104（338）

338

SI１-P３（339）

339

SR２a（340～346）

340

343

344

345

346

攪乱（347）

347

341

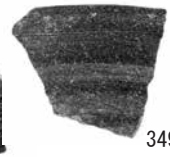
342

その他の時代の遺物

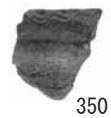
SR２a（348）

348

遺構外出土遺物（349～358）


349

351


350

352

353

354

355

356

357

358

報告書抄録

ふりがな	みちばたいせき　ご
書名	道端遺跡Ⅴ
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	ⅩⅤ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第162集
編著者名	前川雅夫(国際航業株式会社文化事業部　主任研究員)　丹下昌之(同 研究員)　辻 弘和(同 研究員)　福井流星(同 研究員)　片山博道(同 研究員)　高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）　斉藤崇人（同）　松元美由紀（同）　斉藤紀行（同）　馬場健司（同）　沢田 敦(埋文事業団調査課　日東道担当班長)
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団・国際航業株式会社
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1　TEL0250(25)3981　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-3-26　TEL025(247)0318　国際航業株式会社新潟支店
発行年月日	西暦2006（平成18）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
道端遺跡（みちばたいせき）　Ⅴ	新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端97番地ほか（にいがたけんいわふねぐんあらかわまちおおあざみなみしんぼあざみちばたばんち）	15-582	75	38度 07分 00秒	139度 24分 59秒	20050411 ～20051206	12,400㎡ （上層9,600㎡ 下層2,800㎡）	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道端遺跡　Ⅴ	散布地	縄文時代 中世		縄文土器 珠洲焼（甕・擂鉢） 銭貨(『永楽通宝』・『皇宋通宝』)	
	集落	弥生時代	平地式建物(7軒) 竪穴建物(3軒) 周溝遺構(4基) 土坑(9基)　溝跡(5条) 河川跡(3条) 性格不明遺構(5基) ピット(24基)	弥生土器（櫛描文系甕・壺・鉢・沈線文系甕・壺・蓋） 石器（石鏃・大型石包丁・大型直縁刃石器・管玉・擦切具・環石） 木製品（柱根・櫂状木製品）	土器片に籾痕が確認された。 炭化したアワ・ヒエ・コメが検出されたことから稲作農耕が行われていたことが明らかになった。
	集落	古墳時代	竪穴建物(1軒) 掘建柱遺構(1棟) 土坑(5基)　河川跡(2条) 性格不明遺構(4基) ピット(7基)	土師器（椀・高杯・器台・甑・壺・甕・手づくね土器） 須恵器（杯蓋・杯身・無蓋高杯・瑞・甕） 石製品（紡錘車・砥石） 木製品（柱根・建築部材・杭・加工材）	瑞が4個体出土した。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第162集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅤ

道端遺跡Ⅴ

平成18年3月30日印刷
平成18年3月31日発行

発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）551
財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地
電話　0246（23）9051
FAX　0246（22）5222

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第162集『道端遺跡Ｖ』　正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	３８度０７分００秒	３８度０７分１８秒
抄録	東経	１３９度２４分５９秒	１３９度２４分５３秒